Date Due

Bible. Japanese. N.T. [n.d.]

Japanese Scriptures –
The Four Gospels + Acts –

E. Rothesay Miller
Yokohama
April 1879 – Japan

美路留

耶穌降生一千八百七十七年

翻譯委員社中
米國聖書會社

新約聖書馬太傳

明治十年
日本横濱上梓

新約全書　馬太傳福音書

第一章 アブラハムの裔なるダビテのすゑ耶穌キリストの

系圖

二 アブラハム イサクをうみ イサク ヤコブを生 ヤコブ ユダと

その兄弟をうめり 三 ユダ タマルによりてパレスとザラをう

みパレス エスロンをうみ エスロン アラムをうみ 四 アラム

アミナダブをうみ アミナダブ ナアソンをうみ ナアソン

サルモンをうみ 五 サルモン ラカブによりてボアズを生 ボアズ

ルツによりてオベデをうみ オベデ エッサイをうみ 六 エッサイ

ダビデ王をうむ ダビデ王 ウリヤの妻によりて ソロモンを

うみ 七ソロモン レハベアムをうみ レハベアム アビアをう
み アビア アサをうみ 八アサ ヨサパテをうみ ヨサパテ ヨラム
をうみ ヨラム ウッズヤをうみ 九ウッズヤ ヨタムをうみ ヨタム
アカズをうみ アカズ ヘゼキヤをうみ 十ヘゼキヤ マナセをう
み マナセ アモンをうみ アモン ヨシアをうめり 十一バブロン
にうつさるゝとき ヨシア ヨアハズとその兄弟(きやうだい)をうみ 十二バブロン
にうつされたるのち ヨアハズ シアテルをうむ シアテル
ゼルバベルをうみ 十三ゼルバベル アビウデをうみ アビウデ
エリアキンをうみ エリアキン アゾルをうみ 十四アゾル
ザドクをうみ ザドク アキムをうみ アキム エリウデをう

み
十五
エリウデエリアザルをうみエリアザルマツタンをう
みマツタンヤコブをうみ
十六
ヤコブマリアの夫ヨセフをう
めりこのマリアよりキリストととなふる耶蘇うまれたま
ひき
十七
その世系をかぞふるにアブラハムよりダビデまでい
たるまで十四代ダビデよりバブロンにうつさるゝときま
で十四代バブロンにうつされしよりキリストまで十四代
あり○
十八
それ耶蘇キリストのうまれたまへるは左のご
とし その母マリアはヨセフと婚約をなせるのみにていまだ
とつぎまみえざりしとき聖靈に感じてみごもりしがその懷孕
たることあらはれければ
十九
夫ヨセフはたゞしき人なるゆゑ

まことをちぢらしむることをこのまず。ひそかに離縁(りえん)せんとおもへり 二十 かくてこのことをおもひめぐらせるをりに主(しゆ)のつかひのものが夢(ゆめ)にあらはれていひけるは。ダビデのすゑヨセフよなんぢ妻(つま)マリアをめとることをおそるゝなかれ。そのはらめるところのものは聖霊(せいれい)によるなり 二一 これ子(こ)をうまんその名(な)を耶蘇(いえそ)となづくべし。そはその民(たみ)を罪(つみ)よりすくひたまへばなり 二二 すべてこのことは預言者(よげんしや)によりて主(しゆ)のいひたまひしことばに 二三 処女(をとめ)はらみて子(こ)をうまんその名(な)をインマヌエルととなふべしとあるに應驗(こゝろみ)せんためなりき。その名(な)をとけば神(かみ)われらとともにいますとの義(こゝろ)なり

二四ヨセフねむりより起て主のつかひの命ぜしごとくにした
がひその妻をめとりたまへど 二五 冢子のうまるゝまで牀をと
もにせざりき。そのうまれし子を耶蘇となづけたり

第二章 それ耶蘇はヘロデ王のときユダヤのベツレヘムに
うまれたまひしが。そのとき博士たちひがしのかたより
エルサレムにきたりて 二 いひけるは。ユダヤ人の王とてうまれたま
へるものはいづこに在や。われらひがしのかたにて
の星をみたれば。これを拝せんためにきたれり 三 ヘロデ王
これをきゝていたむ。またエルサレムの民もこぞりて然りしかばすべ
ての祭司のをさと民の學者とをあつめてヘロデとひける

ハキリストのうまるべきところハいづこなるや五こたへ
けるハユダヤのベツレヘムなり。そハ預言者のしるされた
ることばにユダヤの地ベツレヘムよなんぢハユダヤの郡の
中にていとちひさきものにあらずわがイスラエルの民を
やしなふべき君そのうちよりいでん。といへるありさてこゝに
おいてヘロデひそかに博士たちをよび星のあらはれしと
きを詳にとひて八このものらをベツレヘムにつかはさんとして
いひけるハ。ゆきて嬰児のことをつぶさにたづねこれにあ
えなば我につげよわれもまたゆきて拝すべし九このものら王の
命をきゝてゆきたり。前にひがしのくにゝてみたりし星この

らにさきだちゆきてをさなごのをるところのうへにとゞまりぬ十かれらこの星をみていとよろこびけり十一いでて室にいりけるに嬰兒のそのはゝマリアとともにをるを見ひれふしてをさなごを拜み寶盒をひらきて黄金乳香沒藥などの禮物をさゝげたり十二かれらその夢にヘロデへかへるなかれとの默示をかうむりければほかのみちよりその國にかへりゆきぬ○十三このはかせらが去るのち主のつかひヨセフのゆめにあらはれていひけるはヘロデをさなごを索てころさんとするゆゑに起てをさなごとそのはゝとをたづさへエジプトにのがれてまたわがなんぢにしらせんときまでそこにを

とゞまれ 十四 ヨセフおきて夜をさなごとその母とをたづさへエジプトにゆき 十五 ヘロデの死るまでそこにとゞまれり。これ主よげんしやによりて、わが子をエジプトよりよびいだせりといひたまひしにかなはしめんためなり 十六 こゝにおいてヘロデはかせにあざむかれたるをしりておほいにいかり人をつかはして博士にくはしくとひたる時をかぎりベツレヘムとそのさかひのうちなる二歳したのをさなごをことごとくころせり 十七 こゝにおいて預言者エレミヤのいひしことは 十八 なげきのこゑみいたく憂るら泣ラマにきこゆラケルその子どもらをなげきその子どものなきによりて慰まず。と

いひしにかなへり　十九　かくてヘロデしにしのち主（ぬし）のつかひヨセフのいめにエジプトにてあらはれいひけるハ　二十　おきて嬰兒（をさなご）とそのはゝとをたづさへイスラエルの地（ち）にゆけ嬰兒（をさなご）のいのちをもとむるものハはや死（ね）り　二十一　かれ起（おき）てをさなごとそのはゝとをたづさへてイスラエルの地（ち）にいたりしが　二十二　アケラヲ父（ちゝ）ヘロデにかはりてユダヤの王（わう）たりときゝければかしこにゆくことをおそる。また夢（ゆめ）につげをかうむりてガリラヤのうちにさけ　二十三　ナザレといへるむらにいたりてすまへり。これハナザレ人（ひと）とよばれんと預言者（よげんしや）によりていはれたる言（こと）にかなはせんためなり

第三章 そのころバプテスマのヨハネきたりてユダヤの野に
て宣つたへて 二いひけるハ。天國ハちかづけり悔あらためよ 三これハ
主の道をそなへそのみちすぢをなほくせよと野によばはる
人のこゑありと預言者イザヤがいひし人なり 四このヨハネ
ハ身にらくだの毛衣をき腰にかはのおびをむすび蝗蟲と
野蜜をしよくもつとせり 五このときエルサレムおよびユダヤ
をこぞり。またヨルダンの四方よりひと〴〵いでヨハネに
つき 六おのが罪をいひあらはしてヨルダンにてこの人より
バプテスマをさづけられたり 七バプテスマをうけんとて
パリサイおよびサドガイの人々のおほくきたるをみて

こと見ていひけるハ。蝮のすゑよ誰なんぢらにきたらんとす
る怒をさくべきことをつげしや 八 さらバ悔改にかなふ果
をむすべよ 九 なんぢらわれらが先祖にアブラハムありとい
ふことをおもふなかれ。われなんぢらにつげん神ハこの石
をもよくアブラハムの子となさしむるなり 十 いまはや斧を
樹のねにおかる。ゆゑにすべて善果をむすばざる樹ハきら
れて火になげいれらるべし 十一 われハなんぢらを悔あらた
めさせんとて水をもてなんぢらにバプテスマをさづく。われ
よりのちにきたるものハわれにまさりて能力あり。われハそ
の履をとるにもたらず。かれハ聖靈と火をもてなんぢらに

バプテスマをさづけん 十二 手にハ箕をもちてその禾場をきよめ麥をあつめてその倉にいれ糠ハきえざる火にてやくべし○十三 このとき耶穌ヨハネにバプテスマをうけんとてガリラヤよりヨルダンにきたりたまふ 十四 ヨハネ辭ていひけるハわれハなんぢよりバプテスマをうくべきものなるになんぢかへつてわれにきたるか 十五 耶穌こたへけるハ。志ばらくゆるせ如此すべてのたゞしきことハわれらつくすをべきなるなり。こゝにおいてヨハネつひにゆるせり 十六 耶穌バプテスマをうけて水よりあがれるとき天たちまちこれがためにひらけ聖靈の鴿のごとくくだりてそのうへにきたるをミる 十七 また天より

聲ありてこハわがこゝろにかなふわが愛子なりといへり

第四章

一 さて耶穌せいれいにみちびかれ惡魔にこゝろみられんために野にゆきしが 二 四十日四十夜くらふことをせずのち餓ぬ 三 こゝろむるもの このものにきたりていひけるハ。なんぢもし神の子ならば命じてこの石を餅とせよ 四 耶穌こたへけるハ。人ハパンのみにていくるものにあらずたゞ神の口よりいづるすべてのことばによるとしるされたり 五 こゝにおいて惡魔このものを聖京にたづさへゆき殿のいたゞきにたゝせていひけるハ 六 なんぢもし神の子ならばおのが身をまろくなげよ。そハなんぢがために神そのつかひたちに命

ぜんごのもの手にてさゝへて なんぢがお足の石にふれざるや
うにべしと しるされたり 七 耶穌これにいひけるハ。主たる
なんぢの神をこゝろむべからずとまた録せり 八 あくま
またこのものをいとたかき山にたづさへゆき世界のくにぐにと
その栄華とをみせて 九 なんぢもしひれふして拝ぜ
バこれらをみななんぢにあたふべしといふ 十 耶穌これに
いひけるハ サタンよしりぞけ。主たるなんぢの神を拝しただ
これにのみつかふべしとしるされたり 十一 つひに悪魔これをと
はなれ。天使たちきたりつかふ○ 十二 耶穌ヨハネのとらはれし
ことをきゝて ガリラヤにゆき 十三 ナザレをさり ゼブルンとナ

ネブタリとのさかひなるうみべのカペナウムにいたりて
こゝにすまへり 十四 これ預言者イザヤのことばに 十五 ゼブルンの
地ナブタリの地うみにそひたる地ヨルダンのむかふの地
異邦人のガリラヤ 十六 くらきにをる民はおほいなる
光をみ死地と死蔭にざするものゝうへにひかりいでた
りといひしことのかなはせんためなり○ 十七 このときより耶蘇
はじめて道をつたへ、天國はちかづきぬあらためよといひ
たまへり 十八 耶蘇ガリラヤのうみべをあゆみてペテロとい
ふシモンとその兄弟アンデレとふたりして海にあみをうちをる
をみたり。このふたりは漁者なり 十九 これにいひけるは。われにしたが

さぐくわれなんぢらを人(ひと)をすなどるものとなさん 二十 かれらやがて網(あみ)をすてゝ耶蘇(いえす)にしたがふ 二一 こゝよりすゝみゆけるにまたほかの兄弟(きやうだい)ふたり即(すなは)ちゼベダイの子(こ)ヤコブとそのきやうだいヨハネ父(ちゝ)ゼベダイとともに舟(ふね)にてあみをつくろへるをみてこれをよびしに 二二 かれらもやがて舟(ふね)と父(ちゝ)とをすてゝ耶蘇(いえす)にしたがへり〇 二三 耶蘇(いえす)ガリラヤをあまねくめぐりてその會堂(くわいだう)にてをしへをなし天國(てんこく)の福音(ふくいん)をのべつたへこの民(たみ)のうちにあるすべての病(やまひ)すべてのわづらひをいやしぬ 二四 その聲名(きこえ)あまねくスリヤにひろがりしかば人々(ひと/＼)すべてのわづらひ萬殊(さまざま)のやまひまたいたみあるものあ

あるひは鬼につかれたるもの癲癇ちゆうぶのやまひなどの
あるものなどこれにつれきたりけれバこれを癒せり 二五 ガリラヤ
とデカポリスエルサレムユダヤヨルダンのむかふよりお
ほくの人々きたりしたがへり

第五章

一 耶蘇おほくの人をみて山にのぼり坐したまひけれ
ば門徒たちもそのもとにきたれり 二 耶蘇くちをひらきて
このものにをしへていひけるは 三 心のまづしきものはさいはひ
なり天國はすなはちその人のものなればなり 四 かなしむ
ものはさいはひなりそのひとは安慰をうくべけれバなり
五 柔和なるものはさいはひなりそのひとは地土を嗣こと

をうべければなり 六 うゑかわくごとく義をしたふものハ
さいはひなり その人ハ飽ことをうべければなり 七 あはれ
みあるものハ福なり その人ハ矜恤をうくべければなり
八 こころの清潔ものハさいはひなり そのひとハ神をみるこ
とを得べければなり 九 和平をもとむるものハさいはひな
り その人ハ神の子ととなへらるべければなり 十 ただしき
ことのためにせめらるるものハ福なり てんこくハすなはち
その人のものなればなり 十一 わがために人なんぢらを詬
譏り迫害いつはりてさまざまのあしきことをいはん。その
ときハなんぢらさいはひなり 十二 よろこびたのしめ 天にお

いてなんぢらの報賞おほいなれバなりなんぢらよりさきの預言者をもかくせめたりき○十三なんぢらハ地のしほなり鹽もしその味をうしなハゞ何をもてかもとの味にかへさんバのちハ用なしそとにすてゝ人にふまるゝのみ十四なんぢらハ世のひかりなり山のうへにたてられたる城ハかくるゝことをえず十五燈をともして斗のしたにおくことなし燭臺におきて家にあるすべてのものをてらさん十六かくのごとくひとびとのまへになんぢらの光をかゞやかせさすれバ人々なんぢらのよきおこなひをみて天にいますなんぢらの父をあがむべし○十七われ律法と預言者とを

つるためにきたりしとおもふなかれのりやぶりきたりてこゝろみる
まつるにあらずかへつて成全せんためなり十八われ誠にな
んぢらにつげん天地のつきざるうちはおきての一點一畫
をとげつくさずしてすたることなし十九このゆゑに人もし
誡のいとちひさき一をやぶり。またそのごとく人にをしへ
なば天國において最小ものといはれん。おほよそこれをお
こなひつゝ人にをしふるものは天國においておほいなる
ものといはるべし二十われなんぢらにつげん。學者とバリサイ
の人のたゞしきよりもなんぢらのたゞしきことまさらず
ばこのならば天國にいることあたはず○二十一いにしへの人に

つげて殺(ころす)ことなかれころすものハ審判(さばき)にあづかるべしとい
へることあるハなんぢらがきゝしところなり 二二 さりながらわ
れなんぢらにつげん。すべて故(ゆゑ)なくしてその兄弟(きやうだい)をいかる
ものハさばきにあづかるべし。またその兄弟(きやうだい)をおろかものよ
といふものハ集議(しうぎ)にあづかるべし。また狂妄(きやうまう)よといふものハ
地獄(ぢごく)の火(ひ)にあづかるべし 二三 このゆゑになんぢもし禮物(そなへもの)
をたづさへて壇(だん)にゆきたるときこゝにて兄弟(きやうだい)にうらみあ
ることあるをおもひいださバ 二四 そのそなへものをだん
のまへに留(おき)まづゆきてなんぢの兄弟(きやうだい)とやはらぎ後(のち)きたり
てなんぢのそなへものを獻(ささげ)よ 二五 なんぢをうつたふるもの

ともに途間にあるときはやくやはらげよ。おそらくハ訟(うつた)ふるものなんぢをさばきやくにわたし審官(さばきやく)なんぢをしたやくにわたし遂(つひ)になんぢハ獄(ひとや)にいれられん 二六 まことになんぢにつげん分釐(ぶんり)までもつぐのはざれバこのところをいづることあたはざるなり○ 二七 いにしへの人(ひと)につげて姦淫(かんいん)することなかれといへることあるハなんぢらがきゝしところなり 二八 されどわれなんぢらにつげん。おほよそ婦(をんな)をみて色情(いろけ)をおこすものハこゝろのうちにすでにかんいんしたるなり 二九 もしみぎの眼(め)なんぢを罪(つみ)におとさバぬきいだしてこれをすてよ。そハ五體(ごたい)のひとつをうしなふハ

全身ぢごくになげいれらるゝよりハまされり 三十 もし右の手なんぢをつまづかせバこれをきりてすてよ。そハ五體のひとつをうしなふハぜんしん地獄になげいれらるゝよりハまされり○三一 またいへることあり。およそ人その妻をいださんとせバこれに離縁状をあたふべしと 三二 されどわれなんぢらにつげん。姦淫のゆゑならでそのつまをいだすものハこれにかんいんをなさしむるなり。またいださるゝ婦をめとるものも姦淫をおこなふなり○三三 またいにしへのひとに告ていつはりの誓をたつることなかれなんぢらちかふところハこれを主にはたすべしといへることあ

るハなんぢらがきゝしところなり 三四 されどわれなんぢらにつげん。さらに誓ことなかれ。天をさしてちかふなかれ。これ神のくらゐなればなり 三五 地をさしてちかふことなかれ。これ神の足臺なればなり。エルサレムをさしてちかふことなかれ。これ大王のみやこなればなり 三六 なんぢのかしらをさしてちかふなかれ。そハひとすぢの髪だにしろくし又くろくすることあたはざればなり 三七 なんぢらハたゞ是々否々といへ。これよりすぐるハ悪よりいづるなり ○三八 目にて目をつくのひ歯にて歯をつくのふといへることあるハなんぢらがきゝしところなり 三九 されどわれなんぢらにつげん悪

に敵することなかれ。人なんぢの右の頬をうたばほかの
の頬をもめぐらしてこれにむけよ 四十 なんぢをうつたへて
裏衣をとらんとするものには外服をもまたとらせよ 四一 人
なんぢに一里の公役をしひなばこれとともに二里ゆけ 四二
なんぢに求るものにはあたへ借んとするものをしりぞく
るなかれ〇 四三 なんぢの隣をいつくしみてその敵をうらむ
べしといへることあるはなんぢらがきゝしところなり 四四
されどわれなんぢらにつげん。なんぢらの敵をいつくしみ。
なんぢらを詛ものを祝しなんぢらをにくむものを善視し。
なやめ迫害ものゝために祈禱せよ 四五 かくするは天にいま

はなんぢらが父の子とならんためなり。そは天の父ハその日をよきものにもあしきものにもてらし雨をたゞしきものにもたゞしからざるものにもふらせたまへり 四六 なんぢら自己をあいするものを愛するハなんの報賞かあらん。みつぎとりもしかせざらんや 四七 安否を兄弟にのミとふハ人よりなんのまさりたることかあらん。税吏もしかせざらんや 四八 このゆゑに天にいますなんぢらの父の純全がごとくなんぢらも純全なるべし

第六章 なんぢら人にみせんためにそのたゞしきを人のまへに行ことをつゝしめ。もししかせずバ天にいますなんぢ

らの父よりむくいをうけじ 二 このゆゑに施濟をなすとき人
のあがめをえんため會堂や街衢にて僞善者のごとく鈸を
ふきならすことなかれまことになんぢらにつげん この
ひと〻はすでにその報賞をえたり 三 なんぢらほどこしをな
すとき右の手のなすことを左の手にしらするなかれ 四 如
此するはそのほどこしのかくれんがためなりされば暗中
にみたまふなんぢの父はあらはに報たまふべし ○ 五 なん
ぢらいのるときは僞善者のごとくするなかれかれらは人に
みられんがために會堂や街衢のすみにたちていのること
をこのむまことになんぢらにつげん この人々はすでに

その報賞をえたり 六 なんぢいのるときハ密室にいり門を
とぢてこの隠れたるにいますなんぢの父にいのれ。さらバこの
かくれたるをみたまふなんぢの父ハ明顕にむくひたまふべ
し 七 なんぢらいのるときハ異邦人のごとくかさねかさねご
とをいふなかれ。かれらハ言おほきをもてきかれんとおも
へり 八 このゆゑにかれらにならふことなかれ。なんぢらの
父ハねがはざるさきにそのなくてならぬものをしりたま
へばなり 九 さればなんぢらこのくいのるべし。天にまします
われらの父よ。ねがはくハ聖名をあがめさせたまへ 十 神國
をきたらせたまへ聖旨の天になるごとく地にもなさせた

まへ
十一 われらのなくてならぬ糧をけふもあたへたまへ
十二 われらに罪をおかすものをわれがゆるすごとくわれらのつ
みを免したまへ
十三 われらをあしきことにさそはせずなほ
悪よりすくひいだしたまへ。國と權と榮はなんぢのかぎり
なくたもちたまふものなればなり。アーメン
十四 なんぢらもし
人のつみをゆるさば天にましますなんぢらの父もまたな
んぢらをゆるしたまはん
十五 されどもし人のつみをゆるさゞ
ればなんぢらの父もなんぢらの罪をゆるしたまはざるべ
し〇
十六 なんぢら斷食するとき偽善者のごとく憂容をする
なかれ。これらはだんどきを人にしめさんために顏色をそこ

る。まことになんぢらにつげん。このものはすでにその
むくひをえたり 十七 なんぢ断食(だんじき)するときはかしらにあぶら
をぬり面(おもて)をあらへ。このごとくするはなんぢのだんじき人(ひと)にみへ
ずして暗中(くれなか)にいますなんぢの父(ち)にあらはさんがためなり
さらばこのくれなかにみたまふなんぢの父(ち)はあらはに報(むくい)た
まふべし○十九 蠹(しみ)くひ錆(さび)くさり盗(ぬすびと)うがちてぬすむところの
地(ち)にたからをたくはふることなかれ 二十 蠹(しみ)くひ錆(さび)くさり盗(ぬすびと)
うがちてぬすまざるところの天(てん)にたからをたくはふべし 二十一
それなんぢらの財寶(たから)のあるところに心(こゝろ)もまたあるべけれ
ばなり○二十二 身(み)のひかりは目(め)なり。ゆゑになんぢの目(め)あきらかな

ならば全身もまたあきらかなるべし
二三 もしなんぢの目あしからば全身くらかるべし。このゆゑになんぢのうちの光もしくらからばその暗こといかに大なるぞや○
二四 人はふたりの主につかふることあたはず。そはあるひはこれをにくみかれを愛しあるひはこれにしたしみかれをうとむべければなり。なんぢら神と財貨とをかねつかふることあたはず
二五 このゆゑに我なんぢらにつげん。生命のためになにを食はんなにをのまんまた身のためになにを衣んとおもひわづらふことなかれ。いのちは糧よりもまさり身はころもよりもまさるものならずや
二六 なんぢらそらの鳥をみよ。稼ことなくかることをせず

倉にたくはふることなし。されどなんぢらの天の父はこれをやしなひたまへり。なんぢらはこれよりもはるかにまされるものならずや 二七 なんぢら誰かよくおもひわづらひてそのいのちを寸陰ものべえんや 二八 またなにゆゑに衣のことをおもひわづらふや。野の百合花をいかにしてそだつかをおもへ。労ず紡がざるなり 二九 されどなんぢらにつげん

ソロモンの栄華の極のときだにもこの花のひとつにだもよそほはざりき 三十 神はけふ野にありてあす爐になげいれらるる草をもかくよそほせたまへば。ましてなんぢらをや。あゝ信仰うすきものよ 三一 さらばなにをくらひなにを飲まんなにを

衣(き)んとておもひわづらふなかれ 三二 これみな異邦人(いはうじん)のもと
むるものなり。なんぢらの天(てん)の父(ちゝ)ハすべてこれらのものゝ
なくてならぬことをしりたまへり 三三 なんぢらまづ神(かみ)の國(くに)
とその義(ただしき)とをもとめよ さらバこれらのものハことごとくなんぢ
らに加(くはへ)らるべし 三四 このゆゑに明日(あす)のことをおもひわづら
ふなかれ。明日(あす)ハあすのことをおもひわづらへ。一日(いちにち)の苦勞(くらう)
ハいちにちにて足(たれ)り

第七章(だいしちしやう)

人(ひと)のつみをさばくことなかれ。おそらくハなんぢ
らもまた罪(つみ)をさだめられん 二 なんぢらが人(ひと)のつみを定(さだむ)る
ごとくおのが罪(つみ)をもさだめらるべし。なんぢらが人(ひと)を量(はかる)ご

しく、おのれもはからるべし　三　なんぢ兄弟の目にあるちり
をみておのが目にある梁木をさとらざるハなんぞや　四　おの
れの目にうつばりのあるにいかで兄弟にむかひてなんぢ
が目にある物屑をとらせよといふことをえんや　五
偽善者よまづおのれの目よりうつばりをとり去らバ兄弟
のめより物屑をとりのぞくるやうあきらかにみゆべし　六　犬に
聖物をあたふるなかれ。また豕のまへになんぢらの珍珠を
なげあたふることなかれおそらくハ足にてこれを踐ふみ
にじりてなんぢらをかみやぶらん　七　求よさらバあたへら
れんたづねよさらバあひ。門をたゝけよさらバひらかるゝこ

ことを得ん八 おほよそもとむるものは得たづぬるものは
あひ門をたゝくものはひらかるべければなり九 なんぢら
のうち誰かその子パンをもとめんに石をあたへんや十 ま
た魚をもとめんに蛇をあたへんや十一 さればなんぢらあし
きものながら善賜をその子にあたふることをしるまして天に
いますなんぢらの父はもとむるものによきものをあたへ
ざらんや十二 このゆゑにすべて人にせられんとおもふこと
はなんぢらまた人にもそのごとくせよこれ律法と預言者な
るなり○十三 せまき門よりいれよほろびにいたる路はひろく
その門はおほいなりこれよりいるものおほし十四 生にい

たるみちハせまくその門ハちひさしその路をたづぬるものハまれなり○十五 いつはりの預言者をつゝしめよかれらハ綿羊のよそほひしてなんぢらにきたれども内ハあらき豺狼なり○十六 なんぢらその果によりてしるべし誰かいばらより葡萄をとりあざみより無花果をとることをせん○十七 すべて善樹ハよき果をむすびあしき樹ハあしきみをむすべり○十八 よききハ悪果をむすぶことなくあしき樹ハよきみをむすぶことあたはざるなり○十九 すべてよきみをむすばざる樹ハきりたふされて火になげいれらる○二十 この故にその果によりてこれをしるべし○二十一 われにむかひて主よ主よといふものことごとく天國に

いるにあらず。たゞこゝにいるものはわが天にいます父の
旨にしたがふものゝみなり 二二 その日われにかたりて主よ
主よ主の名によりてをしへ主の名によりて鬼をおひ主の
名によりておほく異能をなせしにあらずやといふものおほか
るらん 二三 そのときこのひとびとにつげて。われ嘗てなんぢらを
しらず惡をなすものよわれをはなれされといはん 二四 この
ゆゑにすべてわがこのことばをきゝておこなふものを磐
のうへに家をたてたるかしこき人にたとへん 二五 雨ふりおほ
みづいで風ふきてその家をうてどもたふるゝことなし
これいはを根基となしたればなり 二六 すべてわがこのことを

たゞきゝておこなはざるものを沙のうへに家をたてたる
おろかなる人にたとへん 二七 あめふりおほ水いでゝ風ふき
てその家をうちてたゞつひに傾覆てそのたふれおほいなり
二八 耶蘇これらのことばを言竟たまへるとき。あつまりたる人
人そのをしへをおどろきあへり 二九 そは學者のごとくなら
で權威をもてるもののごとくをしへたまへばなり
第八章 一 耶蘇やまをくだりしときおほくの人々これにしたが
ひ 二 癩病のものきたりて拜していひけるは主よもしこゝ
ろにかなふときはわれをきよくなしうべし 三 耶蘇手をの
べかれにつけて。わがこゝろにかなへり 潔なれといひけれ

バらいびやうたゞちにきよまれり耶穌これにいひけるハ慎て人につぐるなかれたゞゆきておのれを祭司にみせこのつモーゼが命ぜしそなへものをさゝげてこれらに證據とせよ○五耶穌カペナウムにいりしとき百夫の長きたりねがふていひけるハ六主よわがしもべ癱瘋をやみて家にふしゐるてあるがはなはだなやめり七耶穌いひけるハわれゆきてこれをいやすべし八百夫のかしらこたへけるハ主よわれハなんぢをわが家裏にいれまつるハおそれおほしたゞ一言をいだしたまはゞわが僕はいえん九そハわれも人の權威の下にあるものなるにわがしたにもまた兵卒ありてこれにゆけとい

へばゆきかれにきたれといへばきたる我しもべにこれをなせといへばすなはち行ふゆゑなり　十　耶穌これをききてあやしみしたがへる人々にいひけるは。われまことになんぢらにつげんイスラエルのうちにだにいまだかかる篤信をあはざるなり　十一　またなんぢらにつげんおほくのひとびと東より西よりきたりてアブラハム　イサク　ヤコブとともに天國にざし　十二　國の諸子はそとのくらきにおひいださるべしそこにててうなしき切齒することあらん　十三　耶穌ひやくにんの長にゆけなんぢが信仰のごとくなんぢに成べしといひたまへるそのときに僕はいえたり○　十四　耶穌ペテロの家にいりて

のしうとめの熱をわづらひふしゐけるを見たまひ、十五 その手にさはりければ其熱さりて婦おきて彼らに供事す 十六 ひぐれたるとき人々鬼につかれたるものをおほくつれきたりければ耶穌ことばにて鬼をおひいだし病ある者のをことごとくいやせり 十七 預言者イザヤによりてのべられしことの我らの患をうけわれらの病をおふといひたまひしにかなはせんがためなり ○十八 さて耶穌おほくの人々の己をめぐれるをみて門徒に命じむかふの岸へわたらんとおもほひしに 十九 ある學者きたりていひけるハ師よいづこへゆかせたまふともわれしたがはん。二十 耶穌これにいひけるハ狐ハあ

あなありそらの鳥(とり)ハすありされど人(ひと)の子(こ)ハまくらするところ
なかりし 二一 またでしのひとりいひけるハ主(しゆ)よまづゆきて父(ちゝ)
をはうむることをまづゆるせ 二二 耶蘇(いゑそ)いひけるハわれに
したがへ死(しに)たるものにその死(しに)たるものをはうむらせよ ○
二三 耶蘇(いゑそ)ふねにのりけるに門徒(でし)たちもこれにしたがひぬ 二四 こ
のときおほいなる颶風(はやて)おこりて舟(ふね)をおほふばかりなる浪(なみ)
たちしに耶蘇(いゑそ)ハいねたり 二五 でしたちこれにちかづきてお
こしていひけるハ。主(しゆ)よわれらをすくひたまへわれらほろびんとす 二六
耶蘇(いゑそ)かれらにいひけるハ信仰(しんかう)うすきものよなんぞおそるゝ
るやがておきて風(かぜ)と海(うみ)とをいましめければおほいにお

だやかになりぬ 二七 人々あやしみていひけるハ。これいかなる人ぞこのかぜもうみもこれにしたがひたり◯ 二八 耶蘇むかふのきしなるガダラ人の地にいたるとき鬼にとりつかれたるふたりのもの墓よりいでゝこれをむかふ。兇猛ことさらはげしくしてそのみちを人のすぐることあたはざりしほどなり 二九 このものさけびていひけるハ 神のこ耶蘇よわれらなんぢとなんの與あらんやいまだ時いたらざるにわれらをせめんとてこゝにきたるか 三〇 さるそのさるなれて豕のおほくのむれ食しゐけるが 三一 おに耶蘇にねがひていひけるハ もしわれらをおひいださんとならバ豕のむれにいることを

をゆるせ 三二 かれらにゆけといひければ鬼いでゝぶたのむ
れにいりしにすべての群さかよりころげて海にいり水にし
みけり 三三 牧者どもむらににげゆきてこのことゝ鬼につか
れたりしものゝことをつげゝれば 三四 耶蘇にあはんとて邑
のものこぞりていできたりこれを見てこの境をいでんこ
とをねがへり

第九章

耶蘇ふねにのりわたりて故邑にいたりければ 二 癱
瘋にて床にふしたるものをひとびと舁きたれり。耶蘇のかれら
が信ずるをみてちゆうぶのものにいひけるは。子よこゝろ
やすかれなんぢの罪ゆるされたり 三 ある學者たちこゝろ

のうちにいひけるは。この人はけがしごとをいへり 四 耶穌そのおもひをしりていひけるは。なんぢらいかなれば心に悪ことをおもふや 五 なんぢの罪ゆるされたりといふと起てあゆめといふといづれかやすき 六 そは人の子は地にてつみをゆるすの權あることをなんぢらにしらせんとてつひに癱瘋のものにおきてねどこをとり家にかへれといひければ 七 おきてその家にかへりぬ 八 人々これをみてあやしみかくのごとき權を人にたまひし神をあがめたり 九 耶穌こゝよりすゝみゆきマタイとなづくる人の税關にざしたるをみてわがあとにしたがへといひければ起てしたがへり 十 耶

蘇この主がいへに食するとき税吏つみあるびとおほくきたり
て耶蘇およびそのでしとともにざしければパリサイの人
これを見てその門徒にいひけるハなんぢらの師ハなにゆ
ゑみつぎとりや罪あるひとゝともに食するや　耶蘇きゝ
てこれにこたへいひけるハ。すこやかなるものハ醫士のたすけ
をもとめず。たゞ病あるものこれをもとむ　なんぢら矜恤を
このみて祭祀をこのまずといふ此ハいかなることなるか
ゆきてまなぶべし。そはわれのきたるハたゞしき人をまねく
ためならず罪あるひとをくいあらためさせんがためな
り（一）おなじころヨハネのでし耶蘇にきたりていひけるハ

われらとパリサイの人ハしばしば断食するに師のでしハだん
じきせざるハなにゆゑぞ　十五 耶穌こたへていひけるハ新郎
の友そのはなむことともにをるうちハかなしむことをえ
んや将来はなむこをひきとらるる日きたらんそのときハ
ハ断食すべきなり　十六 あたらしき布をもてふるき衣をつく
ろふものハあらじ　そハ補ひしものの衣をひきてさけや
ぶりその綻ますますはなはだしくならん　十七 またあたらしき
酒をふるきかはぶくろにいるることハあらじ　もしせ
バ囊はりさけ酒もながれいでてそのふくろもまたむなしくなら
ん新囊にあたらしき酒をいるれバふたつながらたもつ

べし（一）十八 耶蘇これらのことをいへるときある宰きたり
拝していひけるハわがむすめいますでに死りききたりてその
なんぢ手をつけたまはゞ生べし 十九 耶蘇たちてこれにしたが
ひその門徒もともなはれし 二十 十二年血漏をわづらひたる婦
うしろよりきたりてその衣のすそにさはれり 二十一 こ
ろもにたゞさはるとも愈んとおもへばなり 二十二 耶蘇ふりか
へり婦をみていひけるハ。むすめよ心やすかれ なんぢの信
仰なんぢをいやせり。されバをんなこのときより愈 二十三 い
たりて宰のいへにいりしに笛ふくものおよびおほくの人の
なきさわぐをみて 二十四 これらにいひけるハ退むすめハしぬる

はあらずたゞいねふるのみとひとびと耶蘇をあざけらふ
二五
このものをいだせしのちいりてその手をとりしに女おきた
り 二六 このきこえあまねくその地にひろがりぬ 二七 耶蘇こゝ
をさりゆきたまふにふたりの瞽者あとをしたひてよびいひけるはダビデ
の子よわれらをあはれみたまへ 二八 耶蘇いへにいりしにめ
しひきたりければこのものらにいひたまひけるはわれこのこ
とをなしうると信ずるやとかれらいひけるは主よしかり 二九 耶蘇
かれらの目に手をつけてなんぢらの信ずるごとくなんぢ
らになるべしといひければ 三十 その目ひらけゝり耶蘇きびし
くいましめてこれにいひけるはつゝしみて人にしらする

なかれ 三一 されどもかれらはいでゝあまねくその地に耶穌の名をいひひろめたり ○ 三二 めしひのいづるときひとりの鬼にとりつかれたる唖を耶穌につれきたりしに 三三 鬼おひいだされておしものいへれば衆人あやしみいひけるはイスラエルのうちにてもいまだかゝることはみざりき 三四 パリサイのひといひけるはこの人は鬼のかしらによりておにをおひいだせるなり ○ 三五 耶穌あまねくむらざとをめぐりその會堂にてをしへ給ひ天國の福音をのべつたへ民のうちなるすべての病をすべてのわづらひをいやせり 三六 衆人かふものなき羊のごとくなやみまよひ流離するありしゆゑこれを見てあ

れみたまふ 三七 そのときでしたちにいひけるハ收穫ハお
ほく工人ハすくなし 三八 ゆゑにその稼主ハはたらくものをその
りいれにおくりいだされんことをねがふべし

第十章 さて耶穌その十二でしをよびよせけがれたる
鬼をおひいだしまたもろもろのやまひもろもろのわづらひを
いやす權をたまへり 二 それ十二使徒の名ハかくのごとし首
めハペテロとなづけたまひしシモン その兄弟アンデレ
ゼベダイの子ヤコブ そのきやうだいヨハネ 三 ピルポ バルトロマイ
トーマ 稅吏マタイ アルパイの子なるヤコブ タツダイとなづく
るレツバイ 四 カナンのシモン イスカリオテのユダ これぞまくあえ

ち耶穌をわたしゝものなり（五）耶穌この十二をつかはさんとして命じいひけるは異邦の途にゆくなかれまたサマリヤ
人のむらにいるなかれ（六）たゞイスラエルの家のまよへる
羊にゆけ（七）ゆきて天國ちかきにありとのべつたへよ（八）病
のものをいやし癩病をきよくし死たるものをよみがへらせ
鬼をおひいだすことをせよ。なんぢら價なしにうけたれば
またあたひなしにほどこすべし（九）なんぢら金または銀また
は錢をたくはふるなかれ（十）たびぶくろのしたぎ
履つゑもまたそのりやうもつことなかれそはたくむものもその食物をうる
は宜なり（十一）いづれの郷邑にいらんとき其中の好人をた

づねていづるまではそこにとゞまれ 十二 人(ひと)のいへにいらバ
その平安(やすき)をとへ 十三 その家(いへ)もしやすきをうくべきものならバ
なんぢらのねがふ平安(やすき)ハそのいへにいたらん。もしやすきを
受(うく)べからざるものならバなんぢらの祈(ねが)ふやすきハなん
ぢらにかへるべし 十四 たれにてもなんぢらを接(うけ)ずなんぢらの言(ことば)を
きかざるものあらバその家(いへ)また其の邑(まち)をさるとき足(あし)の
ちりをはらへ 十五 われまことになんぢらにつげん審判(さばき)の日(ひ)
にいたらバソドムとゴモラの地(ち)ハこのむらよりもなほやすから
ん〇 十六 われなんぢらをつかはすハ羊(ひつじ)を狼(おほかみ)のなかにいる
るがごとし。ゆゑに蛇(へび)のごとくさとく鴿(はと)のごとくおとなし

こかれ 十七 つゝしみて人(ひと)はこゝろせよ。それ人(ひと)なんぢらを集議(しふぎ)
所(しよ)にわたしまたその會堂(くわいだう)にてむちうつべければなり 十八 ま
たわが縁故(ゆゑ)によりて侯伯(つかさ)およひ王(わう)のまへにひかるべし。こ
れかれらと異邦人(いはうじん)に證(あかし)をなさんがためなり 十九 人(ひと)なんぢら
を解(わた)さばいかになにをいはんとおもひわづらふなかれ。そ
のときいふべきことはなんぢらに賜(たまは)るべし 二十 こゝはなんぢ
らみづからいふにあらずなんぢらの父(ちゝ)の靈(たましひ)そのうちにお
りていふなり 二十一 兄弟(きやうだい)はきやうだいを死(し)にわたし父(ちゝ)は子(こ)を
わたし子(こ)はふたおやと訴(うつたへ)かれをころさしむべし 二十二 ま
たなんぢらわが名(な)のためにすべての人(ひと)ににくまれん。され

ど終まで忍ぶものハすくはるべし 二三 この邑にて人なんぢ
らをせめなばほかのむらにのがれよ我まことになんぢ
らにつげん。なんぢらイスラエルのむら／＼をめぐりつくさ
ざるうちに人の子ハきたるべし 二四 でしハ師よりまさらず
しもべハ主よりまさらざるなり 二五 でしハその師のごとく
僕ハそのあるじのごとくならば足ぬべし。人あるじを
よびてベルゼブルといはゞましてその家のものをや 二六 この
ゆゑにかれらをおそるゝことなかれ。それ掩藏れてあらは
れざるものなくかくれてしられざるものなければなり 二七
われ暗中においてなんぢらにつげしことを明處にのべよ。

耳をつけてきゝしことを屋上にいひひろめよ 二八 身をころ
して霊魂をころしえざるものをおそるゝなかれ。
唯なんぢらたましひとからだとを地獄にほろぼしうるも
のをおそれよ 二九 二羽のすゞめは一銭にてうるにあらずや
しかるになんぢらの父のゆるしなくばそのいちはも地に
おつることあらじ 三十 なんぢらのかしらの髪までことごとくかぞ
へらる 三一 ゆゑにおそるゝなかれなんぢらは多くの雀よ
りもまされり 三二 されバおほよそ人のまへにてわれをしると
いはんものはわれもまた天にいますわが父のまへにこれ
をしるといはん 三三 人のまへにてわれをしらずといはんもの

をわれもまた天にいますわが父のまへにこれをしらずと
いふべし○三四 地におだやかをいださんためにわれきたれ
りとおもふなかれ泰平をいださんとにはあらで刃をいださ
んためにきたれり 三五 それわがきたるは人をその父にそむ
かせ女をその母にそむかせ媳をその姑にそむかせんがた
めなり 三六 人の敵はその家のものなるべし 三七 われよりも
父母をいつくしむものはわれにかなはざるものなりわれ
よりも子女をいつくしむものはわれにかなはざるものな
り 三八 その十字架をとりてわれにしたがはざるものもわれ
に宜ざるものなり 三九 その生命をうるものはこれをうしな

ひ我ためにいのちをうしなふものハこれを得べし 四十 なんぢらを接るものハ我をうくるなり。また我をうくるものハ我をつかハせしものをうくるなり 四十一 預言者なるをもてそのよげんしやを接るものハよげんしやのむくいをうけ義人なるをもてそのたゞしき人をうくるものハたゞしき人の報賞をうく 四十二 わが門徒なるをもてそのちひさきひとりのものにひやゝかなる水一杯にてものまするものハ誠になんぢらにつげん。このかならずそのむくいを失ハじ

第十一章

耶蘇その十二でしに示ををりしときこゝをさり道をなしくひろめんがためにこの地の諸邑にゆけり ○ 二 さ

てヨハネ獄(ひとや)にてキリストのなせしわざをききてそのでし二人(ふたり)
をこのものにつかはして 三 いはせけるは來(きた)るべきものはなんぢ
なるかまたわれら他(ほか)にまつべきかと 四 耶蘇(いゑそ)このものにこたへて
へていひけるはなんぢらが聞(きく)ところみるところのことを
ヨハネにゆきてつげよ 五 瞽者(めしひ)はみ跛者(あしなへ)はあゆみ癩病(らいびやう)はき
よまり聾者(つんぼ)はきゝ死(しに)たるものはいきかへされ貧者(まづしきもの)はふく
いんをきかせらる 六 おほよそわがためにつまづかざるも
のは福(さいはひ)なり○ 七 このものゝかへるのち耶蘇(いゑそ)ヨハネのこと
をひとびとにいひけるはなんぢら何(なに)をみんとて野(の)にいでし
や風(かぜ)にうごかさるゝ葦(あし)なるか 八 さらばなんぢらなにをみ

んとていでしや美服をきたる人なるか。やはらかきころもも
をきたるものは王宮にあり 九 さらばなにをみんとていで
しや預言者なるか。然りわれなんぢらにつげんこれはよげ
んしやよりもすぐれたるものなり 十 それなんぢにさきだ
ちて道をそなふべきわが使者をなんぢのまへにおくら
んと録されたるはすなはち是なり 十一 まことになんぢらに
つげん婦のうみたるもののうちいまだバプテスマのヨハネ
より大なるものはおこらざりきされど天國のいとちひさ
きものもこれよりはおほいなるなり 十二 バプテスマのヨハネ
のときより今にいたるまで人々はげみて天國をとらんと

をておしかけたるものハこれをとらまへり 十三 なべてむかしの預言者
と律法のよげんしたるハヨハネのときまでなれバなり 十四 もし
しなんぢらわがことばを承ることをこのまバきたるべき
エリアハこれなり 十五 耳ありてきこゆるものハきくべし ○
十六 われこの世をなにゝたとへんや 童子いちまちにゐてその侶
をよびていひけるハ 笛ふけどもなんぢらおどらず 哀をあらはせど
もなんぢら胸うたぞといふに似たり 十八 それハヨハネきたり
て食ことも飲ことをもせざれバ鬼につかれたるものなりと人
いふて 十九 人の子きたりてくらふことをもし飲ことをもせしか
バいはく食をたしなみ酒をこのむ人みつぎとり罪あるものゝ

友なりといへりされども智慧ハちゑの子に義とせらるゝなり○二十 そのとき耶穌おほくの異能をなしたまひたる諸邑のくひあらためざるによりて責いひけるハ 二十一 あゝわざはひなるかなコラジンよあゝ禍なるかなベツサイダよなんぢらのうちにてなせし異能をもしツロとシドンにてなせしならばこの民ハとくより麻ぬき灰をかむりてくひあらためしなるべし 二十二 またなんぢらにつげん審判の日にはツロとシドンの刑罰ハなんぢらよりもなほやすからん 二十三 まてよ天にまであげられしカペナウムよまた陰府におとしさるべしそハなんぢらに行しことなるわざをもしソドマにてなせしならば

今日までもなほたもちしならん 二四 まことなんぢらにつげん
審判の日にはソドマの地ハなんぢらよりもなほやすかるべし
○二五 そのときイエスこたへていひけるハ天地の主なる父よ
このことを智者さときもののまへにかくして赤子にあらはした
まふを謝す 二六 ちちよ然りこのごときハ聖旨にかなへ
るなり 二七 父ハまかせて萬物をあたへたまへりちちのほかにハ
子をしるものなくまた子および子のあらはさんとするもの
のゝほかは父をしるものなし○二八 すべて勞たるものおもき
重をおへるものハわれにきたれわれなんぢらをやすませ
ん 二九 われハこゝろ柔和にして謙遜ものなれバわがくびき

と負てわれにまなべ、なんぢらこゝろに平安をうくべし 三十 そ
れわがくびきはやすくわが荷はかろければなり

第十二章 そのころ耶蘇あんそくにちに麦田をすぎしがその
でしたち飢て穂をつみそめたり 二 パリサイの人これをみ
て耶蘇にいひけるは、なんぢのでしは安息日にすまじきこ
とをなせり 三 これにこたへけるは、ダビデおよび従者あり
しものゝ饑しときなせしことをいまだよまざるか 四 すなは
ち神の殿にいりて祭司のほかはおのれおよびともなへる
ものもくらふまじきそなへの餅をくらへり 五 またあんそ
くにちに祭司は殿のうちにて安息日をおかせどもつみな

きことを律法においてよまざるや 六 われなんぢらにつげん殿よりおほいなるものここにあり 七 われ矜恤をこのみて祭祀をこのまずといひしことのこころをしらバ罪なきものをつみせざるべし 八 それ人の子ハあんそくにちの主たるなり ○ 九 ここをさりてかれらの會堂にいりしに 十 一手なえたる人ありけれバかれら耶穌をうつたへんとてこころみていひけるハ安息日にいやすことをゆるすべきや 十一 これにいひけるハなんぢらのうちにひとつの羊をもてるものあらんにもしその羊あんそくにちに坑におちいらバこれをとりあげざるものあらん 十二 人ハひつじよりまさること

いくのまさりぞや。されば安息日は善をなすはよし 十三 つひに
その人に なんぢの手をのべよといひければのばせり。また
もちまへの手のごとく愈 十四 パリサイのひといでゝ耶蘇を
ころさんとはかるのよし 十五 耶蘇これをしりてこゝをさりしに
おほくの人々これにしたがふ。すべて疾病あるものをことごとく
いやし 十六 これを人にあらはすことなかれと戒たまふ 十七 これ
預言者イザヤのいひしことばに 十八 これはわがえらみしわが
僕またなりわが心にかなひたるわが愛もの。われこれにわ
ゝが靈をおくらん。この人は異邦人にこゝちをしめすべし 十九 この人は
競こともなく喧こともなし人ちまたにおいてそのこゑをきく

ることなし 二〇 眞道をして勝とけしむるまでは いためる葦を
をることなく けぶれる麻を けすことなし 二一 異邦人もまた
その名によるべしとあるにかなはせんためなり○ 二二 こゝ
に鬼につかれたるめくらの瘖なるものを耶穌のもとにつ
れきたりければ この瞽のおしをいやしてものいひみゆる
やうになせり 二三 衆人みなあやしみていひけるは これダビデ
の子にはあらざるか 二四 パリサイの人きゝていひけるは この
人はおにのかしらベルゼブルをつかふにあらざれば鬼をお
ひいだすことなし 二五 耶穌そのこゝろをしりてこれらにいひ
けるは すべてあひあらそふ國はほろび すべてあひあら

そふ邑や家はたちゆくことならず 二六 サタンもしサタンをおひいださばみづからあひわかれあらそふなり。さらばその國いかでたたんや 二七 もしわれベルゼブルによりて惡鬼をおひいださばなんぢらの子弟はたれによりておひいだすや。そのゆゑかれらはなんぢらの裁判人となるべし 二八 もしわれ神の靈によりておにをおひいだせしならば神の國はすでになんぢらにきたれり 二九 まづ勇士をしばらざればいかでその家にいりそのだうぐをうばふことをえんや縛てのちはそのいへをうばふべし 三十 われとともにあらざるものはわれにそむくものなりわれとともに斂ざるものはちらすものなり 三一 このゆゑに

なんぢらにつげん人々のすべてをかすところのつみと神
をけがすことはゆるされん。されどひとびとの聖霊をけがす
ことはゆるさるべからず 三二 言をもて人の子にそむくもの
はゆるさるべし。されどことばをもて聖霊にそむくものは今
世においてもまた來世においてもゆるさるべからず 三三 あ
るひは樹をもよしとしその果をもよしとせよ。あるひは樹
をもあしとしその果をもあしとせよ。その樹はその果
によりてしらるゝなり 三四 あゝ蝮のすゑよなんぢら悪にし
ていかで善をいふことをえんや。それ心にみつるより口に
いづるものなればなり 三五 よき人はこゝろの善庫よりよ

きかのごとし。悪人ハそのあしきくらより悪きものをいだせり。三六 われなんぢらにつげん、すべて人のいふところの虚言をさばきの日までこれをうつたへざるを得じ。三七 そはなんぢそのいふところのことばによりて義とせられ、またそのいふことばによりて罪ありとせらるゝなり○三八 このときある學者とパリサイのひとびとこたへていひけるハ、師よ奇蹟をなしてみせんことをなんぢに請。三九 こたへてのたまひけるハ、奸悪なる世ハしるしをもとむ。されど預言者ヨナのしるしのほかハしるしをあたへらるまじ。四〇 それヨナが三日三夜うをのはらのうちにありしごとく人の子

もみつかは地(ち)のうちにあるべし 四一 ニネベの人(ひと)さばきの日(ひ)にともにたちて今(いま)の世(よ)のつみをさだめん。そはヨナのをしへによりて悔改(くいあらため)たり。それヨナよりおほいなるものこゝにあり 四二 南(みなみ)の女王(によわう)さばきの日(ひ)にともにたちていまの世(よ)のつみをさだめん。そのもの地(ち)の極(はて)よりソロモンの智慧(ちゑ)をきかんとてきたりぞ。それソロモンよりおほいなるものこゝにあり 四三 あくき人(ひと)よりいでゝかわきたるところをめぐり安息(やすみ)をもとむれどもえずしていひけるは 四四 わがいでし家(いへ)にかへらんとてきたりしに空虚(くうきよ)にしてはききよめかざりあるをみ 四五 遂(つひ)にゆきておのれよりあしき七(なゝ)の悪鬼(あくき)を

たゞさく〳〵とともにいりてこゝに居バその人(ひと)ののちのありさ
まハまへよりなほあしくなるべし。このあしき世(よ)もまたかく
のごとくならん 四六 耶蘇(いゑそ)ひと〴〵にかたりをるときその母(はゝ)と
兄弟(きやうだい)このまへにものいはんとてそとにたちけれバ 四七 あるひと
耶蘇(いゑそ)にいひけるハなんぢの母(はゝ)ときやうだいなんぢにもの
いはんとてそとにたてり 四八 耶蘇(いゑそ)つげしものにこたへて
いひけるハわが母(はゝ)ハたれぞわが兄弟(きやうだい)ハたれぞや 四九 手(て)をの
べその門徒(でし)をさしていひけるハ。これわがはゝわがきやう
だいなり 五十 それまことにわが天(てん)にいます父(ちゝ)の旨(むね)をおこなふ
ものハこれぞわが兄弟(きやうだい)(アニヲトヽ)わが姉妹(しまい)(アネイモト)わが母(はゝ)なれバなり

第十三章 この日耶穌いでゝうみべに坐せしに おほくの人
人のあつまりきたりければ耶穌ハふねにのりてざし
すべての人々ハきしにたちをり 三 耶穌たとへをもておほく
のことをひとびとにかたりぬ 種まくものまきにいでし 四
播るときみちのほとりにおちしたねありそらの鳥きたり
てついばみつくせり 五 また土うすき磽地におちしたねあ
りたゞちにはえいでたれど 六 日のいでしときやかれてしか
ば根なきがゆゑにかれたり 七 また棘中におちしたねあり
いばらそだちてこれをふさげり 八 また沃壌におちしたね
あり實をむすべることあるひハ百倍あるひハ六十倍ある

ひハ三十倍せり 九 耳ありてきこゆるものハきゝくべし 十 門
徒たちきたりてこれにいひけるハなにゆゑに譬をもて、この
たみらにことばをのべたまふや 十一 こたへていひけるハなんぢらに
ハ天國の奥義をしることをあたへたまへども、このたみらにハあ
たへたまはざればなり 十二 それもてるものハ予られてなほあ
まりあり 無有ものハそのもつところのものをもとらるべ
し 十三 このたみらハ視てもみず聴てもきかずさとらざるがゆゑ
によりてたとへをもてこのたみらにいへり 十四 イザヤの預言に。
なんぢらハきゝけどもさとらず、みれどもみず 十五 そハこの民め
にて見みゝにてきゝこゝろにてさとり悔改てすくはれまいや

ふまんことをおそれその心をにぶくし耳をおほひ目をと
ぢたるといひしはこのゆゑなり 十六 されどなんぢらの目はみるな
んぢらの耳はきくがゆゑにさいはひなり 十七 われまことに
なんぢらにつげんおほくの預言者と義人はなんぢらがみ
るところをみんとしたりしが見ることをえずなんぢらがき
くところをきかんとしたりしが聞ことをえざりき 十八 ゆゑ
になんぢら播種のたとへをきけ 十九 天國のをしへをききて
さとらざればあしきものきたりてその心にまかれたるた
ねをうばふこれ路のほとりにまかれたるたねなり 二十 磽地に
まかれたるたねはこれをしへをききてすみやかによろこ

びらきてども 二一 おのれに根なければ志ばしのみ をしへのた
めに患難あるひハせめくるしきことのおこるときハたちま
ち道につまづくものなり 二二 またいばらのなかにまかれた
る種ハことばをしへをきけどもこの世のこころづかひと
貨財のまどひハをしへをふさぎてみのらざるものなり
二三 沃壌にまかれたるたねハことばをしへをききてさとり實
をむすぶことあるひハ百倍あるひハ六十倍あるひハ三十
倍をむすぶものなり〇 二四 またたとへをこのまてはなしていひ
けるハ天國ハ人はたけによきたねをまくににたり 二五
ひとぐのいねたるうちハその敵きたり麥のなかにそ

むぎをまきてさりぬ 二六 苗(なへ)おひいでゝみのりたるときから
すむぎもあらはれたり 二七 あるじの僕(しもべ)きたりていひけるは
主(きみ)よなんぢは美種(よきたね)をはたけにまかざりしか。いかにしてからすむ
ぎあるや 二八 あるじはいひけるは 敵人(あだびと)これをなせり しもべら
主(あるじ)にいひけるは。われらゆきてこれをぬきあつむ
るはよろしきか 二九 否(いな)おそらくはなんぢらからすむぎを抜(ぬき)あつ
めんとて麦(むぎ)をもともにぬくべし 三十 收穫(かりいれ)までふたつながら
そだておけ。かりいれのとき先(まづ)からすむぎをぬきあつ
めてやかんためにこれをつかね 麦(むぎ)をばわがくらにをさめ
よといはん」 三一 またたとへをこれらにしめしいひけるは

天國(てんこく)ハからしだねのごとし人(ひと)これをとりてそのはたけにまけバ 三二 よろづの種(たね)よりハちひさけれども長(そだち)てハほかのくさよりおほいなりてそらの鳥(とり)きたりそのえだにやどるほどの樹(き)となるなり○三三 またたとへをかれらにかたりけるハ。てんこくハ餅(パン)だねのごとし。婦(をんな)これをとり三斗(さんど)の粉(こ)のなかにかくせバことごとくふくれいづるまでなり 三四 耶蘇(いゑす)たとへをもてすべてこれらのことを衆人(ひとびと)にかたりたまへり。譬(たとへ)にあらざれバかたりたまはず 三五 これ預言者(よげんしや)によりて。われたとへをまうけて口(くち)をひらき世(よ)のはじめよりこのかくれたることをいひいださんといはれたるにかなはせんためなり○三六 つ

ひよ耶穌ひと〴〵をさりて室にいりぬそのでしきたりて
いひけるハはたけのからすむぎのたとへをわれらに解た
まへ 三十七 こたへていひけるハよきたねをまくものハ
人の子なり 三十八 はたけハこの世界なりよきたねハ天國
の諸子なりからすむぎハ悪魔のこどもなり これをま
く敵ハあくまなりかりいれハ世のをハりなりかりいるものハ
天のつかひたちなり 四十 からすむぎをあつめて火にやかるゝ
ごとくこの世のをハりにおいてもまたかくのごとくなるべし
四十一 人の子そのつかひたちをつかハしてその國のうちよ
りすべてつまづかするものと悪をなすものをあつめて

四二 これらを爐の火になげいるべしぞそこにてこのなげきと齒をかむることあらん 四三 このとき義人ハその父の國において日のごとくひかりかがやくべし 四四 また天國ハたとへばこのかくれたる寶のごとし人みいださバこれを秘しかくしよろこびてかへりてその所有をことごとくうりてその田をかふなり〇 四五 またてんこくハよき珍珠をもとめあるくあきびとのごとし。四六 一のあたひたかき珍珠をみいだしさらバそのもちものをことごとくうりてこれを買なり〇 四七 またてんごくハ海になげうちてさまざまの魚をとる網のごとし 四八 それみつれバきしにひきあげ坐てそのよきものをえらびうつは

にいれあしきものをすつるなり 四九 世のをはりにおいても
かくのごとくなるべし。天のつかひたちいでゝ義者のうちよ
りあしきものをとりわけ 五十 これを爐の火になげいるべし。
そこにて哀哭はがみをすることあるべし○ 五一 耶蘇このともがらにい
ひけるはこのことをさとるか悟しや。このともがらはいひけるは主よ
さとれり 五二 耶蘇このともがらにいひけるは。されバてんこくについ
てをしへらるゝ學者はあたらしきものとふるきものと
をその庫よりいだす家のあるじのごとし○ 五三 耶蘇このた
とへをいひをはりてこゝをさりぬ 五四 そのふるさとにいた
り會堂にてをしへしにひと〳〵あやしみいひけるはこの人

の智慧と異能ハいづこよりきたるや 五五 これ木匠の子にハあらずや その母ハマリア その兄弟ハヤコブ ヨセ シモン ユダならずや 五六 その妹たちハみな我らと偕にあるならずや さらばこの人のすべてこれらのことハいづこよりきたりしや 五七 つひに厭てこれをすてゝ 耶蘇これらにいひけるハ 預言者ハその故土そのいへのほかにおいてたふとまれざることなし 五八 このひとゞが信ぜざることあるによりておほくのふしぎあるわざをこゝにハなしたまはざりき

第十四章 そのころ分封のきミ ヘロデ 耶蘇のうはさをきゝて

二 そのしもべにいひけるハこれバプテスマのヨハネなり。この
者よみがへりたり。ゆゑにふしぎなるわざをおこなふなり
三 前(さき)にヘロデそのきやうだいピリツポの妻(つま)ヘロデヤのことに
よりてヨハネをとらへしばりて獄(ひとや)にいれたり 四 こハ
ヨハネヘロデにこのをんなをめとるハよろしからずといひ
しによる 五 このゆゑヨハネをころさんとおもへど民(たみ)これを
預言者(よげんしや)とするによりてこれをおそれたりしが 六 ヘロデ誕(たん)
生(じやう)の日(ひ)をいはへるときヘロデヤのむすめその坐上(ざしやう)にて舞(まひ)
をなしヘロデをよろこばせければ。七 いかなるものをも求(もと)
めにまかせてあたへんとヘロデこれにちかひたり 八 むすめは

その母(はゝ)のをしへによりバプテスマのヨハネの首(くび)を盤(ぼん)に
のせてこゝにたまはれといふ 九 王(わう)うれひけれどもその
誓(ちかひ)たるゆゑ席(せき)につらなれるもののためにあたふることを命(めい)
じ 十 ごゝろかせるもい人(ひと)をつかはし獄(ひとや)においてヨハネのくびをき
らせ 十一 その首(くび)をぼんにのせてむすめにあたへければ女(むすめ)
はこれをその母にさゝげたり 十二 ヨハネのでしたちきた
りて屍(しかばね)をとりこれをはうむりゆきて耶蘇(いえそ)につぐ 十三 耶蘇(いえそ)こ
れをきゝて人(ひと)をさけ船(ふね)にのりてそこをさりさびしきとこ
ろにゆきたまひしが衆人(ひとびと)きゝて歩行(かち)にてこれにしたがへ
り ○ 十四 耶蘇(いえそ)いでゝおほくの人(ひと)をみてこれをあはれみその

病るものをいやせり 十五 日くるゝときその弟子たちきたりていひけるはこゝは寂莫しところにして時もすでにおそしむらがる人々へゆきてみづから食ものをかはせんためにかへらしめよ 十六 耶穌これにいひけるは人々ゆくにおよばずなんぢらこれに食をあたへよ 十七 こたへけるはわれらこゝにたゞ五の餅とふたつの魚あるのみ 十八 耶穌いひけるはそれをこゝにもちきたれと 十九 遂にひとびとに命じてくさのうへに坐せしめ五のパンと二のうをを取り天をあふぎて謝しパンをさきて門徒にあたふ門徒らこれをひとびとにあたへぬ 二十 皆くらひて飽そのあまりたるくづをひろひしに十二の筐にみちたり

三くひしものハ婦人とこどものほかおほよそ五千人ありき○二二やがて耶蘇ひとびとをかへさんとしてその門徒をしひて船にのせむかふのきしへさきにわたらしむ二三かくてひとびとをかへしければ祈禱せんとしてひそかに山にのぼり日くれてひとりそこにいませり二四ふねハ海中にありて逆風のためになみにたゞよハさる二五夜の四時ごろ耶蘇うみのうへをあゆみてきたまひしかバ二六門徒そのうみのうへをあゆめるをみておどろきこハ變化のものなりといひておそれさけびたり二七耶蘇やがてこれにいひけるハこゝろやすくあれわれなりおそるゝなかれ二八ペテロこたへてい

ひけるハ主よもしなんぢならバわれに命じてみづをふみてなんぢのもとにいたらしめよ 二九 来れといひたまひけれバペテロふねよりおりて耶穌のもとにいたらんとして水のうへをあゆみたりしが 三十 風のはげしきをみておそれてしづみかゝりさけびて主よわれをたすけたまへといふ 三一 耶穌やがて手をのべてこれをとらへていひけるハ信仰のうすきものよなんぞうたがふや 三二 ともに舟にのりければ風しづまりぬ 三三 ふねにをるものみなちかよりてこれを拝しいひけるハまことになんぢハ神の子なり○三四 つひにわたりてゲネサレの地にいたりしが 三五 そのところのひとびと耶穌をしりてあまね

ねく四方に人をつかはしてすべて病のものをたづさへきた
らしむ 三六 ただその衣のすそにさはらんことを耶蘇にねが
へり捫しものはみなことごとくいやされたり

第十五章 そのときエルサレムの學者とパリサイの人と耶蘇にきた
りていひけるは 二 なんぢの門徒いかなれば人のつたへを犯
をかすはなにゆゑぞかれら食するときはその手をあらはざ
ればなり 三 こたへてこれらにいひけるはなんぢらはまた
なんぢらのつたへによりて神の誡をそむくはなにゆゑぞ 四
それ神はいましめてなんぢの父母をうやまへまた父母をの
のしるものはころさるべしとのたまへり 五 然るになん

ぢらハいひておよそ人ちゝはゝにむかひなんぢをやしなふべきものハ禮物なりといはゞその父母をうやまはざるもよしとせりかくてなんぢら遺傳によりて神のおきてをむなしくせり 七 偽善者よイザヤハよくなんぢらについてよげんし 八 この民ハくちびるにてわれをうやまへどもその心ハわれにとほざかれり 九 人のいましめを誡としをしへとなしていたづらにわれを拝むといへり 十 耶穌ひとびとをよびてこれにいひけるハきゝてさとれ 十一 口にいるものハ人をけがさず口よりいづるものハこれ人をけがすなり 十二 門徒きたりて耶穌にいひけるハパリサイの人

このことばをきゝていとひ棄るとなんぢしるやの 十三 こたへていひけるはわが天の父のうゑざるものはことごとくぬかるべし 十四 このものどもをすておけ瞽者のてびきするめしひなり。もしめしひのもの瞽者のてびきせばふたりとも溝におつべし 十五 ペテロ耶蘇にこたへていひけるはこのたとへをわれらにときたまへ 十六 耶蘇いひけるはなんぢらもいまださとらざるか 十七 すべて口にいるものは腹をとほりてこのちやにおつるをいまだしらざるやの 十八 口よりいづるものはこゝろより出これぞ人をけがすものなり 十九 それこゝろよりいづるところの悪念 凶殺 姦淫 苟合 盗竊 妄證 謗讟 二十 これらは人をけがすもの

めなり、されども手をあらはずしてくらふハ人をけがさ
ず 二一 耶穌こゝをさりてツロとシドンの地にゆきけるに 二二 その
の地よりいでたるカナンの婦いでてよばはりていひけるハ 主よ
ダビデの裔よわれをあはれみたまへ わがむすめ鬼につ
かれていたくくるしめり 二三 耶穌ひとことも答へたまはずして
ざりしかば その門徒きたりてこふていひけるハ われらのあ
とより喊叫ふゆゑよ この婦をさらせたまへ 二四 こたへていひ
けるハ イスラエルの家のまよへる羊のほかにつかはされ
ざるなりと 二五 婦きたり拝していひけるハ 主よわれをたすけた
まへ 二六 こたへけるハ 児女のパンをとりて犬にあたふ

るはよろしからずと 二七 をんないひけるは主よしかりされど
いぬもその主人の膳よりおつるくづをくらふなり 二八 つひ
に耶穌こたへていひけるはをんなよなんぢの信仰はおほいなる
なりねがひのごとくなんぢに成べしこのときよりその女
いえたり○ 二九 耶穌こゝをさりガリラヤのうみべにゆき山
にのぼりて坐せり 三〇 おほくのひとびと跛者めしひ瘖者かた
はおよびさまざまのやまひあるものをともなひきたり耶穌
のあしもとにおきければすなはちこれをいやしぬ 三一 こゝ
においておしはものいひ残疾はいえあしなへはあゆみ
瞽者はみえたるをひとびと見てあやしみイスラエルの神をあ

ぐめたり○ 三二 耶蘇そのでしを召ていひけるハわれこの衆人をあはれむ。このものどもハすでに三日われとゝもにをりてくらふものなし飢させてかへしむることをこのまずおそらくハ途間にてたをれん 三三 そのでしたちいひけるハ野にてこのおほくの人をあかしむるほどの餅をいづこよりえんや 三四 耶蘇かれらにいひけるハパンいくつあるやかれらいひけるハ七とすこしの魚あり 三五 耶蘇ひとびとに命じて地にすわらしめ 三六 七のパンと魚をとりて謝しこれをさきてその門徒にあたへしでしこれをひとびとにあたふ 三七 くらふてみな飽たりあまりの屑をひろひしに七つのかごにみてり

三八 こゝにて食るものをんなとこどものほかに四千人ありき

三九 耶蘇ひとぐをさらしめ舟にのりてマグダラのさかひに
いたりたまへり

第十六章 パリサイとサドガイの人きたりて耶蘇をこゝろみん
とて天のしるしをあらはさせよといひければ 二 こたへて
のたまひけるハなんぢら暮にハゆふやけによりて晴なら
んといひ 三 朝にハあさやけまたくもりてけふハ雨
ならんといふ。偽善者よそらのけしきをわかつことをしり
て時のしるしをわかちあたはざるか 四 姦悪なる世ハしる
しをもとむるとも予言者ヨナの休徴のほかにしるしを

あたへらるべきしるしはこのほかなかるべしとてかれらをすてゝさりぬ 五 そのときで
しむかふの岸(きし)にいたりしに餅(パン)をたづさふることをわすれ
たり 六 耶蘇(いゑす)かれらにいひけるはこゝろしてパリサイと
サドカイの人(ひと)のパンだねをつゝしめよ 七 門徒(でし)たちひそかに論(ろん)
じていひけるはこれパンをたづさへざりしゆゑならん 八
耶蘇(いゑす)これをしりていひけるは信仰(しんかう)うすきものよなんぢ
らは餅(パン)をたづさへざりしことをろんずるや 九 いまださと
らざるか 五千人(ごせんにん)はいつゝのパンをわかちあたへしにいくつのか
ごひろひしや 十 また四千人(しせんにん)はなゝつのパンをわかちあたへしと
きいくかごひろひしやなんぢらこれをおぼえざるか 十一

パリサイとサドガイの人のパンだねをつゝしめとハ餅(パン)につきていへるにあらざるをなんぞさとらざる 十二 こゝにおいて門徒(でし)そのパンだねにあらでパリサイとサドガイのひとのをしへを謹防(つゝしめ)といへるをさとれり〇十三 耶蘇(いエす)ヒリツポのカイザリヤのさかひにいたりしときそのでしにとひていひけるハひと〴〵ハ人(ひと)の子をたれといふや 十四 こたへていひけるハある人(ひと)ハバプテスマのヨハネあるひとハエリヤあるひとハエレミヤまたハ預言者(よげんしや)のひとりなりといへり 十五 かれらにいひけるハなんぢらハわれをいひて誰(たれ)とするぞ 十六 シモンペテロこたへけるハなんぢハキリスト活神(いけるかみ)の子(こ)なり 十七 耶蘇(いエす)こたへて

てかれにいひけるハヨナの子シモンなんぢハさいはひな
りそハ血肉なんぢにしめせるにあらず天にましますわがお
父なり
十八 またわれなんぢにつげんなんぢハペテロなりわ
が教會をこのいしのうへにたつべし陰府の門ハこれにか
つべからず
十九 またてんこくの鑰をなんぢにあたへん
なんぢがちにおいて繫ところハ天においてもつなぎなんぢ
が地にておいて釋ところハてんにおいてもとくべし
二十 ついに
その門徒をいましめけるハおのれをキリストと人につぐる
ことなかれ○
二十一 このときより耶穌そのでしにおのれの
エルサレムにゆきて長老さいしのかしら學者たちよりおほく

のくるしみをうけすてられころされ第三日(みつかめ)によみがへること
を示(しめ)しはじむ 三二 ペテロ耶穌(いゑそ)をひきとゞめて主(しゆ)よゆるしたまへこの
ことなんぢにきたるまじといひければ 三三 耶穌(いゑそ)ふりかへり
てペテロにいひたまひけるはサタンよわがうしろにしりぞ
けなんぢはわが礙(さまたげ)のものなりそはなんぢは神(かみ)のことをお
もはずして人(ひと)のことをおもへり 三四 このとき耶穌(いゑそ)その
でしにいひけるはくしまゐらせんとおもふものは
おのれをすてゝその十字架(じうじか)を負(おひ)てまゐらすべく 二五 それは
いのちを保全(まつたう)せんとするものはこれをうしなひわがため
にその生命(いのち)をうしなふものはこれをうべければなり 二六 ま

しし人じうかいぢゆうをうるともそのいのちをうしなはゞなんの益あらんやまた人なにをもてその生命にかへんや
二七 それ人の子はちゝの榮光をもてそのつかひたちとともにきたらんそのときおの〳〵の行によりてむくゆべし
二八 まことにわれなんぢらにつげん人の子その國をもてきたるをみるまではこゝに立ものゝうちにしなざるものあるべし

第十七章

一 六日のゝち耶穌ペテロヤコブその兄弟ヨハネをともなひ人をさけてたかき山にのぼりたまひしが
二 かれらのまへにてそのすがたかはりそのかほは日のごとくかゞやきその衣はしろくひかり
三 モーセとエリアあらはれて

耶蘇とゝもにかたりぬ 四 ペテロこたへて耶蘇にいひけるハ主よわれらこゝにをるハ善ことなりみこゝろならバこの處にわれら三の廬をつくらせたまへ一ハ主のため一ハモーセのため一ハエリアのためにせん 五 かくいへるときにかゞやける雲かれらをおほふ聲くもよりいでゝいひけるハこれわがこゝろにかなふわが愛子なりなんぢらこれにきくべし 六 門徒これをきゝておほいにおそれたふれふしたり 七 耶蘇きたりてこれに手をつけ起よおそるゝなかれといひけれバ 八 その目をあげしにたゞ耶蘇の外ハひとりもみざりき○ 九 山をくだるときに耶蘇これに命じて人の

子のよミがへるまでハあんぢうの見しことを人につぐべからずと
十 そのでしとふていひけるハさらバエリアがさきにきたるべしと學者のいふハなんぞや
十一 耶穌こたへていひけるハ實にエリアがさきにきたりて萬事をあらたむべし
十二 されど我なんぢらにつげんエリアハすでにきたれりしかれども人これをしらずたゞ任意にこれをあしらへり。このごとく人の子もまたかれらよりくるしみをうくべし
十三 ここにおいて門徒バプテスマのヨハネをさしていひたまへるをさとれり○
十四 かれらおほくの人のをるところにきたりしにあるひと耶穌のもとにきたり曲跽
十五 いひけるハ主よ

わが子(こ)をあはれみたまへ癲癇(てんかん)にてくるしみ火(ひ)にたふれ水(みづ)に
たふれたるなたゞくるしめり　十六 これをなんぢの門徒(でし)につれ
ゆきたれどいやすことを得(え)ざりき　十七 耶蘇(いゑそ)こたへていひけ
るはあゝ信(しん)なきまがれる世(よ)なるかなわれいつまでなんぢ
らとともにをらんやわれいつまでなんぢらを忍(しのば)んやこの子
をわがもとにつれきたれ　十八 つひに耶蘇(いゑそ)おにをいましめた
まへば鬼(おに)いでゝその子(こ)このときよりいえたり　十九 そのとき
でしひそかに耶蘇(いゑそ)にきたりいひけるはわれらこれをおひ
いだすことあたはざりしはなにゆゑぞ　二十 耶蘇(いゑそ)かれらにい
ひけるはなんぢら信(しん)なきのゆゑなりわれまことになんぢ

らにつげんもし芥種のごとき信あらバこの山にこゝより
かしこにうつれといふともかならずうつらんまたなんぢ
らにあたはざることなかるべし 二一 されどこのたぐひは祈
禱と斷食にあらざればいづることなし ◎ 二二 ガリラヤを周
流ときイエスかれらにいひけるは人の子ひとの手にわたさ
れ 二三 ころされて第三日によみがへるべし門徒これをきき
てはなはだうれへり ◯ 二四 かれらカペナウンにきたれる
とき税金をあつむるものどもペテロにきたりていひける
はなんぢらの師は税金をいださざるか 二五 ペテロしかり
といひていへにいりしときイエスまづかれにいひける

なシモンあんぢハいかにおもふや世界の王たちハ運上お
よび人税をたれよりとるものぞおのれの子よりかほかのもの
よりか 二六 ペテロこれにいひけるハほかの人よりとるなり
耶穌これにいひけるハさらバ子ハかへすることなし 二七 さ
れどもかれらをつまづかせざるためにあんぢ海にゆきて釣
をたれはじめにつる魚をとりてその口をひらかバ金ひ
とつをうべしそれをとりてわれとあんぢのためにこれを
に納よ

第十八章 そのときでし耶穌にきたりていひけるハ天國にお
いて大なるものハたれぞや 二 耶穌をさな子をよびこれを

のなかにたゝせ 三 いひけるハまことに我なんぢらに告ん もしあらたまりて孩提のごとくならずバてんこくにいることをえじ 四 されバおほよそこのをさなごのごとくみづからへりくだるものハこれ天國においておほいなるものなり 五 またわが名のためにかくのごときひとりのをさなごを接るものハわれを接るなり 六 されどわれを信ずるこの小子のひとりをつまづかするものハ磨石をそのくびにかけられて海のふかきところにしづめられんことなほ益あるべし 七 この世ハわざはひなるかなそハつまづきのあることをもてなり 礙ハかならずきたらん されどつまづきをき

たゞしにものハ禍なるかな 八 もしなんぢの手なんぢの足おのれをつまづかさばきりてこれをすてよ両手両足ありてつきざる火になげいれられんよりハ跛またはかたはにて生命にいるハよきなり 九 もしなんぢの眼おのれをつまづかさばぬきいだしてこれをすてよ両眼ありてぢごくの火になげいれられんよりハ一眼にていのちにいるハよきなり

⊙十 なんぢらこのちひさきもののひとりをもつゝしみて軽視なかれわれなんぢらにつげんかれらが天のつかひハ天にありて天にいますわが父のかほをつねにみればなり

十一 それ人の子ハほろびたるものをすくはんためにきたれ

に 十二 なんぢらいかにおもふや人もし百匹のひつじあらん
にその一匹まよはゞ九十九を山におきゆきてまよひし
ひとつをたづねざらんや 十三 もし尋てこれをえばまことに
なんぢらにつげんまよはざる九十九のものよりもなほ
その一をよろこばん 十四 かくのごとくこのちひさきもの
のひとりのほろぶるは天にいますなんぢらが父のこゝろに
あらず 十五 もし兄弟なんぢに罪ををかさばその獨ある
ときにゆきていさめよもしなんぢのことばをきかばその
兄弟をうべし 十六 もしきかずば兩三人の口によりておうし
をあらしすべてのことゝごとさだめんがためにひとりふたり

たゞしきをあひゆけ 十七 もしかのものきかずば教會(けうくわい)につげよ。もし教會にきかずば このものを異邦人(いはうじん)か税吏(みつぎとり)のごとくおもふべし 十八 まことになんぢらにつげん およそなんぢらが地(ち)にて繋(つな)ぐところは天(てん)にても つなぎ。なんぢらが地(ち)にて釋(と)くところは天(てん)にても とくべし 十九 またまことになんぢらにつげん なんぢらのうち二人(ふたり)のもの地(ち)にて こゝろをあはせ なにごとにても もとめば天(てん)にいます わが父(ちち)へ このことのために成(なさ)しめたまふべし 二十 それ わが名(な)のために二三人(ふたりみたり)のあつまるところには われもそのなかに そのうちにあればなり（一） 二 そのときペテロ 耶穌(いえす)にきたりて

ていひけるハ主(しゆ)よいくたびまでわが兄弟(きやうだい)のわれにつミを
をかさばゆるすべきやなゝたびまでか
二二
耶穌(いエス)これにいひ
けるハなんぢにいふ七次(なゝたび)のミならず七十倍(なゝじふばい)せよ
二三
このゆゑに天國(てんこく)ハ王(わう)そのけらいと會計(くわんじやう)をなさんとする
がごとし
二四
なさんとせしとき千萬金(せんまんきん)のおひめおひしたる
ものを王(わう)にひきたりしに
二五
つぐのひうることあたはざりけれバ
しゆハ命(めい)じてその身(み)その妻孥(つまこ)とあらゆるもちものをことごとく
うりてつぐのはしめんとせり
二六
その臣(しん)ひれふしていひけるハ請(こふ)
われを寛(ゆる)したまはゞことごとくつぐのふべし
二七
こゝにおいてその
のけらいの主(しゆ)あはれみてこれを釋(とき)そのおひめをゆるし

たり 二八 その臣いでゝおのれより銀一百のひきおひしたる
友にあひけれバこれをとらへ喉をとりひきおひをかへせ
といふ 二九 その友あしもとに俯伏てねがひいひけるハわが
を寛したまへことごとくつくのふべし 三十 志かるにこれをうけ
がはずしてゆきてその負債をつくのふまでこれを獄にいれ
ぬ 三一 同僚の友そのなせることをみてはなはだこのかなしく往
てこのことをことごとくその主につげしかバ 三二 主この僕をよびて
いひけるハあしき臣よなんぢわれに求しによりてわれそ
のひきおひをことごとく免したり 三三 わがなんぢをあはれみ
しごとくなんぢもまた友をあはれむべきにあらずや 三四 そ

の主いかりてひきおひをとゝるか償までつくのふを獄吏にわたさせ
り 三五 なんぢらもしおの〳〵その心より兄弟をゆるさゞらばわが天のち
ちもまたなんぢらにかくのごとくなさるべし

第十九章

耶穌このことばをいひをはりしときガリラヤをさ
りてヨルダンのむかふユダヤの境にいたりけるに 二 おほくの
人々したがひしかばそこのところにてこれらを醫たまへり
三 パリサイのひときたりて耶穌をこゝろみいひけるは人な
にの故によりてもその妻をいだすはよきか 四 こたへて
これにいひけるは元始に人をつくりたまひしものはこ
れを男女につくれり 五 このゆゑに人ちゝはゝをはなれて

その妻はあひ二人のもの一體となるなりといへり
たゞよのまじはるこの六されバそれハ二つにあらず一體なり神のあは
せたまへるものハ人これをはなすべからず七耶蘇はい
ひけるハさらバ離縁状をあたへて妻をいださせよとモーセハ
命ぜしハなにゆゑぞや八これにこたへていひけるハモーセハなんぢ
らの心のつれなきによりて妻をいだすことをゆるしたる
なり。されど元始ハかくあらざりき九またなんぢらにつげ
んもし淫事のゆゑならでその妻をいだしほかの婦をめど
るものハ姦淫をおこなふなり。またいだされたる婦をめど
るものもかんいんを行ふなり十でしたち耶蘇はいひけるハ

もし人つまにおいてかくのごとくバ娶ざるにしかず 十一 この[illegible]らはいひけるハこのことばハ人みなうけいるることあたはずたゞ稟賦たるもの〻みこれをなしうべし 十二 それ母のたいないよりうまれつきたる寺人ありまた人にせられたる寺人ありまた天國のためにみづからなれる寺人ありこれをうけいるゝことをうるものハ納べし○ 十三 そのときひとびと耶蘇の手をつけていのらんことを求めをさなごをつれまつりきたりければ門徒これをとゞめたり 十四 耶蘇いひけるハ孩提をゆるせわれにきたることをいましむるなかれ天國ハかゝるものにかくのごときもののなり 十五 [illegible]

らま手(て)をつけてこゝをさりぬ○十六ある人(ひと)きたりてこれにいひけるは善師(よきし)よわれかぎりなき生(いのち)をえんがためにはなにかよのよきことをなすべきぞ十七これにいひけるはなにゆゑにわれをよきといふやひとりのほかに善(よき)ものはなしすなはち神(かみ)なりもしいのちにいらんとおもはゞ誡(いましめ)をまもるべし十八かれこたへけるは何(なに)ぞ。耶蘇(いゑそ)いひけるはころすなかれ姦淫(かんいん)するなかれぬすむなかれいつはりの證(あかし)をたつるなかれ十九なんぢの父(ちゝ)と母(はゝ)をうやまへまたおのれのごとくなんぢの隣(となり)をあいすべし二十少者(わかきもの)これにいひけるはこれらはわれいとけなきよりまもれるものなりなほの虧(かけ)たるところわれにあ

るや 二一 耶蘇これにいひけるは完全からんことをおもはゞ
往てなんぢが所有をうりてまづしきものに施せさすれば天
において財あらんしかしてきたりてわれにしたがへ 二二 わかう
どこのことばをきゝてうれひさりぬこれその産業おほ
くありければなり○ 二三 耶蘇そのでしにいひけるはまこと
になんぢらにつげん富るものは天國にいることかたし 二四 ま
たなんぢらにつげんとめるものゝ神の國にいるよりは駱
駝の針のあなをとほるはなほやすし 二五 門徒これをきゝて
いたくおどろきいひけるはさらば誰かすくひをうくべき
や 二六 耶蘇これを見ていひけるはこれ人にはあたはざる

ところなり、されど神はあたはざるところなし〇 二七 この
ときペテロこたへて耶穌にいひけるはわれら一切をすてゝ
なんぢにしたがへり、されば何をか得べきの 二八 耶穌かれ
らにいひけるはまことになんぢらにつげん われにし
たがへるなんぢらは世あらたまり人の子その栄の位にざ
するときなんぢらも十二の位にざしてイスラエルの十二の
支派をさばくべし 二九 およそわが名のために家宅あるひは
兄弟あるひは姉妹あるひは父あるひは母あるひは妻ある
ひは子あるひは田疇をすつるものは百倍をうけ又かぎ
りなき生をつがん 三十 おほくの先なるものは後なり後

あるものハいさきとなるべし
第二十章 それ天國ハあさはやくいでゝ葡萄園にはたらくもの
をやとふ主人のごとし 二 はたらくものにハ一日に銀一
枚をあたへんと約束をなしゝのち葡萄園につか
はせり 三 また九時ごろいでゝちまたにむなしく立るもの
をみて 四 なんぢらも葡萄園にゆけ相當のあたひを
あたへんとこのものどもにいひければ彼等もゆけり 五 また十
二時と三時ごろいでゝまへのごとくなせり 六 五時ごろい
でゝまたほかの立るもののあるをみていひけるハなにゆゑ終
日こゝにむなしくたつや 七 これにこたへていひけるハ我

まゐらせやとふものなきによりてなりとまたまいひけるハなんぢらも葡萄園にゆけさうたうの價をとらすべし 八 日くるるときにぶだうぞのゝあるじその家宰にいひけるハやとひきたるものどもをよびて後にやとひつるものをはじめとし先のものにまであたひをはらへよ 九 五時ごろにやとはれしものどもきたりて銀一枚づゝをうけたり 十 さきのものどもきたりてまさりてはおほくうくるならんとおもひしもまた銀一枚づゝをうく 十一 これをうけて主人をうらみつぶやきけるハ 十二 この後至者のはたらきたるハ一時ばかりなるに終日くるしみを負あつさをあへるわれらとひとし

くなせり
十三 あるじその一人(ひとり)にこたへていひけるハ友(とも)よわれなんぢに不義(ふぎ)をせずなんぢと銀(ぎん)いちまいのやくそくをなしたるにあらずや
十四 なんぢのものをとりてゆけ。われ此(この)のちのものにもなんぢのごとくあたふべし
十五 わがものをもてわがおもふごとくなすはよからざるや。わが善(よき)によりてなんぢの目(め)あしきか
十六 このごとく後(あと)のものハさきに先(さき)のものハあとになるべし。そはよびださるゝものハおほしといへどもえらまるゝものハすくなし〇
十七 耶蘇(いえす)エルサレムにのぼるとき途間(みち)にて衆(ひと)とはなれ十二門徒(でし)をともなひてひそかにかれらにいひけるハ
十八 われらエルサレムにのぼり

人の子は祭司のをさと學者たちにわたされんかれらこれを
死罪にさだめ 十九 また凌辱むちうち十字架につけんために
異邦人にわたすべし また第三日によみがへるべし ○ 二十 その
ときゼベタイの子たちの母その子とゝもに耶穌にきたり拜
してうちにもとむることありければ 二一 これにいひけるは
なにをねがふや、かの耶穌にいひけるはこのふたりのわが子を
なんぢの國において一人はなんぢの右ひとりはなんぢの
左にをらんことを命ぜよ 二二 耶穌こたへていひけるはなん
ぢらは求ところをしらざるぞ。なんぢらはわがのまんとする杯
をのみまたわがうけんとするバプテスマをうけうるやかれら

にいひけるハよくなすべし 二三 耶穌こたへていひけるハまこと
なんぢらハわがさかづきをのミわがうくるバプ
テスマをうくべし。されどわが右左にすわることハわが賜
べきにあらずただわが父にそなへられたるものにあたへ
らるべし 二四 十人のでしこれをきゝてふたりの兄弟をいき
どほりけり 二五 耶穌このでしらをよびていひけるハ異邦の領主ハ
その民をつかさどり大なるものどもハこの民らのうへに權
をとることハなんぢらが知ところなり 二六 されどなんぢらの
うちにてハ然るべからずなんぢらのうち大ならんと思も
ふものハなんぢらのつかへるものとなるべし 二七 まことに

んぢらのうちに首たらんとおもふものハなんぢらのしもべ
となるべし 二八 このごとく人の子のきたるも人をつかふ
ためにあらずかへつて人につかはれまたおほくの人の
かはりて生命をあたへその贖とならんためなり 二九 かれ
らエリコをいでしときおほくのひとびと耶穌にしたがへり
三十 ふたりの瞽者みちのかたはらにすわりしが耶穌の
すぐるときゝてさけびいひけるハダビデのこ主よわれら
をあはれみたまへ 三一 衆これをしづまれといましむれども
愈さけびいひけるハダビデの子しゆよわれらをあはれみ
たまへ 三二 耶穌たちとまりてこれをよびいひけるハなんぢら

らにわれになにをせられんとねがふや　三三　耶蘇(いゑす)にいひけるハ主(しゆ)よわれらの目(め)のひらかれんことをねがふ　三四　耶蘇(いゑす)あはれみてその目(め)に手(て)をつけゝれバたゞちに見(み)ることをえ耶蘇(いゑす)にしたがへり

第廿一章(だいにじふいつしやう)　一　かれら橄欖山(かんらんざん)のベツパゲにいたりエルサレムにちかづけるとき耶蘇(いゑす)ふたりのでしをつかはさんとして　二　かれらにいひけるハなんぢら對(むかひ)のむらにゆけやがてつなぎたる驢馬(ろば)のその子(こ)とともにあるにあはんそれをときてわれにひききたれ　三　もしなんぢらに何(なに)とかいふものあらバ主(しゆ)の用(よう)ありといへさらバたゞちにこれをつかはすべし　四　預言者(よげんしや)

のことばに視よなんぢの王は柔和にして驢馬およびなもちろ
むの子にのりなんぢにきたるとシヨンの女につげよ 五 と
いへるにかなはせんためにこのごとくなせるなり 六 門徒ゆきて
耶穌のめいぜしごとくなし 七 驢馬とその子をひききたり
おのれの衣をそのうへにおきければ耶穌これにのりたまへり 八
衆おほくはそのころもを途にしきあるひとは樹枝をきりて
みちにしきぬ 九 このうち前にゆき後にしたがふものよびい
ひけるはダビデの子ホザナよ主の名によりてきたるもの
はさいはひなり至上ところにホザナよ（） 十 耶穌エルサレム
にいりたまへるときみやここぞりてさわぎたちいひけるはこれ

たれぞや 十一 衆(ひと〴〵)いひけるハこれハガリラヤのナザレよりいでた
るよげんしや耶蘇(いゑす)なり○ 十二 いゑす神のみやにいりてそこの
うちなるすべての賣買(うりかひ)するものをおひいだし兌銀者(りやうがへするもの)のだ
い鴿(はと)をうるものゝこしかけとたふし 十三 このものらにいひける
ハわが殿(みや)ハ祈禱(いのり)のいへととなへらるべしとしるさる。しかるの
るになんぢらこれをぬすびとの巣(す)となせり 十四 瞽者(めくら)あしな
へのひと〴〵殿(みや)にいりて耶蘇(いゑす)へきたりければこれをいやし
ぬ 十五 さいしのをさと學者(がくしや)たちそのなしたまへる奇事(ふしぎなること)をみ
またこどもらのみやにてよばゝりてダビデの子ホザナと
いふをきゝていかりをふくみ 十六 耶蘇(いゑす)にいひけるハこのもの

いふところをきゝしや耶穌(いゑそ)こたへていひけるはしかり嬰兒(をさなご)ちのみ子のくちに讃美(さんび)をまつたくしたりとしるされしをいまだよみたまはざるかと 十七 遂(つひ)にこれらをはなれてみやこをいでゝベタニヤにゆきそこにやどれり○十八 翌朝(あくるあさ)みやこへかへるとき飢(うゑ)ければ 十九 みちのほとりにある一(ひと)つの無花果(いちじく)のきをみてそのところにきたりしに葉(は)のほかにはなにもみあたらざりしかばいまよりのちいつまでも果(み)をむすぶことをえざれとこれにいひたまひければ無花果(いちじく)たちどころにかれぬ 二十 門徒(でし)これをみてあやしみいひけるはいちじくのきはいかにはやくかれしや 二十一 耶穌(いゑそ)こたへてこれにいひけるはまことに

なんぢらはもし信仰ありてうたがはずばこの無花
果におけるがごときのみならずこの山に命じてこゝよりう
つされて海にいれといふともまたならん 二二 またなんぢ
ら信じていのらばねがふところことごとく得べし 二三 いえす
殿にいりてをしへたるとき祭司のをさおよび民の長老だ
ちきたりていひけるはなにの權威をもてこのことをなすや
誰このけんゐをなんぢにあたへしや 二四 耶蘇こたへてかれ
らにいひけるはわれも一言なんぢらにとはんなんぢらもしわれに
こたへをつげなばわれも何のけんゐをもてこれを行ふといは
んことどもなんぢらはいふべし 二五 ヨハネのバプテスマはいづこ

よりぞ天よりか人よりか。この事をたがひに論じあひけるは
もし天よりといはゞさらばなにゆゑ信ぜざるかといはん
二六 もし人よりといはゞまた民をおそるゝなれば、ことごとくヨハネ
を預言者とぞおもへればなり 二七 つひにこたへてわれしらずといふ
耶蘇これらにいひけるはわれもなにの權威をもてこれをなすと
なんぢらにつげじ 二八 なんぢらいかにおもふや あ
る人ふたりの子ありしが長子にきたりていひけるは子よ
けふわが葡萄園にゆきてはたらけ 二九 こたへていなといひ
しがのち悔てゆきたり 三〇 また次子にもかくのごとくいひ
けるにこたへて君よまゐるべしといひしがつひにゆかず

さりき 三一 このふたりのものいづれか父のむねをおこなひし
かれらいひけるハ長子なり耶蘇かれらにいひけるハまこと
になんぢらにつげん税吏および娼妓ハなんぢらよりさき
に神のくにゝいるべし 三二 それヨハネたゞしき道をもて
きたりしになんぢらこれを信ぜずみつぎとりあそびめハ
これを信じたり。なんぢらこれを見てなほ悔あらためで[illegible]
是を信ぜざりき ○三三 また一のたとへをきけある家のある
じぶだうぞのをつくり籬をめぐらしそのなかに酒榨を
ほり樓をたてゝ農夫にかしてほかのくにへゆきし 三四 果期
ちかづきけれバその果をとらんためにしもべをのうふのもとへ

につかはせり 三五 農夫どもそのしもべたちをとらへ一人を
むちうち一人をころし一人をいしにてうてり 三六 またほかの
の僕をまへよりもおほくつかはしけるにこれをもまへの
ごとくあつかひけり 三七 わが子はうやまふならんといひて終にそ
の子をつかはせしに 三八 のうふどもその子をみてたがひに
いひけるにこれは嗣子なりいでころしてその産業をと
らいとくうべしと 三九 すなはちこれをとらへ葡萄園よりおひい
だしてころせり 四〇 さればぶだうぞのの主きたらんとき
にこの農夫になにをなすべきや 四一 かれら耶蘇にいひける
はこれらの悪人をいたくうちほろぼし期におよびてその

果物をおさむるほかの農夫にぶだうぞのをかしあたふべし
四二 耶穌これにいひけるは聖書に匠のすてたる石は
いへのすみの首石となれりこれ主のなしたまふことには
してわれらの目にはあやしとするところなりとあるされし
をいまだよまざるか 四三 この故にわれなんぢらにつげん神
の國はなんぢらよりうばひその果をむすぶ民にあたへら
るべし 四四 この石のうへにおつるものは壞この石うへにお
つればそのものくだかるべし 四五 祭司のをさたちおよび
パリサイの人この譬をききておのれらをさしていへる
をしりて 四六 耶穌をとらへんとおもひたれども民を

おそきたりぞかひとびとのことを預言者とおもひてあり

第廿二章

耶蘇こたへてまた譬をもてかたりけるは 二 天國はある王その子のために婚筵をまうくるがごとし 三 こんえんに請おけるものをむかへんために僕たちをつかはせしかどかれらきたることをこのまざりき 四 またほかのしもべをつかはさんとしていひけるはわが筵すでにそなへたれり わが牛および肥畜をもほふりてことごとくそなはりたれば婚筵にきたるべしとまねきたるものにいへ 五 しかれどもかれら、かへりみずしてさりぬ、その一人はおのれの田にゆきひとりはおのれの貿易にゆけり 六 ほかのものどもはその僕

をとらへはづかしめてころせり 七 王これをきゝていかり
軍勢をつかはしてそのころせるものをほろぼしまたその
邑をやきたり 八 こゝにおいてその僕どもにいひけるはこ
んえんまではそなはれども請たるものは客となるにたら
ざるものなれば 九 衢にゆきてあふほどのものを婚筵にまね
ねけ 十 そのしもべ途にいでゝよきものをもあしきものをも
もあふほどのものをことごとくあつめければこんえんのき
やく充満たり 十一 王客をみんとていりけるにこゝにひと
りの禮服をきざるものあるをみて 十二 これにいひけるは友
よいかにあらまへいふくをきずしてこゝにきたるぞその人黙

然ば 十三 つひに王しもべにいひけるハこの者の手足をしば
りてそとの幽暗になげいだせそこにてなきしこすり切歯
することあらん 十四 それよばるゝものはおほしといへど
えらまるゝものはすくなし ○ 十五 このときパリサイの人い
でゝいかにしてかの者をいひあやまらせんとあひはかり
十六 その徒弟とヘロデの黨をつかはしていはせけるハ師よ
なんぢハ眞なるものなり。まことをもて神のみちををしふ
汝ハ誰をもはゞかることなしいかんとなれハ貌によ
りて人をとらざればなり 十七 されば人税をカイザルにをさ
むるはよきやあしきやなんぢいかにおもふやわれらにつ

けよ 十八 耶蘇その悪をしりていひけるハ偽善者よなんぞわれをこゝろみるや 十九 みつぎの銀錢をわれにみせよかれら一デナリを耶蘇にもちきたりしに 二十 耶蘇かれらにいひけるハこの像と號ハたれのなるや 二一 こたへてカイザルなりといふこゝにおいて耶蘇これにいひけるハさらバカイザルのものハカイザルにかへし神のものハ神にかへすべし 二二 かれらこれをきゝてきゝ奇として耶蘇をさりゆけり○ 二三 復生なしといひなせるサドカイの人この日いゑすにきたりとひて 二四 いひけるハ師よモーセのいへるハ人もし子なくして死なバ兄弟その妻をめとりて子をうみきやうだいのあとを嗣べしと 二五 こ

こゝにわれらの中にきやうだい七人ありしが兄めとりて死
に子なきがゆゑにその妻をおとうとにのこせり 二六 その二その
の三その七までみな然せり 二七 のちつひに婦もまた死ぬ
二八 よみがへるときにはこのみな七人のうち誰かつまなる
べきそのゆゑはこれらみなこの婦を娶しものなればなり 二九 耶蘇こたへ
てかれらにいひけるはなんぢら聖書をも神のちからをも
しらざるによりてあやまれり 三十 それよみがへるときはめ
とらず嫁もせで天にある神のつかひたちのごとし 三一 死しも
のゝよみがへることにつきてはなんぢらは神のつげたま
ひし言は 三二 われはアブラハムの神イサクのかみヤコブのかみ

なりとあるをいまだよまざるものぞ。そもく神ハ死ぬるものゝかみにあらず
神ハあらで生るものゝかみなり　三三　ひとびとこれをきゝてその
訓をおどろけり○三四　耶蘇サドカイの人をいひこめて口をとぢさせし
めたりときゝてパリサイの人ひとつところにあつまりける
が　三五　その中なるひとりの教法師いゑすをこゝろみんため
にとふていひけるハ　三六　師よおきてのうちいづれの誡かおほ
いなる　三七　耶蘇こたへけるハなんぢ心をつくし精神をつ
くし意をつくし主なるなんぢの神をあいすべし　三八　これ第一
にして大なるいましめなり　三九　第二もまたこれにおなじお
のれのごとくなんぢの隣をあいすべし　四十　すべての律法と

預言者はこのふたつのいましめによれり ○四一 バリサイの
ともあつまりゐたるとき耶穌これにとふていひけるは 四二 な
んぢらキリストについていかにおもふや これたれの子なる
らん かれら耶穌にいひけるは ダビデの子なり 四三 これにい
ひけるは さらばダビデ聖霊に感じてなに故これを主と
よぶや ダビデいふ 四四 主わが主にいひけるは われなんぢ
の敵をなんぢの足の台となすまでわが手の右に坐せ
よと 四五 されば ダビデ それを主とよびたれば いかで
その子ならんや 四六 たゞ一言こたへまつることあたはず
この日より敢てまたとふものもなかりき

第廿三章 そのときイエス耶穌ひとびとと門徒とにつげていひけるハ 二 學者とパリサイの人ハモーセの位にざせり 三 ゆゑにすべてかれらが汝らにまもれといふところを守ておこなふべし。されどかれらが行ところのをなすことなかれ。それハかれらハいふのみにしておこなはざればなり 四 またかれらハ重くして負がたき荷をくゝりて人の肩におほせおのれの指をもてこれをうごかさうともせじ 五 すべてかれらの行ハすべて人にみられんがためにするなり。その佩經をそばひろくしその衣のすそをおほいにし 六 また筵席のうはざ會堂のうはざ 七 市上のあいさつ人々よりラビ ラビととよばく

よばれんことをこのむ 八 なんぢらはラビのとなへをうくる
ことなかれそはなんぢらの師はひとりにしてすなはちキリスト
なりなんぢらはみな兄弟なり 九 地にあるものを父と
よぶことなかれなんぢらの父はひとりにして天に
いますものなり 十 またなんぢら導師のとなへをうくることなかれそは
なんぢらの師はひとり即ちキリストなり 十一 なんぢらの
うちの大なるものはなんぢらのしもべとなるべし 十二 おほよ
そみづからを高くするものはひくくせられみづからを卑くす
るものはたかくせらるべし○ 十三 あゝなんぢらわざはひなる
かな偽善なる學者とパリサイの人よそはなんぢら天國を人

のまへはとぢてみづからいらずかのいらんとするものゝい
るをもゆるさゞるなり 十四 噫なんぢらわざはひなるかな
偽善なるがくしやとパリサイの人よそはなんぢら寡婦の家
をのみいつはりてながき祈をなす。これによりてなんぢら
めらとも重刑をうくべければなり 十五 あゝ禍なるかなぎぜ
んある學者とパリサイのひとよそはなんぢらおほく水陸
をへめぐり一人をもおのが宗旨にひきいれんとぞすゝめ
ひきいるればこれをなんぢらよりもなほ倍したる地獄の
子となせり 十六 あゝなんぢらわざはひなるかな瞽者なるて
びきよなんぢらはいふ人もし殿をさしてちかはゞ事なし

殿のこがねをさしてちかはゞそむくべからずとさおろか
にしてめしひなるものよ金とこがねをきよからしむる殿
といづれかたふとき　十八　またいふ人もしまつりの壇をさ
してちかはゞことなしそのうへの供物をさしてちかはゞ
そむくべからずと　十九　愚にしてめしひなるものよそなへも
のと供物をきよからしむる祭壇といづれかたふとき　二十
ゆゑにそのうへのだんをさして誓ふものはまつりの壇およびそ
のうへのすべてのものをさしてちかふなり　二一　また殿をさ
してちかふものは殿およびそのうちにいますものをさし
てちかふなり　二二　また天をさしてちかふものは神の寶座およ

よびそのうへにましますものをさしてちかふなり○二三あゝなんぢらわざはひなるかな偽善なる學者とパリサイのひとよそハなんぢら薄荷茴香馬芹の十分の一をとりおさめておきてのもつともおもき義と仁と信とをなんぢらハ廢こましおこなふべきものなりこのらもまたすつべからざるものなり二四めしひなるてびきよなんぢらハ蠓をこしいだして駱駝をのむものなり二五あゝわざはひなるかな偽善なるがくしやとパリサイのひとよなんぢらさかづきと盤のそとをきよくしてうちハ貪欲と淫欲とをこゝろせり二六めしひなるパリサイの人よなんぢらまづ杯とさらのうちをきよくせ

よさらバその外面もまたきよまるべし○二七 あゝなんぢら
禍なるかなぎぜんなる學者とパリサイのひとよなんぢらハ
しろくぬりたる墳墓ににたりそとハうるはしくこそみゆれど
も内ハ骸骨とさまざまの汚穢にてみつ 二八 かくのごとくなん
ぢらもまた外ハたゞしく人にみゆれどもうちハ偽善と不
法にてみつ 二九 あゝなんぢらわざはひなるかなぎぜんなる
學者とパリサイのひとよなんぢらハよげんしやの墓をたて義
人の碑をかざり 三〇 またいふわれらもし祖先のときにあ
らバよげんしやの血をながすことにハくみせざりしと 三一
さればなんぢらハ預言者をころせしものゝ裔なることを

みづから證す 三二 なんぢらせんぞの量をみたせ 三三 へびよまむ
しのたぐひよなんぢらいかで地獄のけいばつをまぬかれ
んや 三四 このゆゑにわれなんぢらに預言者と智者と學者とを
つかはさんなんぢらそのうちをころしまた十字架につけあ
るひはその會堂にてこれをむちうちあるひは邑より邑へ
おひせまるべし 三五 それ義なるアベルの血よりみやとまつり
の壇のあひだにてなんぢらがころせしバラキアの子ザカリア
の血にいたるまで地にながされたる義人の血はすべてなん
ぢらにむくいきたらんがためなり 三六 われまことになんぢ
らにつげんこのことどもはこの代にむくいきたるべし 三七 あゝ

エルサレム〻〻ハ よ よげんしやをころしなんぢにおくりつかはさるゝものを石にてうつものよ 母雞の雛をいだくのしたにはぐゝむるごとくわれなんぢの子どもをあつめんとせしこといくたびぞやされどなんぢらはこのまざりき 視よなんぢらの家はあれちとなりてのこされん 三九 なんぢらにつげん主の名によりてきたるものは福なりとなんぢらのいはんときのきたるまではいまよりわれをみざるべし

第廿四章

耶蘇みやよりいでゆけるがそのでしたちきたり殿宇をのきまみせんとしたりしは 二 耶蘇このでしらにいひけるはなんぢらはこれらのことを見ざるかわれまことになんぢらにつ

げんこのところは一のいしも石のうへにくづされずして
はのこらじ
三 耶蘇かんらんざんに坐したまへるとき門徒
ひそかにきたりていひけるはいつ此事のあるときこのいはくある
やまたなんぢのきたる兆と世のをはりのしるしはいかなる
ぞや。とたづねまつりければ
四 耶蘇こたへて之にいひ
けるはなんぢら人にあざむかれざるやう愼よ
五 それおほ
くの人わが名をかたりきたりわれはキリストなりといひて
おほくの人をあざむくべし
六 またなんぢら戦といくさの
風聲をきかんされどつゝしみておそるゝことなかれこれ
らのことはかならずあるべきなりしかれども末期はいまだいたら

らず 七 民おこりて民をせめ國ハくにをせめ饑饉疾病地震ところ〴〵にあるなるべし 八 これらハみなわざはひのはじめなり 九 そのとき人なんぢらを患難にわたしなんぢらをころさるべし またなんぢらわが名のために萬民ににくまるべし 十 このときおほくのもの躓きたがひにわたしたがひにうらむべし 十一 また僞よげんしやおほくおこりておほくの人をあざむかん 十二 また不法ふゆるによりておほくの人の愛情ひやゝかになるべし 十三 されどをはりまで忍ぶものハすくはるゝことをえん 十四 また天國のこのふくいんを萬民に證せんためにあまねく天下にいひひろめられん。しかる

のよの末期(ちまき)はいかなるべし 十五 このゆゑに預言者(よげんしや)ダニエルによりていひいだしたるところの殘暴(あらび)にくむべきものゝ聖處(せいしよ)にたつをみば（讀者(よむもの)よくおもふべし）十六 そのときユダヤにをるものは山(やま)にのがれよ 十七 屋上(やのうへ)にをるものはその家(いへ)のものをとらんとておりくだるなかれ 十八 たはたにをるものはその衣(ころも)をとらんとてかへるなかれ 十九 その日(ひ)にははらめるものと乳(ち)をのまするものは婦(をんな)はまさにわざはひあるかな 二十 なんぢら冬(ふゆ)あるひは安息日(あんそくにち)ににぐることなからんことをいのれ 二一 そのころは大(おほい)なる難(なん)あらんかくのごとき災難(わざはひ)は世(よ)のはじめよりいまにいたるまでおこらざりきまた後(のち)にもあるまじ 二二 もしその日(ひ)をちぢめ

くのごとくなんぢらもすべてこのことどもをみなば時ちかく
く門ぐちにいたるとしるべし 三四 まことにわれなんぢらにつげ
んこのことごとく成までこの民はうせざるべし 三五
天地はうせんされどわがことばはうせじ 三六 その日その時
をしるものはたゞわが父のみ天の使もたれもしるものなし
し 三七 ノアのときのごとく人の子のきたるもまたしかるべし
三八 それ洪水のまへノア方舟にいる日まではひと〴〵飲食嫁
娶などして 三九 こうずいのきたりてこと〴〵く滅すま
でさとらざりき。このごとく人の子もまたきたらん 四十 そ
のときふたり田にあらんに一人はとられひとりはのこさ

るべし 四一 二人のをんな磨ひきをらんにひとりハとられひとりハのこさるべし 四二 このゆゑになんぢらの主いづれのときにきたるかをしらざれバおこたらずしてまもれ 四三 なんぢらこれをしれもし家のあるじ賊いづれのときにきたらんかをしらバそのいへをまもりてやぶらせまじ 四四 されバなんぢらもまうけ預備せよおもはざるときに人の子きたらんハしくきたれバなり 四五 時にかなひて糧をこのものにあたふるために主がそのしもべどものうへにたてたる忠義にして智しもべハたれなるその 四六 そのあるじのきたらんときかくのごとくつとむるをみらるゝ僕ハさいはひなり 四七 まことに

らはあんぢうはつげんその全業をまかせつかさどらし
むべし 四八 もしその悪しき僕おのがこころにわが主のきたること
るはおそからんとおもひ 四九 その傍輩をうちたゝきて酒に
ゑひたるものどもとともに飲食しそめなば 五十 そのしもべ
の主おもはざるの日しらざるのときにきたりて 五一 これを
きりころしそのむくいを僞善者とおなじうすべし。そこにて
てなげきし切齒することあらん、

第廿五章 そのとき天國はともしびをとりて新郎をむかへに
いづる十人のむすめになぞらふべし 二 そのうちの五人は
かしこく五人はおろかなり 三 おろかなるものはその燈を

とるはあぶらをたづさへざりしが 四 智(かしこ)きものハそのともしびとゝもにあぶらを器(うつは)にたづさへたり 五 はなむこおそかりければ みな假寐(かりね)してねむりけり 六 夜(よ)なかのほどさけびて はなむこきたりぬいでゝ迎(むかへ)よとよぶこゑありければ 七 この童女(むすめ)どもみなおきてそのともし火(び)をとゝのへたるに 八 愚(おろか)なるものハかしこきものにいひけるハわれらの燈(ともしび)きえなんとす ねがはくハなんぢらの油(あぶら)をすこしはわけあたへよ 九 かしこきものこたへていひけるハわれらとなんぢらとにおそらくハ足(たる)まじ なんぢら賣者(うるもの)にゆきておのがためにかへ 十 このまつら買(かは)んとてゆきしとき新郎(はなむこ)きたりけれバまでらハそな

へたるものハこれとともに婚筵にいりしが門ハとぢられ
たり 十一 このゝちその餘のむすめきたりていひけるハ
主よ主よ われらのためにひらきたまへ 十二 こたへていひけるハ
まことになんぢらにつげんわれハなんぢらをしらずといへり
十三 されバおこたらずして儆醒なんぢらその日その時を
しらざれバなり○ 十四 また天國ハある人のたびだちせんと
してその僕をよび所有をこれにあづけるがごとし 十五 お
のおのの智慧にしたがひてあるものにハ銀五千あるものに
ハ二千あるものにハ一千をあたへてたゞちに旅だち
せり 十六 五千の銀をうけしものハゆきてこれをもてあきなひし

ほかのは五千をえたり　十七　二千をうけしものもまたほかに二千をえたり　十八　一千をうけしものはゆきて地をほりその主のかねをかくせり　十九　ほどへてのちそのしもべたちの主かへりきたりて彼らと會計せしに　二十　五千のぎんをうけしものそのほかの五千の銀をもちきたりて主よわれに五千のぎんをあづけしがほかの五千のぎんをまうけたりといひければ　廿一　主かれにいひけるはああ善かつ忠なるしもべぞなんぢわづかなることに忠なり。われなんぢに多ものをつかさどらせんなんぢの主のよろこびにいれよ　廿二　二千の銀をうけしものもきたりて主よわれに二千のぎんをあづけ

しがほかに二千(せん)の銀(ぎん)をまうけたりといひければ 二三 主(しゆ)これにいひけるハあゝ善(ぜ)かなちゆうなるしもべぞなんぢ寡(すこし)なることにちゆうなり我(われ)なんぢにおほきものをつかさどらせんなんぢのあるじの歓樂(よろこび)にいれよ 二四 一千(いつせん)のきんをうけしものきたりていひけるハ主(しゆ)よなんぢハきびしき人(ひと)なれバまかざるところより穫(かり)ちらさゞるところより歛(あつむ)ることをわれハしる 二五 ゆゑにおそれてゆきて主(しゆ)の一千(いつせん)のぎんを地(ち)にかくしおけり今(いま)なんぢなんぢのものを得(え)たり 二六 その主(しゆ)こたへていひけるハ悪(あし)くかつおこたる僕(しもべ)ぞなんぢハわが播(まか)ざるところより散(ちら)さゞるところよりあつむるこ

とせしか 二七 しからバわがかねを兌換舗にあづけおくべ
きなりし。さらバわがかへりきたるとき本と利とをうくべし 二八
このものよりこの金の一千のぎんをとりて十千の銀あるもの
にあたへよ 二九 それすべてもてるものハあたへられてなほあまり
あり無有ものハそのもてるものまでもとらるべければなり
三十 無益なるしもべをそとのくらきにおひやれそこにて哀
哭はがみすることあらん○ 三一 人の子其のえいくわう
をもてもろ〳〵の聖使をひきゐきたるときハその榮光のく
らゐにざし 三二 萬國の民をそのまへにあつめ羊をかふもの
の綿羊と山羊とをわかつがごとくこのものをわかちて 三三 めん

やうをその右にやぎをその左におくべし 三四 かくて王その
みぎなるものにいはん。わが父にめぐまるゝものよきた
りて創世よりこのかたなんぢらのためにそなへられたる
國を嗣 三五 そはなんぢらわが飢しときくらはせ渇しと
きのませわれ旅せしときやどらせ 三六 裸なりしと
きものきせ病しときみまひ獄にありしときたづ
ねきたればなり 三七 こゝにおいて義ものこたへていひ
けるは主よいつなんぢのうゑたるをみて食せまたかはきた
るを飲せしや 三八 いつ主のたびしたるをみてやどらせまた
はだかなるを衣せしや 三九 いつ主のやまひまたは獄にありしをみて

なんぢにいたりしや 四十 王こたへていはん誠に
なんぢらにつげん なんぢらわが兄弟のいと
ちひさきものゝひとりにおこなへるはすなはちわれに行
しなり 四十一 つひにまた左にをるものにいはん罰せらるべき
ものよわれをはなれて悪魔とその使のためにそなへ
たるきえざる火にいれよ 四十二 それなんぢらわれの飢しときわ
れにくらはせず渇しときわれにのませず 四十三 旅せしときわれを
やどらせず裸なりしときわれにきせず病またひとやにあ
りしときわれを顧ざりけり 四十四 こゝにおいてかれらもこたへ
ていはん主よいつなんぢの飢また渇また旅しまた

裸にして病にして獄にあるをみて主につかへざりしや 四五 そのとき王こたへてかれらにいはん われまことになんぢらにつげん。これらの至微もののひとりにおこなはざりしはすなはちわれにおこなはざりしなり 四六 これらのものはかぎりなき刑罰にいり またたゞしきものはかぎりなき生命にいるべし

第廿六章

さて耶穌このさま／＼の言をいひをはりてその弟子にいひけるは 二 二日ののち逾越節あるはなんぢらがしるところなり そのとき人の子は十字架につけられんためにわたさるべし 三 このときさいしのをさおよび民の長老たちカヤパといへる祭司のをさのやしきの庭にあつまり 四 詭計

をもて耶穌をとらへころさんとともにはかりいひける
は五まつりの日にはあるべからずおそらくは民のうちに
亂おこらんと○六耶穌ベタニヤの癩病シモンのいへにおはしま
へるとき七あるをんな蠟石のうつはものにあたひたかき
香膏をもちて耶穌の食するときもちきたりてその首にそゝ
ぎけり八でしたちこれをみていかりをふくみいひけるは
この糜費のことをなすはなにゆゑぞや九もしこれをうら
ばおほくの金をえてまづしきものにほどこすことをえん
十耶穌さとりてかれらにいひけるはなんぞこの婦をなやま
すや此女はわれに善事をおこなへるなり十一まづしきものの

ハつねになんぢらとゝもにあれどわれハつねにハなんぢらとゝもにあらぬぞ 十二 をんなこのにほひあぶらをわが體にそゝぎてそゝぎしハわれの葬のためになせるなり 十三 まことにまことになんぢらにつげん天の下いづくにてもこの福音のひろめらるゝところにハこのをんなのなせしこともその記念のためにいひつたへらるべし ○ 十四 そのとき十二門徒のひとりなるイスカリオテのユダといへるもの祭司のをさたちのもとにゆきていひけるハ 十五 われなんぢらにこれをわたさバなにほどをとあたふるや。つひに銀三十まで約したり 十六 このときより耶蘇をわたさんと機をうかゞひぬ ○ 十七 たねいれ

ぬ餅のいはひのまつりのはじめの日でし耶穌にきたりいひけるハ
すぎこしの食をなんぢのためにいづこにそなふべ
きや 十八 耶穌いひけるハみやこにいり某にいたりていへ師
いふわが時ちかづきければわがでしとともに逾越のいは
ひをなんぢが家にてなさんと 十九 でし耶穌に命ぜられしごと
くしてすぎこしの食をそなふ 二十 日くるゝとき耶穌ぢふ
にでしとゝもに席につき 二十一 食するときいひけるハま
ことになんぢらにつげんなんぢらのうち一人われをわたす
ものあり 二十二 でしらいたくうれひておのく耶穌にいひけ
るハ主よわれなるか 二十三 こたへていひけるハわれとともに

手を盃につくる者のはすなはちわれをわたす者なり 二四
人の子はおのれについてしるされたるごとく逝ん、されど
人の子をわたす者のはわざはひなるかなその人うまれざ
りしならばかへつて幸なりしならん 二五 このわれをわたすユダこ
たへていひけるはラビわれなるや。これにいひけるはなん
ぢのいふごとし 二六 かれら食するとき耶穌パンをとりて祝
しこれを弟子たちにあたへていひけるは取てくらへ、これはわが身
なり 二七 またさかづきをとりて謝し、これらにあたへていひ
けるはなんぢらみなこの杯よりのめ 二八 これ新約のわが血
にしてつみをゆるさんとておほくの人のためにながすこと

ところのものなり 二九 われなんぢらにつげん今よりのちなんぢらとともにあたらしきものをわが父の國にてのまん日まではふたゝびこの葡萄のみよりなるものをのまじ○ 三十 かれらうたをうたひてのち橄欖山にゆけり 三一 そのとき耶蘇かれらにいひけるは今夜なんぢらことごとくわれについてつまづかんそハわれ牧者をうたん群のめんやうちらんとしるされたるなり 三二 されどわれ復生てのちなんぢらにさきだちカリラヤにゆくべし 三三 ペテロこたへて耶蘇にいひけるはひとみななんぢについて礙ともわれハつひにつまづかじ 三四 耶蘇かれにいひけるはわれまことになんぢにつげんこ

よび雞なかざるまへになんぢ三次われを志らずといはん 三五
ペテロかれにいひけるハたとひ主とともに志ぬるともな
んぢを志らずといはじ門徒らもみなかくいへり 三六 そのとき
耶穌かれらとともにゲツセマネといふところにいたりて門
徒たちにいひけるハなんぢらここにをれわれかしこにゆ
きていのらん 三七 ペテロおよびゼベダイのふたりの子をたづ
さへ憂愁のふかきをもよほし 三八 かれらにいひけるハわが
心いたくうれひて死ぬるばかりなりここにまちてわれとと
もに目をさましをれ 三九 すこしさきへゆきて俯伏いのりい
ひけるハわが父よもしかなはゞこの杯をわれよりはなち

たまへされどわがこゝろのまゝをなさんとするにあらず聖旨(みこゝろ)のまゝにせたまへ
四〇 かへりて門徒(でし)にきたりそのいねたるを見てペテロにいひけるはなんぢら一時(ひとゝき)もわれとゝもにめをさましをることあたはざるか
四一 なんぢらいざなひにいらぬやう儆醒(めをさま)しいのれこゝろはまことにねがへども肉體(にくたい)はよわきなり
四二 またふたゝびゆきて祈禱(いのり)しけるはわが父よもしわがのまずばこのさかづきをのまずしてさることあたはずばなんぢのこゝろのまゝになしたまへ
四三 きたりてまたかれらの寝(いね)たるをみるそはかれらの目うすくなりたるなり
四四 かれらをさしおきてまたゆきて第三次(だいさんど)もおなじことばをもていのれり
四五 つひに

その門徒にきたりていひけるハ今ハいねてやすめ時ハちかし人の子ハつミびとの手にわたさるゝなり 四六 起よいざゆくべしわれをわたすものちかづきたり 四七 かくいへるとき十二のひとりなるユダ剣と棒とをもちたる多くの人々とともにさいしのをさと民の長老のもとよりきたりて耶蘇をわたすものかれらに號をなしていひけるハわが接吻せる者ハそれなりこれをとらへよ 四九 たゞちに耶蘇にきたりてきミやすかれといひてこれにくちつけをなしけれバ 五〇 耶蘇これにいひけるハ友よなにのためにきたるやつひにこの人々きたり手を耶蘇にかけてとらへぬ 五一 耶蘇とともにあり

しものゝひとり手をのべ剣をぬきてさいしの長のしもべをうちその耳をきりおとせり　五二 耶蘇これにいひけるはなんぢのつるぎをもとにをさめよ　すべて剣をとるものはつるぎにてほろぶべし　五三 まさにいま十二軍餘の天使をわがちちに求てうることあたはずとなんぢおもふや　五四 もし然せばかくあるべきことをしるせし聖書はいかでかなりなんや○　五五 このとき耶蘇ひとびとにいひけるはつるぎと棒とをもちてぬすびとをとらふるごとくしてわれをとらへにきたるか。われ日々なんぢらとともに殿にざしてをしへしになんぢら我をとらへざりき　五六 されどこのことのなる

かゝる預言者のかきしたるところに應成せんためなり。つひまでしたちみな耶蘇をすてゝにげさりぬ〇 五七 耶蘇をとらへたるものこれをひきて學者と長老のあつまれるところの祭司のをさカヤパのもとにゆく 五八 ペテロはとほくしたがひきて耶蘇にしたがひ祭司のをさの庭にいりてその結局をみんとて内にいりしもべとともにざせり 五九 さいしのをさたちおよび長老すべての議官ともに耶蘇をころさんとして妄證をもとむれどもえず 六十 おほくのいつはりの證者きたるもまたえず後にいつはりのあかしびと二人きたりていひけるは 六一 この人さきにいへることあり

よく神のみやをこぼちて三日のうちにこれを建あぐるをうべ
しと
六二 さいしのをさ起ていひけるハなんぢこた
ふることなきかこの人々のなんぢにたいする證據ハいかに
六三 いゑす默然たり。さいしのをさこたへていひける
へなんぢキリスト神の子なるや。われらなんぢに活神をさしてちかは
せてこれをつげしめん
六四 耶穌これにいひけるハなんぢが
いへるごとし。かつまたなんぢらにつげん　こののち人の子
大權のみぎにざし天の雲にのりてきたるをなんぢらみる
べし
六五 こゝにおいて祭司のをさそのころもを裂ていひけ
るハこの人ハけがしごとをいへり。なんぞほかにしようこ

をもとめんやなんぢらも今（いま）その褻瀆（けがれ）たることをきく 六六 な
んぢらハいかにおもふやとのたまへバこたへていひけるハこのものハ
死（し）にあたるものなり 六七 こゝにおいてその面（かほ）につばきし
つ拳（こぶし）にてうてり。またある人（ひと）ハこのものをたゝきいひけるハ 六八
キリストよなんぢをうちしものハ誰（たれ）なるかあてゝよげんせよ（一）
六九 ペテロにはに坐（ざ）しゐけるにある婢（はしため）きたりてなんぢも
ガリラヤの耶蘇（いゑそ）とともなりといひけれバ 七〇 ペテロすべての
人（ひと）のまへにこのことをうけがはずしてなんぢのい
ふところをしらずといへり 七一 いでゝ門（もん）ぐちにいたれると
きまた他（ほか）のしもめこれをみてそこにをるものにいひける

いこの人もナザレの耶穌(いえす)とともにありし 七二 ペテロまたう
けがはずして誓(ちかふ)われはその人(ひと)をしらずと 七三 しばらくありて
このかたはら立(たち)たるものまぢかくよりてペテロにいひけるは
まことになんぢもその黨(ともがら)のひとりなりそはなんぢの口音(くにことば)
なんぢをあらはせり 七四 こゝにおいてペテロのゝしりかつ
ちかひてわれその人(ひと)をしらずといひしがやがて雞(にはとり)なきぬ
七五 ペテロ耶穌(いえす)のにはとりなかざるまへなんぢ三次(みたび)われを
しらずといはんといひたまへる言(こと)をおもひいだしそとにいで
いたく悲慘(かなしみ)なけり

第廿七章(だいにじふしちしやう) 平旦(よあけ)になりてすべてのさいしの長(ちやう)と民(たみ)のとしより

共(とも)にはかりて耶穌(いゑす)をころさんとし 二 まづこの人を縛(しば)りひき
ゆきて方伯(つかさ)のポンテオ ピラトにわたせり○三 ここにおい
て耶穌(いゑす)をわたせしユダ この人の死(し)にさだめられしをみて悔(くい)
その銀(ぎん)三十(さんじふ)をさいしのをさ 長老(ちやうらう)だちにかへして 四 いひけ
るは無辜(つみなき)の血(ち)をわたしわれ罪(つみ)ををかしぬといひけ
るは われらにおいてなんぞ與(あづか)らんや なんぢみづからこれを當(あた)るべ
し 五 ユダ そのぎんを殿(でん)になげすてて そこをさりゆきて みづ
から縊(くび)れたり 六 さいしのをさだちこの銀(ぎん)をとりていひけ
るは これは血(ち)のあたひなれば 賽錢(さいせん)のなかにいるべからずとて
七 ともにはかりて この銀(ぎん)をもて旅客(たびびと)をはうむるために陶工(やきものし)

のはたけをかへり 八 故にそのはたけはいまにいたるまで血田と
なづけらる 九 こゝにおいて預言者エレミヤによりいはれたる
ることばにイスラエルの民にねぶみられ估られしものゝあ
たひの銀三十をとり 十 主のわれに命ぜしごとくやきもの
しのはたけを買ぬとあるにかなへり 十一 さて耶蘇つかさ
のまへに立つかさ耶蘇にとふていひけるはなんぢはユダヤ
びとの王なるかと耶蘇これにいひけるはなんぢがいへるご
とし 十二 祭司のをさ長老たちこれをうつたふれどもなにのこ
たへもせず 十三 こゝにおいてピラトこれにいひけるはこ
の人々なんぢにたつる證のかくおほいなるをなんぢきかぬの

ざるの 十四 方伯のいとあやしと思ふまでに耶蘇はひとことにも
こたへせざりき 十五 このまつりの日ごとに方伯より民のねがふ
ひとりをゆるせてとらへの罪人をゆるすその例あり 十六 ときには
バラバといへる一人のあらぶるぶんすんありけるが ピラト民
のあつまりしときこの民らにいひけるハバラバかまたハキリ
ストととなふる耶蘇なるぞ。なんぢらたれをゆるさんとお
もふや。これ媢嫉によりて耶蘇をわたしたりとしれバなり
○十九 方伯さばきの座にすわりたるときその妻いひつかは
しけるハこの義人ハなんぢのかゝはることなかれ。そハわれ
けふ夢のうちにこのことにつきておほくくるしみたり 二十 祭司の

さし、長老たちバラバをゆるし耶穌をころさんことをねがふべく民にすゝむ、二一 方伯こたへてこれらにいひけるハふたりのうちいづれをわがなんぢらにゆるさんことをのぞむや。かれらバラバといふ 二二 ピラトいひけるハさらバキリストととなふる耶穌ハまさになにのものをなすべきや。衆いふ十字架につけよと 二三 つかさいひけるハこのひとなにの惡事をなせしや。このものますますさけびて十字架につけよといふ 二四 ピラトその言の益なくしてたゞ亂のおこらんことをしり水をとりてひとびとのまへに手をあらひいひけるハこのたゞしきものの血につきてわれつみなしなんぢらみづからこれに當れ 二五 た

みなこたへていひけるはその血はわれらとわれらの子
孫にかゝるべし 二六 こゝにおいてバラバをこのものらにゆる
し耶蘇をむちうちて これを十字架につけんためにわたし
けり 二七 つかさの兵卒は耶蘇をたづさへ公廳にいり組中
をそのもとにあつめ 二八 うはぎのころもをはぎてむらさきの
袍をきせ 二九 いばらの冠をあみてその首にかむらしめまた
葦をみぎの手にもたせそのまへにひざまづき嘲弄し
ていひけるはユダヤびとの王やすくあれと 三十 またこれに唾しそ
の葦をとりてそのかうべをうてり 三 てうろうしをはりて
そのうはぎを褫もとのころもをきせて十字架につけんと

このものとひきゆく　三二　そのいでしときクレネびとのシモンと
いふものにあひければ強てこれにその十字架をおはせさし
む○　三三　このものゴルゴダ譯ばすなはち髑髏といへるところに
きたり　三四　醋に膽をあはせて耶穌にのませんとしたりしに
嘗てのむことをせざりき　三五　かくて耶穌をじふじかにつけ
しのち鬮をとりてそのころもを分これ預言者のことくだりは。
このものたがひにわれが衣をわけわれが裏衣をくじにすといひ
しにかなへり　三六　兵卒ここにざして耶穌をまもりをり　三七　また
罪標にこれハユダヤびとの王いゑすにてありとしるしてその首
のうへにかけき　三八　そのとき二人のぬすびと耶穌とともに

ひとりハその右ひとりハその左に十字架につけらる○ 三九
ゆきゝのもの耶穌をのゝしり首をふりていひけるハ 四〇 殿
をこぼちて三日にてたつるものよみづからをすくへ
なんぢもし神の子ならバ十字架よりおりよ 四一 祭司の長がく
しや長老たちもまたおなじく嘲弄していひけるハ 四二 人をす
くひておのが身をすくふあたはずもしイスラエルの王たら
バいま十字架よりくだるべしさらバわれこれを信ぜん
四三 これハ神によりたのめり神もしこれをいつくしまバ今
すくふべしそハこれわれハ神の子なりといひしなり 四四
ともに十字架につけられたる盗もおなじく耶穌をのゝし

まり〇 四五 晝のおふまじより三時にいたるまでその地あまねく黑暗となる 四六 さんじころ耶穌おほごゑによばはりエリエリラマサバクタニとよばはりぬ。これを譯ばわが神わが神なんぞわれをすてたまふやといへるなり 四七 このところにたちたるもののうちある人これをきゝてこのものエリヤをよべるなりといふ 四八 そのうちの一人たゞちにはしりゆきて海絨をとり醋をふくませこれをよしにつけて耶穌にのましむ餘人いひけるは俟エリヤきたりてこれをすくふや否こゝろむべし〇 五十 耶穌ふたゝび大聲によばはりて氣たえたり 五一 みやの幔うへよりしもまでさけて二つとなり地ふるひ磐さけ 五二 墓ひらけ

けてきたれい いねむりたる聖徒の身おほくよみがへり耶穌のよ
みがへりたるのち 五三 墓をいでゝ聖城にいりおほくのひとにあらは
れたり○ 五四 百夫の長とともに耶穌をまもりたるもの
の地震およびそのありしことを見て甚おそれていひけるはまこと
に神の子なりといへり○ 五五 このところに遙にのぞみゐた
るおほくの婦ありしがこれはガリラヤより耶穌にしたが
ひつかへしものどもなり 五六 そのうちにはマグダラ
のマリアとヤコブヨセの母なるマリアとゼベダイの子
たちの母とあり○ 五七 日くれて耶穌の弟子なるヨセフとい
へるアリマタヤの富人きたりてピラトにゆき耶穌のしかば

ねをこひしかバ
五八 ピラトその屍をわたせと命ず
五九 ヨセフ
そのかばねをとりてきよき布につつみ
六〇 いはを磐にほりたるおのがあたらしき墓におきおほいなる石をはかの門にまろばしてさる
六一 マグダラのマリアとほかのマリアともにはかにむかひて坐しそこにをれり〇
六二 預備日の翌日さいしのをさたちバリサイのひとびとだちピラトのもとにつどひきたりていひけるハ
六三 主よわれらおもひいだせりこの僞者いきてありしとき三日の後よみがへらんといひし
六四 この故に命じて三日にいたるまで墓をかためしめよ。おそらくハその弟子夜きたりてかれをぬすみて死よりよみがへりたりと

民にいはんかくならバ後のまどひハ先よりもいやまさるべし 六五 ピラトこのともがらにいひけるハ守兵ハなんぢらにあり ゆきておもひのまゝにこれをまもらしめよ 六六 こゝにおいてかれらゆきて石に封印しまもるものをおきて墓をまもらしめたり

第廿八章

安息日をはりてのち七日のはじめの日よあけんとするさ マグダラのマリアおよびほかのマリアその墓をみんとてきたりしに 二 おほいなる地震ありて主のつかひ天よりくだり墓のもんより石をまろばしそのうへに坐せり 三 その容貌ハいなびかりのごとくその衣服ハゆきのごとくしろし 四 守兵このさまをおそれをのゝき死たるもののごとくなりぬ

五 天使こたへてをんなにいひけるハなんぢらおそるゝこ
となかれ われなんぢらが十字架につけられし耶穌をたづ
ぬることをしる 六 このところにハあらず そのいへるごとく
復生たり。なんぢらきたりて主のおかれしところを見よ 七
うらゆきてその門徒につげよ このひと死よりよみがへりな
んぢらにさきだちてガリラヤにゆけり。かしこにおいてなん
ぢらこのきみをみるべし。われこれをなんぢらに告 八 をんなお
それおそれつゝもいとよろこびて急ぎそのところをさりその門徒につ
げんとてはしりゆけり 九 まさにつげんとてゆくとき耶穌こ
れにあふて安かれといひたまひければ婦たちすゝみその足

をいだきて拝しぬ 十 耶穌これにいひけるは おそるゝな
ゆきてわが兄弟にガリラヤにゆけとつげよ かしこにて
われを見るべし ○ 十一 婦のさりしのち守兵のうちある者
どもみやこにいりきて ありしことを祭司のをさたち
につげしらべ 十二 これと長老あつまりて ともに議しあまたの
かねを士卒にあたへていひけるは 十三 なんぢらいへよ
いねたるときその門徒きたりてこれをぬすめりと 十四
このこともし方伯にきこゆるともわれらこれをなだめて
なんぢらに憂慮なからしめん 十五 このかれら銀子をとりていひふ
くめられたるごとくなせり 於是このことのきこえなし今

日にいたるまでユダヤ人のうちにいひひろめつたへたり○
十六 十一のでしガリラヤにゆきて耶蘇のかねて命じたま
ふところの山にいたり 十七 耶蘇をみて拝せり。されどうたがへ
るものもありき 十八 耶蘇きたりてかれらにいひける
は天のうち地のうへのすべての權をわれにたまはれり 十九
このゆゑになんぢらゆきて萬國の民にバプテスマをほどこ
しこれを父と子と聖靈の名にいれさづけしとき 二十 われつ
ねになんぢらに命ぜしことをまもれとつたへをしへ
よ それわれは世のをはりまでつねになんぢらとともにあ
るなり アーメン

耶穌降生千八百七十七年

翻譯委員社中
米國聖書會社

新約聖書馬可傳

明治十年
日本横濱上梓

新約全書　馬可傳福音書

第一章

一 これ神の子耶穌キリストのふくいんのはじめなり 二
預言者のしるして視よわれなんぢの面前よりわがつかひを
つかはさんかれなんぢのまへにその道をまうくべし 三 野に
よばゝる人のこゑありいはく主のみちをそなへそのみち
すぢを直せよとあるがごとく 四 ヨハネ野においてバブテスマ
をほどこし罪のゆるしをえさせん爲に悔改のバブテスマ
をのべつたへたり 五 ユダヤのくに中およびエルサレムの人みな
かれにきたりておの〳〵その罪をいひあらはしヨルダンといへる
河にてバブテスマをうく 六 ヨハネは駱駝のけごろもを着こ

しハ腰帯(こしおび)をむすび蝗蟲(いなご)と野蜜(のみつ)をくらへり 七 このもののべつた
へけるハ我(われ)よりまさるものわが後(のち)にきたらん人ハ鞋(くつ)
てその鞋(くつ)のひもをとくにもたらず 八 我ハ水にてなんぢらへ
らにハバプテスマをほどこせしがこのものハ聖霊(せいれい)をもつてなんぢ
らにバプテスマをほどこすべし 九 そのころ耶蘇(いえす)ガリラヤの
ナザレよりきたりヨルダンにてヨハネよりバプテスマをうけ
十 やがて水(みづ)よりあがるとき天(てん)ひらけて聖霊(せいれい)鴿(はと)のご
とくそのうへにくだるをみたりまた天(てん)より声(こゑ)ありて
いふなんぢハわが愛子(あいし)わがよろこぶところのものなりと
〇 十二 このとき霊(れい)たゞちに耶蘇(いえす)を野(の)にゆかしむ 十三 このとき四十(よそか)日

のまにありサタンにこゝろみられ獣とともにをりしが天の
つかひたち之につかへぬ（　）十四ヨハネのとらへられしのち
耶蘇ガリラヤにいたり神の國の福音をつたへいひけるハ十五
期ハみちたり神の國ハちかづけり汝等心をあらためて
福音を信ぜよ（　）十六耶蘇ガリラヤのみづうみのほとりをあゆ
めるときシモンとその兄弟アンデレーのみづうみに網をうて
るをみる。このふたりハ漁者なり十七耶蘇このふたりにいひけるハわ
れにしたがへわれなんぢらを人をすなどるものとせん十八
かれらたゞちにその網をすてゝしたがへり十九こゝ
よりすこしくゆきゼベダイの子ヤコブとそのきやうだ

いヨハネの舟にありてあみつくろふをみて 二十 たゞちにか
れらをよびたまひしかばその父ゼベダイを傭人とともにふ
ねにのこしてかれにしたがへり○ 二十一 かれらカペナウムにい
たる耶蘇すなはち安息日に會堂にいりてをしへをなせし
に 二十二 人々そのをしへにおどろきあへり。そは學者のごとく
なくして權威をもてるもののごとくをしへたまへばなり 二十三
その會堂にけがれたる鬼につかれたる人ありて 二十四 さ
けびいひけるはあゝナザレの耶蘇よわれらなんぢとなん
の與りあらんや。なんぢきたりてわれらをほろぼさんとするか。われなん
ぢは誰なるをしる すなはち神の聖なるものなり 二十五 耶蘇

これを責ていひけるハ聲といゞまてこゝくあくまそこをいで
よ 二六 汚れたるあくらいその人をひきつけさせ大聲にさけびてこの
者いでたり 二七 衆みなおどろき相とふていひけるハこれ
何ごとぞやこれいかなるあたらしき教ぞや、けくのまたゝる悪
さくけんゐをもて命じければしたがへり 二八 こゝにおいて
耶蘇いきこえあまねくカリラヤの四方にひろがりぬ○二九 この
まゝやがて會堂をいでゝヤコブおよびヨハネとゝもに
シモンアンテレーの家にいりしに 三十 シモンのしうとめ熱
をやみてふしゐければある人たちハこれを耶蘇につげ
三一 耶蘇ゆきてその手をとりこれをおこしければ熱たちまち

ちさりぬ。かくてその婦(をんな)のことは佚事(いつかい)なり 三二 ゆふべになりて日(ひ)の
いるとき人々(ひとびと)すべての病(やまひ)をわづらへるもの鬼(おに)につかれた
るものを耶蘇(いゑす)にたづさへきたる 三三 その邑(まち)こぞりて門(もん)にあ
つまれり 三四 耶蘇(いゑす)さまざまのやまひをわづらへるおほくの人(ひと)
人(びと)をいやしおほくの鬼(おに)などおひいだし鬼(おに)のものいふこ
とをゆるさざりき。そは鬼(おに)かれをしりたればなり〇
三五 夜(よ)あけまへに耶蘇(いゑす)はやくおきて人(ひと)なきところにゆきそこ
にて祈禱(いのり)せり 三六 シモンおよびこれとともにありしものども
はその跡(あと)をしたひゆき 三七 これにあひていひけるは衆(ひとびと)みな
なんぢをたづぬ 三八 耶蘇(いゑす)これにいひけるはわれらちかく

我のきたるためハなんぢらとともに近郷のむら〳〵へゆかん
其処にても道をのべんためにきたれバなり　三九 耶蘇あまねくガリラヤの
くに〳〵を經めぐりその會堂にてをしへをのべ鬼をおひいだ
せり○四十 癩病のもの一人その前にきたりて曲跪ねがひ
ていひけるハなんぢもし聖旨ならバなんぢ我をきよく
なしうべし　四一 耶蘇あはれみて手をのべてかれにつけいひけるハ
こゝろなり潔なれと　四二 いふやいなやたゞちに癩病去
りてその人きよまりぬ　四三 耶蘇きびしくいましめつゝ
いひてつゝしんで人につぐるなかれたゞゆきておのが身を祭
司にみせなんぢのきよめられしためにモーセが命ぜしところ

のためを献てかれらに證據となせといひてさらしめたり
四五 されどかの人出て先このことを大にいひふらし
たりければ耶蘇このゝちあらはに城に入ることあたはず
たゞ人なきところに居たりしが人々四方よりかれにきた
りけり

第二章 一 数日のゝち耶蘇またカペナウムにきたりしに 二 の
家にいますことをきゝて直にあつまりたれば多くの人々つど
ひきたり門にもたつべき場處さへもなきほどなりき耶蘇か
れらに道を宣 三 ころに癱瘓をわづらふものを四人に
てかゝせ耶蘇にきたるものありしが 四 群集によりてちかく

つきえざりけれバ、かれのをるところの屋蓋をとりのぞきてちゆうぶの人とねどこのまゝつりおろせり 五 耶穌その信仰をみてちゆうぶのひとにいひけるハ子よなんぢの罪ゆるされたり 六 數人のがくしやらそこに坐しをりしが心のうちにおもひけるハ 七 この人ハなにゆゑかくのごとく惡口をいふぞ神にあらずしてたれか罪をゆるすことをえんや 八 耶穌たゞちにかのがくしやが心のうちにかくのごときことを論ずるをみづからそのこゝろにさとりてかれらにいひけるハなんぢらなんぞ心のうちにかゝることをろんずるや 九 癱瘋の人にむかひてなんぢのつみハゆるされたりといふと起てなんぢの

ねどこをとりてゆけといふといづれかやすきや 十 されど人(ひと)
の子(こ)地(ち)にてつみをゆるすの権威(けんゐ)あることをおまへたちにし
らせんとて遂(つひ)にちゆうぶの人(ひと)に 十一 われなんぢに告(つぐ)おきて、
臥床(ねとこ)をとりてなんぢの家(いへ)にかへれといひけれバ 十二 その人(ひと)た
だちにおきてねどこをとり衆人(ひとびと)のまへにいでゆけバみな
おどろき神(かみ)をあがめていひけるハわれらいまだかくのごと
ききことを見(み)しことなしと 十三 耶蘇(いえす)またうみべにゆきしに
衆(ひと)々(びと)みなそのもとにきたりければこれを教(をしへ) 十四 こゝよりゆく
みちアルハヨの子レビといふもの税吏(みつぎとり)のやくしよにすわり
ゐけるをみてわれにしたがへといひけれバその者起(たち)てしたがひ

かく、從へり 十五 このとき耶蘇その家にて食をするときおほくの税吏つみあるひとゞも耶蘇および門徒とゝもに坐せり、こはこれらのもの多くありて耶蘇にしたがひぬ 十六 學者とパリサイの人ゝこれらハ耶蘇がみつぎとりと罪ある人ゝとゝもに食するをみてその弟子にいひけるはなにゆゑ税吏つみあるひとゝともに食飲するや 十七 耶蘇きゝてこれらにいひけるは康強なるものハ醫者のたすけをもとめず、たゞ病あるものこれをもとむ、われのきたりしハ義人をまねくためにあらず罪人をくいあらためさせんがためなり○ 十八 ヨハネのでしおよびパリサイの人つねに斷食をすることありけれバこの事にて耶蘇に

きたりいひけるハヨハネのでしとパリサイのでしハ断食(だんじき)せるにあなたの門徒(でし)ハなにゆゑだんじきせざるか耶蘇(イエス)これに答へていひけるハ新郎(はなむこ)の友(ともだち)そのはなむこにしたしくあるほどのうちハ断食(だんじき)するこゝろをうべきかうばはるゝ新郎(はなむこ)にはなれしのちあるうちハだんじきすることをえじ将来(のち)にハ新郎(はなむこ)をとらるゝ日(ひ)きたるべしその日(ひ)にハだんじきすべきなり 二 あたらしき布(ぬの)をふるき衣(ころも)にぬひつくるものあらじ。もし然(しか)せバそのおぎなひたるおぎなへるもの旧(ふるき)をほころばしてそのやぶれいよ〳〵おほきくなるべし 三 また新酒(あたらしきさけ)をふるきかはぶくろにいるゝものあらじもししかせバかはぶくろさきさけハそ

の嚢(ふくろ)をやりさき酒(さけ)ながれいでゝそのふくろともにそこなはるべし。あたらしき酒(さけ)ハあたらしきふくろにいるべきものなり

二三 さて耶蘇(やそ)あんそく日(にち)ハむぎのはたけをとほりしにその門徒(でし)あゆみつゝ麥(むぎ)の穗(ほ)をつみけれバ 二四 パリサイの人(ひと)ゝいひけるハこのさま安息日(あんそくにち)ハせまじきことをなにゆゑなすぞ 二五 耶蘇(いえそ)こたへけるハダビデおよび從(とも)ハありしもの乏(とぼ)しくして飢(うゑ)しときなしたることをいまだ讀(よま)ざるか 二六 すなはちアビアタルの祭司(さいし)のときにあたり神殿(かみどの)にいりてたゞ祭司(さいし)のほかハくらふまじき供物(そなへもの)のパンをくらひともにありしものにもあたへり 二七 またかれらにいひ

ひけるハ安息日ハ人のためにまうけられたるものにして人ハあんそくにちのために設られたるものにあらざればひとの子ハあんそくにちにも主たるなり

第三章 耶穌また會堂にいりしにこゝに手なへたる人ありけるが 二 ひとぐ耶穌をうつたへんとして。このまにこの人をあんそくにちにいやすや否とうかゞへり 三 いゑす手なへたる人にいひけるハ中にたちよ 四 またひとぐにいひけるハ安息日に善をなすと悪をなすと生命をたすくると殺といづれをよくなすべきぞとひとぐ黙然たり 五 耶穌いかりをふくみてみまはしこのものらがこゝろの頑硬なるをうれひ手なへた

る人はなんぢの手をのべよといひければその人その手をの
ばせしはまたなほ他のてのごとくいえたり 六 パリサイの人
いでゝいりましてかの耶穌をころさんとたくみはヘロデの
黨とあひはかりぬ 七 耶穌そのでしとともに海邊にしり
ぞきしはおほくの人々ガリラヤよりこれにしたがひまた
ユダヤ 八 エルサレム イドマヤ ヨルダンのあなたまたツロとシドン
のほとりよりおほくのひと〴〵耶穌のなせしことゞもをきゝて
うちにむらがりきたる 九 耶穌ひと〴〵の群集によりておし
なやまさるゝことなからんために小舟をそなへお
けとその門徒にいへり 十 そは耶穌あまたのひと〴〵を愈せ

しよりてすべて疾(やまひ)あるひとびと手(て)をそのきみにさはらんと
て擁擠(おしせまり)しがゆゑなり。十一 また汚穢(けがれ)たる鬼(おに)このきみをみてそのまへ
にひれふしさけびて。なんぢは神(かみ)の子(こ)なりとのゝしりを 十二
耶穌(いゑそ)このものらは我(われ)をあらはすことなかれときびしくいまし
めたり○ 十三 耶穌(いゑそ)やまにのぼりてその意(こゝろ)にかなふところの
ものを召(よび)たまへば、きたりて彼(かれ)につけり 十四 こゝにおいて十二(じふに)
人(にん)をたてゝおのれとともにおき。また教(をしへ)をのぶるためにつ
かはし。十五 このものらに病(やまひ)をいやし鬼(おに)をおひいだすの権威(けんゐ)をさづく
十六 すなはちシモンにペテロとなづけ 十七 ゼベダイの子ヤコブと
その兄弟(きやうだい)ヨハネこのふたりをボアネルゲとなづく。こゝろを譯(やく)

ゞ雷の子なり 十八 また アンデレ ピリポ バルトロマイ マタイ
トーマ アルパヨの子ヤコブ ダッダイ カナンのシモン 十九 また
イスカリオテのユダこれは耶穌をわたせしものなり ○ 二十 こ
れらのもの家にいりしにおほくの人々またきたりあつま
りければ食するいとまもあらざりき 二十一 その親屬きゝてこれ
は狂氣せりといひてこれをとらへんとてきたる 二十二 また
エルサレムよりくだれる學者たちもこれはベルゼブルにとり
つかれたりこれ鬼のかしらによりて鬼をおひいだすなり
といへり 二十三 耶穌これらをよびて譬をもていひけるはサタンを
いかでサタンをおひいだしえんや 二十四 もし國おのれにわかる

てわかれあらそはゞその國たつべからず 二五 また家おのれにもとりてわかれあらそはゞその家たつべからず 二六 もしサタンおのれにもとり起てまたわかれあらそはゞ彼たつべからざるばかりかへつて終あるべし 二七 たれにても勇士のいへにいりてそのだうぐをうばはんとせバ先つよきものをしばらざれバうばふことあたはず縛てのちその家をうばふべし 二八 われまことになんぢらにつげん人のすべての罪とけがしまてしこころの褻瀆ハゆるさるべけれど聖靈をけがすものハ永ゆるさるべからずかぎりなき刑罰にあづからん 三十 かくいへるハひとびと耶蘇をあくきにとりつかれたりといひしが

ゆゑなり〇 三一 その兄弟と母ときたりて戸外にたちて人をつ
かはして耶穌をよばしむ 三二 おほくの人々耶穌をめぐり
て坐したりしがこのものいひけるは視よなんぢの母と兄弟
そとにありてなんぢをたづぬ 三三 耶穌こたへていひけるは
わが母わがきやうだいはたれぞや 三四 かくてまはりに坐せ
る人々をみまはしていひけるはわが母わが兄弟をみよ 三五
それ神の旨をおこなふものはこれわが兄弟わが姉妹わが
母なり

第四章

耶穌またうみべにて教訓をはじめしにおほくの人
人あつまりければこれ艀にのりて坐しすべてのひ

ひとびとハ海はそふてきしにたてり 二 かれたちへたとへをもておほくのことをかれらにをしふ教ていひけるハ 三 きけよ種まくものまかんとて出 四 まけるときある種ハみちのほとりにおちしがそらの鳥きたりてこれをくらへり 五 あるたねハ土うすき磽地ハおちしがつちふかゝらねバたちまちもえいでたれど 六 日いでしかバやかれ根なきがゆゑにこのかれけり 七 あるたねハ棘中ハおちしがいばらそだちてこれを蔽ければ實をむすバざりき 八 あるたねハ沃壌ハおちしにその苗もえいでゝのびたちて實をむすぶることあるひハ三十倍あるひハ六十倍あるひハ百倍せり 九 みゝあるもの

らまいひけるハ耳ありてきこゆるものハきくべし 十 衆
人のをらざりしとき耶穌のかたはらにありしものと十二
の門徒とこのたとへをとひしかバ 十一 耶穌かれらにいひけ
るハ神のくにの奥義をなんぢらにハしることをたまへど
他のものにハすべてたとへをもつてす 十二 これかれらがみる
とき視てもみえずきくとき聴てもさとらばその罪のゆるし
をえざらんためなり 十三 またかれらにいひけるハなんぢら
この譬をしらざるかさらバいかにしてすべてのたとへを
識ことをえんや 十四 その播者ハをしへをまくなり 十五 道のま
うへにて路のほとりにおちしものハ人ことばをきゝし

たゞちにサタンきたりてその心にまかれたることばをとうばひさるなり　十六また礁地にまかれたるものハ人ことばをきくとき、たゞちによろこびてこれを受をさめども、おのれに根なきがゆゑたゞしばしのみ後うちのために患難あるひハ迫害にあふときにハたゞちにつまづくものなり　十八またいばらのなかにまかれたるものハ人ことばをきけども十九この世の思慮と貨財のまどひとさまざまの情欲いりきたりて道をふさぐによりつひに實をむすばざるものなり　二十沃壤にまかれたるものハ人ことばをきゝてこれをうけ或ハ三十倍あるひハ六十倍あるひハ百ばいのみをむすぶ

ぶものあり〇 二一 またかれらにいひけるハ燈をもちきたり
て斗のしたあるひハ牀のしたにおくものあらんやこれを
燭臺のうへにおかんためならずや 二二 隠てあらはれざるハ
なくつゝみてあらはるゝものハなし 二三 耳ありてきこゆ
るものハきくべし 二四 またかれらにいひけるハ聴ところをつ
つしめよなんぢらがはかるところの量をもてなんぢら
もはからるべし。きゝたるなんぢらハなほ加られん 二五 それ
あるものハなほあたへられあらざるものハそのもてるものをも
とらるべし〇 二六 またいひけるハ神の國ハ人たねを地に
まかんがごとし 二七 日夜おきふしするうちに種はえいでゝ

そもそもその然(しか)るゆゑをしらず 二八 それ地(ち)はおのづから實(み)をむすぶものにしてはじめは苗(なへ)つぎに穂(ほ)いでほのなかに熟(じゆく)したる穀(こく)をむすぶ 二九 それはみのみのるときいたるによりてたゞちに鎌(かま)をいれさするなり〇 三〇 またいひけるは神(かみ)の國(くに)はいかになぞらへなにのたとへをもてこれをたとへん 三一 一粒(ひとつぶ)のからしだねのごとしこれを地(ち)にまくときはよろづの種(たね)よりもちひさけれど 三二 それは播(まき)ておひいづればよろづの野菜(やさい)よりはおほきくなりおほいなる枝(えだ)をいだしてそらの鳥(とり)そのかげにすむほどになるなり〇 三三 耶穌(いゑす)このひとびとのきゝうるところにしたがひておほくかゝる譬(たとへ)をも

てをしへをこのまるゝきゝうるなり 三四 たとへにあらざれバかたらざりき。耶蘇そのでしとともにあるときこのたとへをことごとくこれを解きあかせり ○ 三五 さてその日のくれがたに耶蘇のいひけるハむかふの岸へわたらんといひければ門徒だちひとびとをかへらせ耶蘇の舟にありしまゝそのまゝつれゆくもまたわたりぬ。またほかの小舟もともにゆけり 三七 時におほかぜおこり浪うちこみて殆どふねにみちぬ 三八 耶蘇はともの かた枕していねふりしが門徒らの目をさましていひけるハ師よわれらがおぼるゝをもかへりみたまはざるか 三九 耶蘇おきて風をいましめまた海にしづまりておだやかな

なれといひければ風やみておほいになぎたり 四十 かくてか
れにいひけるはなにゆゑかくおそるるやなんぢらなん
ぞ信なきや 四一 かれらはなはだしくおそれ互にいひけるは
かぜと海さへもしたがふこれ誰なるぞや

第五章 かれ海をわたりてガダラびとの地につき 二 ふね
より耶穌のあがれるとき悪鬼にとりつかれる人たゞち
に墓間よりいでてかれに遇 三 このひとははかのあたりにすまゐ
とせりしばしば桎梏とくさりをもてつなげども鏈をうちき
つてあしかせをうちくだくによりこれを繋うるものなくま
たたれもこれを制しうるものなかりき 五 夜もひるもつね

に山(やま)とはかどころにおいてさけびまた石(いし)をもておのれが身(み)をきずつけぬ 六 かれはるかに耶蘇(いゑす)をみてはしりきたりて拜(をが)みし 七 おほごゑにてよばゝりけるは至上(いとたかき)神(かみ)の子(こ)いゑすよわれなんぢとなんのかゝはりあらんやわれ神(かみ)によりて求(ねがふ)われをくるしむることなかれ 八 これ耶蘇(いゑす)もあくきよ人(ひと)よりいでよといひしによりてなり 九 耶蘇(いゑす)これになんぢの名(な)はなにととひしにこたへけるはわれらは多(おほき)がゆゑにわが名(な)をレギヨンといふ 十 しきりにこの土地(とち)よりわれらをおひいだすなかれと耶蘇(いゑす)にねがひたり 十一 こゝにおほくの豕(ぶた)のむれ山(やま)にてえさをくひゐたりしが 十二 すべての悪鬼(あくき)これにねがひてわれ

らをおくりて豕にいらせよといひければ　十三 耶蘇たゞちに
これらにゆるせり汚たるおにその人よりいでゝぶたに入
りしかばおほよそ二千匹ほどの群はげしくかけくだり山坂
より海におちてうみにおぼれぬ　十四 牧者どもにげゆきてこ
のことを邑まち〳〵むら〳〵につげければ人々そのありしこと
をみんとて出　十五 いゑすにきたりて惑鬼にとりつかれたる
ものゝ即ちレギヨンをもちたりし人の衣服をつけたしかなる
こゝろにて坐しゐけるをみておそれあへり　十六 このことを
見しものども惑鬼にとりつかれたりしものゝことゝ豕の
ことを人々につげゝれば　十七 やがて耶蘇にその境をいで

んことをねがひぬ 十八 耶穌ふねにのらんとせしとき悪鬼に
とりつかれたりしものともにをらんことをねがひけれど
も 十九 耶穌ゆるさずしてこれにいひけるハなんぢの家にかへ
り親屬にゆきて主のなんぢに行しおほいなることゝなん
ぢをあはれみしことを告よ 二十 この者ゆきて耶穌のおのれに
なしたまへる大なることをデカポリスにのべければ衆人を
みなおどろきあへり〇 二十一 耶穌ふねにのりてまた海のむかふに
わたりしに大勢のひとびとこれにあつまる耶穌ハうみに
ちかくをれり 二十二 會堂のつかさヤイロといふ人きたり耶穌
をみてそのあしもとにふし 二十三 切にねがひいひけるハわが

いとけなき女(むすめ)志ぬるばかりなりねがはくはきたりたまひ
てきたりて手(て)をこれにおきたまへ。さらばむすめいゝくべ
し 二四 耶蘇(いゑそ)これとともにゆくときおほぜいの人々(ひと〴〵)これに志
たがひておしあへり 二五 こゝに十二年(とせ)血漏(ちろう)をわづらひたる
をんなあり 二六 この婦(をんな)おほくの醫者(いしや)のためにさまざまくる
しめられその所有(しんだい)をもことごとくつひやしけれどもすこしの
益(えき)もなくかへつてあしくなりしが 二七 耶蘇(いゑそ)のことをきゝて群(ぐん)
集(じゆ)のうちへまぎりいり主のうしろよりきたりその衣(ころも)にさはりつ 二八
これはそのころもにだにさはらばたすかるべしといへばなり
是 二九 かくて血(ち)のいづることたちまちとまりまたその疾(やまひ)い癒

しとつての身はおぼえたり　三十　耶蘇(いゑす)みづから能力(ちから)のおのれよりいでたるをしり大勢(おほぜい)のひとゞのくにかへりていひけるハわが衣(ころも)にさはりしものはたれなるの　三一　門徒(でし)これにいひけるハぐんしふの人々(ひとびと)のなんぢをおしあふをみてわれに觸(ふれ)しものはたれぞといひたまふや　三二　耶蘇(いゑす)このことをなせる婦(をんな)をごらんとみまはしけれバ　三三　をんな恐懼(おそれ)をのゝきおのが身(み)にせられしことをしりきたりてそのまへにて俯伏(ひれふ)しことごとくありのまゝをつぐ　三四　耶蘇(いゑす)これにいひけるはむすめよなんぢの信(しん)なんぢをすくへり安然(あんぜん)にしてゆけなんぢのやまひいゆべし○　三五　耶蘇(いゑす)このことをいひをるうちに會堂(くわいだう)

のつかさの家よりひとびときたりていひけるはなんぢの女(むすめ)
はすでにしたりなんぞ師をわづらはすや 三六 耶蘇(いゑす)たゞちに
そのつげしことをきゝて會堂(くわいだう)のつかさにいひけるはおそる
るなかれたゞ信(しん)ぜよ 三七 耶蘇(いゑす)ペテロとヤコブおよびそのき
やうだいヨハネのほかの誰(たれ)をもともにゆくことをゆるさざ
りき 三八 すでにくわいだうの宰(つかさ)のいへにきたりてひとびとの
忙亂(さわぎ)いたくなきさけぶをみる 三九 いりてこれらにいひける
はいかんぞさわぎてかくのごとく哭(なく)やむすめは死(しせ)るにあらずたゞいね
たるのみ 四十 これら耶蘇(いゑす)をあざわらふ。耶蘇(いゑす)すべてのひとびと
をいだし女(むすめ)のちゝはゝとそのともなへるものどもをひき

つれ女のふしたるところにいり 四一 むすめの手をとりてこれにいひけるはタリタクミこれを譯ばむすめよわれなんぢに命ずおきよといふ義なり 四二 たゞちに女おきてあゆめりこの女ハ十二歳なりこの時甚おどろきぬ 四三 耶穌このことを人にしらすることなかれときびしく戒めまたむすめに食物をあたへよと命じたり

第六章

一 耶穌こゝをさりてふるさとにいたりしにその門徒もこれに從ひぬ 二 安息日になりければ會堂にてをしへを始しむ衆人これをききてあやしみいひけるハいづこよりてこの人ハかくのごときことをえたるこの誰よりこの智慧

をさづけられてかくのごとくふしぎなるわざをなすその手よりおこ
この 三 この者ハ木匠(こだくみ)にあらざるやマリアの子(こ)ヤコブヨセユダと
シモンの兄弟(きやうだい)にしてその姉妹(しまい)もこゝにわれらとともにを
るにあらざるや。つひに人々(ひとびと)この者につまづけり 四 耶蘇(いゑす)この者らに
にいひけるハ預言者(よげんしや)ハそのふるさととその親戚(しんせき)その室家(いへ)の
ほかのところにおいてハたふとまれざることなし 五 耶蘇(いゑす)このところにて
てわづらふものに手(て)をつけてたゞ數人(すうにん)をいやせしほかのふ
しぎなるわざをなさゞりき 六 またこの者らの信(しん)
ぜざるをあやしみき終(つひ)にむら〳〵をへめぐりてをしへなせ
り 七 い[illegible]を十二(じふに)のでしを召(めし)てこの者らを二人(ふたり)づゝつかはしたま

さんとしてこれを遣し悪鬼(あくき)どもをおひいだす権威(けんゐ)をさづけ 八 またこ
れらに命(めい)じけるハひとつの杖(つゑ)のほかハ旅(たび)のためになにも
たづさふるなかれ旅嚢(たびぶくろ)もパンも帯(おび)の中に錢(ぜに)もたづさへずたゞ鞋(くつ)
をはきふたつの衣(ころも)をきるなかれ 九 またこれにいひけ
るハ何處(いづこ)にても人(ひと)の家(いへ)にいらばそのところをさるまでそ
こに居(をれ) 十一 およそなんぢらを接(うけ)ずなんぢらにきかざる
ものあらばそこをさるとき證(あかし)のためにあしの塵(ちり)をはらへ
誠(まこと)になんぢらにつげん審判(さばき)の日(ひ)にいたらばソドム
とゴモラハこの邑(まち)よりもなほやすかるべし 十二 でしたちい
でゝ人々(ひとびと)にくいあらたむべきことを説(とき)ひろめ 十三 おほくの悪

くの悪鬼をおひいだし。またおほくの病るものにあぶらをつけて
いやしぬ○十四耶蘇の名ひろごりければヘロデ王これを
ききていひけるはバプテスマをほどこせしヨハネいきか
へりたるゆゑにふしぎなるわざをなせり十五ある人はこれ
をエリアなりといひ或はいにしへのよげんしやのごとき
預言者なりといふ十六ヘロデこれをききていひけるはこれ
わが斬しところのヨハネなりこの者よみがへりたるなり十七
さきにヘロデその兄弟ピリポのつまヘロデヤのことにより
て人をつかはしヨハネをとらへて獄につなげり。そはヘロデ
がこの婦をめとりしを十八ヨハネいさめてなんぢきやうだ

いの婦(つま)をいるゝハよろしからずといへるによりてなり 十九 ヘロデヤこれをうらみてころさんとおもひしかどあたはざりき 二十 ヘリデハヨハネが義(たゞしく)して善(ぜん)なるひとなるをしりてかれをうやまひつゝかれを保護(まもり)これをきゝておほくのことをおこなひかつ歓喜(よろこび)てこれをきゝことゝせり 二十一 しかしてヘロデその誕生(たんじやう)の日(ひ)もろ／＼の大臣(だいじん)せんにんの長(をさ)およびガリラヤの尊貴(たふとき)ひと／＼にふるまひをなせる機會(をりふし)の日(ひ)いたりければ 二十二 ヘロデヤのむすめきたりて舞(まひ)をなしヘロデとその席(せき)につらなれる人々(ひと／＼)をたのしましむ。王(わう)そのむすめにいひけるハ何(なに)なりともわれにねがへ、なんぢののぞむところのものハ我(われ)なんぢに

あたふべし 二三 又この事はおほよそなんぢがねがふものはわが領分の半までなるともなんぢにあたへんとちかふ 二四 女いでゝそのはゝになにを求べきものといひければ母はなんぢバプテスマのヨハネが首といへり 二五 むすめたゞちにいそぎ王にきたり求てバプテスマのヨハネがくびを盤にのせてすみやかにわれにたまへといふ 二六 王いたくうれひけれどもまへに誓たると同席のものゝゆゑをもてこれをこばむことをこのまず 二七 王たゞちにヨハネの首をもちきたれと命じて兵卒をつかはしければ。この者ゆきて獄においてこれをきり 二八 その首をぼんにのせもちきたりて女にあ

たふむきをハこれをその母にあたへたり 二九 ヨハネの門徒
たちこのことをきゝてきたりその屍をとりて墓にをさむ
ずぬ○ 三十 使徒だち耶穌にあつまりておこなひつることゝを
しへしことをことごとくこれにつぐ 三一 耶穌これにいひ
けるハひとびとをさけてなんぢらともにしばらく寂寞と
ころにゆきてやすまん。これ往來のものおほくして食する
ひまもなかりしがゆゑなり 三二 かれら人をさけ舟にのりてさび
しきところへゆけり 三三 そのゆくをみてひとびとおほく耶穌
をしりてむらむらより歩行にてはしりかれらの先にいたる
ところへさきだちゆきて耶穌にあつまれり○ 三四 耶穌いで

ておほくの人をみるにこの事は牧者のなき羊のごときも
のなるによりてこれを憫さまざまのことををしへたまひぬ
三五 時すでに晩くなりければそのでしらきたりていひ
けるはこゝはさびしきところにして時もはやおそし 三六
衆人のくらふべきもののなきゆゑにそのむらざと四周の
むらざとにゆきて餅をもとめんがためにこのものらをさらし
めたまへ 三七 耶穌こたへけるはなんぢらこれに食をあたへよ
よでしこの事をいひけるはわれらゆきて銀二百のパンをかひこの
ひとゞもにあたへてくらはしむべきかの 三八 耶穌これにいひ
けるは餅はいくつあるゆきてこれを観てそのかぞ

としり五のパンと二のうをありといふ 三九 耶穌すべての人をくみ〳〵にして青草のうへにまとゐしめよと命じけれバ 四〇 あるひハ百人あるひハ五十人づゝならび坐せり 四一 耶穌そのいつゝの餅とふたつの魚をとり天をあふぎ謝してパンをさき門徒にあたへてひと〴〵のまへにおかしむ。またふたつのうをを衆人びとにわけあたへぬ 四二 ひと〴〵みなくらひて飽そのパンとうをの餘屑をひろひしに十二のかごにみちたり 四三 餅をくらひたるをとこおよそ五千人なりき◯ 四五 たゞちに耶穌そのでしをしひて舟にのせむかふのきしなるベツサイダへまづわたらしめ己ハひと〴〵をかへらしむ

四六 衆人（ひとびと）をかへせしのちいのりのために山（やま）にゆけり 四七 日（ひ）くれて舟（ふね）はうみのなかにあり耶穌（いゑす）はひとりをかにありけり 四八 風（かぜ）さからふによりて門徒（でし）たちのふねをこぐにつかれするをみて暁（あかつき）の四時（よとき）ごろ耶穌（いゑす）うみのうへをあゆみきたりかれらをすぎんとせしに 四九 門徒（でし）そのうみをあゆめるをみて変（へん）化（げ）のものならんとおもひさけびたり 五〇 それでしみなかれをみておそれしがゆゑなり耶穌（いゑす）たゞちにかれらにかたりていひけるは心（こゝろ）やすかれわれなりおそるゝことなかれ 五一 つひにふねにのぼりしかば風（かぜ）やみぬ。かれらこゝろのうちにおどろきあやしめることはなはだし 五二 かれそのこゝろ

の愚頑よりてパンの奇跡をもさとらざりしなり〔一〕 五三 そ
でなわたりゲネサレといふ地にいたりてふなをつなぎせり
五四 うちつれ舟よりいでしはやかてひとぐ耶蘇とをしりて 五五 あ
まねくそのあたりの地へはせありき病るものどもねだいのまゝ
もちてはこび耶蘇のいますをところくときゝいづくしてこゝまでよ
つけ 五六 およそ耶蘇のいたるところあるひは郷あるひ
は邑あるひは村その街市にやめるものをおきてこの衣のすそ
の衣のすそなりださはらせたまへとねがへまださはるもの拯
ほどのものはみないえたり

第七章 パリサイの人とある學者たちエルサレムよりきたりて

耶蘇のもとにあつまり 二 かれの門徒のうちにきよからざる手すなはちあらはざる手にてパンを食するものありしをみてこれをとがめたり 三 それパリサイのひと〴〵ユダヤの人々はみないにしへの人のつたへをまもりてその手をきよくあらはざれば食せず 四 市よりかへりきたりてあらはざれば食せずこのほかの杯また鍋および牀をあらふなどさまざまのつたへをうけまもれり 五 こゝにおいてパリサイの人とがくしやたち耶蘇にとひけるはなんぢのでしらなにゆゑ古人のつたへにしたがはずしてあらはざる手をもちてパンをしよくするや 六 耶蘇こたへてかれらにいひける

へイザヤは偽善者なるなんぢらをさしてよく預言せり。そ
のしるせしごとくこの民はくちびるにてはわれをうやま
へどもその心はわれにとほざかれり 七 人のいましめを教となし
していたづらにわれを拝むなり 八 それなんぢらは神
のいましめをすてゝ人のつたへをまもれり。すなはち鍋さ
かづきをあらひおほくこのごときことをおこなふ 九 ま
たかれらにいひけるはなんぢらおのれの遺傳をまもらん
とてよくも神のいましめをすつ 十 モーセはいひけるはなん
ぢおのれの父母をうやまへ。またちゝあるひははゝをのゝしるも
のはころさるべしと 十一 されどなんぢらはいふ。もし人ちゝ

あるひハちゝはむかひてなんぢをやしなふべきものハコルバン即ちそなへものなりといはゞつかざるもよしと
十二 かくのごとくして人のその父あるひは母のためになにをもなさゞるようしとなんぢらゆるさず 十三 かくなんぢらハそのさだむるところの遺傳をもて神のことばをむなしうせり又おほくこの類のことをなせり〇 十四 耶穌またひとびとをよびてこれらにいひけるハなんぢらことごとくわがことばをきゝてさとれ 十五 そとより人にいるものハひとをけがすことあたはずされど人よりいづるものハひとを汚すなり 十六 きくみゝある耳あるものハきくべし〇 十七 耶穌ひとびとをはなれて室にいりし

にそのでし譬のこゝろをとひければ 十八 これらにいひける
ハなんぢらもなほさとらざるか おほよそ外より人にいる
ものゝ人をけがしあたはざることをしらざるか 十九 それハそ
のこゝろにいらずして腹にいりて廁におつ、これみなくらふと
ころのものをきよむるなり 二十 またいひけるハ人よりいづるも
のハこれ人をけがす 二一 人のこゝろよりいづるものハ悪念
姦淫苟合兇殺 二二 盗竊貪婪悪慝詭譎邪侈嫉妒謗讟驕傲狂妄
あり 二三 これらのあしきことハみな内よりいでゝ人をけがすの
ものなり○ 二四 耶穌ことをさりてツロとシドンのさかひ
にゆき家にいりて人にしらさゞらんことをねがひしかど

くれえさりし　二五　それ悪鬼につかれたるをさなき女をもてるをんな耶蘇のことをききてきたりその足もとにふしたるにいたりてあり　二六　この婦はサイロビニシヤにうまれしギリシヤのをんなりしが悪鬼をそのむすめよりおひいだしたまへんことを耶蘇にねがへり　二七　耶蘇かれにいひけるハ先こどもに飽しむべしこどものパンをとりて犬になぐるハよからず　二八　をんなこたへていひけるハ主よしかりされどいぬも案のしたにありて兒曹のたべくづをくらふなり　二九　耶蘇をんなにいひけるハこのことばによりてかへれ悪鬼ハなんぢのむすめよりいでたり　三十　婦そのいへにかへりしにあ

くきすでにいでゝ女(むすめ)の牀(とこ)にふしたるをみし○三一耶穌(いえそ)ツロ
とシドンの地(ち)をさりてデカポリスのちをすぎガリラヤのうみ
にいたれり三二ひと〲聾(つんぼ)のどもるものを耶穌(いえそ)につれきたり
て手(て)をつけたまはんことをねがひければ三三耶穌(いえそ)ひと〲を
はなれこれをほかへつれゆき指(および)をその耳(みゝ)にさしいれまた
唾(つばき)してその舌(した)にさはり三四うち天(てん)をあふぎ嘆(たん)じてその人(ひと)にむか
ひてエツパタといふ。これをとけばひらけよとの義(ぎ)あり三五た
だちにその耳(みゝ)ひらけ舌(した)のもつるゝもとけてたゞしくものい
へり三六耶穌(いえそ)これを人(ひと)につぐるなかれとこれらをいましむ
されどいましむるほどます〱いひふらしぬ三七衆(ひと〲)それをはなはだし

くおどろきていひけるはこの人のなせしところことごとく善あるひはつんぼをきこえさせあるひは啞者をものいはしめたり

第八章

そのころあつまれる人々はなはだおほかりしがなにの食物もあらざりければ耶穌そのでしをよびていひけるに 二 われこのおほくのひとびとをあはれむ。そはすでに三日までわれとともにをりしゆゑ今なにもくらふものなし 三 もし飢しまたそのいへにかへさば途間にてなやまん。そのうちには遠處よりきたれるものあればなり 四 そのでしこたへていひけるはこの野にていづくよりパンを得てこのひとびとをあ

かしめんや 五 耶蘇かれらにとひけるハパンいくつあるや。
七とこたふ 六 耶蘇ひとびとに命じて地にざせしめ七のパン
をとりて謝しこれを擘ひとびとのまへにおかしめんがため
その門徒にあたへけれバ門徒すなはち人々のまへにおけり 七
またちひさき魚をわづかもてり。これをも祝してひ
とびとのまへにおけといふ 八 ひとびとこれをくらひて飽そ
のくづをなゝつの籃にひろへり 九 これを食ものおよ
そ四千人なりき。すなはち耶蘇これをかへしぬ◯ 十 耶蘇たゞ
ちにそのでしとゝもに舟にのりてダルマヌタのこうちにゆき
しにパリサイの人いでゝこれをこゝろみんがため天よりの

しるしをもとめて詰（きつ）もとむ 十二 耶穌（いゑす）こゝろのうちにふかく歎（たん）息（そく）していひけるはこの世（よ）の人（ひと）なんぞしるしをもとむるや。まことになんぢらにつげん休徴（しるし）はこの世（よ）のひとらにあらばあたへられじ 十三 耶穌（いゑす）かれらをはなれてまたふねにのりむかふのきしにわたりき○ 十四 さて門徒（でし）パンをたづさふることをわすれたゞ一（ひと）つのパンのほか船（ふね）にありき 十五 耶穌（いゑす）かれらにきつといましめていひけるはこゝろしてパリサイの人（ひと）のパンだねとヘロデの餅（パン）だねとをつゝしめよ 十六 門徒（でし）たがひに論（ろん）じていひけるはこれパンをたづさへざりしゆゑなりと 十七 耶穌（いゑす）これをしりてかれらにいひけるはなんぞたがひに餅（パン）

とたくはへざりしことをろんずるやいまださとらざるか
なんぢらのこゝろなほにぶきか 十八 目(め)ありてみえざるか耳(みゝ)あ
りてきこえざるかまたおぼえざるか 十九 われ五千人(ごせんにん)にいつ
つのパンをさきあたへしときその餘屑(くづ)をいくつのかごひろひ
しや。こたへけるに十二(じふに)なり 廿 また四千人(しせんにん)になゝつのパン
を擘(さき)あたへしときそのくづを幾籠(いくかご)ひろひしや。こたへける
は七(なゝつ)なり 廿一 耶穌(いゑす)かれらにいひけるはなんぞさとらざるや
廿二 耶穌(いゑす)ベツサイダにいたりければひとびと瞽者(めしひ)をつれきた
りてこれに手(て)をつけたまはんことをねがへり 廿三 耶穌(いゑす)めし
ひの手(て)をとりてむらのそとへつれいでその目(め)につばきし

く手をこのうへにつけとひけるは何(なに)かみゆるや 二四 めしひ目(め)を
あげていひけるはまことこの人々(ひと〴〵)のあるくをみるは樹(き)のご
とし 二五 つひに耶蘇(いゑそ)まのくこつまやうてをこのまの目(め)につけその目(め)
をあげさせければすなはち愈(いえ)てすべてのものあきらかにみ
えけり 二六 耶蘇(いゑそ)このまをそのいへにかへらせいひけるはこ
の村(むら)にいるなかれまたこのむらびとにもつぐるなかれ○
二七 耶蘇(いゑそ)そのでしとゝもにピリツポのカイザリヤのむら〳〵へゆ
く途間(みち)にてそのでしにとうていひけるはひと〴〵はわれを
いひて誰(たれ)とするぞ 二八 こたへけるはある人はバプテスマの
ヨハネあるひとはエリヤあるひとは預言者(よげんしや)のひとりなり

といへるを 二九 耶穌(いゑす)このものらにいひけるハなんぢらハわれをとい
ひて誰(たれ)とおもふやペテロこたへけるハなんぢハキリストなり
三十 耶穌(いゑす)このものらをいましめてわがことをたれにもつぐるな
ことなかれと命(めい)じたまへり ○ 三一 まさに人(ひと)の子のかならずおほくのくる
しみをうけ長老(としより)さいしのをさ學者(がくしや)どもにすてられころ
ころされて三日(みつか)のちによみがへるべしとこのものらにしめし
はじめたまへり 三二 あきらかにこのことを示(しめし)たまひしかバペテロ
耶穌(いゑす)をひきよせていさめんとせしに耶穌(いゑす)ふりかへりてその門徒(でし)
をみてペテロをいましめいひけるハサタンよわがうしろ
へしりぞけなんぢハ神(かみ)のことをおもはずかへつて人(ひと)のこ

ことをおもふ〇 三四 ひと〲とその門徒をともによびてこれ
にいひけるはわれにしたがはんとおもふものは己を
すてその十字架をおひてわれにしたがへ 三五 それ生命をま
つたうせんとするものはこれをうしなひわがためまた福
音のためいのちをうしなふものはこれをうべければな
り 三六 もし人ぜんせかいぢゆうをうるともその生命をうしなは
ばなんの益あらんや 三七 また人なにをもてそのいのちにか
へんや 三八 淫悪なるこの世においてわれとわがことばをは
づるものは人の子もまた聖使とともに父の栄光をもて
きたるときこれを恥べし

第九章 耶穌またかれらにいひけるハわれまことになんぢらにつげんこゝにたつものゝうちに神の國のけんゐをもてきたるをみるまでハ死ざるものあり○二さて六日のゝち耶穌ペテロヤコブヨハネをともなひ人をさけてたかき山にのぼりたまひしがかれらのまへにてそのすがたかハり三その衣ハかゞやきしろきことはなはだしくして雪のごとく世上の布さらしもこのしろさにハおよびあたハざるべし四エリヤモーセとともにかれらにあらはれて耶穌とことさまをまうり五ペテロこたへて耶穌にいひけるハラビわれらこゝにをるハ善ことなりわれら三の廬をつくらせよ一ハ

主のために一ハモーセのために一ハエリヤのためにせん 六 こハそのいふところをしらざりしなりかれら甚おそれしによる 七 このとき雲かれらをおほひ聲くもよりいでていひけるハこれわが愛子なりこれにきくべし 八 やがて門徒みまはしけれバ耶穌とおのれのほかハひとりもみざりき○

九 やまをくだるときに耶穌かれらに命じて人の子のよみがへるまでハなんぢらの見しことを人につぐるなかれといましめし 門徒たちこのことばをまもりてたがひに論じいひけるハよみがへるといふハなにのことぞと かれら耶穌にとふていひけるハエリヤハ前にきたるべしと學者の

いづるはなにぞや 十二 耶蘇こたへていひけるは實にエリヤはさきにきたりて萬事をあらたむ。また人の子についてはそのさまぐ〵のくるしみを受かつかろしめらるゝことのきしるされたり 十三 されど我なんぢらにつげん エリヤはすでにきたりしにかれについてしるされたりしごとく人々こゝろのまゝにこれをあしらへり ○ 十四 耶蘇でしたちのもとにきたりしに。おほくの人々のこれらをめぐりかこめると學者たちのこれらと論じをりしをみたり 十五 衆たゞちにこのまをみておどろきあへしをよりて禮をなせり 十六 耶蘇こりくしやはらひけるは門徒となにごとを論ずるや 十七 ひと〵のう

ち一人(あるひと)こたへけるハ師よわれものいはぬ悪鬼(あくき)にとりつかれたるわが子をなんぢにつれきたれり 十六 あくきのとりつくときハこれをあげたふされ沫(あわ)をふき歯(は)をかみしつかれはつるなり。これをおひいださんことをなんぢの門徒(でし)にこひしかどもかれらあたハざりき 十九 耶穌(いゑす)これにこたへていひけるハあゝ信(しん)なき世(よ)なるかな いつまでわれなんぢらとゝもにあらんや何時(いつ)までわれなんぢらを忍(しの)ばんやこのものをわれにつれきたれ 二十 このものらその子をつれきたりしにあくき耶穌(いゑす)をみてたちまちこのものを拘攣(ひきつけ)しむ。このもの地(ち)にたふれころげまろびてあわをふきぬ 二十一 耶穌(いゑす)その父(ちゝ)にとひけるに

いつのころよりかくなりしや 父(ちゝ)いひけるハ をさなきとき
よりなり 二二 悪鬼(あくき)しばしばこれを火(ひ)のなかあるひハ水(みづ)のなかへ
はなげいれてころさんとせり なんぢもし為(なす)ことをえバわ
れらをあはれみてたすけよ 二三 耶穌(いゑす)これにいひけるハなん
ぢもし信(しん)ずることをえバ信(しん)ずるものにはおいてなしあた
はざることなし 二四 その子(こ)のちゝたゞちに聲(こゑ)をあげなみだに
をながしていひけるハ 主(しゆ)よわれ信(しん)ずわがふしんなきをたす
けたまへ 二五 耶穌(いゑす)ひとびとのはしりあつまるを見(み)て悪鬼(あくき)をせ
めいひけるハ 唖(おし)またつんぼなるあしきよ我(われ)なんぢにめ
いず出(いで)てふたゝびこれにいるなかれ 二六 悪鬼(あくき)さけびておほい

いまの事をひきつけしめていでしかバ、この子死たるもののごとくなりぬ。人々これを見て死りといふ 二七 耶蘇その手をとりておこしけれバかれ起た○ 二八 耶蘇家にいりしにその門徒ひそかにとひけるハわれらこれをおひいだすことあたはざりしハなにゆゑぞ 二九 耶蘇これにいひけるハこのたぐひハ祈祷と断食にあらざれバおひいだすことあたはざるなり○ 三十 こゝをさりてガリラヤをすぐこのことを耶蘇ひとのしることをこのまざりき 三一 それハその弟子にをしへていひつて人の子ハひとの手にわたされかれらこれを殺されそのゝち第三日によみがへるべしといひたまふがあなど

ま　三二 そのとき門徒たちこのことばをさとらずまた問ことをおそれたり（）　三三 さて耶蘇カペナウムにいたり室にありて門徒にとひけるは汝等途間にてなにをたがひに論ぜしや　三四 でし黙然たりこは途間にてたがひに論じ誰のおほいなるとのあらそひありければなり　三五 いゑす坐してその十二をよびこれにいひけるは若首たらんとおもはゞものはすべての人の後となりまたすべての人のつかへびとゝならん　三六 また孩提をとりてこれらのなかにたゝせこれをいだきこれらにいひけるは　三七 おほよそわが名のためにこのごときをさなごのひとりをうくるものは即ち

われをうくるなり、またわれを接ものはすなはちわれをう
くるにはあらず我をつかはせしものを接るなり〇三八ヨハネこの
ことにこたへていひけるは師よわれらはわれらにしたがはざるもの
のなんぢの名によりて悪鬼をおひいだせるを見しがわれ
らはわれらにしたがはざるゆゑにこれを禁たり 三九 耶蘇いひけるはそ
の人をとゞむるなかれ、それわが名によりふしぎなるわざ
をおこなひて軽易にわれをそしりうるものはあらじ 四〇 われに
そむかず敵たらざるものはわれらにつくものなり 四一 なんぢら
をキリストに屬ものとしてわが名のために一杯の水をのませ
する人あらば、のませるものは誠になんぢらにつげん

その人ハむしろいハざるなり 四二 またおほよそわれを
信ずるちひさきもののひとりをつまづかするものハその
首に磨をかけられて海になげいれらるゝこそその人の
ためにハなほよかるべし 四三 もしなんぢのうで手なんぢをつ
まづかさバこれをきりされ両手ありて地獄すなはちきえ
ざる火にゆくよりハ殘缺にていのちにいるハなんぢの
ためによきことなり 四四 このところにいるものハ蟲つきず火き
えざるなり 四五 もしなんぢのあしなんぢをつまづかさバこれ
をきりされ両足ありてぢごく即ちきえざる火になげいれ
らるゝよりハ跛にて永生にいるハなんぢのためによきな

そ 四六 かしこにいるもののうじつきず火きえず 四七 もしなんぢの一眼なんぢをつまづくのさかひとならばぬきいだせりやうがんありて地獄の火になげいれられんよりハかためにて神の國にいるハなんぢのためによきなり 四八 彼處にいるものうじつきず火きえず 四九 それすべての人ハ鹽をつくるごとく火をもてせらるべし。すべての祭物ハしほをもて鹽つけらる 五十 しほハよきものなり。されど鹽もしその味をうしなハゞなにをもてこれにあぢをつけんや。なんぢら心のうちに鹽をたもてまたたがひに睦やはらぐべし

第十章

耶蘇こゝをいでヨルダンのかなたをへてユダヤのさ

ヨルダンのうちにきたりしにおほくの人々またかれにあつまりければ例のごとくこの群衆に教誨をなしたまへり
二 パリサイの人きたりてこれをこゝろみいひけるは人その妻をいだすはよきことなるや
三 こたへていひけるはモーセはなんぢらになにと命ぜしや
四 かれらいひけるはモーセは離縁状をかきあたへてこれを出すことをゆるせり
五 耶穌こたへてかれらにいひけるはモーセなんぢらのこゝろの剛硬によりてこのおきてをなしたるなり。
六 されど開闢のはじめ神ひとを男女につくりたまへり
七 このゆゑに人はその父母とはなれてその妻にあひて
八 ふたりのもの一體となるべしされば

二りにあらずいつたいなり 九 このゆゑに神のそなはせたまへるものは人これをはなすべからず○ 十 室にありて門徒たちまたこのことをとひければ 十一 耶蘇これにいひけるはおほよそその妻をいだしてほかのをんなをめとるものはその妻に對してかんいんをおこなふなり 十二 また婦もしその夫をいだしてほかのに嫁がばこのものも姦淫をおこなふなり○ 十三 耶蘇にさはらしめんがため人々をさなごをつれきたりけるが門徒たちそのつれきたれるものをいましめたり 十四 耶蘇これをみていかりをふくみていひけるは孩提をわれにきたらせよこれを禁ずるなかれ神の國

よきるものはかくのごときものなり　十五　われまことになんぢらにつげん　およそをさなごのごとくに神の國をうけざるものはこれにいることを得ざるなり　十六　すなはちこの子らをいだきて手をそのうへにのせこれを祝せり○　十七　耶穌みちにいでけるに一人はしりきたりてひざまづきとひけるは善師よわれかぎりなきいのちを嗣ためになにをなすべき　十八　耶穌これにいひけるはなんぞわれを善といふやひとりのほかに善ものはなし　すなはち神なり　十九　いましめはなんぢがしるところなり　姦淫するなかれ　殺なかれ　盗なかれ　妄のあかしをたつるなかれ　拐騙なかれ　なんぢの父と母

をうやまへ 二十 こたへていひけるハ師よこれらハわがいと
けなきよりまもれるものなり 二一 耶蘇これをみていつくし
みいひけるハなんぢなほひとつを虧ゆきてそのもちもの
を賣まづしきものにほどこせさらば天において財あらん
しかうしてきたり十字架をとりてわれにしたがへ 二二 このひと
のことばによりてうれへしをうれひてさりぬ。このひとハおほくの
ある産業をもてるものなればなり 二三 耶蘇みまはしてその
門徒にいひけるハ財をもてるものゝ神の國にいるハいか
にかたいかな 二四 でしこのことばをおどろけり。耶蘇またこ
たへてこのものらにいひけるハ小子よたからを恃むものゝ神の

くにゝいるはいとかたかりけるかな　二五 富ものゝかみのくにゝいるよりは駱駝の針のあなをとほるはなほやすし　二六 でしたち甚おどろきたがひにいひけるはさらば誰かすくひをうくべきや　二七 耶穌これをみていひけるはこれ人にあたはざるところなれど神においてはしからず神はあたはざるところなければなり　二八 こゝにおいてペテロこれにいひけるはわれら一切をすてゝなんぢにしたがへり　二九 耶穌こたへていひけるはまことになんぢらにつげんわれと福音のために家宅あるひは兄弟あるひは姉妹あるひは父あるひは母あるひは妻あるひは兒女あるひは田疇をすつる

ものは[三十]この世にて百倍をうけざるものなし即ちいへきやうだい姉妹ちゝこどもたちをゑるにくるしみもまたうけまたのちの世にはかぎりなきいのちをうけん[三一]されどおほくの先なるものはおくれになり後なるものはさきになるべし○[三二]さて彼らはエルサレムにのぼるみちにありて耶蘇でしにさきだちゆきければでしたちおどろき且おそれてしたがひぬ。耶蘇また十二をともなひて將におのが身におよばんとせることどもをこれらにつげ語りけるは[三三]われらエルサレムにのぼり人の子はさいしのをさたちと學者たちにわたされん。このものらこれを死罪にさだめ異邦人にわたし[三四]またこれを嘲

弄しむちうち唾しのちこれをころさん。かくて第三日によみがへるべし○
三五 ゼベダイの子ヤコブとヨハネ耶蘇にきたりていひけるハ師よわれらのもとむるところをねがはくハわれらに成たまへ
三六 この者らにいひけるハなんぢらハわがなにをなさんことをねがふや
三七 この者らいひけるハなんぢ榮をえんときわれらのひとりをその右にひとりをその左にざせしめよ
三八 耶蘇この者らにいひけるハなんぢらハ求ところをしらざるぞ。なんぢらわが飲ところの杯をのみわがうくるところのバプテスマをうけうるや
三九 この者らいひけるハ能せらるべし。耶蘇この者らにいひけるハなんぢらハ實にわがのむ

ところのさかづきを飲まくわがうくるところのバプテスマや
をうくべし 四十 されどわがみぎひだりに坐することはわが
予ふべきにあらず唯そなへられたるものはあたへらるべし
四一 十人のでしこれをきゝてヤコブとヨハネをいきどほれ
り 四二 耶蘇これをよびていひけるは異邦人の君とみとむる
ものはその民ををさめまた大なるものどもはこのものらのう
へは権をとるこれなんぢらのしるところなり 四三 されどな
んぢらのうちにては然るべからず。なんぢらのうち大ならん
んとおもふものはなんぢらのつかふるものとなれ 四四
どのしもなんぢらのうち首たらんとおもふものはすべての人

のしもべとならん 四五 それ人の子のきたるも人をつかふためにあらずかへつて人につかへまたおほくの人にかはりその命をあたへて贖となさんためなり○ 四六 かくてかれらきたりエリコにいたり耶穌そのでしとおほくの群集のひとびとゝもにエリコをいづるときテマイの子なるバルテマイといふ瞽者みちのかたはらにざして乞食しけるが 四七 ナザレの耶穌なりときゝてよばはりいひけるはダビデの子耶穌よわれをあはれみたまへ 四八 おほくの人々かれをいましめもだすべしといひけれどもいよいよよばはりてダビデの子よわれをあはれみたまへといひければ 四九 耶穌たちどまりてこの

立とゞまるべく命じければ人々めしひをよびてこれにいひけるハ心をやすんぜよ起て耶穌なんぢをよぶ 五十 瞽者そのうはぎをすてたちて耶穌にきたれり 五一 耶穌こたへてこれにいひけるハなんぢ我になにをせられんことをねがふや。めしひのいひけるハ主よみえなんことをねがふ 五二 耶穌これにいひけるハ往なんぢの信仰なんぢをすくへりたゞちにその目みゆることを得いゑすにしたがひて路をゆけり

第十一章 この章にハ橄欖山のベツパゲとベタニヤにいたりエルサレムにちかづけるとき耶穌ふたりの門徒をつかはさんとして

二 かれらにいひけるハなんぢら對面のむらにゆけ。そこにて

まいらバやがて人のいまだのりこゝろみざるところのつなげる驢馬の子をみるべしそれをときてひききたれ 三 もしたれかなんぢらはなにゆゑしかするやといふものあらバ主の用ありといへさらバたゞちにそれをこゝにおくるべし 四 かのものゆきて門のそとの岐路につなげるろばの子をときてこれをときけれバ 五 そこにたてる人々のうちあるものかれらにいひけるハこの驢馬のこをときていかにするや 六 でし耶穌の命ぜしごとくいひしかバ遂にゆるしたり 七 門徒ろばのこを耶穌にひききたりておのゝ衣をそのうへにおきければ耶穌これにのれり 八 ひとぐおほくハそのころも

を路上にしきあるひハ樹のえだをきりてみちにしき 九 か
つ前にゆき後にしたがふひとびとよばゝりいひけるハホサナ
よ主の名によりてきたるものハ福なり 十 主のなによりて
きたるわれらの父なるダビデの國ハさいはひなるかな至上と
ころにホサナよ〇 十一 耶蘇エルサレムにいたり聖殿にいりて
ことごとくみまはし時もはや暮におよびければ十二弟子とも
にベタニヤにいでゆけり〇 十二 明日かれらベタニヤよりいでし
ときに耶蘇うゑたり 十三 はるかのに葉あるいちじくの樹をみて
その樹に果にくのあらんとてきたりしに葉のほかになにもな
えぎりきこれ無花果樹のときにあらざればなり 十四 耶蘇こ

のきにむかひて今(いま)よりのちながくなんぢの果(み)をくらふ人(ひと)あらざれといふ門徒(でし)これをきけり 十五 かれらエルサレムにいたり耶穌(いゑす)みやにいりてそのうちにある賣買(うりかひ)するものをみやよりおひいだし兌銀者(りやうがへするもの)のだいと鴿(はと)をうるもののこしかけをたふし 十六 また器具(うつはもの)をもちてみやをとほることをゆるさず 十七 またこれらにをしへていひけるはわが殿(との)はばんこくのひとの祈禱(いのり)のいへととなへらるべしとしるされたるにあらずやなんぢらはこれを盜賊(ぬすびと)の巣(す)となせり 十八 がくしやと祭司(さいし)のをさこれをきゝていかにもして耶穌(いゑす)をほろぼさんとはかりしがこのことをおそれたり。それは衆(ひとびと)みなそ

のをしへにおどろきたればなり○十九日くれて耶蘇みやこ
をいでゆけり 二十 翌朝のぼるいちじくの樹をすぐるときその
根よりことごとくにかれつるをみる 二十一 ペテロおもひいでゝ耶
蘇にいひけるハラビみよ詛しところのいちじくハかれき
よ 二十二 耶蘇こたへてこれらにいひけるハ神を信ぜよ 二十三 まこと
にまことになんぢらにつげん誰にてもそのこゝろにうたが
ふことなくそのいふところの言ハかならずなるべしと信ぜ
ばこの山にうつりて海にいれといふともそのことばのごとく
成べし 二十四 このゆゑにまたなんぢらにつげんおほよそ祈禱
のときそのねがふところのものハかならずうべしと信ぜ

バこのあらざ得べし 二五 またなんぢら立ていのりをするときもし人をうらむることあらバこれをゆるせそハ天にいますなんぢらの父ハなんぢらもまたその過をゆるしたまハんためなり 二六 もしなんぢら免さずバ天にいますなんぢらのちゝもまたなんぢらのあやまちをゆるしたまハじ ○ 二七 かれらまたエルサレムにいりつ耶穌みやをあるけるとき祭司のをさ學者および長老どもきたりて 二八 かれにいひけるハなにの權威をもてこのことをなすや誰がこのことをなすべきためハなんぢにこのけんをあたへしや 二九 耶穌こたへてかれらにいひけるハ我も一言なんぢらにとハんまづハ

こたへよ。さらバわれなんぢらになにの権威をもてこの事を
なすかといふことをつぐべし 三十 ヨハネのバプテスマハ天より
この人よりかわれにこたへよ 三一 このものたがひに論じいひけ
るハもし天よりといはゞさらバなにゆゑこの事を信ぜざる
かといはん 三二 もし人よりといはゞ—。この事民をおそるゝ
なり。そハ民ミなヨハネを預言者とせしなる 三三 つひにこ
たへてさらにしらずといふ。耶蘇こたへていひけるハわれも何の
じゝ汝らに告てこの事をなせるかなんぢらにつげざらんト

第十二章 耶蘇たとへをもてこの事をまうされり。ある人ぶだう
ばたけをつくり籬をめぐらし酒榨をほりものみをたて農

夫よそのくにへゆきしが 二 期いたりければ葡萄ぞのゝわけの果をうけとらんために僕をのうふのもとにつかはしけるに 三 農夫どもこれをとらへうちたゝきてむなしくこれをかへらしめたり 四 また他の僕をこのもとにつかはせしにのうふどもこれを石にてうち首にきずつけ恥かしめてかへらしむ 五 またほかのものをつかはせしにこれをころせり。またほかのおほくつかはせしにあるひは打あるひはころしぬ 六 こゝにひとりの愛子ありけるがこのわが子はうやまふならんといひて卒にその子をつかはせしに 七 のうふら互にいひけるはこは嗣子なりいでこれをころさ

んさらバ産業はわれらのものとならん 八 すなはちとらへ
てこれをころし葡萄園のそとにすてたり 九 さらばぶだ
うばたけの主なにをなすべきぞ。この来りて農夫どもを
うちほろぼし葡萄ばたけをほかの等にあたふべし 十 工匠
のすてたる石はいへのすみの首石となれり 十一 これ主のな
したまへることにしてわれらの目にはあやしとするところ
なりとあるさうしをいまだよまざるか 十二 かれらこの譬は
おのれらをさしてのたまへりとさとり耶蘇をとらへんとせし
されども衆をおそれて耶蘇をさりゆけり○ 十三 かれら耶蘇を
そのことばをとりて陥いれんとしてパリサイのひとびと

ヘロデの黨のうちより數人をつかはせり
十四 つかはされしものどもは耶穌のもとにきたりいひけるハ師よなんぢハ眞なるものなりまた誰をもはゞかることをせざるハしる。そハ貌によりて人をえらばずまことをもて神のみちをしふればなり。人税をカイザルにをさむるハよきや否われらをさむべきや納ざるべきやと
十五 耶穌そのまことならざるをしりてこれらにいひけるハなんぞわれをこゝろむるやデナリをもちきたりてわれにみせよ
十六 このものらもちきたりければ耶穌これらにいひけるハこの像と號ハたれのぞ。こたへてカイザルなりといふ
十七 耶穌いひけるハカイザルのものハ

カイザルにかへしまつく神のものハこのみにかへをべし。この者ら
これを奇とせり○二十三 復生なしといひなせるサドカイの人き
たりて耶穌にとひけるハ 二十四 先師よモーセがいはくおき
けるハ人のきやうだいもし子なくして妻をのこし死バ
そのきやうだいこの妻をめとりて兄弟のあとをたつべ
し 二十五 とこゝに七人のきやうだいありしが長子妻をめと
り子なくして死に 二十六 第二のものこれを娶まて子なくして
死 二十七 第三もまたしかせ七人ことごとくこれをめとりたれど子
なくつひまた、この婦も死ねり 二十八 復生のときこのおんなが
つらバこのおんなハたれの妻となるべきぞ。そハ七人ある

じくこれをめとりたれバなり　二四 耶穌こたへてこれにいひけるはなんぢらは聖書をも神のちからをもしらざるによりてあやまれるならずや　二五 それ死よりよみがへるときはめとらず嫁がず天にあるつかひたちのごとし　二六 死にしものゝよみがへることにつきてはモーセの書しばの篇に神これにつげてわれはアブラハムの神イサクの神ヤコブの神なりといひたまひしをなんぢらはいまだよまざるか　二七 神は死にしものゝ神にあらず生るものゝ神なりなんぢらおほいにあやまれり○二八 學者のひとりこの議論をきゝて耶穌のよくこたへたまひしをさとり。きたりてこれにとひけるはすべて

のいましめのうちいづれ首なるや 二九 耶蘇これにこたへけるハすべての誡のかしらハイスラエルよきけ主なるわれらの神ハすなはち一の主なり 三十 なんぢ心をつくし精神をつくし意をつくし力をつくし主なるなんぢの神をあいすべし。これおきての首なり 三一 だい二もまたこれにおなじ。おのれのごとくなんぢのとなりを愛すべし。これより大なるおきてなし 三二 がくしや耶蘇よいひけるハ善かな師よなんぢ神ハすなはち一にしてほかのかみなしといひしハまことなり 三三 またこゝろをつくし智慧をつくし精神をつくしちからを盡てこれをあいしまたおのれのごとく隣をあいそ

るハすべての燔祭と禮物よりもまさるなり 三四 耶穌この者が
道理をおもへることばへとこたへてこれにいひけるハなんぢハ神の
國よりとほからずこのゝち敢てとひまつるものあらざり
き〇 三五 耶穌みやにありて教誨をなせるときこたへて
いひけるハなんぞ學者ハキリストをダビデの子といふ
や 三六 それダビデ聖靈にかんじてみづからいふ。主わが主に
いひけるハわれなんぢの敵をなんぢの足のしたにおくま
でハわが手のみぎに坐せよと 三七 かくダビデみづからかれ
を主ととなへたり。されバいかでその子なるべきやおほくの
人々よろこびて耶穌にきくことをなせり〇 三八 耶穌をしへ

教へけるときこのまゝはいひけるはながき衣服をきてある
き市(いちば)にて人々のあいさつ會堂(くわいだう)のうゝざ筵席(ふるまひ)のこゝざこ
のみ 四十 まゝ嫠婦(やもめ)のいへを呑(のみ)いつはりてながきいのりをなすぞ
るこのくしやを謹防(つゝしめ)よこのもののつみせらるゝことなほおも
重(おも)し〇 四一 耶蘇(いゑそ)さいせんのまへにむかひて坐(ざ)しいかにしうぐの錢(ぜに)
をさいせんばこにいるゝをみたまひしにおほくとめるものはおほ
くいれたり 四二 ひとりの貧(まづし)きやもめきたりてレプタふた
つをなげいれぬこれは四厘(りん)ほどにあたれり 四三 耶蘇(いゑそ)そのでし
をよびていひけるは誠(まこと)にまうさんなんぢらにつげん
はこになげいれしすべての人々(ひとびと)よりもこのまづしき嫠婦(やもめ)

いれはしくなけいれまつり 四三 そこでいゑすハみなその弟子(でし)をよびこ
ろざもていふこのひんなるやもめハその外(ほか)のものよりもおほくいれたり
てのもちもののあまれるものより全業(しんだい)をことごとくいれたればなり

第十三章

一 いゑすを聖殿(みや)よりいでゆけばひとりの門徒(もんと)のうちい
ひけるハ師(し)よみたまへこの石(いし)この殿宇(でんう)いうまさかんなら
ずや 二 耶蘇(やそ)こたへていひけるハなんぢこの大(おほい)なるいく
をみるこの一(ひとつ)のいしも石(いし)のうへにさしおかれてハのこら
ず 三 いゑを橄欖山(かんらむざん)にてみやにむかひ坐(さ)したまへるにペテロ
ヤコブヨハネアンデレー等(ら)ひそかにとひけるハ 四 いづれの
時(じ)このことあるやまたすべてこのことのならんときい

このある兆あるやわれらにつげたまへ 五 耶蘇こたへてこれらにいひけるは人にあざむかれざるやうつゝしめよ 六 そは多くの人わが名をおかしきたりて我はきりすとなりといひておほくのひとを欺惑べし 七 なんぢら戦といくさの風聲をきくとききおそるゝなかれこの事どもはかならずあるべきなり。されど末期はいまだいたらず 八 民は民におこりてたゝかひをせめ國はくにを攻まし ところ〴〵に地震あり饑饉みだれあらん これらは患難のはじめなり 九 なんぢらみづからの[illegible]そはなんぢら集議所にわたされ會堂にてむちうたれうつ證となさんためにわがことによりて侯

および王(わう)のまへにひきたてらるべし　十　しかして福音(ふくいん)はま
づ萬民(ばんみん)にいひひろめざるをえず　十一　人(ひと)なんぢらをひきわたさ
ば以前(まへ)よりなにをいはんとあらかじめおもひわづらふ
なかれたゞなんぢらそのとき賜(たまは)るところのことをいふべし。
そはものいふものはなんぢらにあらず聖靈(せいれい)なり　十二　きやう
だいは兄弟(きやうだい)を死(し)にわたし父(ちゝ)は子(こ)をわたし子(こ)はそのち
ちにさからひて之(これ)を死(ころさ)しめ　十三　またなんぢらはわが名(な)
によりてすべての人(ひと)ににくまるべしされどをはりまで忍(しの)
ぶものはすくはるゝことを得(え)ん　十四　よげんしやダニエルが
いひしところの殘暴(あらき)にくむべきものゝ立(たつ)べからざるとこ

ろにたつをみバ（讀ものよくおもふべし）そのときユダやにをるものハ山ににげよ 十五 屋上にをるものハいへにくだるなかれ又物をとらんとてその家にいるなかれ 十六 田にをるものハその衣服をとらんとてうしろへかへるなかれ 十七 その日にハはらめるものと乳をのまする婦ハわざはひなるかな 十八 なんぢら冬にかゝることなからんためにいのれ 十九 その日ハなやみあらんかくのごとき患難ハ神のものをつくりたまひし開闢よりいまにいたるまであらざりき。またのちもあらじ 二十 もし主その日をすくなくしたまはずバ一人もすくはるゝものなし。されど主のえらびたまへ

るところのえらまれしものゝためにその日を減少したまふべし 二一 そのときもしキリストこゝにありかしこにありとなんぢらにいふものあるとも信ずるなかれ 二二 そハ偽キリストにせ預言者おこりてしるしとふしぎなるわざをおこなひ揀選たるものをもあざむくことをえばあざむくべければなり 二三 なんぢら慎よわれあらかじめなんぢらにことごとくこれを告 二四 そのときこのなやみのゝち日ハくらく月ハひかりをうしなひ 二五 天の星ハおち天のいきほひ震動べし 二六 そのときひとびとハ人の子のおほいなる權威と榮光をもて雲のうちよりきたるをみん 二七 またそのとき人の子

そはつかひたちをつかはして地のはてより天のはてまで
四方よりそのえらまれしものとあつむべし 六 これなんぢ
ら無花果樹よりてたとへをまなべ。その枝すでにやはらか
になりて葉めぐめば夏のちかきをしる 元 かくのごとくな
んぢらもすべてこれらのことをみば時ちかく門につちよい
たるをしれ 丰 まことにまことになんぢらにつげんこれらのこ
とことごとく成るまではこの民はうせざるべし 三 天地はうせ
んされどわがことばは廢ず 三 その日そのときをしるもの
いたゞわが父のみなり天にあるつかひも子もたゞしらざる
ものなし〇 三 この日いづるのよくきたるこのときあつまれば

なんぢらつゝしみて徴醒(めをさま)しいのりせよ　三四　そハ人のよハたびだちせんとしてその權(ちから)を志もべどもに委(まか)せおの〳〵にあてがふべき事をさづけまた閽者(かどもり)におきてたるぞまもれと命(めい)じて家(いへ)をさるひとのごとし　三五　このゆゑになんぢらもおきてたるべしてまもれそハ家(いへ)のあるじあるひハ夕(ゆふべ)あるひハ夜半(よなか)あるひハ鶏(にはとり)なくころあるひハ早晨(よあけ)にいつかへるやと志らざればなり　三六　おそらくハおもはざるの時(とき)きたりてなんぢらがねむれるをみん　三七　まづおこゝろざしてまもれなんぢらにつぐるハすべての人(ひと)につぐるなり

第十四章(だいじふしせう)

さて逾越(すぎこし)まつりすなはちたねいれぬパンの節(せつ)の二日(ふつか)まへ

は祭司のをさとがくしやたち詭計をもて耶穌をとらへころさんとし 二 いひけるハまつりの日にハなすべからずおそらくハ民のうちに亂おこらん（） 三 耶穌ベタニヤの癩病シモンのいへにおいて食しゐたまへるときあるをんな蠟石のうつはものにあたひたかきナルドのあぶらをもりてもちきたりその盒をやぶり耶穌のかうべにそゝぎたり 四 ある人〻たちたがひにいかりをふくみいひけるハこの膏をつひやすハなにゆゑぞや 九 これをうらバ三百あまりのデナリをえてまづしきものにほどこすことをえんとこの婦をいたくとがむ 六 耶穌いひけるハこのまゝにのこしおけなんぞかれ

なんぞこのをんなをなやますやわれに善事をおこなへるなり 七 まづしきものハいつもなんぢらとともにあれバなんぢら意にまかせてかれらをたすくることを得べしわれハつねになんぢらとともにをらず 八 このをんなハ力をつくしてなせりそハあらかじめこれを葬ためわが身にあぶらそゝぎしなり 九 われまことになんぢらにつげん天下いづくまでもこの福音のひろめらるゝところにてハこのをんなのなせしこともまたその記念のためにいひつたへらるべし 十 さて十二のひとりなるイスカリオテのユダ耶穌をわたさんとて祭司のをさにゆきしに 十一 かれらこれをきゝ

きゝてよろこび銀子をわたさんと約せしかバユダハ耶蘇を
わたさんと機をうかゞひつゝも○ 十二 除酵餅のいはひのはじめ
の日すなはちすぎこしの羔をころすべき日でし耶蘇にい
ひけるハすぎこしの食をいづこにまうけん ⑩きそてまうけしめたまふ
べきや 十三 耶蘇ふたりの門徒をつかはさんとしてこゝろえさせい
ひけるハみやこにゆけさらバ水といれたる瓶をもてる人
にあふべしこれにしたがふべし 十四 そのいるところの家のある
じに師いはくわが弟子とともにすぎこしの食をくらふべき客房ハ
いづこにあるやといへ 十五 さすれバこの人陳設たるおほいな
るにかいのざしきをあんないすべしそこにてわれらのためにそ

こゝに預備よ　十六でし出きて京城にいりしに耶穌のいひたま
へるごとく遇しのばすぎこしのそなへをなせり　十七日くれ
て耶穌ぢふにの門徒とともにきたれり　十八人々の席につ
きてしよくするとき耶穌いひけるはまことになんぢ
らにつげんなんぢらは食するなんぢらのうち一人はわれ
をうりわたすべし　十九この弟子うれひておの／＼耶穌にいひつゞけ
るはわれなるかといふ又ほかのひとりもいひけるはわれなるか
二十耶穌こたへていひけるは十二のうちのひとりわれとゝもに
手を盃につくるものこれなり　二十一人の子はおのれに
ついて録されたるごとく逝ん。されど人の子をわたすものの

ハわざはひなるかな。その人ハうまれざりしならバ幸なりし
ならん。二二 かれら志よくするとき耶穌パンをとりて祝しこ
れを擘てでしたちにあたへていひけるハ取てくらへこれハ
わが身なり。二三 また杯をとりて謝しでしたちにあたへけれバ皆
このさかづきよりのめり。二四 耶穌いひけるハこれハ新約の
わが血にしておほくの人のためにながすところのものな
り。二五 われまことになんぢらにつげん今よりのちあたらし
きものを神の國にてのまん日までハ葡萄にてつくりたるも
のをのまじ。二六 でしたち歌をうたひて橄欖山にゆけり。二七 耶
穌でしたちにいひけるハ今夜なんぢらみなわれについてつ

まづかん。それは我牧者をうたんそのとき綿羊ちるべしと
しるされたればなり　二八　されど我よみがへりてのちなん
ぢらにさきだちてガリラヤにゆくべし　二九　ペテロ耶蘇にいひけ
るハたとひみな礙くとも我ハしからじぞ　三十　耶蘇これにいひ
けるハ我まことになんぢにつげん今日このよ鶏ふたゝ
びなくまへになんぢ三次我をしらずといはん　三一　この我ま
たゝりくしいひけるハ我なんぢとともにしぬるとも
なんぢをしらずといはじ門徒みなかくいへり　三二　かくて
この我ゲツセマネといふところにいたり　耶蘇そのでしにい
ひけるハ祈禱あひだこゝにざせよ　三三　つひにペテロヤコブ

ヨハネをともなひゆき甚しくうれひかなしみをもよほし
三四 これらにいひけるハわが心いたくうれひて死なんばかりのも
なりなんぢらこゝにまちて儆醒をれ 三五 耶蘇すこしくすゝみて
ゆきて地にふしいのりをいひけるハもしかなはゞこの時を
さらしめたまへ 三六 まうしけるハアパ父よなんぢにおい
てハすべてのことしあたはざるなしこの杯をわれよりさり
たまへ、されどわがおもふところをなさんとするにあらず。
なんぢがおぼしめすこゝろにまかせたまへ 三七 耶蘇きたりてみ
たりのいねたるを見ペテロにいひけるハシモンなんぢいね
たるかの一時もめをさましをることあたはざるこの 三八 誘惑よ

いらぬやうめをさまし且いのれ。そのたましひハねがふなれど
まこと肉體よわきなり 三九 またさりゆきておなじことをいひて
いのれり 四十 返てまたこの弟子のいねたるを見る。こハこの弟子
その目つかれたるなり。耶穌になにとこたふべきやをしら
ざりき 四一 三次きたりてこの弟子にいひけるハ今ハいねてや
すめ充分なり時いたれり人の子ハつみびとの手にわたさる
るなり 四二 起よわれらゆくべし視よわれをわたすものちかづ
けり○ 四三 このいへるときただちに十二のひとりなるユダ
つるぎと棒とをもちたるおほくの人々とともにさいしの
をさ學者および長老のもとよりきたる 四四 耶穌をわたすも

のこのものらハ號(あいづ)をなしていひけるハわが接吻(くちつけ)するものハそ
れなりこれをとらへてしかとひきつれよ 四五 きたるやたちまち
よりて耶蘇(いえす)にちかくよりラビラビといひてくちつけせり 四六 ひ
とびと手(て)を耶蘇(いえす)にかけてとらふ 四七 かたはらにたてるもの
の一人(ひとり)つるぎをぬきて祭司(さい)の長(をさ)のしもべをうちてその耳(みゝ)を
きりおとす 四八 耶蘇(いえす)こたへていひけるハ刃(つるぎ)と棒(ぼう)とをも
ちぬすびとをとらふるごとくしてわれをとらへにきたれる
か 四九 われ日々(ひゞ)なんぢらとともに殿(みや)にありてをしへしかどなんぢら
われをとらへざりきされどこれ聖書(せいしよ)にかなはせんがため
なり 五〇 門徒(でし)みな耶蘇(いえす)をすてゝにげさりぬ 五一 あるわかき

ものその身にたゞ麻の夜具をまとひて耶穌にしたがひさ
ましが逮捕のものどもこれをとらへんとしければ 五二 かれはその
やぐをすてゝはだかにてのがれさりけり〇 五三 ひとびと耶穌をさ
いしの長につれゆきけるに祭司のをさ長老およびがくし
やたちことごとくそのもとにあつまれり 五四 ペテロはとほく
はなれて耶穌にしたがひ祭司のをさの庭のうちまでいり
僕とゝもにざして火にあたりをれり 五五 さいしのをさ
および議官ども耶穌をころさんとして證をもとむれども
えず 五六 おほくのひとびと耶穌にいつはりのあかしをいひい
だせどもその證あはず 五七 ある人々たちていつはりのあかしを

しといひいひしけるハ 五八 われ手をもてつくりたるこの聖殿をこぼち三日のうちに手をもてつくらざる別のみやをたてんといひしとわれらハきゝけり 五九 かくいひしかどもその證またあはざりき 六〇 祭司のをさ中にたちて耶蘇にとひいひけるハなんぢこたふることなきやこの人々のなんぢにたいしつる證據ハいかに 六一 いゑそ黙然としてなにごともこたへざりけれバ祭司の長またこれにとひていひけるハなんぢハ頌べきものゝ子キリストなるか 六二 耶蘇いひけるハわれそれなり人の子大權の位にざし天の雲のうちにありてきたるをなんぢらみるべし 六三 こゝにおいて祭司のをさその衣をさきて

いひけるハなんぞまたほかの證據どもをもとめんや 六四 その褻瀆たることばハなんぢらもきけるところなりなんぢらいかにおもふや。この者みな耶蘇を死にあたるべきものとさだめたり 六五 あるものハこの者に唾しまたその面をおほひ拳にてたゝきいひけるハ預言せよ。またしもべどもも手のひらにてこの者をうてり 六六 ペテロ下庭にありしにさいしのをさのある婢きたりて 六七 その火にあたりゐるをみ熟々この者をみていひけるハなんぢもナザレの耶蘇とともにありし 六八 ペテロうけがはずしていひけるハわれ者こ者とあらずまたなんぢがいふところのことをさとりえず

るなのり。かくて庭門(にはぐち)にいでけるににはとりなきぬ 六九 その婢(はしため)かれをみてそのかたはらにたてるものにまたいひけるはこの人(ひと)もかの黨(たう)のひとりなり 七十 ペテロまたうけがはずしばらくしてかたはらにたてるものまたペテロにいひけるはなんぢまことにかのともがらの一人(ひとり)なり。そはなんぢはガリラヤの人(ひと)なりその口音(くちなまり)もこれにあへりと 七一 こゝにおいてペテロ誓(ちかひ)てみづから神(かみ)のたゝりをうくるともなんぢらがいふその人(ひと)をもしらざるなりといひしが 七二 このとき鶏(にはとり)ふたゝびなきければペテロ耶蘇(いえす)のにはとりふたゝびなくまへに三次(みたび)なんぢわれをしらずといはんといひたまひしことばをおもひいだし

しまへにいひつることをおもひいだして哭(なき)かなしめり

第十五章

平旦(よあけ)にはやくただちに祭司(さいし)のをさ長老(ちやうらう)ぶくしやだ
ちすべての議官(ぎくわん)とともにはかりて耶穌(いゑす)をしばりひきつれ
てピラトにわたせり
二 ピラトこのものにとひけるはなんぢは
ユダヤびとの王(わう)なるやと耶穌(いゑす)こたへけるはなんぢのいへる
ごとし
三 さいしの長(をさ)おほくのことをもてうつたふ
四 ピラトまた耶穌(いゑす)にこたへていひけるはなにもこたへざる
かこのものらがなんぢについて證(あかし)をたてしこといかばかりぞ
や
五 ピラトのあやしとするまでに耶穌(いゑす)なにごともこたへざ
りき
六 さてこのまつりにはこのものらが求(ねがひ)にまかせてひとり

の囚人(めしうど)をゆるす其の例(ためし)あり 七 ときにハバラバといへるものあり
かのものとともに謀叛(むほん)せしともがらとおなじくつながれゐ
たりしがこのものハそのむほんのとき人(ひと)をころせしものど
もあり 八 ひとびと聲(こゑ)をあげてよばはり恒例(いつも)のごとくせんこ
とをねがへるに 九 ピラトこのものらにこたへていひけるハユダヤ
びとの王(わう)をなんぢらにゆるさんことをのぞむや 十 こ
れピラトさいしの長(をさ)たちのねたみによりて耶穌(いゑす)をわたしゝを
たりとしれバなり 十一 祭司(さいし)のをさ民(たみ)どもにバラバをゆるさ
んことをねがへとすゝむ 十二 ピラトまたこたへてうつしけれは
いひけるハさらバユダヤ人(ひと)のわうとなんぢらがよべる

もしかハ何ぞりしゅあさんじうどあんちうのぞむや 十三 かれらまたさけびてこれを十字架につけよといへり 十四 ピラトかれらにいひけるハこの人なんの悪事をなせしやとかれらますますさけびてこれをおふじうは釘よといふ 十五 ピラト民のよろこびをえんとしてバラバをこれらにゆるし耶蘇をむちうちてこれを十字架につけんためにわたせり 十六 兵卒ぐるこれを公廳につれゆき組中のものをよびあつめ 十七 この者にむらさきの袍をきせいばらのかんむりをあみてこれにかむらしめたり 十八 かくていひけるハユダヤびとの王やすかれ 十九 また葦をもてその首をたゝきこれに唾しひざまづきて拝しぬ 二十

てうろう〳〵しをはりて紫（むらさき）のころもをぬきもとの衣（ころも）をきせ
出してはりつけんとてひきゆきしが 二一 アレキサンデルとルフスの
父なるクレネのシモンといへるものいなかよりきたりて
そのところをとほりかゝりけるが強てこれに耶蘇（いえす）の十字
架をおはせたり 二二 耶蘇（いえす）をゴルゴダとよりが即ちされかうべと
いへるところにつれきたり 二三 没薬（もつやく）と酒（さけ）とまじへてのませ
んとあたへりしかどもうけざりき 二四 耶蘇（いえす）をあふしゝはつ
けしのち誰なにをとらんと鬮（くじ）をとりてその衣服（ころも）をわけのそ
ま 二五 おさきの第九時はいちもと十字架はいりけ 二六 その罪標と
ユダヤびとの王とかきつく 二七 ふたりの盗をつけてもまた一人

はその右ひとりはその左にあふしくのまつりける 二八 こゝに聖書にこの事は罪人とともにかぞへられたりといひしにかなへり 二九 ゆきゝのもの耶穌をのゝしり首をふりていひけるはあゝ聖殿をこぼちて三日にたつるものよ 三十 みづからをすくひて十字架をおりよ 三一 祭司のをさたち學者どもゝおなじく嘲弄してたがひにいひけるは人をすくひてみづからをすくひえず 三二 イスラエルの王キリストは今おりよかしこのよりくだるべし。さらばこれを見てこの事を信ぜん。またともに十字架につけられたるものどもこの事をのゝしりき 三三 第十二時より三時にいたるまであまねく地のうへく

らゝなりぬ 三四 第三時に至るをおほごゑによばゝりてエリエリラマサバクタニといふことばを譯ばわが神わが神なんぞ我をすてたまふやといへるなり 三五 そこにたちゐるものゝうちある人これをきゝてこれはエリヤをよぶなりといふ 三六 ひとりはしりゆきて海絨をとり醋をふくませ葦につけて彼にのましめいひけるは俟エリヤきたりて彼をすくふや否みるべし○ 三七 耶蘇ふたゝび大なる聲をいだしていき絶ぬ 三八 みやの幔うへよりしもまでさけて二となる 三九 耶蘇にむかひてたちゐたる百人の長このやうにさけびて氣たえしをみていひけるはまことにこの人は神の子なり○

四十 またとほくよりのぞみみたる婦ありしがそのうちにありしものはマグダラのマリアおよびちひさきヤコブとヨセの母なるマリアまたサロメなり 四一 かれらは耶穌のガリラヤにおはしまししときしたがひつかへしものどもなりこのほかにもこれにつきてエルサレムにのぼりしおほくのをんなありき○ 四二 この日はそなへ日にてあんそく日のまへの日なりしゆゑ 四三 日くれてとき尊貴ぎゐんなるアリマタヤのヨセフといへるものきたりこのひとは神の國をのぞめるものなりしがはばからずピラトにゆきて耶穌のしかばねを求たり 四四 ピラト耶穌のすでにしねるをお

やしを百人のかしらをよびてこの者死てより時をへたる
やいなやをとひ 四五 ひやくにんの長よりきゝてことさだかになり
屍をヨセフにあたふ 四六 ヨセフ枲布をかひもとめて
耶穌をとりおろしこれをそのぬのにてつゝみ磐にほりた
る墓におき石をもてそのもんにまろばしおけり 四七 マグダラの
マリアおよびヨセの母なるマリアその屍をおきしところ
をみたり

第十六章 安息日すぎてマグダラのマリアとヤコブの母なるマリア
およびサロメ香料をかひとゝのへ耶穌にぬらんとてきたる
れり 二 七日のはじめの日いとはやく日ののぼるころこの墓

ら墓にきたり 三 たがひにいひけるハ誰かわれらのために石を墓の門よりまろばしさるものあらんかと。その石ハはなはだおほいなりけり 四 かくてかれら目をあげみれば石のすでにまろびあるをみる 五 墓にいりしに白ころもをきたる少者の右のかたにざせるをみておどろきあやしめり 六 少者かれらにいひけるハおどろきあやしむなかれなんぢらハ十字架につけられしナザレの耶穌をたづぬ。この者ハよみがへりてこゝにをらず。この者をおきしところをみよ 七 且ゆきてその門徒とペテロにつげよ。この者ハなんぢらにさきだちてガリラヤにゆけり。なんぢらかしこにて

こゝろを見へ、おそれおのゝきてそのあんちうはいそぎしがごとし 八
この女らいでゝ墓よりにげさりぬ。このゝ戦慄このおどろきたればなり
一言を人にいはざりき。これおそれしがゆゑなり ○ 九
いゑす七日のはじめの日よあけごろよみがへりてまづ
マグダラのマリアにあらはる。さきに耶穌この女より七つの悪鬼
をおひいだせり 十 耶穌とともにありしもの哭しつゝありしに
ゆきてこの婦きたりてこれらのことを告げたり。このもの耶穌
の活てこの女にあらはれたまひしことをきゝしが信ぜざ
りき 十二 このゝちこのうちの二人のものいなかへゆきけ
るとき路にてやくはき耶穌このかはりたる貌にてこれにあらはれ

る　十三　このふたりのものゆきてほかの門徒(でし)たちにつげしも
どもまたこれをも信(しん)ぜざりき。十四　またそのゝち十一(じふいち)のでし
しの食(しよく)しをるときあらはれてこれらが信(しん)なきことゝそのこ
ころの剛硬(かうかう)なるをいましめたまへり。これはこのものら耶穌(いゑす)のよみ
がへりたまへるのち其(それ)をみしものゝいふところを信(しん)ぜざ
るしがゆゑなり　十五　耶穌(いゑす)これらにいひけるはあまねく世界(せかい)を
めぐりてすべての人(ひと)にふくいんをのべよ　十六　信(しん)じてバプテ
スマをうくるものはすくはれ信(しん)ぜざるものは罪(つみ)にさだめ
らるゝなり　十七　しんずるものゝためには左(さ)のごとき奇跡(きせき)ともなふ
べし。わが名(な)によりて悪鬼(あくき)をおひいだし。ことなるくにの方(こと)

言をいひまた蛇をとらへ毒をのむとも害なくまた手をや
まひのものにつけなばたちまち愈ん ○ 十九 かくて主はこの言
らをいひしのち天にあげられ神のみぎにざしぬ 二十 門徒
たちあまねく福音をのべつたふ主もまたこれとともにはたらき
とおちせそのしたがふところの奇跡をもて道のあかしと
なしたまへりアーメン

新約聖書馬可傳 終

耶穌降生一千八百七十六年

翻譯委員社中

米國聖書會社

新約聖書路加傳

明治九年

日本横濱上梓

新約全書 路加傳福音書

第一章 一 われらの中にあつく信ぜらるることを始より
親しくみて道につかへたるものゝ 二 われらにつたへしごと
く記載んとあまたの人々これを手にとりけるゆゑに。貴き
テヨピロよ 三 われも原よりすべての事をつまびらかに考究
したれバ次第をたゞして なんぢに書おくり 四 なんぢがをしへ
られしところの確實をさとらせんとおもへり○ 五 ユダヤ
の王ヘロデのときにアビアの班なる祭司ザカリアといへる
ものあり。その妻ハアロンの裔にて名をエリサベツといふ 六
ともに神のまへにて義人なり。すべて主の誡命と礼儀を

のけがれなくおこなへり 七 エリサベツ妊なきによりてかれらに子なし。また二人とも年も老ぬ 八 ザカリアその班次にあたりて神のまへに祭司の職をおこなふとき 九 祭司の例にしたがひて籤をとりて主の宮にいりて香を焼ことを得 十 かうをたきける時に衆の人々はみな外にゐていのりき 十一 主のつかひ香壇のみぎにたちてザカリアにあらはれしかば 十二 ザカリアこれをみてあわてておそる 十三 天使かれにいひけるはザカリアよおそるなかれなんぢのねがひきこえきたりたまへり。なんぢの妻エリサベツ男子をうまんその名をヨハネとなづくべし 十四 なんぢによろこびとたのしみあらん。おほくの人も

またそのうまるゝによりてよろこびあらん
十五 それこの子主の
まへに大ならん葡萄酒と濃酒とをのまじ。母の
胎よりうまれいでゝ聖靈に充さる
十六 またイスラヱルの民
のおほくのひとを主なるその神に歸服せしむべきなり
十七 かれエリアの心と才能をもて主のさきにゆかん。これ父
のこゝろに子を慈ませ。逆ものを義人の智にかへらせ。主
のためにあらかじめなる民を備んとなり
十八 ザカリア天使に
いひけるハわれハ老まさるに年あゆみ妻もまた年邁されバ
何によりてかこのことあるをしらん
十九 天使こたへていひける
ハわれハガブリヱルとて神の前にたつものなり。なんぢに

かたりてこのよろこびの音をつげんために奉使されバ
二〇 その時いたらバかならず應驗べきわがことバを信ぜざる
によりて。なんぢおしとなりてこのことの成日までものいふ
ことあたはじ
二一 民ザカリアをまちゐて。その神殿のうちに
ひさしくとゞまるをあやしむ
二二 ザカリアいでゝものいふことあたハ
ざりしかバ。かれらハその聖殿のうちにて異象をみたることを
さとりたり。ザカリアひとびとに首をもてしめし。つひに瘖
となれり
二三 その職事の日みちけれバ家にかへりぬ
二四 この
後その妻エリサベツはらみてかくれをりしこと五ヶ月に
して
二五 いひけるハ。主わが恥を人のなかにすゝがせんため

に眷顧(かへりみ)たまふときかくのごとく。これはなせり○二六 この
六ヶ月(ろくげつ)はあたりガリラヤのナザレとなづけらる邑(まち)の二七 ダビデ
の家(いへ)のヨセフといへる人は所聘(えんぐみ)したる處女(をとめ)へ。神(かみ)よりガブリ
エルといふ天使(つかひ)をつかはされたり。そのをとめの名(な)はマリアと
いへり 二八 つかひこのをとめにきたりいひけるは。めでたしめぐ
まるゝものよ主(しゆ)なんぢと偕(とも)にいませ。なんぢは女(をんな)のうちにて
福(さいはひ)なるものなり 二九 處女(をとめ)そのことばを訝(いぶかり)このあいさつはいか
なることぞとおもへり 三〇 天使(つかひ)いひけるは。マリアよおそるゝ
なかれなんぢは神(かみ)よりめぐみをえたり 三一 なんぢはらみて
男子(なんし)をうまん。その名(な)を耶穌(いゑす)となづくべし 三二 かれ大(おほい)なる

ものとなりて至上者の子ととなへられん。また主なる
神その先祖ダビデ王の位をこれにあたへ給ひて 三三 ヤコブの
家をかぎりなく支配ましますべく。またその國とゞまることあら
ざるべし 三四 マリア天使にいひけるは。われいまだ夫に適ざる
にいかにしてこのことあるべきや 三五 天使こたへていひける
は聖靈なんぢに臨いとたかきものの大能なんぢをおほ
はん。このゆゑになんぢがうむところの聖なるものは神
の子ととなへらるべし 三六 それなんぢの親戚エリサベツかれ
も年おいて男子をはらめり。素はらみなきものとい
はれたりしがいますでにはらみて六ケ月になりぬ 三七 それ

神にありてハあたハざることなけれバなり 三八 マリアいひ
けるハ我ハこれ主の使女なり。なんぢのいへるごとく
我にあれかし。天使つひにさりぬ○ 三九 そのころ
マリア起て急ぎて山地なるユダのまちにゆき 四十 ザカリア
の家にいりてエリサベツにあいさつしたりしに 四一 エリサベツ
マリアのあいさつをききしかバ。その胎孕ちごのうちにて
跳動たり。エリサベツ聖霊にみたされ 四二 おほごゑに呼いひ
けるハ。女のうちにてなんぢハさいはひなるものなりまた
妊ところのものもさいはひなり 四三 わが主の母わがもとに
きたれる。これなにゝよりてかゝることを得し 四四 それなんぢ

のあいさつの聲(こゑ)わが耳(みゝ)にいりしとき。はらみ子(ご)よろこび
てわが腹内(ふくない)にをどりけり 四五 主(しゆ)のことを信(しん)ぜしものはさい
はひなり それは主(しゆ)のうけたまひしごとく。のこらず
なるべければなり 四六 マリア いひけるは。わがこゝろ主(しゆ)をあがめ
四七 わがたましひはわが救主(きうせいしゆ)なる神(でうす)をよろこぶ 四八 これその
使女(つかひめ)のいやしきをも眷顧(かへりみ)たまふがゆゑなり。いまよりのち
萬世(よろづよ)までも我(われ)をさいはひなるものととなふべし 四九 それ
權能(ちから)をもちたまへるもの我(われ)におほいなることをなせり。
その名(な)はきよく 五十 そのあはれみは世々(よゝ)かれを敬畏(おそるゝ)ものに
およびなん 五一 その臂(ひぢ)のちからをあらはして心(こゝろ)の驕(おごれ)るものの

をおろし 五二 權柄あるものを位よりおろし。卑賤ものをあげ
五三 飢たるものを美食にあかせ。富るものをむなしくかへ
らせたまふ 五四 アブラハムとその子孫をかぎりなくあはれむ
ことをおぼえたまひて 五五 その僕イスラエルを扶持たまへり。
これわれらの先祖にいひたまひしごとくなり 五六 マリア
エリサベツとをりしこと三ヶ月ばかりにておのが家にかへ
りたりき○ 五七 さてエリサベツ産期みちて男子をうめり 五八 その
隣里のものまた親戚のもの主がエリサベツにあはれみある
慈悲をたれたまひしことをきゝてともによろこべり 五九
第八日におよびけるがうまれし子に割礼せんとてきたり。

その父の名によりザカリアとなづけんとせしに 六十 その母
こたへていひけるハしからずヨハネとなづくべしといひけれ
バ 六一 かれらエリサベツにむかひていひけるハなんぢが親戚
のうちにハこの名をなづけしものなし 六二 かれらつひに
その父に頭にて示意いかゞなづけんとおもふや問たるに
六三 ザカリア寫字板を請てその名ハヨハネなりとかきしる
しゝかバ皆あやしめり 六四 ザカリアの口たゞちにひらけて
舌とけものいひて神をあがめたり 六五 その隣里にすめる
人々みなおそれぬ。またこのことをあまねくユダヤ
の山地にいひふらされしかバ 六六 きくもの みなこれを心に

とめて。この子ハいかなるものにやならんといへり。さて
主の手かれとともにありし。六七 父ザカリア聖霊にかんじられ
預言していひけるハ 六八 主なるイスラエルの神ハ讃美べきかな。
これその民を眷顧てあがなひをなし 六九 われらのために
拯救の角をそのしもべダビデの家にたてたまへるなり 七十 いにし
へより聖なる預言者の口をもていひたまひしがごとく
われらをわれらの敵またすべてわれらを惡むものゝ
手よりいだせる拯救なり 七二 これ仁惠をわれらの先祖にほど
こしそのきよき聖約をおぼえたまへるなり。これわれらの先
祖アブラハムにちかひしところの誓にして 七四 われらを敵の

手よりすくひ。われらの生涯を 七五 聖と義にありておそれなく主に服事しめんとなり 七六 をさなごよなんぢハ至上者のよげんしやとよばれん。それなんぢハ主にさきだちてゆき。その路を備んとすればなり 七七 神のふかき憐憫により。その罪をゆるされてすくはれんことを。その民にしめさんためなり 七八 そのあはれみによりて旭のひかりうへより 七九 幽暗と死蔭にをるものをてらし。われらの足をみちびきてやすらかなる路にいらせんとてのぞめり〇 八十 かくてをさなき子ハやゝ成長し精神ますく強健にしてイスラエルにあらはるゝの日まで野にをれり

第二章 そのころ天下のこせきをしらぶる詔カイザルアウグストよりいでければ 二 この戸籍しらべはクレニオスリヤををさめしときの初次にあらためられたりしなり 三 人みなみなこせきにつかんとておのおのその故邑にかへりたり 四 ヨセフもダビデの宗族また血統なればこせきにつかんとて 五 すでに孕るその所聘の妻マリアとともにガリラヤのナザレよりいでゝユダヤにのぼり ダビデのむらベツレヘムといふところにいたれり 六 こゝにありて産期みちければ 七 冢子をうみそれを布につゝみて槽に臥せたり。これ客舎にかれらのをるところなかりしゆゑなり○八 このあたりに羊を牧ものありける

か野にをりて夜間その群をまもりをりしに 九 主の天使きたりて主の榮光かれらをめぐりてらしければ牧者おほいにおそれけり 十 天使かれらにいひけるは おそるゝことなかれ我れ萬民にかゝはるおほいなるよろこびの音をなんぢらにしめすべし 十一 それ今日ダビデの邑においてなんぢらのために救主うまれたまへりこれ主なるキリストなり 十二 なんぢら布にてつゝみし嬰児の槽に臥たるをみん これその徴なり 十三 忽然おほくの天軍あらはれ天使とゝもに神を讃美ていひけるは 十四 天上ところにはえいくわう神にあれ地には平安ひとにはめぐみあれ 十五 天使たちさ

らをさりて天にゆきければ。羊をかふものらたがひにいひけ
るハ。いざベツレヘムにゆき主のしめしたまへる。そのありし
ことをみんとて 十六 いそぎいたりマリアとヨセフまた槽に
ふしたる嬰兒にたづねあへり 十七 すでに見て。この子に
つき。天使のかたられしことをつげひろめければ大きく
ものみな羊をかふもののかたれることを奇しみけり 十九 マリアハ
すべてこれらのことを心にとめておもひめぐらしぬ 二十 羊
をかふものらその見聞せしところ悉くかのつげにかたられ
しごとくなるにより神をあがめかつ讃美してかへり
○二十一 子に割礼をおこなふべき八日の日みちければ。その

いまだ胎にやどらざるさきに天のつかひの稱しごとく名
を耶穌となづけたり〇
二二
モーセの例にしたがひて潔の日みち
ければ嬰兒をたづさへて主にさゝげんためエルサレム
にのぼれり
二三
これ主のおきてにはじめよりうまるゝ男子は
主の聖物ととなふべしとしるされたるがごとし
二四
また
主のおきてに班鳩ひとつがひ或ハ雛鴿ふたつをさゝぐべし
といへるにしたがひて祭をなさんとしてなり〇
二五
さてエルサレム
にシメオンといへる人ありこのひとは義にして虔誠ありて
イスラエルの民のなぐさめられんことをまちゐたるものなり。
かつ聖靈そのうへにとゞまり
二六
まさに主のキリストをみざる

らぬかハ死なじと聖靈にてしめされき 二七 かれ聖靈に感じ
て神殿にいたり。両親その子耶穌をおきそのならはしに
したがひて行はんとちかづききたりしに 二八 シメオンをさなご
抱いだき神を讃美いひけるハ 二九 主よいまその約言にした
がひて僕を安然に世をば逝せたまふ 三〇 わが目すでに萬民
のまへに設たまひし救をみたり 三一 これ異邦人をてらさん
光なり 三二 またなんぢの民イスラエルの榮なり 三三 その父母ハ
かれにかゝはることについていはるゝことを奇をりぬ 三四 またシメオン
かれらを祝てその母マリアにいひけるハ。この嬰兒ハイス
ラエルのおほくの人の顛てまた興らんことゝいひさからひ

をとらけん。その號はさからはる三五これおほくの心のおもひの
顯露れんがためなり。また劍なんぢがこゝろをも刺透べし
〇三六アセルの支派パヌエルのむすめはアンナといへる預言者
ありけり。すでに甚としよりなり。その處女なりしとき夫に
適て七年ともにをりき三七この老女はやもめとなりて八十
四歳の嫠なりしが。神殿をはなれずして夜もひるも禁食と
祈禱をもて神につかへたり三八このときこの老女もかたはら
にたちて主を讃美し。またエルサレムにて贖をのぞめる者
にこの人はこの子のことをかたりき〇三九主のおきてを志
たがひてことごとくをはりければガリラヤのおのがむら

ナザレにかへりたり。四十その子やゝ成長して精神さとくなり
て智慧みち神の恩寵そのうへにありき○四一さてその
ふたおやは年ごとに逾越の節にエルサレムへゆきしが四二かれの
十二歳のとき。またいはひの例にしたがひエルサレムにのぼ
り四三節日をはりてかへりゆきけるに。その子耶穌はエルサレム
にとゞまりぬ。しかるにヨセフと母これをしらず四四同行人
のうちにあるならんとおもひ。一日程をゆきて親戚しるべの
うちにたづねしが四五あはざりければ。これをたづねて
エルサレムにかへり四六三日の後聖殿にてあひたるに。この時
教師のうちに坐しかつ聽かつ問ゐたり四七聞もの皆

その智慧とその應對とをあやしとせり 四八 兩親これを
みておどろき母これにいひけるハ子よ何ぞかくまでに
如此なせしや なんぢの父とわれとうれひてなんぢ
をたづねたりき 四九 耶穌これにいひけるハ。なにゆゑにわれを尋
ぬるや われハわが父の事をつとむべきをしらざるか 五〇
されど兩親ハそのいはれることをさとらざりき 五一 耶穌これと
ともにくだり。ナザレにいたりかれらにしたがひたまへり。
その母ハこれらのすべてのことをこゝろにとめぬ 五二 耶穌
ちゑもよはひもいやまさり。神と人とにますます愛せ
られたまへり

第三章 テベリオ カイザル在位の十五年 ポンテオ ピラトハユダヤの方伯となり。ヘロデハガリラヤの分封君となれりその兄弟ピリポハイツリアおよびテラコニテの地の分封君となり。ルサニアハアビレネの分封君となれり 二 アンナスとカヤパ祭司の長となりしとき。ザカリアの子ヨハネ野にありて神の命令をうけ 三 ヨルダンのほとりなるすべての地にきたり。罪の赦をえさせんがためにくいあらための「バプテスマ」を宣つたへたり 四 預言者イザヤのことばをしるせる書に野によべる人のこゑあり。いはく主の道をそなへ。そのみちすぢを直せよ 五 すべての谷はうめ

られし。すべての山崗ハたひらげられ、屈曲たるハなほく。崎嶇ハやすくせられ六人々みな神のすくひをみることを得んとあるごとし七於此「バプテスマ」をうけんとてきたれる衆にヨハネいひけるハ、あゝ蝮蛇のすゑよ。誰がなんぢらにきたらんとする怒をさくべきことをつげしや八さらバ悔改にかなへる果をむすぶべし。なんぢら心に祖にアブラハムありとおもふことなかれ。我れなんぢらにつげん。神ハ能ら此の石をアブラハムの子となしうべし九いまや斧を樹のねにおかる。ゆゑにすべて善果をむすばざる樹ハきられて火になげいれらるなり十ひとびとヨハネに

とふていひけるハさらバわれら何をなすべきや　十一　答ていひ
けるハふたつの衣服をもてるものハもたぬものにわけあ
たへよ食物をもてるものも亦志かすべし　十二　税吏も「バプ
テスマ」をうけんとてきたりいひけるハ師よわれらハなに
をなすべきや　十三　答ていひけるハ定例の税銀のほかにおほ
くとることなかれ　十四　兵卒もまたとふていひけるハわれらハ
なにをなすべきや　答ていひけるハ人を強暴しあるひハ誣
うつたへすることなかれうくるところの給料をもて足
れりとせよ　十五　民まちまうけしときなれバ衆みなこゝろ
にヨハネをキリストなるやいなやと忖度ひしに　十六　ヨハネこれ

ヨ答いひけるハ。われまさに水をもて「バプテスマ」をなんぢらに
ほどこすといへども。われよりも能力あるもののきたるらん。われハその
履帯をとくにもたらざれバ聖霊と火をもて「バプテスマ」をほどこさん
かれハかならずきたらん 十七 手にて箕をもちてその禾場をきよめ
め麦ハあつめてその蔵にいれ。殻ハきえざる火にてやく
べし 十八 ヨハネまた多端をもてすゝめをなし。福音を民に
のべつたへたり 十九 さて分封君なるヘロデその兄弟ピリポの
妻ヘロデヤの事およびおこなふところのすべての悪ことゞもを
ヨハネにいましめられけれバ 二十 なほも悪事をくはへヨハネ
を獄にいれたり 二十一 民みな「バプテスマ」をうけたるに耶穌もまた

「バプテスマをうけて いのれるとき。天ひらけ 二二 聖靈 鴿のごとき
状にて そのうへにくだりぬ また天より聲あり云 なんぢハ
わが愛子なり 喜悦ところのものなり○ 二三 時に耶穌としハ
約そ三十にして 福音を宣はじむ。ひとびとハヨセフの子とおも
はれたまへり。ヨセフの父ハヘリ 二四 その父ハマツタテ その父ハ
レビ その父ハメルキ その父ハヤンナ その父ハヨセフ 二五 その父ハ
マタテヤ その父ハアモス その父ハナオム その父ハエスリ その父ハ
ナムガイ 二六 その父ハマアツ その父ハマタテヤ その父ハセメイ その父ハ
ヨセフ その父ハユダ 二七 その父ハヨハンナ その父ハレサ その父ハゼル
バベル その父ハサラタヱル その父ハネリ 二八 その父ハメルキ その

父ハアツデ その父ハコサム その父ハヱルマダム その父ハヱル
二九 その父ハヨセ その父ハヱリヱセル その父ハヨホレム その父
ハマツタテ その父ハレビ 三十 その父ハシメオン その父ハユダ その
父ハヨセフ その父ハヨナン その父ハヱリアキム 三一 その父ハメレア
その父ハマイナン その父ハマタツタ その父ハナタン その父ハ
ダビデ 三二 その父ハヱツサイ その父ハオベテ その父ハボアス その
父ハサルモン その父ハナアソン 三三 その父ハアミナダブ その父ハアラムそ
の父ハヱスロン その父ハパレス その父ハユダ 三四 その父ハヤコブ その父
ハイサク その父ハアブラハム その父ハテラ その父ハナコル 三五 その父
ハサルク その父ハラガウ その父ハパレク その父ハヘベル その父ハサラ

三六 その父ハカイナンその父ハアバザデその父ハゼムその父ハノア
その父ハラメク 三七 その父ハマトサラその父ハエノクその父ハヤレド
その父ハマレレエルその父ハカイナンその父ハエノスその父ハセツ
その父ハアダム。アダムハまことに神の子なり

第四章 さて耶蘇せいれいにみちみちてヨルダンよりかへり。
霊にみちびかれ野にゆきて 二 四十日悪魔にこゝろみらる。
この諸日なにをもくらはざりき四十日をはりてのち饑たり。 三 悪魔かれにいひけるハなんぢもし神のこならば
この石に命じて餅とならせよ 四 耶蘇こたへけるハ人ハ餅
のみにて生るものにあらず。たゞ神のすべての言に

ようと録されたり。五 悪魔またこれをたづさへ山につれゆき。一瞬間に天下の萬國をしめしければ。六 いひけるハこのすべての權威と榮華をなんぢにあたへん。それハわれにまかされたれバわが所欲ものにこれをあたふべし。七 ゆゑにもしわがまへに拜跪ばことごとくなんぢの屬とならん。八 耶穌こたへけるハ。サタンよわがうしろにしりぞけ。かゞ主なるなんぢの神にひれふしこれにのみつかふべしとしるされたり。九 悪魔また耶穌をエルサレムにつれゆき聖殿のいたゞきにたゝせいひけるハ。なんぢもし神の子ならバこゝよりおのが身をなげよ。十 それ神その使者に

ちに命じてなんぢをまもらせん十一なんぢが足の石にふれざらんやうかれら手にてさゝふべしとしるされたる十二耶穌こたへけるは。主なるなんぢの神をこゝろむべからずといひあけり十三惡魔この誘試ことごとくをはりてしばらくかれをさりけるまでしばらくさりぬ十四耶穌せいれいの能をもてガリラヤにかへりしかばその聲名あまねくまはりの地にひろがりぬ十五このくにてかれらが會堂にてをしへをなし衆人にあがめられたまへり○十六その長育しところなるナザレにきたり。常例のごとく安息日に會堂にいりて聖書をよまんとてたちければ十七預言者イサヤの書をあたへしかば。耶穌

その書をひらきてこのごとく録れたるところを見いだせり
十八 主の靈われにいませり。貧きものに福音をつたへんことをわれにそゝぎて任じ。心の傷たるものを醫し。また囚人にゆるさんことを瞽者に見させんことを示し。また壓制らるゝものをはなち
十九 主の禧年を宣ひろめんがためにわれをつかはせり。
二十 耶穌書をまき。その役者にわたして坐しければ會堂にあるものみな目をとめて視たり
二十一 耶穌かれらにいひけるはこの録されたることは今日なんぢらのまへに應驗り
二十二 衆かれを稱讚その口よりいづるところの恩惠のことばをあや

しみいひけるハ。これヨセフの子にあらずや 二三 耶穌かれらにいひけるハ。なんぢらかならずわれに諺をひきて。醫者みづからをいやせ。われらきゝしところのカペナウムにて行しことを自己の家郷なるこゝの土にもなすべしといはん。二四 又いひけるハ。われまことになんぢらにつげん。預言者そのふるさとにてハ敬重るゝものにあらず 二五 われまことをもてなんぢらにつげん。エリヤのとき三年と六ケ月天とぢて徧地おほいなる饑饉なりし。その時イスラエルのうちにおほくの嫠ありしかど 二六 エリヤハその一人へだにつかはされずして只シドンなるサレパタのひとりの

嫠につかはされたり 二七 また預言者エリヤのときにはイスラエルのうちにあまたの癩者ありしかどそのひとりだには潔られず。たゞスリヤのナーマンのみきよめられたり 二八 會堂にありしものこれをきゝてみなみないきどほり 二九 起て耶穌を邑のそとにいだし。なげおとさんとてその邑のたてる山のがけまでひきゆけり 三十 しかるに耶穌かれらの中をとほりてさりぬ 三一 ガリラヤのカペナウムといへるまちにいたりて安息日ごとに衆ををしへしに 三二 そのことむ權威ありければひとびとそのをしへにおどろけり○ 三三 會堂に汚たる鬼の靈にとりつかれたる人ありおほごゑにさけ

ひていひけるハ
三四 あゝナザレの耶蘇よ われらハなんぢとなんの與あらんや。なんぢきたりてわれらをほろぼさん。われハなんぢの誰なるをしる。すなはち神の聖なるものなり
三五 耶蘇これを責ていひけるハ。聲をいだすことなかれ。[illegible]を出よ。惡鬼つゐにその人をひとびとのなかにたふし傷ずしていづ
三六 衆みなおどろきたがひにかたりいひけるハ。權威と能力をもちてけがれたる鬼に命ずれバ出さ[illegible]り。是いかなる道ぞや
三七 こゝに耶蘇のきこえ遍このあたりの地にひろがりぬ○
三八 耶蘇會堂をいでゝシモンの家にいりしにシモンの妻母あつき熱病をわづらひゐたりき
三九 ひとびとこれがため

は耶蘇はねがひければ。そのかたはらにたちて熱をせめしかば熱去りぞけり。婦ただちに起てかれらに供事へり
四十 日のいるときさまざまの病をわづらひたるものをもてる人々みなそれを耶蘇につれきたりければ。一々そのうへに手をおきていやせり
四一 悪鬼もまたおほくの人々をいでさりさけびてなんぢは神の子キリストなりといへり。しかるにこれを斥てものいふことをゆるさざりき。悪鬼そのキリストなるを志れるなり
四二 あくるあさ耶蘇いでて人なきところにゆきけるに。衆人たづねきたりてその離去ことをはばむ
四三 耶蘇いひけるは。われまたほかのむらむらへゆき

神の國の福音をのべつたへざるを得ず。そハこれがた
めに奉使されたればなり 四四 かくてガリラヤの諸會堂にて道を
のべつたへたり

第五章

ひとゞく神のことばをきかんとて擠擁けるとき耶穌
ゲネサレの湖のほとりに立て 二 ゐそに二艘のふねあるを
見し漁者のおのゝ舟をはなれて網をあらひをりし 三 その
一艘ハシモンの舟なりしが耶穌これにのり。請て岸より
すこしくこぎはなさせたまひ。坐して舟中よりひとゞくををしふ 四
教をおハりてシモンにいひけるハ澳へいでゝあみを下してすな
どれ 五 シモンこたへけるハ師よわれら終夜ほねをりしかど

所得なかりき。されどなんぢの言にしたがひて網をおろさん 六 既にかくして魚を圍ることはなはだ多く網さけかゝりけれバ 七 いま一艘なるふねの侶をまねきて來らしめしに。かれらきたりしとき。その魚を二艘のふねに滿てしづまんばかりなりし 八 シモン ペテロこれを見て耶蘇の足下にふして。主よわれを離たまへ。我は罪人なりといへり 九 是シモンおよび偕にありしもの悉くすなどりしところの魚の夥しきにおどろけるなり 十 シモンの侶なるゼベダイの子ヤコブとヨハネもまた然り。耶蘇シモンにいひけるハ。おそるゝなかれなんぢいまより人を獲べし 十一 かれら舟

を岸によせおき一切をすて耶蘇にしたがへり○十二耶蘇
ある邑にをりしとき身ことごとく癩病をやめるものあり。
耶蘇をみてひれふしねがひいひけるは。主もし聖旨にかなふ
ときはわれをきよくなし得べし十三耶蘇手をのべかれに按
て。われこゝろにかなへり潔なれといひければ。たゞちに癩病
いゆ。十四耶蘇かれを戒ていひけるは人につぐることなか
れ。たゞ往ておのれを祭司にみせ。かつきよめられしため
にモーセが命ぜしごとく獻物をなし。證據をかれらに
せよ。十五されど耶蘇の聲名ますますひろがりて群衆ある
ひは教をきかんとし。あるひは病をいやされんとてあつま

まゐりきたれり十六耶穌つねに人なきところにしりぞきて祈禱したまひき○十七あるひ耶穌をしへをなせるときパリサイのひとゝ教法師ガリラヤの諸郷ユダヤエルサレムよりきたりてこゝに坐しぬ。このとき病をいやすべき主の能あらはれたり十八あるひと癱瘓をやめるものを牀にのせてきたり。これを家にいれ耶穌のまへにおかんとおもへども十九群集にて舁いるべきみちなかりけれバ屋上にのぼり瓦をとりのけて。その人をねだいのまゝ衆人のなかへ縋おろしぬ。耶穌のまへにおけり二十耶穌その信あるをみてやまひのものに。人よなんぢの罪ゆるさるといひければ二十一學者と

パリサイのひとぐ心におもひいひけるハこの褻瀆ことばを
いふものハ誰ぞ。神よりほかにたれか罪をゆるすことを得
ん 二二 耶穌そのおもひをしりて答いひけるハ。なんぢ
らこゝろのうちに論ずるや 二三 なんぢの罪ゆるさるゝといふ
と起てあゆめといふと いづれかやすき 二四 それ人の子地にて
罪をゆるすその權威あることをなんぢらにしらせんとて、つ
ひに癱瘓の人に。われなんぢにいふ。起てねどこをとり家に
かへれといひければ 二五 そのひと衆のまへにてたゞちに
おきてその臥たるねどこをとり。神を稱讚ておのがいへに
かへりぬ 二六 衆みなおどろきて 神をあがめかつおそれていは

畏懼ていひけるハ今日ふしぎなることを見たりと
○二十 このゝち耶穌いでゝレビといへる税吏の税関に坐しあけるをみて我にしたがへといひければ 二八 レビ一切をさしおき起てしたがへり 二九 レビおのれの家にて耶穌のために豐盛なる筵をまうけしに。税吏また他のひとゞもともに筵につき坐したるものあつまりけるが 三十 そのところの學者とパリサイのひと耶穌の門徒につぶやきいひけるハ。なんぢらみつぎとり並つみある人々とともに飲食をするハなにゆゑぞ 三一 耶穌こたへていひけるハ。康強なるものハ醫者のたすけをもとめず。たゞ病あるもののこれをもとむ 三二 我ハ義き

人をまねくためならず。たゞ罪ある人を悔改させんが
ためなり 三三 彼ら耶蘇にいひけるは。ヨハネの徒はしばしば
禁食また祈禱をなす。パリサイの徒もまた然り。しかる
になんぢの門徒のむことくらふことをなせるは何ゆゑぞ
三四 耶蘇いひけるは。新郎の友その新郎と一處にをる
うちはこれに禁食なさしむることを得んや 三五 のち新郎
とらるゝ日いたらん。その日にはかならず禁食すべきなり 三六 譬
をもていひけるは。新衣をきりとりて舊衣につくろふもの
あらじ。もししからば新衣をもそこなひかつあたらし
きよりとりたる布はふるきものとあはざるべし 三七 又あたらしき

酒をふるき革袋にいるゝものあらじ。もししからば。あたらしき酒はそのふくろを裂きもれいでゝ且つふくろもそこなはるべし 三八 あたらしき酒はあたらしきふくろにいるべきものなり。かくて両ながら存るなり 三九 ふるき酒をのみたる人立刻にあたらしきさけを欲ものはあらじ。これふるきをもつとも好といへばなり

第六章 逾越節の二日此のちすぎしめのあんそくにち耶蘇むぎのはたけをとほりしに。そのでし麦の穂をつみこれを手にてもみくらひしかば。あるパリサイの人々らにいひけるは。なんぢら安息日にはせまじきことをなすか

何ゆゑぞ 三 耶穌こたへていひけるは。ダビデおよび從者あり
しがうゑしときなしたるところをいまだ讀ざるか 四
すなはち神の殿にいり。ただ祭司のほかはくらふまじき
供物の餅をとりてくらひ且ともにありしものにもあた
へたり。五 またいひけるは人の子は安息日にも主たるなり
○六 またほかのあんそくにちに耶穌會堂にいりてをしへし
ここに右の手なへたる人ありけるが 七 學者とパリサイの
ひとびと。耶穌これを安息日にいやすやうかがひねらひ。そは
これをうつたへんとおもへばなり 八 耶穌そのこころをさとりて
手なへたる人にむかひて中にたてよといひければ。そのひと

起てたてり。九 耶穌いひけるハ。われなんぢらにとはん。安息日
に善をなすと悪をなすと。また生をすくふと殺といづれ
がよろしかるべき 十 つひにひとびとをみまはして。その人に手をのべよ
といひければ。かれそのごとくせしに。手はたちまち愈てほか
の手のごとくなりぬ 十一 かれらがあまりに怒ていかに耶穌をなさ
んとかたらひよりあへり○十二 そのころ耶穌いのりのため
に山にゆきてよもすがら神にいのり 十三 夜あけて耶穌
でしをよび。そのうちより十二人をえらみてこれを使徒
となづく 十四 即ちペテロとなづけたまひしシモンその兄弟
アンデレ。およびヤコブとヨハネ。ピリポとバルトロマイ 十五 マタイ

とトーマ　アルパイの子なるヤコブとゼロデといへるシモン
十六ヤコブの兄弟のユダとイスカリオテのユダなり。この
ユダは耶蘇をつきわたせるものなり　十七耶蘇かれらと
ともにくだりてたひらかなる地にたちしに。あまたの門徒
とおびたゞしき人々　ユダヤの四方およびエルサレムおよび
ツロ　シドンの海邊よりきたりあつまりて或はその教をき
かんとし。あるひは病をいやされんことをねがへり　十八また
悪鬼になやまされたるものありてことごとくいやされたり
十九衆みな耶蘇にさはらんとせり　これ能力のその身より
いでゝかれらをことごとく醫せるなり　○二十耶蘇目をあ

げ門徒をみていひけるは。なんぢら貧者はさいはひなり。神の國はすなはちなんぢらのものなればなり 二一 なんぢらいま饑るものはさいはひなり。飽ことを得べければなり。なんぢらいま哭ものはさいはひなり。なんぢらわらふことをうべければなり 二二 人の子のために人なんぢらをにくみ。またしりぞけ詈なんぢらの名を悪としてすてなばなんぢら福なり 二三 その日にはよろこびおどれ。なんぢら天におい て賞賜おほいなればなり。その祖が預言者になしたり しかりといへども 二四 なんぢら富ものはわざはひなるかな。すでに安樂をうけたればなり 二五 なんぢら飽ものはわざはひ

なるかな饑(うゑ)んとすればなり。なんぢら今(いま)わらふものはわざはひなるかな哀(かなしみ)なかんとすればなり 二六 すべての人(ひと)なんぢらをほめなばなんぢらわざはひなるかな。その祖(せんぞ)がいつはりの預言者(よげんしや)になしたりしもかくのごとし 二七 されど聴(きく)ところのなんぢらにつげん。その仇(あだ)を愛(あい)し。なんぢらをにくむものを善(よく)し 二八 詛(のろふ)ものを祝(しゆく)し虐遇(なやむる)もののために祈禱(きたう)せよ 二九 なんぢの頰(ほゝ)の右方(みぎ)をうたばまた左方(ひだり)のほゝをもむけよ。なんぢの外服(うはぎ)をとらばしたぎをも禁(こばま)ざれ 三十 すべてなんぢに求(もとむ)ればこれにあたへ。なんぢの物(もの)をとらばそれをまた索(もとむ)るなかれ 三一 なんぢら人(ひと)にせられんとおもふごとくまた人(ひと)にも

そのごとくせよ 三二 おのれを愛するものをあいするとてなにの
賞賜あらんや。悪人にてもおのれを愛するものはあいする
なり 三三 おのれに善をなすものに善をなすとてなにの
むくいあらんや。悪人もまたかくのごとく行なり 三四 なんぢ
ら償ふることを得んとおもふ人に借すとてなにのむくいあら
んや。悪人もそのごとく償をえんとてまた悪人にかす
なり 三五 なんぢら仇を愛し。また善をなし何をものぞま
ずして借あたへよ。さらばその賞賜はおほいなり。かつ
至上者の子となるらん。それ至上ものは恩をしらざるもの
および不善者にまで慈愛をほどこしたまへばなり 三六 このゆゑ

まなんぢらの父のあはれみのごとくまた憐憫をなすべ
し 三七 人を議ことなかれ。さらばなんぢらもさばかれず。人を
つみすることなかれ。さらばなんぢらも罪せられず。ひと
をゆるせ、さらばなんぢらもゆるさるべし 三八 人にあたへよ。
さらばなんぢらも予らるべし。つまり量をよくおし
いれ撼りいれあふるゝまでにしてなんぢらの懷にいれん。
なんぢらはかるところのその量にてまた人にはからるべ
し 三九 また譬をもてかれらにいひけるは瞽目はめしひの手
びきをなし得るや。あひともに溝壑におちいらざらん
や 四十 でしはその師にまさらず。あれもまた全備なるものは

その師のごとくなるべし 四一 なんぢ兄弟の目にあるちりをみて
わが身の目にある梁木をさとらざるはなんぞや 四二 いかでわが
身の目にあるうつばりをみずして兄弟にむかひ。兄弟よ
なんぢの目にある物屑をとれはとらせんといふことを得
んや。偽善者よまづわが身の目より梁木をとれ。さらば
兄弟の目にあるちりをとることあきらかにみゆべし 四三 それ
悪果をむすぶ善樹にあらず。またよき果を結ぶ悪しき
樹にあらざるなり 四四 すべてその樹はその果によりてしらる。荊棘より
無花果をとらず。また蒺藜より葡萄をとらず 四五 善人は
こころのよきくらより善をいだし。悪人はその悪庫よりあ

しきをいふなり。それ心にみつるより口にいふものなり 四六 なんぢ
らわがいふことをおこなはずして何ぞわれを主よ主よと
よぶや 四七 すべてわれに就わがことばをきゝて行ものを
たとへをもてなんぢらにしめさん 四八 その人は家をたつるに土を
ふかくほりていしずゑを盤上におけるがごとし。洪水のとき
横流その家を衝ともうごかすことあたはず。これ基礎
をいはほのうへにおけばなり 四九 聴ておこなはざるものはいし
ずゑなく家を土のうへにたつる人のごとし ながれこれを
うつときはその家たゞちにたふれ。その頽壊はなはだなる
べし

第七章 耶穌このすべての言を民にきかしをはりてカペナウムにいりしに 二 ある百夫の長その愛する僕やみてしぬばかりなりければ 三 耶穌のことをききてユダヤの長老どもをさしつかはしてきたらし僕をすくひたまはんことをねがへり。四 かれら耶穌に就しきりにすゝめいひけるは。このことを求るひとはよきひとなれば 五 わが民を愛しわれらのために會堂を建たり 六 耶穌かれらとともにゆきてその家にちかづけるとき。百夫のかしら友だちをつかはしていはせけるは。主よみづからを勞動ことなかれ。わが家裏にいれまつるはおそれおほし 七 故にわれ進なんぢの前にいづるも

まうしあぐれあり。ただ一言をいだしたまへ我がしもべは愈ん。そは我れ人の權威のしたに屬るものなるに我が下にまた兵卒ありてこれにゆけといへばゆき。かれにきたれといへばきたる。我が僕にこれをなせといへばすなはち行ふがゆゑなり 九 耶穌きゝてこれを奇しくおもひ從がへる人々をふりかへりみていひけるは。われなんぢらにつげん、イスラエルの中にてもいまだかゝる篤信にあはざりき 十 つかはされたるものの家にかへりて病たりし僕をみるにすでに全快をなせり○ 十一 翌日耶穌ナインといへる邑にゆきけるに。あまたの門徒および群衆もともにゆけり 十二 邑の門にちかづき

しときゝ舁(かき)いださるゝ死人(しにん)あり。その母(はゝ)は寡(やもめ)にてこれはひとりの子(こ)なり。邑(まち)のひとびとあまたこれにともなふ。十三 主(しゅ)やもめをみてあはれみ。哭(なく)なかれといひて 十四 ちかより。その櫬(ひつぎ)に手(て)をつけゝれば。舁(かくる)ものとゞまれり。耶穌(いゑす)いひけるは。少者(わかうどの)よわれなんぢにいふ。おきよ 十五 死(しに)たるもの起(おき)てうつものいひそむ。耶穌(いゑす)これをその母(はゝ)にわたせり 十六 ひとびとみなおそれて神(かみ)をあがめいひけるは。大(おほい)なる預言者(よげんしゃ)われらのうちに興(おこ)る。神(かみ)その民(たみ)をかへりみたまへり 十七 耶穌(いゑす)のこのことばユダヤの國中(くにぢゅう)またあまねく四方(よも)にひろがりぬ○十八 ヨハネの門徒(でし)ことごとくこれらのことを彼(かれ)につげゝ

まうせ 十九 ヨハネ二人のでしをよびていひつかはしけるハ。来るべきものハなんぢなるか。まさにわれら他をまつべきか 二十 そのふたり耶蘇にきたりいひけるハ。「バプテスマ」のヨハネわれらをなんぢにつかはしていはしむ。きたるべきものハなんぢなるかまさにわれら他をまつべきか 廿一 このとき耶蘇おほくの病あるひとなやみ。および悪鬼にとりつかれたるものをいやし。まさにおほくの瞽にみゆることをあたへたり 廿二 耶蘇かれらにこたへいひけるハ。なんぢらが見るところ聞ところをヨハネにゆきてつげよ。それめしひハ見。あしなへハあゆみ。癩者ハきよめられ。聾者ハきゝ。

死しものハいきかへされ。まづしきものハ福音をきかせらる
二三 およそわがためにつまづかざるものハさいはひなり 二四
ヨハネの使者さりしのち。耶穌ヨハネのことをひと〴〵に
いひけるハ。何をみんとて野にいでしや。風にうごかさるゝ
葦なるか 二五 さらバなにをみんとていでしや。
やはらかきころもをきたる人なるか。文繍をきておごれる
ものハ王の宮にあり 二六 さらバなにをみんとて出しや。
預言者なるか。然われなんぢらにつげん。これ預言者よ
りもすぐれたるものなり 二七 それなんぢにさきだちて
道をそなふるわが使者をなんぢのまへにつかはさんと録

これといふハ まさしくこれなり 二八 われなんぢらにつげん
婦のうめるもののうちにいまだ「バプテスマ」のヨハネより
おほいなる預言者ハなし。されども神の國のちいさきもの
もこのものよりハ大なるなり 二九 ヨハネにきける庶民まで税吏
ハその「バプテスマ」をうけて神を義とせり 三十 パリサイの人まで
教法師をその「バプテスマ」をうけずみづから暴て神の旨に
そむきたり 三一 さてまたこの世代のひと〴〵をなになぞらへ
まさ何にかならべんや 三二 わらべ市に坐しおたがひによびてわれ
ら笛ふけどもなんぢらおどらず。悲歌をうたへどもなんぢ
ら哭ずといふにおなじ 三三 それ「バプテスマ」のヨハネきたりて餅を

もくらはず酒をものまざれば悪鬼はとりつかれたるものなりと汝らいへり三四人の子きたりてくらふこともし飲こともすれば大食をこのみ酒をこのむの人みつぎとり罪人の友なりと汝らいへり三五されど智慧はそのもろの子に義とせらるる○三六あるパリサイのひと耶蘇を請てともに食せんことをねがひければ耶蘇パリサイの人の家にいりて食につけり三七邑のうちに悪行をなせる婦ありけるが耶蘇がパリサイのひとの家に坐するをしりて臘石の盒ににほひあぶらをもちきたり三八耶蘇のうしろに立あしもとに哭き涙にてそのあしをうるほし首の髪をもてこれを

ぬぐひ。かつその足に口をつけ。また香膏をこれにぬりまつり
三九 耶穌をまねきたるパリサイのひとこれをみて心のうち
にいひけるハ。この人もし預言者ならバさはりしものゝ
誰なるか。またいかなる婦なるかをさとらん。この婦ハ悪行
をなせるものなり 四十 耶穌これにこたへていひけれバ。シモン
われなんぢにいふことあり。こたへけるハ。師よいひたまへ 四一
耶穌いひけるハ。ある債主にふたりの負債人ありて。ひとりハ
金五百ひとりハ五十をかりしに 四二 償のくなかりけれバ。この
ぬしこれ二人をゆるしてけり。さらバ二人のうちたれかこのし
ぬしを愛することいづまさるべき。我にきかせよ 四三 シモン

こゝろへけるハ、つミれおのかにゆるさるゝことのおゝきかゆへなり。

邪蘇(いゑそ)いひけるハ。なんぢがおもふところ、たがハざるなり四四 つゐに
婦(をんな)をかへり見(み)てシモンにいひけるハ、このをんなをみるか。われ
なんぢの家(いへ)に入(いる)になんぢハわが足(あし)に水(みづ)をあたへず。このをんなハ
泪(なみだ)にてわがあしをぬらしかしらの髪(かみ)をもてぬぐへり四五 なん
ぢハいつわれに口(くち)をつけず。このをんなハわがこゝに入(いり)しときよりつねにわが
足(あし)に口(くち)をつけてやまず四六 なんぢハわが首(かしら)にあぶらをぬらず。こ
のをんなハわがあしに香膏(にほひあぶら)をぬれり四七 このゆゑにわれなんぢに
いはん、このをんなのおほくの罪(つミ)ハゆるされたり。これによりてその
愛(あい)もまたおほきなり。赦(ゆる)さるゝことすくなきものハその愛(あい)も

まさきらなし 四八 於是そのをんなにいひけるハ。なんぢの罪
ゆるされたり 四九 ともに坐せるものども心のうちにいひけるハこの
人ハこれ何人なれバ罪をもゆるすぞ 五十 耶穌をんなにいひけ
るハ。なんぢの信なんぢをすくへり安然にしてゆけ

第八章

一 こののち耶穌諸邑諸村をへめぐりて神のくにの
福音をのべつたふ。十二の門徒もともにしたがひぬ 二
まへに悪鬼をさられひとりしもの。病をいやされたるをんな
などもしたがひけり。すなはち七の悪鬼をおひいだしたまへる
マグダラといふマリア 三 またヘロデの家宰クーザの妻
ヨハンナ。またスザンナ。このほかあまたの婦ありてみなその

所有まちの人耶穌につどひきたりき○四おほくのひとびと諸邑よりいでゝ耶穌のもとにあつまりければ。譬をもていへり五種まくものたねをまかんとていでぬ。播るとき路旁におちしは種あり。ふみつけられまたそらの鳥これをくらへり六また石上におちしたねあり。生いでゝ槁たり。これ潤なかりしゆゑなり七また棘の中におちし種あり。いばらもともにそだちてこれを蔽り八また沃壌におちしたねあり。生いでゝ實をむすべること百倍せり。是をいひをはりてよばはりけるは。耳ありてきくものはきくべし九その門徒とふていひけるは。これいかなるたとへぞ十こて

つけたれ。神のくにの奥義をなんぢらは知ことをたまへ
ど。他のものにはたとへをもてす。これは視てもみえず聽
てもさとらざるためなり 十一 それこのたとへは種はすなはち
神の道なり 十二 みちのほとりにおちしはきゝしのち悪魔
のきたりてそのこゝろより道をとりさるものなり。かれは人の
信じてすくはれんことを恐る 十三 いはのうへにおちしは
きくときよろこびてことばをうくれども根なければ
信ずることしばしのみ。こゝろみにあふときはしりぞきて道をそ
むくものなり 十四 いばらのなかにおちしはきゝて往この
世の諸慮とたからと宴樂とにおほはれてみのらざる

ものなり十五よき地にあるハあつしん正く善こゝろにてことば
をきゝてこれをまもり忍て實をむすぶものなり○十六燈を
ともし器にてこれをおほひ。あるひハ床下におくもの
なし。入きたるものゝその光をみんために臺のうへにお
くべし十七隠てあらはれざるものなく。藏てあらはにしられずあ
らはれいでざるものなし十八この故になんぢら聽ことを
をつゝしめ。有者はなほあたへらる。無有者ハそのもちたりと思
ところのものもとらるべし○十九このとき耶蘇の
母と兄弟きたりけれど群集によりてちかづくことあたはず
ざりしかバ二十あるひとこれを耶蘇につげていひけるハなんぢ

ぢが母と兄弟なんぢにあはんとて外にたてり 二一 耶穌こたへ
ていひけるハ。神のことばをきゝてこれを行ものハすなは
ちわが母わが兄弟なり○ 二二 ある日耶穌でしたちと舟に
のりて。われら湖のむかふへわたるべしといひければ。ふ
ねをいだせり 二三 ふねのはしるとき耶穌いねたり。
颶風みづうみにふきおろし舟に水みちんとして危かり
しかば 二四 門徒きたりて耶穌をさましいひけるハ。師よ師よ
われらほろびなんとすと。耶穌おきて風と浪とをいましめ
ければ。止てなぎやかになりぬ 二五 耶穌いひけるハ。なんぢら
の信いづこにあるや。かれらおどろき且あやしみてたがひ

はいひけるは。これ何人なるぞや。かぜとみづとに命ぜし
かれもまたしたがへり。二六 かくてガリラヤにむかへるガダラ人
の地につきて 二七 きしにあがりしとき。あるひとり邑より
いでゝ耶穌にあふ。このものひさしく悪鬼にとりつかれ。
衣をきず家にもすまず。たゞ塚にのみをりき 二八 耶穌を見
てさけび。その前にひれふしおほ聲にてよばはりいひけるは。
至高神の子耶穌よ。われなんぢとなんの與あらんや。なん
ぢに求むわれをくるしむることなかれ 二九 これ悪鬼に人より
いでよと耶穌が命じたまふによりてなり。かれのとりつかれ
しことひさし。鏈にて桎梏にてしばりまもられ

どもり　そましをとうちくだき悪鬼(あくき)のために野(の)におはれぬ　三十
耶蘇(いえそ)これに問(とふ)ていひけるは。なんぢが名(な)はなにといふや。こたへ
けるに。レギヨン。これおほくの悪鬼(あくき)の入(いり)たるが故なり
三一　悪鬼(あくき)耶蘇(いえそ)にねがひけるは。命(めい)じて底(そこ)なきところにゆかし
むるなかれ　三二　こゝにおほくの豕(ぶた)のむれ山(やま)に草(くさ)をくひゐたり
しが。かれらその豕(ぶた)にいらんことをゆるせと求(もとめ)ければ。これを
ゆるせり　三三　悪鬼(あくき)その人(ひと)よりいでゝ豕(ぶた)にいりしかば。その群(むれ)は
げしくかけくだり。山坡(がけ)より湖(みづうみ)におちておぼる　三四　牧者(ぼくしや)
どもそのありしことをみてにげゆき。これを邑(まち)またむら
につげたり　三五　衆(ひとびと)そのありしことを見(み)んとていでゝ耶蘇(いえそ)のもと

とにきたりまへば。悪鬼のはなれし人きものを著てしづかなる心にて耶蘇のあしもとに坐せるをみておそれあへり 三六 悪鬼にとりつかれたりし人のすくはれしさまを見たるもの。其をかたりければ 三七 ガダラ四方のおほくのひとびと耶蘇にこゝをさらんことをねがへり。これおほいにおそれしがゆゑなり。耶蘇舟にのりてかへりぬ 三八 悪鬼のはなれたる人。耶蘇とともにをらんことを求けるに。耶蘇これをさらしめて 三九 家にかへり神のなんぢに行しおほいなることゞもを人につげよといひければ。遂にさりて耶蘇のおのれになしゝまひし大なることを遍邑につたへたり〇 四十 耶蘇かへりたまへる

ときに衆みなまちゐてこれをよろこびむかふ 四一 ヤイロといへる人ありて會堂のつかさなり。年およそ十二歳なるひとりの女ありて死ぬるばかりなりけれバ。きたりて耶蘇のあしもとにふして我が家にきたりたまはんことをねがへり。耶蘇のゆくときに衆これにおしあへり 四三 婦あり十二年血漏をわづらひて醫者のためにその業をことごとくついやしけれど。たれにもいやされ得ざりしが 四四 耶蘇のうしろにきたりて。そのころもの裾にさはりけれバたゞちに血のいづることとまりぬ 四五 耶蘇いひけるハ。我にさはりたるものハたれぞや。衆ハみなこゝにさはれるものなしといへり。ペテロおよび偕

にあるものどもいひけるハ。師よひとびとなんぢにおしあひ
せまるに我にさはるものハたれぞといひたまふか 四十六 耶蘇いひ
けるハ。われにさはれるものあり。能力のわが身よりいづるを
おぼえたればなり 四十七 その婦みづからかくせぬを知り。戰慄きつゝ
きたりてまへにふし。さはりしゆゑとそのたゞちに愈ることを
ひとびとのまへにつぐ 四十八 耶蘇いひけるハ。女よ心やすかれなんぢ
の信なんぢをすくへり。安然にしてゆけ 四十九 かくいへるときに
會堂のつかさの家より人きたりて宰にいひけるハ。なんぢが
むすめもはや死にたり師をわづらはすなかれ 五十 耶蘇これをきゝ
こたへてつかさにいひけるハ。おそるゝなかれ。たゞ信ぜよむす

めハいゆべし 五一 耶穌家にいるにペテロ ヤコブ ヨハネ およびむすめの父母のほかたれをもともに入ることをゆるさゞりき 五二 衆みな女のためになきかなしみしが。耶穌いひけるハ。哭なかれ死たるにあらず寝たるのみ 五三 かれらその死たるをしれば これをあざわらへり 五四 耶穌ひと〴〵をみないだして むすめの手をとり。むすめ起よとよびいひければ 五五 その魂かへりて たゞちにおきたり。耶穌命じて食をあたへしむ 五六 父母いたくおどろきぬ。耶穌これの行しことを人につぐることをいましめたり

第九章

耶穌十二のでしをよびあつめ。すべての悪鬼をいだし

病をいやせる能力と權威をさづけたまひ二また神の國をつたへ
病者をいやさせんために三かれらを遣さんとしていひける
へ。路資になにをもとらざれ。杖またたびぶくろ。くひもの。金
ふたつの衣をももつことなかれ四いづれの家にいるともそこ
にとゞまりて、またそこよりされ五なんぢらを不接ものあら
ば、その邑をいづるときかれらに證のため足より塵をはらへ
六門徒いでゝあまねく諸郷にゆきゝ福音をつたへ。かつやまひを
いやせり○七まけりのちの君ヘロデ耶穌のなせし諸事をきゝて
まどへり。ある人々これをヨハネの復活るなりといひ八ある
ひとびとはエリアの現るゝなりといひ、またあるひとびとはいにしへ

の預言者の一人よみがへれるなりといへばなり九ヘロデいひ
けるはわれヨハネの首をきれり。如是ことのきこゆるもの
ハ誰なるぞ。ヘロデこれをみんとおもへり○十使徒たちかへ
りきたりてその所行しことを耶蘇につぐ。耶蘇かれら
をともなひて潛にベツサイダといへる邑のひとりなる野に
しりぞきしに十一ひとびとしりて随ひければこれを接て神の
國のことをかたり。また醫をもとむるものをいやせり○十二日か
たふくときに十二の弟子きたりて耶蘇にいひけるはこゝは野
なれば衆人をさらせ。四圍のむらざとへゆきて宿をとり
食をえることをさせたまへ十三耶蘇いひけるはなんぢらこれ

に食をあたへよ。こたへけるハ。われらたゞ五の餅と二のうをを
あるのミこの おほくの人のためにゆきて買にあらざれバ
われらに食物ハなし 十四 こゝにをりし男おほよそ五千人なりき。
耶穌でしにいひけるハ。ひとびとを五十人づゝならべ坐せしめよ。
十五 門徒そのごとくなしてかれらをみな坐せしめたり 十六
耶穌いつゝの餅とふたつのうををとり。天をあふぎ祝して
これをわり。門徒にあたへてひとびとのまへにおかしむ 十七 皆
くひあきて餘のくづを十二の筐にひろひへり ○ 十八 耶穌ひとびと
のさらざりしとき祈禱しをりしが門徒もともにをりき。
耶穌これにとひていひけるハ。衆ハわれをいひて誰とする

ら
十九
こたへていひけるは「バプテスマ」のヨハネあるひはエリアあるひ
はいにしへの預言者のひとりのよみがへれるなりと
二十
耶蘇
いひければ。なんぢらはわれをたれとするや。ペテロこ
たへけるは。神のキリストなり
二十一
耶蘇きびしくいましめて
このことを何人にもつぐるなかれと命じ
二十二
またいひ
けるは人子かならずおほくのくるしみをうけて長老
祭司のをさ學者どもにすてられ。かつころされ第三日に
よみがへるべし
二十三
また耶蘇ひとびとにいひけるは。もし我にしたが
はんとおもふものは己にうちかち日々その十字架をおひて
われにしたがへ
二十四
その生命をまつたうせんとするものはこ

れをうしなひ。わがためにいのちをうしなふものはこれを保全(ほうぜん)すべし 二五 人(ひと)もし全世界(ぜんせかい)を利(り)するとも自己(じぶん)をうしなひみづからほろびなばなんの益(えき)あらんや 二六 われとわが道(ことば)をはづるものをば。人子(ひとのこ)もまさつらが栄光(えいくわう)と父(ちち)と聖使(きよきつかひ)のえいくわうをもちてきたるときこれをはづべし 二七 われ誠(まこと)になんぢらにつげん。ここに立(たつ)もののうちに神(かみ)の國(くに)をみるまでは死(しに)なざるものあり〇 二八 此(この)ことをいひけるのち八日(やうか)ばかりすぎて耶蘇(いゑす)ペテロ ヨハネ ヤコブをともなひ祈禱(いのり)せんとて山(やま)にのぼれり 二九 いのれるときにその顔(かほ)のかたちつねとことなりてその衣服(ころも)しろくかがやきぬ 三十 ふたりの人(ひと)ありてこれとものいへり。

すなはちモーセとエリアなり。榮光のうちにあらはれまして
三一 耶穌のエルサレムにてまさに世をさらんとすることをかたる
三二 ペテロおよびともなるものどもいたくねむりたりし
が、めのさめて耶穌の榮光またともにたてる二人をみた
り 三三 このふたりの耶穌とわかるるとき、ペテロ耶穌にいひけ
るは、師よ、ここにをるは善し。われら三の廬をつくらせたまへ
一はなんぢのため一はモーセのため一はエリアのためにせん。
これその言ところをしらざりしなり 三四 かくいへるとき雲き
たりてかれらをおほへり。その雲にいりしとき門徒たち
おそれぬ 三五 聲くもよりいでていひけるは、これ我が愛子なり。

これをきくべし 三六 聲(こゑ)やみしときまでは耶穌(いえす)ひとりとみえけり門徒(でし)

こゝろ口(くち)をとぢて見(み)たりしことを當時(そのころ)はたれにもつげざりき

○三七 翌日(よくじつ)やまよりくだりけるにおほくのひと〻耶穌(いえす)をむか

ふ 三八 そのうちのある一人(ひとり)よばはりていひけるハ師(し)よねがハくハ

わが子(こ)を眷顧(かへりみ)たまへこれはわがひとり子(ご)なるに 三九 悪鬼(あくき)のためにと

らへられては忽然(たちまち)さけび泡(あわ)をふきひきつけられて傷(きずつけ)らる

ることまことにこのごとし 四十 われこれを逐(おひ)いだされんことをなん

ぢの門徒(でし)にもとめしかどもあたはざりき 四一 耶穌(いえす)こたへていひ

けるハあゝ信(しん)なきまがれる世(よ)なるかなわれなんぢらのうち

にありてなんぢらを忍(しのば)ていつまであらんやなんぢが子(こ)をこゝま

つれきたれ
四二 來るに惡鬼これをたふしてひきつけぬ。耶穌けがれたる鬼をせめてその子をいやし。父にあたへたり
四三 衆みな神のおほいなる能をおどろき耶穌のなせしことをあやしめるときに。耶穌でしにいひけるは
四四 この言をなんぢら耳にきゝとめよ。それ人の子はひとの手にわたされん
四五 かれらこのことばをさとらざりし。悟らざるやうかくされたるなり。かれらもまたおそれてこのことをとはざりき○
四六 門徒たちの中たがひにたれか大ならんとのあらそひありければ
四七 耶穌その心のおもひをしりて。孩子をとりそのかたにたてゝ
四八 かれらにいひけるは。すべて我名のためにこのをさなごを接るもの

いまなりちごをうくるなり。我(われ)をうくるものハわれをつかはせしものをうくるなり。すべてなんぢらのうち最微(いとちひさき)ものぞこれおほいならん四九ヨハネこたへていひけるハ師よなんぢの名(な)によりて鬼(おに)をおひいだせるものを見(み)たりしがわれらとゝもにしたがはざるゆゑこれを禁(とゞめ)たり五十耶穌(いゑす)いひけるハ禁(いさむ)ることなかれわれらに敵抗(てきかう)ざるものハわれらに順(つく)ものなり○五一耶穌(いゑす)天(てん)にのぼるの期(とき)いたりければ。エルサレムにゆくこゝろざしのかたくさだめたり五二使者(つかひ)たちをさきにつかはしけれバかれらゆきて耶穌(いゑす)に預備(そなへ)んがためサマリア人(びと)のむらにいりしに五三郷人(むらびと)そのエルサレムにむかひ行(ゆく)さまなるがゆゑに耶穌(いゑす)

を納ざりき五四門徒のヤコブヨハネらこのことをみていひけるハ主よ
なんぢらエリアのなせしごとく天より火をよびくだしかれ
らをほろぼさんとおもふや。欲ハ五五耶穌かへりみてこれを責いひ
けるハ。なんぢらハ心いかなる者なるかを自己しらざるなり五六ひとの
子ハ人のいのちを滅ためにきたらず。これをまつたふするため
なりとて遂ほかの村にゆけり○五七路をゆくときある人
耶穌にいひけるハ。主よいづこへゆきたまふともしたがひ
ん。五八耶穌かれにいひけるハ。狐ハ穴ありそらの鳥も巢あり。
されど人の子ハまくらするところなし五九また或一人にいひけ
るハ我にしたがへ。かれいひけるハ。主よまづゆきて父をはうむるこ

ことをわれにゆるせ 六十 耶穌いひけるは。死たるものはその死しを
ものを葬らせ。なんぢはゆきて神の國をひろめよ 六一 またある
ひとのいひけるは。主よなんぢにしたがはん。まづゆきて家人に
わかれをつぐることをゆるせ 六二 耶穌いひけるは。手を犂につ
けてうしろをかへりみるものは神の國にかなふものに
あらず

第十章 このゝち主また七十人をえらみてこれを兩個づゝに
わかち。みづからいたらんとする諸邑諸地へさきだちてつかはさ
んとしてかれらにいひけるは。收穫はおほく工人はすくなし。
ゆゑになんぢらはその穡主にはたらくものを收穫所におくらんことを

を求べし 三 往よ我なんぢらをつかはすハ羔を狼のなかにい
るがごとし 四 嚢また旅ぶくろ履をもつことなかれみちにて
て人に問候をもすることなかれ 五 人の家にいらバまづその家
の平安ならんことをねがへ 六 もしここに安然の子あらバなん
ぢらが祈るあんぜんハその家にとゞまらん若しからずバそ
のいのる安然なんぢらに歸べし 七 その家にとゞまりて供るとこ
ろのものハこれを飲食せよ、そハはたらくものハその工銭
をうくハ宜なればなり。家より家にうつることをせざれ 八 邑に
いらんに接るものあらバそのなんぢらの前にそなふるもの
を食せよ 九 邑のうちなる病のものをいやせまた衆に神の

國はなんぢらにちかづけりといへ 十 もし邑にいらんに接るものなくば衢にいでゝいへ 十一 われらにつきたるなんぢらが邑の塵はなんぢらにむかひてはらはん。されども神の國のちかづけるをしれ 十二 われなんぢらにつげん、その日にはソドムの刑罰はこの邑よりもなほやすかるべし 十三 あゝ禍なるかなコラジンよ あゝわざはひなるかなベツサイダよ。なんぢらのうちになせし異能をもしツロとシドンになせしならばかれらははやく麻をき灰をかうむり坐して悔改しなるべし 十四 審判にはツロとシドンの刑罰はなんぢらよりもなほやすからん 十五 なんぢは天にまであげられたるカペナウムよ。まさに陰府に

おとさるべし 十六 なんぢらに聴ものハわれにきくなり。なんぢ
らを棄るものハわれを棄るなり。我を棄るものハわれ
を遣たるものを棄るなり○十七 七十人よろこびかへりてい
ひけるハ。主よ悪鬼さへもなんぢの名によりてわれらに服
せり 十八 耶穌いひけるハ。われ電のごとく｜サタンの天よりおつる
を見たり 十九 われなんぢらに蛇蠍をふみ。また敵のすべての權
をおさふる權威をさづけたり。なにものもなんぢらを害する
ものなし 二十 しかれども悪鬼のなんぢらに服せるをよろこび
とするなかれ。なんぢらが名の天にしるされしをよろこび
とすべし 二一 このとき耶穌こゝろによろこびていひけるハ。天地の

主なる父よこの道を智者と達者とにかくして赤子にあらはしたまふことを謝す。父よ然りそれかくのごとくするは意旨にかなへるなり 二二 父は萬物をわれにあたふ。父のほかに子はしれるものなく。また子および子のあらはさんとするものの外は父はたれなるとしるものなし 二三 耶蘇でしをかへりみてひそかにいひけるは。なんぢらが見るところのことをみるその目はさいはひなり 二四 われなんぢらにつげん。おほくの預言者および王もなんぢらが見るところのことをみんとせしかども見ず。なんぢらが聞ところのことをきかんとせしかどもきかざりき○二五 ここに一個の教法師あり起て

なれをこころみいひけるハ。師よわれなにをなさバ永生をう
くべきや。二六 耶蘇いひけるハ。律法にしるされしハ何ぞ。なんぢ
いかによむや 二七 答ていひけるハ。なんぢ心をつくし精神をつ
くし力をつくし意をつくして主なるなんぢの神を愛す
べし。又おのれのごとく隣をあいすべし 二八 耶蘇いひけるハ。なん
ぢのこたへ然り。これをおこなはゞ生べし 二九 かれみづからを罪
なきものにせんとて耶蘇にいひけるハ。わが隣とハたれな
るや 三十 耶蘇こたへていひけるハ。ある人ヱルサレムよりヱリコに
くだるとき強盗にあへり。ぬすびとその衣服を剥とりて
これをうちたゝきしぬばかりになしてさりぬ 三一 のくるとき

にある祭司この路よりくだりしがこれをみすぐしにして
ゆけり 三二 またレビの人もここにいたりきたりて見ておなじく
すぎゆけり 三三 あるサマリアのひと旅してここにきたり。これ
をみて憫 三四 ちかよりてあぶらと酒とをその傷にそゝぎ。これをつゝ
みておのが驢馬にのせ旅邸につれゆきて介抱せり 三五 次日い
づるとき銀二枚をいだし館人にあたへて。この人をかいほ
うせよ費もしまさらばわれかへりのときなんぢに償べし
といへり。三六 さればこの三人のうちたれかぬすびとにあひ
しものゝ隣なるとなんぢおもふか 三七 かれいひけるは。その人
をあはれみたるものなり。耶蘇いひけるは。なんぢも往て

そのごとくせよ○三八かれら路をゆけるとき耶穌あるむらにいりたまひぬ。マルタといへる婦これをむかへてみづからの家にいれぬ三九その姉妹にマリアといへるものあり。耶穌のあしもとにすわりてその道をきけり四〇マルタ供給のことおほくして心いりみだれ。耶穌にちかよりていひけるは。主よわが姉妹われを一人のこしてもてなさしむるをなにともおもひたまはざるか。このゆゑに命じてわれをたすけしめよ四一耶穌こたへていひけるは。マルタよマルタよなんぢ多端によりおもひわづらひてこころづかひをせり。されどなくてかなふまじきものは一なり。マリアはすでに善業をえらみたり。これを

かれより奪べからざるものなり

第十一章 耶穌あるところにて祈禱なしけるをはりしとき。ひとりの門徒いひけるは。主よヨハネそのでしにをしへしごとくわれらにもいのることををしへたまへ 二 耶穌いひけるは。いのるときかくいふべし。天にましますわれらが父よ。ねがはくは聖名をあがめさせたまへ。聖國をきたらせたまへ。聖旨の天になるごとく地にもなさせたまへ 三 われらのなくてならぬ食を毎日にあたへたまへ 四 罪をわれらにをかすものをすべてゆるせばわれらが罪をもゆるしたまへ又われらをあしきことにさそはせずなほ惡よりすくひい

ごとしたまへ 五六 またかれらにいひけるは。なんぢらの中のもし
ある人よなかにその友へゆきて。友よわがともだち途間より
きたりしに供べきものなきゆゑ三の餅をかせよといはん
に 七 内にをるものこたへてわれを煩すなかれ。いまや門の
閉されとわが兒どもゝ牀にあれば。おきてあたふることあた
はずといふものあらんや 八 われなんぢらにつげん。その友なるに
よりて起てあたへざれども迫切にこふがゆゑにその需にしたがひ
おきてあたふべし 九 われなんぢらにつげん。求よさらばあたへ
らるべし。尋よさらばあひ。門をたゝけよさらばひらかるゝこと
を得ん 十 それすべてもとむるものは得。たづぬるものは遇。めん

を叩ものハひらかるゝがあり 十一 なんぢらのうち父たるもの誰かその子の餅をもとめんに石をあたへんや。魚をもとめんにそのかはりに蛇をあたへんや 十二 卵をもとめんに蠍をあたへんや 十三 されバ爾らあしきものなれども善賜をその兒子にあたふるを知る。まして天にいます爾らの父ハもとむるものに聖靈をあたへざらんや ○十四 耶蘇おふしなる悪鬼をおひいだしけるに悪鬼いでゝ瘖者ものいひしかバ。人々おどろけり 十五 その中なるものゝいひけるハかれハ悪鬼の王ベルゼブルによりて悪鬼をおひいだせるなり 十六 またあるひとびと耶蘇をこゝろみんとて。天よりの異兆をもとめけり 十七 耶蘇そのこゝろをしりていひけるハ。すべてみづからあらそふ國ハ

ほろび。こゝろはなれあらそふ家はたふるなり 十八 もしサタンもみ
づからはなれあらそはゞその國いかで立んや。それなんぢら
我をいひてベルゼブルによりて悪鬼をおひいだせりといふに 十九 もし
われベルゼブルによりて悪鬼をおひいださば。なんぢらの子弟
はたれによりて悪鬼をおひいだすや。それゆゑになんぢら
の裁判人となるべし 二十 もしわれ神の指をもてあくきを
おひいだせるならば神の國はもはやなんぢらにきたれり
二十一 勇士よろひきて邸をまもるときは。その所有あんぜんな
り 二十二 もしこれよりつよきものきたりて。それに勝ときは。その
たのみとせる鎧をうばひ。その贓をわかつべし 二十三 われとともならぬ

ざるものハわれにそむきわれとともに斂(あつめ)ざるものハちら
すなり○二四あくき人(ひと)よりいでゝ旱(かわき)るところをめぐり安(やす)
きをもとむれども得(え)ずしていひけるハ。わが出(いで)し家(いへ)にかへ
らん二五既(すで)にきたりしに、はききよめ修飾(かざれ)るを見(み)二六つひ
にゆきておのれよりなほあしき七(なゝ)の悪鬼(あくき)をしたがへいり
てこゝに居(すま)む。その人(ひと)の後(のち)のありさまハまへよりなほあし
かるべし二七この語(こと)をいへるとき群集(ぐんじゆ)のなかより一婦(あるをんな)こゑを
あげていひけるハ。なんぢをやどらせし腹(はら)となんぢのすひし
乳(ち)ハさいはひなり二八耶穌(いえす)こたへけるハ然(さ)れど神(かみ)の道(ことば)を
きゝてそれをまもるものゝさいはひにハしかずぞ○二九衆(ひと〴〵)あつ

しあつまるとき耶穌いひけるハ。いまの世ハあしし。志
るしをもとむるとも預言者ヨナの奇蹟のほかハ志るしハ
あたへられまじ 三十 それヨナが二ネベの人に志るしとなりし
ごとく人の子ハいまの世に志るしとなるべし 三一 南方の女
王さばきの日にともに起ていまの世のひとの罪をさだめん。
かれハ地のはてよりソロモンの智慧をきかんとてきたれり。
それソロモンよりあたいなるものこゝにあり 三二 二ネベの人さ
ばきの日にともにたちていまの世の人のつみをさだめん。
かれらハヨナの勸言によりてくいあらためたり。それヨナ
よりあたいなるものこゝにあり 三三 燈をともして隠處にある

ひを升の志たにおくものなし入きたるものハその光をみんためなり燭臺のうへにおくなり三四身のあかりハ目なり。なんぢの目あきらかならバ全身あかるし。その目あしければなんぢの身もくらし三五故ハなんぢハある光のくらからぬやうにつゝしめよ三六もしなんぢの全身あきらかにしてくらきところなくバ燈のひかりなんぢをてらすごとく全あきらかなるべし○三七耶穌ものいふときあるパリサイの人ともに食せんことを請ければ入て食につけり三八その食まへるさきに洗ことをせざりしをみてパリサイの人あやしめり三九主これにいひけるハなんぢらパリサイの人盌と盤のそ

とゝのをきよくす。されどなんぢら内は貪慾と悪にてみてり
四十 おろかなるものよ。外をつくりしものはまた内をもつくら
ざりしや 四一 なんぢら所有ものをほどこせ。さらばなん
ぢらのためにすべてのもの潔なるなり 四二 禍なるかななん
ぢらパリサイの人よ。薄荷芸香およびすべての野菜十分の
一をとりをさめて義と神を愛することを廢。これおこな
ふべきことなり。これもまたすつべからざるものなり 四三 わ
ざはひなるかな。なんぢら。パリサイの人よ會堂の高座。市上
のあいさつをこのめり 四四 わざはひなるかな。夫なんぢらは
かくれたる墓のごとし。そのうへをあるくひとぐこれを

あらざるなり　四五　ある教法師こたへていひけるハ。師よこの言ハわれらをもはづかしむ　四六　耶穌いひけるハ。なんぢらもわざはひなるかな教法師よ。たへがたき荷を人におはせ。みづから指ひとつをもその荷につけず　四七　禍なるかな。なんぢらハ預言者の墓を建つ。なんぢらの祖ハこれをころせり　四八　實になんぢら祖のなせる事をこのむ證明をなせり。それかれらハこれを殺し。なんぢらハその墓をたつ　四九　このゆゑに神の智いへることあり。我れ預言者および使徒をかれらにつかはさんに　その中のあるものをころし。あるものをせめくるしむべしと　五十　創世よりこのかた流しゝすべての預言者の血ハこの代においてたゞさん

とがむるなり五一すなはちへベルの血より聖殿と祭壇のあひだにころされたるザカリアの血にまでいたる。それ誠になんぢらにつげん。これをこの代にたゞすべし五二なんぢらわざはひなるかな。教法師よ知識の鑰をとりてみづからいらず。いらんとおもふものをも阻めり五三このことをいへるとき學者とパリサイのひとびとおほくいきどほりをふくみて多端のことをとひかけ五四その口よりいづることばをなほとらへて訴んとしてうかゞひけり

第十二章

そのとき數萬のひとびとあひふみあふほどにあつまりぬ。耶穌まづ門徒にいひけるは。なんぢらパリサイの人の餅

だねをつゝしめよ。これ偽善(ぎぜん)なり 二 それ掩藏(おほひかくれ)てあらはれざるものなく隠瞞(かくれ)てしられざるものなし。ゆゑに 三 なんぢらくらきにていひしことは明處(あかるき)にきこゆべし。密室(ひそかなるへや)にて耳(みゝ)につきていひしことは屋上(やねのうへ)にひろがるべし 四 わが友(とも)よなんぢらにつげん。身體(からだ)をころして後(のち)になにをも為(なし)あたはざるものをおそるゝなかれ 五 われおそるべきものをなんぢらにしめさん。殺(ころ)してのちに地獄(ぢごく)になげいるゝ權威(ちから)をもてるものをおそれよ。われ誠(まこと)になんぢらにつげん。これをおそるべし 六 五(いつゝ)の雀(すゞめ)は二銭(せん)にてうるにあらずや。しかるに神(かみ)におゝいてはその一(ひとつ)をもわすれたまはず 七 なんぢらのかしらの

の髪までもみなかぞへらる。ゆゑにおそるゝなかれ。なんぢら
はおほくの雀よりもまされり八また我なんぢらにつげん。
われを人のまへにあらはすものをば人の子もまた神の
使者のまへにてあらはすべし九われを人のまへにて不認もの
は神の使者のまへに彼もまたいなまるべし十およそ人の
子をそしるものはゆるさるべけれども聖靈をけがすものは
ゆるさるべからず十一人なんぢらを會堂または有位および權
あるもののまへに曳つれゆかば。いかにこたへ何をいはんとお
もひわづらふなかれ十二その時いふべき言は聖靈なんぢら
にしめすべし〇十三ひとびとのうちよりひとり耶蘇にいひ

けるは、師よ。わが兄弟に遺業をわかてよといひつけたまへ。耶穌いひけるは人よ誰がわれをたてゝなんぢらの裁判人または物をわかつものとなせしぞ 十五 耶穌ひとびとにいひけるは。こゝろして貪心をつゝしめよ。それ人のいのちは所蓄のゆたかなるにはよらざるなり 十六 またたとへをもつていひけるは。ある富人その田畑よくみのりければ。みづからおもひけるは。わが産業をおさむるところなきをいかにせん 十八 またいひけるは。我かくなさん。わが倉を毀ちさらに大なるをたて。すべてわが産と貨をそこにおさむべし 十九 かくて霊魂にむかひ、たましひよ多年をすごすもたるのおほくのたからをため

こゝろハ安心して食飲たのしめよといはんとも 二〇 しかるに
神これにいひけるハ。愚なるものよ今夜なんぢがたましひとら
るゝことあるべし。さらバなんぢのそなへたりしものハ誰が
ものとなるや 二一 おほよそおのれのために財をたくはへ。神につ
いて富ざるものハかくのごときなり 二二 耶穌その門徒にいひ
けるハ。此ゆゑにわれなんぢにつげん。なんぢら生命のために
なにをくらひ。身體のためになにを著んとおもひわづら
ふなかれ 二三 いのちハくひものよりまさり。からだハ衣よりも
まされり 二四 鴉をおもひみよ。稼ず穡ずくらもなくやをも
なきに。されども神ハなほこれらをやしなふ。ましてなんぢ

らハ鳥よりもたふときこといくばくぞや 二五 なんぢらのうち
誰かよく思慮てそのいのちを寸陰ものべえんや 二六 されば
最小ことすらあたはざるに何ぞそのほかをおもひわづら
ふや 二七 百合花ハいかにしてそだつかをおもへ。勞ず紡がざるな
り。われなんぢらにつげん。ソロモンの榮華の極のときだにも
この花のひとつほどもよそほはざりき 二八 神もしけふ野にあり
てあすは爐になげいれらるゝ草をも如此よそほはせたまへば
ましてなんぢらをや。あゝ信仰うすきものよ 二九 なんぢらな
にを食なにを飲んともとむるなかれ。また罣慮ことなか
れ 三十 すべてこれらのものは世界の邦人のもとむるものな

り、なんぢらの父ハこれらのものゝなんぢらになくてハかなハぬ
ことをしる三一たゞ神の國をもとめよ。さらバこれらのものハなんぢ
らに加らるべし三二ちひさき羣よおそるゝなかれ。なんぢら
の父ハよろこびて國をなんぢらにあたへたまへり三三なんぢ
らの所有をうりて施濟をなしおのがためにつねにふるびざる財布
まちそのたから盡ざるたからを天にたくはへよ。そこハ盗もちか
よらず又蠹もそこなハざる所なり三四なんぢらの財寶のある
ところにハなんぢらの心もまたそこにあるべし三五なんぢら
腰に帯して燈をともしてをれ三六主人婚筵よりかへり
きたりて門をたゝかバすみやかにひらかんためにそのしゆを待

ひとのごとくせよ 三七 主人きたりてその儆醒しをるを見ば
この僕はさいはひなり。まことにわれなんぢらにつげん。
主人みづからこしに帯し しもべを食につかせすゝみてこれに
供事すべし 三八 あるひは二更あるひは三更に主人きたりて
かくのごとくなるを見ばこの僕はさいはひなり 三九 なんぢらこれ
をしるべし。もし家のあるじ盗いづれの時にきたるを
しらばその家をまもりてやぶらせまじ 四十 さればなんぢら
もあらかじめそなへをせよ。おもはざるときに人の子きたら
んとすればなり 四一 ペテロいひけるは。主よこのたとへはわれら
にいふか、またすべての人にいふか 四二 主いひけるは時よくあ

よびて食物をあてがはしめんために主がその僕どものうへにたつる忠義にして智いへづかさはたれなるか 四三 その主きたるときにかくのごとくつとむるを見らるる僕はさいはひなるなり 四四 我まことになんぢらにつげん。その所有をことごとくかれに督どらしむべし 四五 もしその僕こころのうちにわがあるじのきたることはおそからんとおもひ。その僕婢をうちたたき食飲してかつ酒にゑひそめんに 四六 その僕の主おもはざるの日おもひがけぬ時にきたりてこれを斬刑そのむくゐを不信者とおなじうすべし 四七 僕あるじのこころをしりながら預備せず。かつその心にしたがはざるものはうたるることおほからん

らん四八志らずして打るべきことをなせしものハ打ることもすくなからん。おほくあたへらるゝものハおほく求らるべし。おほくあづけましこれよりおほくのぞむべし○四九我れ火を地になげいれんためにきたれり。それなにを欲すでにこの火の燃たらんことなり五十我うくべきのバプテスマあり。その成らるゝまではわがいたみいかばかりぞや五一それわれ安全を地にあたへんとてきたるとおもふや。それなんぢらにつげん。志からずかへりて分爭志む五二いまよりのち一家に五人あらバ三人ハ二人にてきらひし二人ハ三人にてきらふてさからふるべし五三父ハ子に子ハちゝに母ハむすめに女ハはゝに姑ハ

そのよめに婦はそのしうとめにてきたいしてはなるべし
五四 耶蘇またひとびとにいひけるは。雲の西よりおこるを見ばただちに雨ふらんとなんぢらいふ。まことにしかり 五五 南より風ふけば暑からんとなんぢらいふ。まことにしかり 五六 偽善者よ天地の色象をばよくこころでしりてこの時をばつらうちあふをぎうかしなんぢらや 五七 またなんぞみづから公義をさぐらざるか 五八 なんぢを訟るものとともに有司にゆくとき途中にて心をつくしてかれよりゆるされんことをもとめよ。おそらくは訟者なんぢを裁判人に曳。さいばんにんなんぢを吏にまでふし。しかうしてなんぢを獄にいれん 五九 われなんぢにつげ

ん一錢ものこさず償までハなんぢそこをいづることを得
ざるなり

第十三章 そのころあつまりたるもののうちにピラトがガリラヤ
人の血をその供物にまぜしことを耶蘇につぐるものあり二耶蘇
こたへてかれらにいひけるハなんぢらこのガリラヤ人かくの
ごとく害されしゆゑにすべてのガリラヤ人よりも多き罪ある
ものとおもふや三されなんぢらにつげん。なんぢら
悔改ずバみなおなじくほろぶべし四シロアムの塔たふ
れて壓死されし十八人ハエルサレムに住るすべてのひとびとより
も多き罪あるものとおもふや五我なんぢらにつげん。なんぢら

ぞなんぢらくいあらためざるならばみなおなじくほろぶべし 六 またこのたとへをいへり。ある人その葡萄園にうゑおきたる無花果樹ありしがきたりてこれに果をもとむれどもえざりければ 七 その園丁にいひけるは。われ三年きたりてこの無花果樹に果をもとむれども得ず。これを斫きれなんぞいたづらに地をふさぐや 八 こたへけるは。主よわれその周圍をほりてこれに糞するまで今年もゆるせ。九 もし果をむすばゞよし。もし結ばずばのちにこれを斫べし ◯十 耶蘇あんそくにちにある會堂にてをしへしま 十一 十八年あくまにわづらはされたる婦あり。かゞまりて

すこしも伸ることあたはざりき十二耶蘇これをみてよび。婦よなんぢはその病よりはなされたりといひて十三手をおきたまひければたゞちにのびて神を讃美たり十四會堂のつかさ耶蘇の安息日にいやしたまふことを怒。こたへてひと〴〵にいひけるは。事をなすべき日は六日あればその中にきたりていやさるべし。安息日にはせざれ十五主かれにこたへていひけるは。偽善者よなんぢらおの〳〵安息日にもその牛や驢をとき厩よりひきいだして水をのまさざるか十六ましてこのをんなはアブラハムの裔なるを十八年サタンに縛られたるそのむすびを安息日にとく

べからざらんや十七耶蘇かくいひければ。敵たるものみな慚愧ぬ。またひとびとそのなせしもろもろのけなきことをよろこべり十八耶蘇またいひけるハ。神の國ハなにゝなぞらへまたなにゝたとへんや十九ひとつぶの芥種のごとし。人これをとりてその園にまけば長生て大なる樹となり。そらの鳥その枝にやどるなり二十またいひけるハ。これ神の國をなにゝなぞらへんや二十一餅だねのごとし。婦これをとりて三斗の粉のなかにかくせばことごとくふくれいだせるなり。二十二耶蘇をしへつゝ各城各郷をすぎてエルサレムにむかひて旅だちけり二十三あるひといひけるハ。主よすくはるゝものそ

少きや 二四 耶穌かれらにいひけるは。窄門にいらんとつとめよ力をつくせ。われなんぢらにつげん入んことをもとめてあたはざるもの多かるべし 二五 家の主おきて門をとざしのちになんぢらそとにたちて門をたたきて。主よ主よわれらにひらけといはんは主こたへてわれなんぢらが何處よりきたりしをしらずといはん 二六 そのときにわれらなんぢのまへに食飲しなんぢまたわれらの衢にをしへたりしといひいださん 二七 主こたへて。われなんぢらにつげん。いづくよりきたりしをしらず。すべて悪をなすものよわれをされといはん 二八 なんぢらアブラハム イサク ヤコブ およびすべての預言者は神の國

はありてなんぢらハ外になげいださるゝを見んときには
哀哭切歯することあるべし 二九 またひとびと西やひがし北や
みなみよりきたりて神の國に坐するならん 三十 それ後のも
のさきになり先のものあとになるべし ○ 三一 この日あるパリ
サイのひとびときたりて耶蘇にいひけるハヘロデなんぢを殺
さんとするゆゑにこゝを離ゆけ 三二 こたへていひけるハなん
ぢらゆきてその狐につげよ。われけふあすも悪鬼をおひい
だし病をいやし第三日にはことををはらん 三三 されども今日
明日また次日もわれはかならずゆくべし。それ預言者ハヱルサ
レムのほかにてころさるゝことあらねばなり 三四 あゝヱルサレムよ

エルサレムよ預言者をころしなんぢにつかはされしものを石にてうつものよ。母鶏の雛をつばさのしたにあつむるごとくわれなんぢの赤子をあつめんとせしこといくたびぞや。しかるになんぢら欲まず 三五 みよなんぢらの家は墟となりてのこさるべし。まことにわれなんぢにつげん。主の名によりてきたるものは福なりとなんぢらいはんときいたるまでなんぢらわれを見ざるべし

第十四章

耶穌あんそくにちに食事のためある宰なるパリサイの人の家にいりしに。人々かれをうかゞひをり。そのまへに腹脹をわづらひたる人ありしかば 三 耶穌こたへて教法師とパリサイ

のひと〴〵にいひけるは。安息日にいやすことはよきやいなや四かれら黙然たり。耶蘇その人をとらへ醫してこれをさらしめ五かれらにこたへていひけるは。なんぢらのうちたれか驢あるひは牛などの阱におちいらんに安息日にはすみやかに曳出さゞるか六かれらこの言につきてこたふることあたはざりき〇七このときその席にまねかれたるひと〴〵の首位をえらぶを見て。耶蘇たとへをもてかれらにいひけるは八なんぢ婚筵にまねかれんとき首位に坐することなかれ。おそらくはなんぢより尊人まねかれなば九なんぢとなんぢを請しものきたりてこの人に坐をゆづれといはん。さ

らバなんぢはぢて末位(まつざ)にゆくべし 十 このゆゑになんぢ請(まねか)
れんときハゆきて末位(まつざ)に坐(ざ)せよ。まねきし人のきたりて
友(とも)よ首位(じやうざ)にすゝめとなんぢにいはゞ同席(どうせき)の人のまへに
なんぢほまれあるべし 十一 おのれをみづから高(たか)ぶるもの
ハ卑(くだ)され、みづからへりくだるものハたかくせらるべし
十二 またおのれを請(まねけ)るものにいひけるハ。なんぢ午餐(ひるげ)あるひ
ハ晩餐(ゆふげ)をまうくるとき朋友(とも)兄弟(きやうだい)親戚(しんるい)またとめる鄰(となり)のひとを
まねくなかれ。おそらくハかれらもまたなんぢをまねきて
その報答(むくい)をなさん 十三 なんぢ筵(ふるまひ)をなさバ貧乏(まづしきもの)廢疾跛者(あしなへ)瞽者(めしひ)
などをまねけ 十四 さらバなんぢ福(さいはひ)なるべし。そハこのかれらハな

んぢは報ことあるべし。たゞしきひと〴〵の復生らんその時
なんぢにむくいあるべきなり 十五 ともに食せるもの一人これ
をきゝて耶穌にいひけるは。神のくにゝ食するものはさいはひ
なり 十六 耶穌かれにいひけるは。ある人おほいなる筵をまうけ
て多賓をまねけり 十七 ふるまひのとき僕をその請たるものに
つかはして。すべてのもの既そなはりたればきたるべしと
いはせけるに 十八 かれらことごとくおなじく辭ぬ。そのはじめの
もの彼にいひけるは。われ田地をかひたればゆきて視ざるを
えず。ねがはくはわれをゆるしたまへ 十九 また一人のものいひ
けるは。われ五耦の牛をかひたればこれを試るにゆかん。

ねがはくはこれをゆるしたまへ 二十 またひとりのものいひけるは
われ妻(つま)をめとりたり。このゆゑにゆくことをえざるなり 二一
その僕(しもべ)かへりてこのことを主(あるじ)につげしかば。あるじ怒(いかり)てそ
のしもべにいひけるは。すみやかに邑の衢巷にゆきて。まづし
きもの。ちんば。あしなへ。めしひなどをこゝにつれきたれ
二二 僕(しもべ)いひけるは。主(しゆ)よ命(おほせ)のごとくなせり。されどなほあまりの
坐(ざ)あり 二三 主(あるじ)しもべにいひけるは。道路(みち)や藩籬(まがき)のほとりにゆき
強(しひ)てひとびとをつれきたりてわが家(いへ)をみたしめよ 二四 われなんぢ
らにつげん。かの請(まね)きたるひとびといひとりだもわが餐(ふるまひ)をあぢ
はふものなし ○ 二五 おほくのひとびと耶穌(いえす)とともにゆきしが

耶穌かへりみて彼らにいひけるは 二六 およそ我にきたりて
その父母妻子兄弟姉妹またおのれの生命をもにくむもの
にあらざればわが門徒となることをえず 二七 またおのれの十字架
をおはずしてわれにしたがふものはわがでしとなること
をえず 二八 なんぢらのうちたれか城をきづかんにまづ坐してその
つひえこのことの竣まで足やいなやを計ざらんや 二九 おそ
らくは基をすゑてこれをなしあたはざるを見るものこぞりて
あざけりいひて 三〇 この人は築かけてなしとげざりしといはん
三一 またある王いでゝほかの王と戰はんにまづ坐してこの一萬人を
もてかれが二萬人に敵すべきやいなやを籌ざらんや 三二 もし叶はずば

べし敵なほ遠くへだてをるときに使をつかはして和睦をもとむ
べし 三三 かくのごとくなんぢらその所有をことごとく
すてざるものはわが門徒となることあたはず 三四 塩はよきものなり
なれどもし塩その味をうしなはばなにをもてこれに
味をつけんや 三五 田にも糞にも益なし外にすてらるるなり。
耳ありてきくものはきくべし

第十五章

さて税吏と罪あるものども耶蘇にきかんとてちかよ
りければ 二 パリサイの人と學者らつぶやきていひけるは
この人はつみあるひとをうけいれともに食せり 三 耶蘇かれらに
譬をまうけていひけるは 四 なんぢらのうち誰か一百

の羊あらんにもしその一をうしなはゞ九十九を野におきてゆ
きてそのうしなひし羊をうるまでたづねざらんや五たづね
得ばよろこびてこれをおのれの肩にうけ六家にかへりてその友
とその鄰のひとびとをよびあつめていはん、われとともによ
ろこべ我うしなへる羊をえたればなり、七我なんぢらにつげん
かくのごとくひとりの罪人くいあらためなば悔あらたむる
におよばざる九十九の義人よりもなほ天にてよろこび
あらん八またある婦のうちに金銭十枚をもち、その一枚を
うしなはゞ、燈火をともして室を掃除し、これをうるまで
ねんごろにたづねざらんや九たづね得ばその友とその鄰

のひとびとをよびあつめていはんぞ、われとともによろこべ、わがうしなへる金錢をえたればなり 十 われなんぢらにつげん。かくのごとくひとりの罪人くいあらたむるならば、神の使たちのまへによろこびあるべし ○十一 またいひけるは、あるひと子ふたりあり 十二 そのおとうと父にいひけるは、父よわがうくべき業をわれに分あたへよ。父その志んだいをふたりにわかちぬ

十三 幾日も經ざるに、おとうとその志んだいをことごとくあつめて遠國へたびだちせしが、放蕩にしてその分資をそこなひそこにて耗せり 十四 ことごとくつひやせしとき、あまねくいたる饑饉その地にありて、彼ともしくなりそめけるが 十五 ゆきて

その地のあるひとに身を投たり。その人ぶたを牧しめにかれを野につかはせり 十六 かれ豕の食するところの豆莢をもておのが腹をみたさんとおもふほどなれどもかれにあたふる人なし 十七 みづから省悟ていひけるは。わが父のところには食物あまれる傭人いくばくあるにわれは飢てしなんとす 十八 起てわが父にゆきていはん。父よわれ天となんぢのまへに罪犯をかしゝくらまらべ 十九 なんぢの子ととなふるに足ざるものなり。なんぢの傭人のひとりのごとく我をなしたまへと 二十 すなはち起てその父にゆけり。なほ遠ありしにその父かれをみてあはれみ。はしりゆきその頸をいだきて接吻し 二十一 子

ちゝにいひけるは。父よわれ天となんぢのまへに罪をおかし
これよりなんぢの子ととなへらるゝにたらざるなり 二一 父そのしも
べどもにいひけるは。いとも美服をもちきたりてこれにきせ。
その指に環をはめ。そのあしに履をはかせよ 二三 またこえたる犢
をひききたりて宰れ。われら食してたのしまん 二四 これわ
が子死てまた生かへりうしなひてまた得られたればなりとかれらと
たのしみをはじむ 二五 そのあに田にありしがかへり
て家にちかづき樂と舞のおとをきゝて 二六 その僕のひとりをよび
てこれ何ごとぞとたづねたるに 二七 こたへていひけるは。なんぢのお
とうとかへりたり。恙なくかへりきたりしによりてなんぢ

げ父こえたる犢をほふりたるなり 二八 長子いかりて入ず。このゆゑにその父いでゝかれをすゝめしかば 二九 父にこたへていひけるは。われ多年なんぢにつかへていまだなんぢのいましめにそむかず。されどもわが友とたのしむために羔だもあたへしことなし 三十 しかるに娼妓のためになんぢの業をつひやしたるこのなんぢがかへりければこれがために肥たるこうしをほふれり 三一 父かれにいひけるは。子よなんぢはつねにわれとともにあり。またわが所有はことごとくなんぢのものなり 三二 なんぢのおとうとは死てまたいき生かへりうしなふてまた得たるがゆゑによろこびそ樂むは當然のことなり

第十六章(だいじふろくしやう)

耶蘇(いえす)またそのでしにいひけるは。ある富(とみ)るひとにばんとうありけるが主(しゆ)の所有(もちもの)をつひやしぬと主人(あるじ)へうつたへらる 二 主人(あるじ)ばんとうをよびていひけるは。なんぢにつきてきくところは何(なん)ぞや。なんぢをばんとうとなしおかざれば、その會計(あつかひ)たりしことがらをつまびらかに辨(のべ)よ 三 ばんとうこゝろにおもへらく。主人(あるじ)わがやくめをとりあげるなればなにをなさん。われ鋤(すき)をとらんは力(ちから)なし施(ほどこし)を乞(こふ)もはづかしく 四 我(われ)やくめをとりあげられんときはこれらの家(いへ)にむかへらるべき所為(しわざ)をしりぬとぞ 五 つひにあるじの負債人(ふさいにん)をことごとくよびてそのはじめのものにいひけるは。なんぢはわが主(あるじ)におふくば

いかほどあるや 六 こたへていふ油百斗なり。かれにいひけるハ。なんぢの券書をとりいそぎ坐して五十とかけよ。また一人にいひけるハ。なんぢの負債なにほどあるや。こたへていふ小麦百斛なり。かれにいひけるハ。なんぢの券書をとりて八十とかけよ 八 あるじその所為のたくみなるによりてこの不義なるばんとうをほめたり。それこの世の子どもらハこの世においてハ光明の子どもらよりももつとも巧なり 九 われなんぢらにつげん。不義のたからをもておのが友をえよ。これハともしからんとき、かれらなんぢを永遠宮にむかへんがためなり 十 小事にたゞしきものハ大事にもたゞしく小事

はでしりつけるものは大事にもでしりつけるぞ 十一 ゆゑにもしなんぢら不義のたからにでしりつけざれば。たれかまことのその財をなんぢらにあづけんや 十二 なんぢら人のものに不義なるならば。たれかなんぢのものをなんぢにあたへんや 十三 一人のしもべはふたりの主人につかふることあたはず。それはこれを悪みかれを愛し。あるひはこれを重んじかれを軽んずればなり。なんぢら神と財をかねつかふることあたはず 十四 欲ふかきパリサイのひとびとこのことをきゝて耶蘇をあざけり 十五 耶蘇かれらにいひけるは。なんぢら人々のまへにみづからを義とするものなり。されども神はなんぢらの心を志

れりそれ世人のたふとむところのものは神のまへにはにくまるゝものなり十六律法と預言者はヨハネまでなりそのゝち神のくにのふくいんつたへらる。これに用力てうまれいらんとするなり十七天地のすたれんは律法の一畫のすたるよりも易し十八およそその妻をいだして他のものをめとらバ姦淫をおこなふなりまた夫よりいだされたる婦をめとるものも姦淫をおこなふなり〇十九こゝに富る人あり紫袍と細布をきて日々おごりたのしめり二十またラザロといへる貧者あり。いたく腫物をやみて富るひとの門にあつまり二一その案よりおつる餘屑にてやしなはれんとねがへりまた犬きたりてそのしゆもつ

を舐ぬ 二二 まづしきもの死にければ天のつかひたちよりて
アブラハムの懐におくられたり。富人も志にてはうむられし
が 二三 地獄にくるしみてその目をあげ。はるかにアブラハムとその
ふところにあるラザロを見て 二四 さけびいひけるは父アブラハム
よ われをあはれみてラザロをつかはしてその指のさきを水
にひたしてわが舌をひやさしめたまへ。われこの火燄のなか
にくるしめばなり 二五 アブラハムいひけるは子よなんぢはいきてを
りしときになんぢの福をうけ。またラザロはその苦をうけ
たりしを いまかれは慰られなんぢはくるしめらる
なり 二六 このみならずこゝよりなんぢらにゆかんと

まゐることもえせず。彼よりわれらにわたらんとするものもまた得ざるなりわれらとなんぢらとのあひだに限なかなるおほいなる淵あり。二七こたへけるは。さらば父よねがはくはわが父の家へラザロをおくりたまへ。二八そはわれに五人の兄弟あり。かれらがこの苦のところにきたらざるためにラザロを證據をなさしめよ。二九アブラハムいひけるは。かれらにはモーセと預言者あればこれにきくべし。三十こたへけるは。あらず父アブラハムよ。もし死よりかれらにゆくものあらば悔改べし。三一アブラハムいひけるは。もしモーセと預言者にきかざらばたとひ死よりよみがへるものありともその勸をうけざるべし

第十七章　耶穌弟子にいひけるハ。躓きたらざることハあたハざるべきならん。されどこれをきたらするものハ禍なるかな 二 この小子のひとりをつまづかするよりハ磨石を頸にかけられて海になげいれられんこそよし。その人のためによかるべし 三 みづからを謹慎よ。もし兄弟なんぢに罪をおかさばこれを諫よ。かれもし悔ばこれをゆるせ 四 もし一日に七次つみをなんぢにをかして一日に七次なんぢにむかひてわれ悔といはゞゆるすべし○五 使徒主にいひけるハ。われらに信をまさせよ 六 主いひけるハ。なんぢらもしからしだね一粒ほどの信あらばこの桑樹にぬけて海に植れといふともなんぢらにしたがふべし 七 誰かなん

ぢらのうちにあるひハ耕(たがやし)あるひハ獣(けもの)を牧(かふ)しもべあらんにかれ田(た)よりかへりきたるときたゞちにゆきて食(しよく)につけといふものあらんや 八 かへつていふならずやわれが食(しよく)をそなへわれが食飲(くひのみ)するまで帯(おび)をしめてつかへて後(のち)なんぢくひのみすべしと 九 僕(しもべ)あるじの命(めい)ぜしことにしたがへばとて主(あるじ)かれに謝(しや)をすべきや しからずとおもへり 十 このゆゑになんぢら命(めい)ぜられしことをことごとくなしをはらばわれらは無用(むよう)のしもべなりなすべきことをしたるなりといへ 十一 耶穌(いえす)エルサレムにゆくときサマリアとガリラヤのうちをとほり 十二 ある村(むら)にいりしとき十人の癩者(らいびやうにん)ありてかれにあひはるかにたち聲(こゑ)をあげいひけるは 十三 師(し)耶穌(いえす)

よわれらをあはれみたまへ 十四 耶蘇これを見ていひけるハ
ゆきてなんぢらの身を祭司にみせよ。かれらゆくうちに潔られた
り 十五 そのひとり己がいやされたるを見てかへりきたり大聲
に神をあがめ 十六 耶蘇のあしもとにひれふして謝せり。
かれハサマリア人なり 十七 耶蘇こたへていひけるハきよめられし
ものハ十人にあらずや。その九人ハいづくにある 十八 この異
邦人のほかに神をあがめんとてかへりくるものあらざるか
十九 またかれにいひけるハ。起てゆけなんぢの信仰なんぢを
すくへり 二十 神の國ハいづれの時きたるとパリサイのひと
にとはれければ。耶蘇こたへていひけるハ。神のくにはあら

はれてきたるものにあらず 二一 此はこゝよ彼はこゝよと人のいふ
べきものにもあらず。それ神の國はなんぢらのうちにあり
二二 また門徒にいひけるは、なんぢら人の子の一日を見まくおもふ
日きたらん。されどもこれをみざるべし 二三 人々なんぢらにこゝに
みよかしこにみよといはん、されども徃なかれしたがふなか
れ 二四 それ電光の天のあなたよりひらめき天のこなたにひら
めくがごとく人の子もその日にかくあるべし 二五 されど人の
子はかならずまづおほくの苦をうけ、またこの世の人にすて
らるゝならん 二六 ノアの時にありしごとく人の子のときにもし
かあるべし 二七 すなはちノア方舟にいりし日までひとびと

食飲嫁娶などなしけるが洪水きたりてこれらをほろぼせり 二八 またロトの時にもかくありき。ひとびと喰飲買賣樹藝構造などなしけりしに 二九 ロト ソドマより出たりし日、天より火と硫黄をふらせてかれらをことごとくほろぼせり 三十 人の子のあらはるゝ日にもまたかくのごとくあるべし 三一 その日において人いへのうへにあらばその器具いへにあるともこれを取んとてくだるべからず。また田畑にあるものもおなじくかへるべからず 三二 ロトの妻をおもへ 三三 おほよそその生命をたもたんとするものはこれを失ひ。もしその生命をうしなはんものはこれを保全べし 三四 われなんぢらにつげん。その夜ふたり同床に

あらんその一人ハとられ一人ハのこさるべし 三五 ふたりの婦ともに
磨ひきをらんに一人ハとられ一人ハのこさるべし 三六 かれらこたへていひけるハ主よこのこと何處にあるや かれらにいひけるハ屍のあるところにハ鷹あつまらん

第十八章

耶蘇また人のつねにいのりして懈怠まじきことをしめさんためにたとへをかれらにのべけるハ 二 あるまちに神をおそれず人をもかへりみざる裁判人ありけるが 三 その邑にやもめありてつねにきたりてわが仇よりすくひたまへといひてかれにいへりしかるに 四 かれ久しくうけがはざりしかど。その後こゝろのうちにおもひけるハわれ神をもおそれず人をもかへりみざれども 五 こ

の婆われをわづらはせば、かれが絶ずきたりてわれを[illegible]聒[illegible]六 主いひけるは不義なるさばいにんのいひしことをきけ 七 まして神を昼夜いのるところのえらびたまひしものを[illegible]忍ともつひに[illegible]ざらんや 八 われなんぢらにつげん。神はすみやかに[illegible]ちん。されど人の子きたらんとき信を世にみんや〇 九 おのれをみづから義とおもひ人をかろしむるあるものに耶蘇このたとへをかたりけり 十 二人いのらんとて殿にのぼりしが、そのひとりはパリサイの人ひとりは税吏なりき 十一 パリサイの人ひとりたちてみづからかくいのりけり。神よわれは他のひとのごとく強索

不義(ふぎ)姦淫(かんいん)せずまたこのみつぎとりのごとくにもあらざるを謝(しや)す十二われ七日間(ひとまはり)にふたゝび禁食(だんじき)しまたすべてうるものゝ十分(じふぶん)の一(ぶ)をさゝげたり十三税吏(みつぎとり)はとほくにたちて天(てん)をもあふぎみずその胸(むね)をうちて神(かみ)よ罪人(ざいにん)なるわれをあはれみたまへといへり十四われなんぢらにつげんこのひとはかの人(ひと)よりも義(ぎ)とせられて家(いへ)にかへりたり。それすべておのれを高(たか)くするものは卑(ひく)くせられおのれをひくうするものはあげらるべし十五耶蘇(いゑす)にまさにふれんがため人々(ひとびと)をさなごらをつれきたりしに門徒(でし)らこれを見(み)てこれをいましめたり十六耶蘇(いゑす)をさなごをよび門徒(でし)にいひけるは嬰孩(をさなご)をわれにきたらせよこれを禁(いまし)むる

なかれ神の國はかゝるもののごときもののなり 十五 まこと
に爾曹につげん凡そ嬰孩のごとくに神の國
をうけざるものハこれに入ことをえざるなり 十六 あな抱き
とくそていひけるハ善師よかぎりなき生を嗣ためにわれ
なにをかなすべきぞ 十八 耶穌かれにいひけるハなんぢなにゆゑ我を
善といふや一の外に善者ハなし すなはち神なり 十九
誡ハなんぢが知ところなり 姦淫するなかれ 殺すなかれ 竊むなかれ
妄證をたつるなかれ なんぢの父と母とをうやまへ 二十 こたへて
けるハこれらはわれ幼よりまもれるなり 二十一 耶穌[illegible]
をきゝていひけるハなんぢなほひとつを缺 その所有を

ことごとくうりて貧者にほどこせ。さらバ天にありて財あらん。しかしてきたり我にしたがへ 二三 かれはなはだ富ものなりしかバこれをきゝて甚うれひけり 二四 耶蘇そのいたく憂しを見ていひけるハ。とめるもの〻神の國にいるハいかに難かな 二五 とめるもの〻神の國にいるより駱駝の針のあなをとほるハなほやすし 二六 これをきけるもの〻どもいひけるハ。さらバ誰かすくひをうくべきや 二七 耶蘇いひけるハ人のなしえざるところハ神のなしうるところなり 二八 ペテロいひけるハ。われら一切をすてゝなんぢにしたがへり 二九 耶蘇かれらにいひけるハ。まことになんぢらにつげん。おほよそ神の國のた

めまた家あるひハ父母あるひハ兄弟あるひハ妻あるひハ兒女をすつる
ものハ 二九 今世にて幾倍をうけ來世にハかぎりなきいのちを
うけざるものなし○三十 耶穌十二の門徒をともなひ
てこれらにいひけるハ。われらヱルサレムにのぼる。人の子につ
いて預言者のしるされしことハ皆とげらるべし 三一 それ
人の子ハ異邦人にわたされ戲弄くるしめられ唾せら
るべし 三二 かつかれら鞭撲てこれをころさん。また第三日
によみがへるべし 三三 門徒これらの語をすこしもさとらざりき。
またこのいへることかれらに隱たり。またそのいはれたる言
をしらざりき○三五 耶穌ヱリコにちかよれるとき。ある瞽者

みちのかたはらに坐して乞ゐたりしが 三六 大衆のすぐるを
きゝてこれなにごとぞといひければ ひとびと ナザレの耶穌の
すぐるなりと告 三八 瞽者よばゝりいひけるは。ダビデの子耶穌よ
われをあはれみたまへ 三九 さきだちゆくものども默止とて
かれをいましむれどもますます ダビデの子よわれをあはれみ
たまへとよばゝり 四十 耶穌たちとゞまりかれをつれきたれ
と命ぜしかば、瞽者ちかよりければ 四一 耶穌かれにとひけるはなん
ぢわれはなにを為られんとねがふやこたへけるは主よ見ゑ
んことをねがふ 四二 耶穌かれにいひけるは。見ることをうけよ
なんぢの信なんぢをすくへり 四三 かれやがて見え神をあがめ

て耶蘇にしたがひぬ民ことごとくこれを見て神をあがめたり

第十九章

耶蘇エリコにいりてすぎゆくとき 二 ザアカイといへる人あり税吏のかしらにて富るものなり 三 耶蘇をいかなる人なるか見んとおもへども身量ひくければ大衆なるによりて見ることあたはざりき 四 これを見んとてはしりゆき桑樹にのぼれり耶蘇そのみちを過んとするゆゑなり 五 耶蘇こゝにきたりあふぎてこれを見いひけるは 六 ザアカイよいそぎくだれ今日われなんぢの家にやどらんかれいそぎくだりてよろこびて耶蘇をむかへたり 七 衆人これをみて怨言いひけるはかれはゆきて罪あるひとの客となれり 八 ザアカイたちて主に

よろづ所有の半をまづしきものにほどこさん。もしわれ誣
訟て人よりうばひとりしところあらば四倍にしてこれをつぐ
のふべし九耶穌かれにいひけるは。今日この家すくひをうることを
得たり。それこの人もアブラハムの裔なればなり十それ人の
子はうしなひしものをたづねて救んためきたればなり十一衆
この言をききけるときまた譬をまうけていへり。これエルサレム
にちかくなりしにより人びと神の國ただちに顯明べしとおもふが故
なり。十二ある貴者ありて領地をうけんとて遠國
へゆくとき十三十人の僕をよびてかれらに金十斤をあたへ
ていひけるは。われかへるまで商賣せよ十四その國民かれをう

らみてあとより使をつかはしいひけるハ。われらこの人を王
とあふぐことをこのまずと十五 領地をうけてかへりしとき。おの〱
あきなひしてなにほどの利をえたるかをしらんとて金
をあたへおきたる僕どもを召と命じぬ十六 さてはじめの一人き
たりていひけるハ。主よなんぢの一斤ハ十斤の利をえたり十七 主
人いひけるハよし善僕よなんぢハつらぢうのめのなに忠なれバ
十の邑をつかさどるべし十八 またつぎの一人きたりていひけ
るハ。主よなんぢの一斤ハ五斤の利をえたり十九 主人いひけるハ。
なんぢも五の邑をつかさどるべし二十 また一人きたりていひ
けるハ。主よなんぢの一斤ハこゝにあり。われ手巾につゝみて

藏おきたりき 二一 それなんぢ嚴人なるがゆゑにわれおそれたり。なんぢ置ざるものをとり播ざるものを獲ひとなればなり。二二 主人いひけるは。あしき僕よわれなんぢの口によりてなんぢを鞫べし。なんぢわれは嚴ものにて置ざるものをとり播ざるものをかると知る 二三 しかるに何ぞわがきたるとき本と利をともにもとむるにわが金を為替坐にあづけざりしや。二四 遂にかたはらに立るものにいひけるは。この人の一斤をとりて十斤のもてるものにあたへよ 二五 ひとびと主人にいひけるは。主よその人すでに十斤をもてり 二六 主人いひけるは。われなんぢらにつげん。それもてるものはあたへられ。

もたぬものはその所有ものまでもとらるべし 二七 またわが
敵なるわれが支配をこのまざるものをここにつれきた
りてわがまへにころせ 二八 耶穌このことをいひしのち衆に
さきだちてエルサレムにのぼりたまひ 二九 橄欖となづくる山に
あるベツパゲとベタニヤにちかづけるときその門徒ふたりをつ
かはしていひけるは 三十 對面のむらへゆけ。彼處にいら
ば人のいまだ乗ざるところのつながるる驢駒にあふべし
それを解てひききたれ 三一 もしひとなんぢらになにゆゑ
解やといふものあらばかくいふべし。主の用なり 三二 奉遣
たるものゆきければ。そこにてそのいひたまへるごとく

遇ぬ 三三 かれらが驢駒をとくとき。その主どもかれらになん
ぞ驢駒をとくやといひしかバ 三四 こたへて主の用なりといひ
て 三五 これを耶蘇にひきたり。おのが衣をろバのこまにおき
耶蘇をそのうへにのせ 三六 耶蘇ゆきけるとき衆そのころも
を路上にしきけり 三七 耶蘇ヱルサレムにちかづき橄欖山をく
だらんとするとき。大衆のでしみなよろこびその見し
ところの奇跡なるすべての能によりて大聲に神を讃美
していひけるハ 三八 主の名によりてきたる王はさいはひなり。天
にありてハ和平に。いとたかきところにハ榮光あるべし
三九 おほぜいのうちよりあるパリサイのひと耶蘇にいひける

は。師よなんぢの門徒をいましめよ 四十 いゑすこたへていひける
は。我なんぢにつげんこの輩もし黙止ならば石さけぶべし
四十一 すでにちかづけるとき城中をみてこれがために哀哭い
ひけるは 四十二 あゝなんぢもしなほ今このなんぢの日においてなんぢの平安にかゝはることをしらば福なるにいま
なんぢの目にかくれたり 四十三 なんぢの敵なんぢのまはり
に塁をきづき四方よりかこみせめ 四十四 なんぢとその中なる
児女をうちたふし石を石のうへにのこさゞる日きた
らん。これなんぢその眷顧たまふの時をしらざればなり
四十五 耶穌みやにいりそのうちにて貿易せるものをおひい

だし 四六 かれらにいひけるハ。わがいへハ祈禱(いのり)の殿(との)なりと志るされたるに なんぢらこれを盗(ぬすびと)の巣(す)となせり 四七 耶穌(やそ)日(ひ)ごとに殿(みや)にてをしふ。祭司(さいし)のをさ學者(がくしや)たちの尊者(たふときもの)どもハかれを殺(ころ)さんとすれども民(たみ)みなこゝろをかたむけてそのをしへをきけるがゆゑに 四八 なすべきかたをしらざりき

第二十章

一 そのころ耶穌(やそ)ハ殿(みや)にて民(たみ)に訓(をしへ)福音(ふくいん)を宣(のべ)しに。祭司(さいし)の長(をさ)學者(がくしや)長老(としより)とともにちかより耶穌(やそ)にのぞみていひけるハ。なんぢの權威(けんゐ)をもちてこのことをなすや 誰(た)がこの權威(けんゐ)をあたへたるやわれらにつげよ 三 こたへていひけるハ。われも一言(ひとこと)なんぢらにとはん。まづわれにつげよ

四ヨハネのバプテスマは天よりか人よりか 五 かれらたがひにいひけるはもし天よりといはゞなにゆゑかれを信ぜざりしやといはん 六 もし人よりといはゞ民みなヨハネを預言者と信ずれば我らを石にて撃んとす 七 つひにこたへていづれよりなるかしらずといへり 八 耶蘇かれらにいひけるは。我もまたなにの權威をもてこれを爲かをなんぢらにつげじ○ 九 またたちこのたとへを民にかたれり。あるひと葡萄園をつくり農夫にかして久しく他國へゆきしが 十 期いたりければぶだうぞのゝ果をうけとらんために僕を農夫のもとへつかはしけるに。農夫どもこれを撲て

たきてむなしくかへらせり 十一 また他のしもべをつかはせしにこれをもうちたゝき辱しめてむなしくかへらせたり 十二 また三次しもべをつかはせしにこれをも傷ておひいだしけり 十三 ぶだうばたけの主いひけるは、我いかになさん、我が愛子をつかはすべし、これをみなば恭敬ならん 十四 農夫どもこれをみてたがひに議いひけるは。これは嗣子なり、いざころさん、業をわれらのものになすべしとて 十五 かれを葡萄園のそとにいだして殺せり、しからば葡萄園のあるじいかにかれらを處べきや 十六 彼きたりてこの農夫どもをほろぼし、ぶだうばたけを他人にあたふべし。

人々これをきゝていひけるハ然ハあらざれ 十七 耶穌かれら
をみていひけるハ匠人のすてたる石これぞ屋隅の首石
となれりとしるされしハなんぞや 十八 この石のうへにおつるもの
ハ壊らん石もし人におちなバそのものハつぶさるべし 十九 祭司
のをさと學者どもそのおのれをさしてこの譬をいひた
るをさとりこのとき耶穌をとらへんとせしかども民をお
それたり 廿 さてかれらこれをうかゞひその言をとりて方伯
の政事の權威にわたさんとしてみづから義人といつはれる
廿一 偵者をつかハせり。就て耶穌にとひけるハ師よわれら
なんぢの言ところなしたまふところ正しうのこのゝよぶらを

誠をもて神の道ををしふるを知る 二二 われら税をカイザルに
をさむるハ宜やいなや 二三 耶蘇その詭譎なるを知りていひける
ハなんぞ我をこゝろむるや 二四 デナリをわれに見せよ。この像と
號ハたれなるか。こたへてカイザルなりといふ 二五 耶蘇いひける
ハ。さらバカイザルのものハカイザルにをさめ。神のものハ神
にをさめよ 二六 かれら民のまへにてその言をとらへえず
そのこたへを奇とおもひて默然たり○ 二七 復生ことなしと
いふサドカイの人きたりて耶蘇にとひけるハ 二八 師よモーセわ
れらに書あたへけるハ。ある人のきやうだい妻ありて子なく
して死なバ兄弟その妻をめとり子を生てその嗣をつがせ

べしと 二九 さらば七人の兄弟あらんに長子つまをめとり子なくして死 三十 ついで二のものその婦をめとり子なくして死 三一 ついで三もこれをめとり七人おなじくこれをめとり子なくして死 三二 つひに婦も死たり 三三 さらば七人ともにこの婦を妻とせしゆゑに復生たるときは誰の妻となるべきか 三四 耶蘇こたへていひけるはこの世の子はめとりとつぐことあり 三五 かの世にいり死より復生にいたるものは娶嫁ことなし 三六 これまた死ることあたはざるがゆゑなり。それは天の使とひとしく復生の子にて神の子なればなり 三七 さて死しもののよみがへることにつきてそはモーセ棘中の

篇に。主をアブラハムの神イサクの神ヤコブの神といひてこれを
あらはせり。三八それ神はしぬるものゝ神にあらず生るもの
の神なり。それ神のまへにはみな生るものなればなり三九その
學者たちこたへいひけるは。師よよくいへり四〇このゝちあへて
耶穌にとふものなかりき○四一耶穌かれらにいひけるは。ひ
とぐいかなればキリストをダビデの裔といふや四二四三ダビデみづ
から詩の篇に。主わが主にいひけるは。われなんぢの敵をな
んぢの足凳となすまでわが手のみぎに坐すべしといへ
り四四さればダビデこれを主とよべばいかでその裔
ならんや四五民これをきゝけるときそのでしにいひけ

るれ四六長服をきてあるくことをこのみ市上にて人のあいさつ會堂の高坐ふるまひの上坐をよろこぶ學者をつゝしめよ四七かれらは嫠婦の家をのみ。いつはりてながき祈をなすとて。罪せらるゝこといともおもし

第二十一章

耶穌目をあげ富るひと〲の捐輸をさいせんばこにいるゝを見る二またあるまづしき嫠婦のレプタふたつをいるゝをみていひけるは三われ誠になんぢらにつげん。このまづしき嫠婦はすべてのものよりも多いれたり四そはかのものらはみなその羨餘あるところより神のさゝげものにいれたり。このをんなは不足ところよりそのしんだいをこ

と〴〵いれたれバなり○五 またあるひと殿(でん)の美石(びせき)と奉納(ほうなふ)ものをもて修飾(かざれ)ることをかたりしに六 耶穌(いえす)いひけるハ なんぢらのみるところのもの石(せき)ハ石(せき)のうへにものこさずくづされて日(ひ)いたらん七 かれらとふていひけるハ 師(し)よ いづれのときこの事(こと)あらん 又(また)このことのきたらんとするときハ いかなる兆(きざし)あるや八 耶穌(いえす)いひけるハ なんぢらつゝしみてまどハさるゝことなかれ。そハおほくのものわが名(な)をおかしきたり 我(われ)ハキリスト なり 時(とき)ハちかよれりといはん。さりとてなんぢらしたがふなかれ九 戰(たゝかひ)みだれをきくときおそるゝなかれ。このことのこのさきにあらん止(やむ)をえざることなり。されど末期(をはり)ハたい

まだをはりはならず十またいひけるは。民はたみをせめ國は
くにをせめ十一各處におほいなる地震饑饉疫病おこり。また
おそるべきことどもおほいなる異象天よりあらはるべし。十二
このことよりさきにひとびとなんぢらをとらへ窘迫會堂に
および獄にわたし。わが名のために王および侯のまへにひきゆく
べし。十三されどもなんぢらがこの事はあかしの證となるなり十四ゆゑ
になんぢら先なにをいはんとおもひわづらふまじきことをむね
心にさだめよ十五それわれなんぢらに仇するもの辯駁
まして激對ことをなしえざるべき口と智とをあたへなんぢら
にあたへん。十六またなんぢら父母兄弟親戚朋友などより

にくまれん。なんぢらのうち或(あるもの)はころさるべし 十七 なんぢら
わが名(な)のためにひとびとに憾(うら)まれん 十八 されどもなんぢらの首髪(かみのけ)
ひとすぢもうしなはれじ 十九 なんぢら忍耐(にんたい)てその生命(いのち)をたも
つべし 二十 なんぢら軍勢(ぐんぜい)にエルサレムのかこまるゝをみるならば。
その亡(ほろび)ちかきにあると知るべし 廿一 その時(とき)ユダヤにをるものは山(やま)に
のがれよエルサレムにをるものはいでよ郷下(いなか)にあるものはエルサレム
にいるなかれ 廿二 これ刑罰(けいばつ)の日(ひ)にしてしるされたることのみな
応(とげ)らるゝ日(び)なり 廿三 その日(ひ)には懐孕(みごもれるもの)と哺乳者(ちのみごあるもの)はわざはひな
るかな。これ地(ち)におほいなる災(わざはひ)ありて怒(いかり)この民(たみ)におよぶ
べければなり 廿四 ひとびと刀刃(つるぎのは)にふれまたとらはれて諸(しよ)

國にひかれエルサレムは異邦人の時みつるまではいはうじんに
蹂躙るべし 二五 また日月星に異象あるべし。地にては諸國の人
かなしみて海と波との瀾濤によりてうろたへ 二六 ひとびと畏れ
つゝ世界にきたらんとすることを俟なやむべし。これ天のい
きほひ震動さるべければなり 二七 そのときひとびと人の子の
權威とおほいなる榮光をもて雲にのりきたるを見るべし 二八
これらのことの成そめんときなんぢら起てなんぢらの首を
あげよ。それなんぢらの贖ちかづけばなり 二九 耶蘇たとへを
かれらに語けるは。無花果とすべての樹をみよ 三十 すでに萌
せばなんぢらこれを見てみづから夏はすでに近しと知る 三一 かく

のごとくなんぢらもこれらのことの成をみば神の國の
ちかきを志るべし 三二 まことに我なんぢらにつげん。この事ことご
とくなるまでこの世は逝ざるべし 三三 天地はすたるべし。されど
わが言はすたることなし 三四 なんぢら自ら慎よ
おそらくは飲食にふけり世事にまとはされ、なんぢらのこゝ
ろ昏迷なりておもひよらざるときにこの日なんぢらに
臨ん 三五 これ機檻のごとくあまねく地のうへに居ものにの
ぞむべし 三六 このゆゑになんぢら儆醒てこの のぞまんとす
るすべてのことを避また人の子のまへに立うるをうるためにつね
にいのれ 三七 耶穌ひるは殿にてをしへ夜はいでて橄欖とい

つる山に宿りぬ 三八 庶民みなきかんとて朝はやく
殿にきたりぬ

第二十二章

逾越といへる除酵餅節ちかづけり 二 祭司の長学者らいかにして耶蘇をころさんとうかがふ、そは民をおそれたればなり 三 さてサタン十二のうちのイスカリオテととなふるユダに入りぬ 四 かれ祭司の長たちと庶司どもにゆき、いかにしてか耶蘇をわたさんとかたりければ 五 かれらよろこびて銀子をあたへんと約す 六 ユダうけがひて人びとの居ざるときに耶蘇をわたさんと機をうかがへり 七 さて除酵餅節なるすぎこしの小羊をころすべき日きたりければ

八耶穌ペテロとヨハネをつかはさんとしていひけるは ゆきてわれらが食せんために逾越をそなへよ 九かれらこたへけるは 何處にこれをそなへんとおもふか 十耶穌いひけるは 城下にいらば水をいれたる瓶をもちたる人なんぢらに遇べし その入ところの家にしたがひゆきて 十一家のあるじにいへ 師なんぢにいふ われ門徒とともに逾越を食すべき客房はいづこにあるやといへ 十二さらばかれ彼らにそなへたるおほいなる樓をしめすべし。そこにて備よ 十三かれらゆきて耶穌のいひたまひしところのごとく遇しかばすぎこしのそなへをなせり 十四時いたりければ耶穌食につきぬ。十二使徒も

とこりにつきたり 十五 耶穌(いえす)かれらにいひけるハ我(われ)くるしみを
うくるまへになんぢらとともにこの逾越(すぎこし)を食(しよく)せんこと
大(おほい)にねがへり 十六 われなんぢらにつげん これを神(かみ)の國(くに)に
應成までふたゝびこれを食(しよく)せじ 十七 耶穌(いえす)杯(さかづき)をとり謝(しや)し
ていひけるハ。これをとりてたがひにわかてよ 十八 われな
んぢらにつげん。神(かみ)の國(くに)のきたるまでハ葡萄(ぶだう)よりつく
りしものを飲(のま)じ 十九 また餅(パン)をとり謝(しや)して擘(さき)かれら
にあたへていひけるハ。これハなんぢらのためにあたふる
わが身體(からだ)なり。われを記んためにこれをなせ 二十 また食(しよく)
してのち杯(さかづき)をとりいひけるハ。この杯(さかづき)ハなんぢらのために

るゝわが血よりして立るところの新約なり 二一 されどわれ
をわたすものゝ手はわれとともに案にあり 二二 人の子はか
うしてさだめられしごとく逝ん。されども人の子を
わたす人はわざはひなるかな 二三 衆このことをせんものゝ
は誰なるかとたがひにとひぬ 二四 またかれらのうちにて
長たらんものは誰なるかと互のあらそひありき 二五 耶蘇か
れらにいひけるは異邦人の王はその民をおさむ。またその
のうへに權をとるものは恩をほどこすものと稱らる 二六 され
どなんぢらは如是あるべからず。なんぢらのうち大なる
ものはちひさきがごとく、首なるものはつかふるもののごとく

なるべし 二七 食につけるものと役事ものといづれか大なる
る。食につけるものにあらずや。されども我ハなんぢらの中に
つかふるもののごとし 二八 わが患難においてわれとともに居
しものハなんぢらなり 二九 わが父のわれに任ぜしごとく
われもなんぢらに國を任ずべし 三十 これなんぢらわが國に
おいてわが食案に食飲し。この位に坐してイスラエルの十二
の支派をさばかんがためなり 三一 主またいひけるハ。シモンよシモン
よ。サタンなんぢらをもとめて麥のごとく簸んとしきて 三二 されど
もなんぢの信仰のたえざるやう爾のためにいのりたる
んお歸正んときその兄弟をかたくせよ 三三 シモンいひけるハ。

主よわれ獄にまでもなんぢとともにゆかんとこゝろさだめたり 三四 耶穌いひけるはペテロわれなんぢにつげんけふ鶏なかざるまへになんぢ三次われをしらずといはん○ 三五 またかれらにいひけるはわれ財布旅袋履をもたせずなんぢらを遣せしときなにの缺たることありしや。こたへけるはなかりき 三六 耶穌かれらにいひけるは今はさいふあるものはこれを取たび袋あるものもまたしかり。これらなきものは衣服をうりて刀をかふべし 三七 われなんぢらにつげんかれは罪人のうちにかぞへられきとありしと録さるゝこの言はつひにとげらるべし。そはわれを指るこ

とくなを成(とげ)らるべけれバなり 三八 かれらいひけるハ 主(しゆ)
みよこゝにふたつの刀(つるぎ)あり。耶蘇(いゑず)かれらにいひけるハ。足(たれ)り 三九 耶蘇(いゑず)
いでゝ例(れい)のごとく橄欖(かんらん)の山(やま)にゆきけるにその門徒(でし)もした
がへり 四十 そのところにいたりてかれらにいひけるハ。誘惑(まどわし)
にいらざらんためいのるべし 四一 耶蘇(いゑず)かれらをはなれて石(いし)の投(なげ)らるゝ
ほどへだゝり曲膝(ひざまづき)いのりいひけるハ 四二 父(ちゝ)よもし聖旨(みこゝろ)ならバ
それこの杯(さかづき)をわれよりはなちたまへ。されどもわが意(こゝろ)に
あらせで聖旨(みこゝろ)のまゝになしたまへ 四三 天使(つかひ)天(てん)よりかれ
にあらハれて健壮(ちから)をそへぬ 四四 耶蘇(いゑず)いよ〳〵哀(かな)しきりに
いのりけれバその汗(あせ)ハ血(ち)のしたゞりのごとく地(ち)におちくる

四五 祈よりたちて門徒にきたりたまふに憂てねむりゐるを見 四六 いひけるハなんぞねむるや起てまどひにいらざるやう祈れ 四七 かく言とき許多のひとびときたる。まづ十二のひとりなるユダといへるものさきだちて耶穌に接吻せんとちかよれり 四八 耶穌いひけるハ。ユダなんぢは接吻をもて人の子をわたすか 四九 そのこのあたりにをるものども事のなりゆかんとするを見ていひけるハ主よつるぎをもて撃べきや 五十 そのうちのひとり祭司の長のしもべをうちてその右の耳をきり おとせり 五一 耶穌こたへて。これまでを聴せといひ。その耳にさはりていやしたまふ 五二 耶穌

にきたりし祭司(さいし)のをさ殿(みや)の庶司(つかさびと)と長老(ちやうらう)どもにいひけるは。なんぢら刀(つるぎ)と棒(ぼう)とをもちきたり強盗(ぬすびと)にむかふがごとくきたるか 五三 われ日々(ひゞ)になんぢらとともに殿(みや)にありしときはわれに手(て)をくだすことなかりき。しかるに今(いま)はなんぢらの時(とき)また黒暗(くらやみ)のいきほひなり 五四 かれら耶蘇(いえす)をとらへ曳(ひき)て祭司(さいし)のをさの家(いへ)につれゆけり。ペテロはるかに従(したが)ひぬ 五五 ひとびと中庭(なかには)のうちに火(ひ)をたきてともに坐(ざ)しければペテロもそのなかに坐(ざ)せり 五六 ある婢(はしため)かれが火(ひ)のこのかたに坐(ざ)せるを見(み)これをつら〳〵みていひけるは。この人(ひと)もかれとともにありし 五七 ペテロうけがはずして。女(をんな)よわれかれをしらず

といへり五十八志ばらくして他の人もまた見ていひけるハな
んぢもかれらの一人なり。ペテロいひけるハ人よわれハ志から
ず五十九おほよそ一時ほどすぎてまたある人いひはりけるハ。
まことにこの人もかれとともにありし。これガリラヤの人な
るがゆゑなり六十ペテロいひけるハ人よわれなんぢの言ところを
識らずといひもあへずして忽ちにはとりなきぬ六十一主身をかへ
りてペテロを見たまへり。今日にはとり鳴まへに三次われを
志らずといはんと主のいひたまひし言をペテロおもひいだし
六十二そとへいでていたく哭けり○六十三耶穌をまもれるものども
嘲弄してこれを撲六十四その目をおほひとふていひけるハ。なんぢ

をうつものは誰なるや預言せよ 六五 またさま〴〵のことをもいひてこれを譏讟れり 六六 平旦に民のとしより祭司のをさ學者どもあつまりて耶穌を集議所にひきゆきて 六七 いひけるはなんぢもしキリストならばわれらにつげよ。耶穌いひけるは。たとひ我なんぢらにいふとも信ぜざるべし 六八 またたとひ我なんぢらにとふとも答ざるべし 六九 今よりのち人の子は大權ある神のみぎに坐せん 七十 みないひけるは。さらばなんぢは神の子なるか。耶穌いひけるは。なんぢらがいへるごとく我これなり 七一 かれらいひけるは。なんぞ證據をもちゐんや。われらみづからその口よりきけり

第二十三章 一 ひと〴〵こぞり起て耶穌をピラトにつれゆき 二 これを訟
いひけるハ。われらこの人が民をまどハし税をカイザルにを
さむることを禁止。みづから王なるキリストととなふるを見
たり。三 ピラト耶穌にとふていひけるハ。なんぢハユダヤびとの
王なるか。こたへけるハ。なんぢがいへるごとし 四 ピラト祭司の
長たちと衆にいひけるハ。われこの人にあへて罪あるを
ミず。五 かれらますますはげしく極力いひけるハ。かれハガリラヤよりは
じめてあまねくユダヤ域をへてこの處まできたりて民
をみだせり 六 ピラトガリラヤときゝてこの人もガリラヤ人なる
かをとひ 七 そのヘロデの所管なるをしりてこれをヘロデに

あくる。この時ヘロデもエルサレムにありしが八耶穌を見
てはなハだよろこべり。そハ許多なるかれがうハさをきゝ
てひさしくこれを見んことをねがひ。またその奇跡な
る事をこゝろみんと望みてまぢなり九こゝのゆゑんを多言をもて
とひけれども耶穌なにもこたへざりき十祭司のをさ學
者たち側にたちて志きりにうつたへぬ十一ヘロデその
士卒とゝもにかれをかろしめ嘲弄して華服をきせ。
すぐピラトにおくりき十二ピラトとヘロデさきに仇ありし
が當日したしみをなせり○十三ピラト祭司のをさ
有司および民どもをよびあつめて十四いひけるハ。なんぢらこの

人をなれはつれきたりて民をみだしたるものなりとくせり。われなんぢらが訴るところをもてなんぢらのまへに鞫どもその罪あるをみとめず
十五 ヘロデもまたしかり。そはなんぢらをヘロデにつかはせどもまた耶穌がせしことの死罪にあたるをみざりき
十六 故にわれむちうちてこれをゆるさん
十七 それこの節期にはかならずひとりを釋ことあたはざるなり
十八 この時ことごと一齊によばはりてこの人を除きバラバをわれらにゆるせといふ
十九 バラバは城下に一揆をおこし人をころして獄にいりしものなり
二十 ゆゑにピラトは耶穌をゆるさんとおもひて復かれらにいひしかど
二十一 衆よばはりて。これを十字架につけよ

十字架につけよといふ 二二 ピラト三次いひけるは。かれはなんの悪事をせしや。われいまだかれの死罪にあたることをみざれば笞うちてゆるさん 二三 かれらますますはげしく聲をたてゝこのものを十字架につけんといひ募まり。ついにかれらと祭司の長さわがしき声かちけり 二四 ピラトその求のごとくさだめて 二五 かれらがねがふ一揆をおこし人をころして獄にいれられしものを釋し、そのこゝろにまかせて耶穌をわたせり 二六 かれら耶穌をひきゆくとき田間よりいできたるクレネのシモンといへるものをとらへそれに十字架をおはせて耶穌にしたがはせしむ 二七 おほくの民および婦たちのしたがふ。婦たちは

かれをなきかなしめり 二八 耶蘇かれらをかへりみていひけるは。
エルサレムの女子よわがために哭なかれ。たゞおのれとおのが
子のためになけ 二九 産ざるもの いまだ孕ざるの胎 いまだ哺
せざるの乳は福なりといはん日きたらん 三十 その時ひとびと
山にむかひてわれらがうへに頽よ陵にむかひてわれらを掩へとい
はん 三一 もし青木にさへかくなさば枯木はいかゞせらるらん
○三二 また他に二人の罪人を耶蘇とともに死罪におこなは
んとてひきゆけり 三三 かれらクラニオンといへるところにいた
りてこゝに耶蘇および罪人を十字架につけぬ。一人を耶
蘇の右ひとりを左につく 三四 耶蘇いひけるは。父よかれらをゆ

ゆるしたまへその所為をしらざればなり。かれら鬮をして耶穌の衣服をわかつ。三五たみは立て耶穌を見たり。有司もまたあざけりていひけるは。かれは他人をすくへり。もしキリスト神のえらみたまへるものならば自ですくふべし。三六兵卒もまたかれを嘲弄し來り酢をあたへて
三七なんぢもしユダヤびとの王ならばみづからをすくへといへり。三八またギリキヤ ロマ ヘブル の文字にて。これはユダヤびとの王なりとかける罪標をそのうへに建たり ○三九懸られたる罪人のひとり耶穌をそしりていひけるは。なんぢもしキリストならば おのれとわれらをすくへ 四十 ほかの一人こ

こたへてかれをいましめいひけるは。なんぢおなじく罪をうけるながら神をおそれざるか四一われらは當然なり所行のむくいの報をうくるなれどこの人はなにも不是ことをなさゞりしなり四二かくて耶蘇にいひけるは。なんぢその國にきたらんときはわれを憶ひたまへ四三耶蘇これにいひけるはまことに我なんぢにつげん今日なんぢはわれとともに樂園に在べし○四四時およそ十二時ごろより三時にいたるまであまねく地のうへ黒暗となりたり四五日光くらくて殿のうちの斗帳まんなかより裂たり四六耶蘇おほごゑにてのべけりいひけるは。父よわがたましひをなんぢの手にあづくるといひて

氣たゆ 四七 百夫の長このありしことをみて神をあがめていひけるは。まことにこのひとは義人なりきと 四八 これを見んとて聚まるひとびとこゝなることのありしをみて胸を搏てかへりぬ 四九 耶蘇の相識のひとびとおよびガリラヤより志たがひし婦どもとほく立てこれらのことを見たり○集議官なるヨセフといへる善なる義なるひとあり 五一 かれらの評議と所爲をうけがはざりき。これはユダヤのアリマタヤの邑の人にて神の國をまてるものなり 五二 この人ピラトにゆき耶蘇の屍をこひて 五三 これをおろし布をもてつゝみいまだ人を葬しことなき石の鑿る墓におけり

五四 この日は備節なり。また安息日ちかづきぬ 五五 ガリラヤより
耶穌とともにきたりし婦たち後にしたがひてその墓と屍
のおかれたるさまを見たり 五六 かれらかへりて香料と香膏をとと
のひおきて誡にしたがひ安息日をやすめり

第二十四章

一 七日の首日の昧爽にこの女たち備おきたる香料
をもちて墓にきたりしにほかの女たちもともにきたれ
り 二 かれら石の墓より轉されしを見て 三 入けれども主耶
穌の屍をみざりき 四 これがために躊躇をりしにかゞやける
衣服をきたる二人そのかたはらにたてり 五 かれらおそ
れて面を地にふせけるにその人いひけるは。なんぢらなん

んぞ死たるもののうちに生るものを求るや 六 かれハここ
にあらずそ復活たり。かれガリラヤに居しときなんぢらに
かたりて。人の子ハかならず罪ある人の手にわたされ十
字架につけられまた第三日によみがへるべしといひたりしを。
憶いでよ 八 かれらその言をおもひいで 九 墓よりかへりてこ
れらのことをすべて十一の門徒とそのほかの弟子たちに告
十 これらのことを使徒につげたるものハマグダラのマリア。
ヨハンナ。ヤコブの母なるマリアまた他にともにありし女たち
なり 十一 使徒そのいふところを虚誕とおもひて信ぜざりき 十二 ペテロ
起てはしり墓にゆきかがまりて臬布のかたよせあるを見

てその過ところのことを奇しとおもへり〇十三 當日ふたりの
門徒エルサレムより三里許へだてたるエマヲといへるむら
にゆきけるに十四 たがひにこれらの所遇ことどもをかたり
あへり十五 かたらひ論ずるときに耶蘇みづから近づきてとも
にゆけり十六 されどその目まどはされて知ことを得ざりき十七 耶蘇
いひけるはなんぢらあゆみつゝたがひにこのかなしみ談論ことはな
んぞや十八 その一人のクレオパといへるものこたへけるはなんぢひとり
エルサレムの旅びとにて獨このごろありしことをしらざるか十九 こた
へけるはなにごとぞやとこれにいひけるは。ナザレの耶蘇のことなる
りこの人は神と萬民のまへにおいて行と言とにおい

なる能ある預言者なりしが 二十 祭司のをさと有司らか
れをば死罪にさだめて十字架につけたり 二十一 われらは
イスラエルを贖はんものはこの人なりと望みし、さのこそ
きのふならびに此等のことの成しよりけふは第三日なる
に 二十二 われら、ともがらの中なる婦たちわれらを驚駭せり。
かれらあさまだきはやく墓にゆき 二十三 その屍をえずしてきた
り、天の使あらはれて彼をよみがへりたりといへるを見
たりとつぐ 二十四 また我らとともにありしものゝ墓に
ゆきたるに婦のいへるごとくにて且かれを見ざりき
二十五 耶穌いひけるは。預言者のすべていひしところを信

ずるこゝろの遅(おそき)おろかなるものよ 二六 キリストこれらの
難(なやみ)をうけてその榮光(えいくわう)にいるべきにあらずや 二七 かくてモーセ
よりはじめすべての預言者(よげんしや)をもはじめすべての聖書(せいしよ)においてそ
のおのれにつきてのことを詳明(しやうめい)されたり 二八 かれらゆく
ところの郷(さと)にちかづきけるに。彼(かれ)はなほさきへゆかんとするけ
しきをなせしかば 二九 かれらしひてとゞめいひけるは。日(ひ)かたぶき
て暮(くれ)におよびぬ。われらとゝもに止(とゞま)れ。かれいりてとゞ
まる 三十 ともに食(しよく)につけるとき餅(ぱん)をとり謝(しや)してこれを擘(さき)
またこれにあたへければ 三一 二徒(ふたり)のものゝ目(め)あきらかになり
りて彼(かれ)をしりぬ。また忽(たちまち)その目(め)にみえずなりぬ 三二 かれ

らたがひにいひけるは途間にてわれらとかたりわれらに聖書
を解ひらけるときわれらが心うち熱しにあらずや 三三 この
ときうちたち起てヱルサレムにかへり十一の門徒および同人のあ
つまれるにあふ 三四 その人々いひけるは主實に
よみがへりシモンにあらはれたり 三五 二徒も途間にてあり
しことどもまた餅を擘たまへるによりて識たることをかたり
り 三六 このことどもをかたるとき耶穌みづからその中に立
ていひけるはなんぢら平安なれ 三七 かれら驚駭おそれて
みるところのものを靈ならんとおもへり 三八 耶穌いひける
はなんぢらなんぞおどろくやなんぞこころに疑おこる

や
三九
わが手わが足をみてわれなるをしれ。われを摸て
みよ靈はわがあるをなんぢらが見るごとく肉と骨ハあ
らざるなり
四〇
かくいひてその手足をみせしに
四一
かれら喜
べどもなほ信ぜずして。奇異あるときに耶蘇これに食物あるや
といひければ
四二
炙たる魚と蜜房をあたふ
四三
これを取て
そのまへにて食せり
四四
またかれらにいひけるハ。モーセのお
きてと預言者の書また詩の篇にしるされたるわがことに
つきてすべてのことのかならず應べきをわれなん
ぢらとともにありし時かくいへるなり
四五
こゝにお
いて聖書をさとらせんとてその聰をひらき
四六
いひける

へ。まさによふうしく録しまつれり。かくのごとくキリストも苦をうけ第三日
によみがへるべし
四七 またその名によりて悔改と赦罪を
エルサレムよりはじめ萬國にのべつたへらるべし
四八 なんぢら
はこれらの事の證人なり
四九 それわが父のちかひのものを
なんぢらにおくらん。なんぢら上より權をさづけらるゝ
までエルサレムにとゞまれ
五十 耶穌かれらをひきゐてベタニヤ
にいたり手を擧てかれらを祝す
五一 祝するときかれら
をはなれ天にあげられたり
五二 かれらこれを拜していたく
よろこびてエルサレムにかへり
五三 つねに殿にありて神を
頌美まつり祝謝せり。アーメン

耶穌降生一千八百七十八年

翻譯委員社中

米國聖書會社

新約聖書約翰傳

明治十一年

日本横濱上梓

約翰傳福音書

第一章 太初にことばあり。ことばハ神とともにあり道ハす
なはち神なり 二 この道ハはじめに神とともにありき 三 萬
物これによりてつくらる。つくられたるもの一としてこ
れによらでつくられしハなし 四 これに生あり。このいのち
ハ人のひかりなり 五 光ハくらきにてりて暗ハこれをさとら
ざりき○ 六 さてここに神のつかはしたまへるヨハネといふ
るものあり 七 そのきたりしハ證のためなり。すなはち光に
つきてあかしをなしすべての人彼によりて信
ぜしめんがためなり 八 かれハひかりにあらず光について

證をなさんためにきたれり 九 それすべての人をてらす眞のひかりハ世にきたれり 十 これ世にあり。よハかれにつくられたるに世これをしらざりし 十一 かれおのれの國にきたりしにその民これをうけざりき 十二 これを接その名をしんぜしものにハ權をたまひてこれを神の子となせり 十三 かゝる人は血脈によるにあらず情慾によるにあらず。ひとの意によるにあらずたゞ神によりてうまれしなり 十四 それことば肉體となりてわれらのうちにやどれり。われらその榮をみるにまことに父のうみたまへる獨子のさかえにして恩寵と眞理にてみてり 十五 ヨハネかれの證をなしてよびいひけ

るもこれさきにわれにおくれきたらんものハ我(われ)よりまさ
れるものなればぞそハ我(われ)よりさきにありしものなれバなりと
いひしハこの人(ひと)なり 十六 われら皆(みな)このれにみちたるその中(うち)
よりうけてめぐみに恩寵(めぐみ)をくはへらる 十七 律法(おきて)ハモーゼに
よりてつたはりめぐみとまことハ耶穌(いエス)キリストによりてき
たれり 十八 いまだ神(かみ)をみしひとあらず たゞうみたまへるひ
とり子(ご)すなはち父(ちゝ)のふところにあるものこれをあら
はせり〇 十九 ユダヤびと祭司(さいし)とレビの人(ひと)をエルサレムより
ヨハネのもとにつかはしなんぢハ誰(たれ)ぞととはしめたると
きあかしせること左(さ)のごとし 二十 彼(かれ)かくすところなくいひ

あらはして我(われ)はキリストにあらずとあきらかにいへり 二一 またとひけるはさらばなんぢは誰(たれ)ぞエリアなるぞ。いなとこたふ。またなんぢはかの預言者(よげんしや)なるかととひしにしからずとこたふ 二二 ここにおいてかれらまた問(とひ)けるはなんぢはたれなるぞわれらをつかはせしものにわれらがこたへをなし得(うる)やうわれらにつげよ。なんぢみづからいかにいふや 二三 ヨハネいひけるはわれはすなはち主(しゆ)の道(みち)をなほくせよと野(の)によばはるひとのこゑなり預言者(よげんしや)イザヤのいへるがごとし 二四 そのつかはされたる人々(ひとびと)はパリサイのひとなりき 二五 かれらまたヨハネにとひていひけるはさらばなんぢはキリスト

はあらばエリアにあらば彼よげんしやにもあらばしてなんぞバプテスマを施しや
二六 ヨハネこたへいひけるハわれハ水にてバプテスマをさづくされどなんぢらがしらざるところのもの一人なんぢらのうちにたてり
二七 これハおくれきたりて我ハまされるものなりこれハその履の紐をも我ときくにもたらざるものなり
二八 これらのことハヨハネのバプテスマ施せしヨルダンのむかうなるベタニヤにてありしことなり○
二九 あくる日ヨハネ耶穌のおのれにきたるをみていひけるハ世のつみをおふ神の羔をみよ
三十 これハおくれきたらんものなり我よりまされるものなり。そはわれより以前

にありしものなれバなりとわがいひしハこの人(ひと)なり 三一 我
も素(もと)よりこれを人(ひと)としらざりし。されどわがきたりて水(みづ)にてバプ
テスマをほどこすハこれをイスラエルの民(たみ)にあらはさんがた
めなり 三二 ヨハネまた證(あかし)していひけるハ。われ靈(みたま)の鴿(はと)のごと
く天(てん)よりくだりてそのうへにとゞまれるを見(み)たり 三三 われもと
もこれをしらざりしかど我(われ)をつかはして水(みづ)にてバプテスマをほど
こさしめしものわれにいひけるハなんぢ靈(みたま)くだりてそれ
のうへにとゞまるを見(み)ん。これぞ聖靈(せいれい)をもてバプテスマをなさん
ものなり 三四 われもこれを見(み)てそれ神(かみ)の子(こ)たるをあかしせり
三五 あくる日(ひ)またヨハネふたりの門徒(でし)とともにたち 三六 耶穌(いえす)

のあゆくをみて神の羔をみよといふ 三七 このいひつるを門徒
きゝて耶穌にしたがひゆくを 三八 耶穌かれらのしたがへる
を回顧てなんぢらなにを求るやとこれらにいふ。こたへて
ラビいづくにやどるやといふ。ラビを譯ば師といふの義な
り 三九 いえすこれらに来りみよといひたまひければつひにゆ
きてそのやどりたまふところを見てこの日ともにやどれ
り時はひるの四時ごろなりき 四十 ヨハネのいひしことをきゝ
て耶穌にしたがへるふたりのもの、そのひとりはシモン
ペテロの兄弟アンデレーなり 四一 かれまづその兄弟シモンに
あひていひけるは。われらメッシヤにあへりメッシヤを譯ば

キリストなり 四二 さてかれらかれを耶蘇(いゑす)にひきゆきしにいゑすは
視(み)てこれにいひたるはなんぢはヨナの子(こ)シモンなり。なん
ぢはケパととなへらるべし ケパは譯(とけ)ばペテロなり ○ 四三 あ
くる日(ひ)いゑすはガリラヤにゆかんとしてピリポにあひわれに
したがへといへり 四四 ピリポはアンデレーとペテロのすめる
ベッサイダといへる邑(まち)のひとなり 四五 ピリポナタナエルにあひ
ていひけるはわれら律法(おきて)のうちにモーゼがしるせるところ
ろ預言者(よげんしや)たちのしるせしところのものにあへり。すなはち
ヨセフの子(こ)ナザレの耶蘇(いゑす)なり 四六 ナタナエルいひけるをナザレ
よりなにの善者(よきもの)いでんや ピリポこれにいひたるはきたり

くみよ 四七 耶穌ナタナエルのおのがもとにきたるを見かれを
さしていひけるは視よまことのイスラエルの人にしてその
こゝろ詭譎なきものぞ 四八 ナタナエルいゑすにいひけるはい
かにしてわれをしりたまふや耶穌これにこたへていひけ
るはピリポがなんぢをよばざるさきに無花果樹のしたに
なんぢのをるをみたりき 四九 ナタナエルこたへていひけるは
ラビなんぢは神の子なりなんぢはイスラエルの王なり 五十 耶
穌こたへていひけるはなんぢが無花果樹のしたにをれる
をわがみしといへるによりてなんぢ信ずるかこれよりも
おほいなるわざを爾みるべし 五一 またいひけるは我まことに

まことになんぢらはつぐん天ひらけて神のつかひたち人の子のうへにのぼりくだりするを見ん

第二章

第三日ガリラヤのカナにて婚筵ありしが耶穌のはゝもまたそこにをりき 二 いゑすとそのでしも婚筵にまねかる。ぶだう酒たらざれば母いゑすにいひけるハかれらに蒲萄酒なし 四 いゑすはいひけるハ婦よなんぢとわれとなにのかゝはりあらんやわが時はいまだいたらず 五 その母僕どもにむかひてかれがなんぢらに命ずるところをなせよといひおけり 六 ユダヤびとの潔の例にしたがひて四五斗いるその石甕むつそこにありしが 七 耶穌しも

べどもに水をかめにみたせよといひたればかめの口まで
みたせり 八 またこれを今くみとりて持ゆきふるまひを
つかさどるものにもたせよといひければ。これをもちゆけり 九
筵をつかさどるもの酒となりし水をなめてそのいづくよ
りきたるをしらざりきされど水をくみししもべはしれり 十
ふるまひをつかさどるもの新娶をよびてこれにいひけるは
そおほよそ人はまづ旨酒をいだし。さけたけなはなるにお
よびてあしき酒をいだすになんぢはよきさけをいまゝで
とゞめおけり 十一 このことは耶穌がガリラヤのカナにてな
せるは休徴のはじめにしてその榮をあらはせり門徒この

を信ぜ〇 十二 これのち耶蘇そのはゝ兄弟およびでしたち
カペナウムにくだりそこにとゞまることひさしからざりし
て 十三 ユダヤびとの逾越節ちかづきたれば耶蘇エルサレムに
のぼり 十四 聖殿にて牛ひつじ鴿をうるものと兄銀するもの
の坐せるをみて 十五 縄をもて鞭をつくりこれらおよび羊う
しをみやより逐ひいだし兄銀するものの金をちらしその
案をたふし 十六 鴿をうるものにいひけるはこの物をとりて
ゆけ我ちゝのいへをあきなひの家とするなかれ 十七 門徒さ
ちなんぢのいへのために熱心われをくらはんと録されたる
るとおもひいだせり 十八 こゝにユダヤびとこたへて耶蘇に

いひけるハなんぢこれらのことをなしたまふわれらに
なんの休徴(しるし)をしめすや 十九 耶蘇(いえす)こたへてなんぢらこの聖殿(みや)
をこぼてわれ三日(みつか)にてこれをたてんといひければ 二十 ユダヤ
人(びと)いひけるハ此(この)みやをたつるに四十六年を經しになん
ぢ三日(みつか)にてこれをたつるか 二一 耶蘇(いえす)のかくいひつるハそのか
らだの殿(みや)をさせるなり 二二 死(し)よりよみがへりたまへるのち
門徒(でし)たちいえすのこのことをいひたまひしをおもひいだし聖(せい)
書(しよ)といえすのいひしことばを信(しん)ぜり 二三 さて耶蘇(いえす)すぎこしの
節(いはひ)にエルサレムにありしときおほくの人(ひと)いえすのなせししるし
をみてその名(な)をしんぜり 二四 耶蘇(いえす)ハみづからをかれらにまかせ

せバそはすべての人(ひと)をしりたまひ 二五 ひとのこゝろのうちを知(しつ)
ゞゆゑに人(ひと)にほかの證(あかし)をうくるのをもとめざるなり

第(だい)三(さん)章(しやう)

ユダヤびとの宰(つかさ)なるパリサイのニコデモといへるひとあり 二 これよる耶蘇(いえす)にきたりていひけるハラビわれらなんぢハ神(かみ)よりきたりし師(し)なりとしる。それ神(かみ)もし人(ひと)とゝもにあらずバなんぢのなせるこの休徵(しるし)ハひとこれをなすことあたはざれバなり 三 耶蘇(いえす)こたへていひけるハまことにまことに爾(なんぢ)につげん人(ひと)もしあらたにうまれずバ神(かみ)の國(くに)をみることあたはず 四 ニコデモこれにいひけるハ人(ひと)すでに老(おい)ぬれバいかでかふたゝびうまるゝことを得(え)んやふたゝび母(はゝ)のはら

にいりてうまるべけんや 五 耶蘇こたへけるハまことに誠
になんぢにつげんひともし水と靈とによりてうまれざれバ
神のくにゝいることあたはざるなり 六 肉によりてうまる
るものは肉なり靈によりてうまるゝものハ靈なり 七 わがの
爾にあらたにうまるべきことをいひしを奇しとおもふなかれ
八 風ハおのがまゝにふく。なんぢその聲をきけどもいづく
よりきたりいづくへゆくをしらず。すべて靈によりてうま
るゝものもかくのごとし 九 ニコデモこたへていかでかゝるの
ことあらんやといふ 十 耶蘇こたへていひたるハなんぢは
イスラエルの師なるになほこのことをしらざるか 十一 まことに

に誠になんぢにつげん。われらしるところをいひ見しところ
を證するになんぢらはわれらのあかしをうけず 十二 われ
地のことをいふになんぢ信ぜざれば まして天のことをいは
んには何で信ずることをせんや 十三 天よりくだりて天にを
る人の子のほかに天にのぼりしものなし 十四 モーセ野に蛇
をあげしごとくひとの子もあげらるべし 十五 すべてこれを
信ずるものはほろぶることなくして永生をうけしめんが
ためなり 十六 それ神はそのうみたまへる獨子を賜ふほどに世のひ
とを愛したまへりすべてこれを信ずるものはほろぶ
ることなくしてかぎりなきいのちをうけしめんがためな

それ
十七
神のその子をよにつかはしたまふるハ世のつみとさだめんとにあらず。かれによりて世をすくはんがためなり
十八
かれをしんずるものハ罪にさだめられず信ぜざるものハすでにその罪さだまれり。そハかみの生たまふるひとり子の名をしんぜざるによる
十九
つみの定るゆゑハ光よにきたりしに人その行のあしきによりてひかりを愛せず。かへつて暗をあいせしゆゑなり
二十
すべて悪をなすものハ光をにくみそれおこなひを責られざらんがためにひかりにきたらず
二十一
眞理をおこなふものハそれ行のあらはれんがためにひかりにきたる。それハ神によりておこなへばなり○三こ

のゝち耶蘇でしとユダヤの地にいたる。ともにかしこにとゞまりてバプテスマをほどこせり 二三 ヨハネもまたサリムにちかきアイノムに於てバプテスマを施せり。そこに水おほきがゆゑなりひとびときたりてバプテスマをうけたり 二四 このときヨハネはいまだ獄にいれられざりき 二五 ヨハネの門徒とユダヤびとゝきよめごとにつきてあらそひたりけるが 二六 かれらヨハネにきたりていひけるはラビ視よなんぢとともにヨルダンのむかふにありてなんぢが證せしものバプテスマをほどこせるにみなかれにきたれり 二七 ヨハネこたへていひけるはひとは天よりたまふにあらざればうくることあた

はざるなり 二八 それハキリストにあらざれバそのさきに遣(つかは)さ
れしものなりといひしことを證(あかし)するものハなんぢらなり
二九 新婦(はなよめ)をもてるものハ新郎(はなむこ)なれどもはなむこの友(とも)たちてその
こゑをきゝてこれによりてよろこびおほいによろこぶ我(われ)いまこの
喜(よろこび)みつることをえたり 三十 かれハかならず盛(さかん)にならしめわれハ
このなからバおとろふべし 三一 天上(うへ)よりきたるものハ萬物(ばんもつ)の
うへにあり 地(ち)よりいづるものハちに属(つき)そのいふところも
地(ち)のことなり天(てん)よりきたるものハばんぶつの上(うへ)にあり 三二
かれハみづからみし見(み)しところ聞(きゝ)しところのことを證(あかし)と
なれどもひとのあかしをうくるものなし 三三 その證(あかし)をうけしも

のは印をもて神の眞なることをあかしゝ 三四 神のつかはせしものは神のことばをかたる そは神これに靈をたまひてかぎりなければなり 三五 父は子をあいして萬物をその手にさづけたまへり 三六 子をしんずるものはかぎりなき生命をえ子にしたがはざるものはいのちを見ることをえず かへつて神の怒そのうへにとゞまらん

第四章 主おのれ門徒をとれることまさるバプテスマをほどこせることヨハネよりもおほしとパリサイの人のきゝしをしる 二 されどその實はいこはみづからバプテスマをほどこせるにあらず門徒これをなせるなり 三 そのときユダヤを

さりてまたガリラヤにゆく 四 サマリアを過してゆくことお
たきば 五 つひにサマリアのスカルといへる邑にいたれり。此
のまちハヤコブその子ヨセフにあたへし地にちかし 六 こ
こにヤコブの井ありて耶穌たびのつかれにてそのゐどのか
たはらに坐せり。ときハひるの十二時ごろなりき 七 ひとりの
のサマリアの婦みづをくまんとてきたりければ耶穌そのを
んなにむかひてわれに飲せよといふ 八 そはでしたち食物
かはんために邑へゆきてをらざりしゆゑなり 九 サマリア
のをんないひけるはなんぢハユダヤ人にしてなにゆゑぞサマリア
の婦なるわれにのむことをもとむるや。こハユダヤびとと

サマリアの人(ひと)とはまじはりをせざれバなり 十 耶蘇(いえす)こたへて
いひけるハなんぢもし神(かみ)の賜(たまもの)とわれにのませよといふも
のゝ誰(たれ)なるかをしらバなんぢかれにもとめん。さらバ活(いけ)るみ
づをなんぢにあたふべし 十一 をんな耶蘇(いえす)にいひけるハ主(しゆ)よ
つるべなく井(ゐど)もまたふかし なんぢいづくより汲(くみ)てそのい
ける水(みづ)をもてるや 十二 この井(ゐど)ハわれらの先祖(せんぞ)ヤコブのあた
へしところなり。かれもその子(こ)も畜(けもの)までもみなこれを
のみたり。なんぢハ彼(かれ)よりもまされるものならんや 十三 耶蘇(いえす)
こたへていひけるハすべてこの水(みづ)をのむものハまた渇(かわか)ん
十四 されどわがあたふる水(みづ)をのむものハかぎりなくかわく

あるまし。わがあたふる水はそのうちにて泉となり湧いでゝかぎりなきいのちにいたるべし 十五 をんないひたるは主よわがかわくことなくまたこのところに水をくみにきたらぬためそのみづをわれにあたへよ 十六 耶穌いひたるははなんぢゆきて夫をよびきたれ 十七 婦こたへていひたるはわれに夫なし。いゑすいひたるは夫なしといへるは理なり 十八 そはなんぢさきに五人のをつとありて今あるものはなんぢの夫にあらずなんぢのいひしは眞なり 十九 をんないひけるは主よわれなんぢを預言者としれり 二十 われらの列祖はこの山にて拜せしになんぢらは拜すべきところは

エルサレムなりといふ 二一 耶蘇いひけるハをんなよわれを信ぜよたゞこの山のみにあらず。またエルサレムのみにもあらずしてなんぢら父をはいすべき時きたらん 二二 なんぢらハ拝するものをなんぢらハしらずわれらの拝するものをわれらハしる。それ救ハユダヤびとよりいづるがゆゑなり 二三 まことの拝するもの靈と眞とをもてちゝをはいする時きたらん今それときになれり。それ父ハかくのごとくはいするものを要たまふ 二四 神ハ靈なれバはいするものもまた靈とまことをもてこれを拝すべきなり 二五 婦いひけるハキリストととなふるメッシヤのきたらんことをしる。かれ來んときは

盡くのことばわれらにつげん 二六 耶蘇(いえす)いひけるハなんぢとかたるところは我(われ)ぞそれなり 二七 ときに門徒(でし)きたりてこれのをんなとかたらるるを奇(あやし)みけれどもそれなにをもとむるやまたなにゆゑこれとかたらるるやといふものなかりき 二八 婦(をんな)そのみづ瓶(がめ)をのこして邑(まち)にゆきひとびとにいひけるハ 二九 わがすべてなせしことを我(われ)につげし人(ひと)をきたりてみよこれキリストならずや 三十 こゝにおいて人々(ひとびと)まちをいでゝ耶蘇(いえす)のもとにきたる 三一 それよりさき門徒(でし)これに請(こひ)てラビ食(くら)ひたまへといひければ 三二 耶蘇(いえす)これらにいひけるはわれはなんぢらのしらざる食物あり 三三 でしたちたがひにいひけるハ食(くひ)

物(もの)をかれにもちきたりしものは誰(たれ)なるや 三四 耶穌(いえす)かれらにいひけるは我(われ)をつかはせしものの旨(むね)をおこなひその工(わざ)をなしをはることこれ我が糧(かて)なり 三五 なんぢら穫時(かりいれどき)になるまでなほ四(よ)月(つき)あるといはずやわれなんぢらにつげん目(め)をあげてみよはや田(た)はいろづきてかりいれどきになれり 三六 穫(かる)ものはその工錢(あたひ)をうけて永生(かぎりなきいのち)にいたるべき實(み)をあつむ、このゆゑに播(まく)ものとかるものとともによろこばん 三七 これはまきこれは穫(かる)といへるはこれにつきてまことなり 三八 われなんぢらの勞(らう)せざりしところをかりとらせんとしてなんぢらをつかはせり他(ほか)のひとぐ勞(らう)せしによりなんぢらはそのらうしたる果(み)を

うけたり 三九 かれ婦わがなせしすべてのことをかれ我に語
りしと證せしことばによりてその邑のサマリアびとおほく
耶穌をしんぜり 四〇 こゝにおいてサマリアのひと耶穌のもと
にきたりてとゞまらんことをねがひしかば
いゑすはこゝに二日とゞまれり 四一 彼のことばによりて信ぜ
しものさきよりもおほかりき 四二 かれら婦にいひけるは今
なんぢのいひしことによりて信ずるにあらずわれらみづ
からきゝて此はまことに世のすくひぬしとしればな
り〇 四三 二日すぎて耶穌そこをさりガリラヤにゆけり 四四 それ
かれみづから預言者はふるさとにてたつとばるゝことな

しといひしによる 四五 ガリラヤにいたりしときガリラヤのひと
びとかれを接(むか)へり。そはさきに節筵(いはひ)のとき耶蘇(いえす)のエルサレム
にておこなひしすべてのことをかれらもそのいはひにゆ
きてこれをみたればなり 四六 耶蘇(いえす)またガリラヤのカナにいた
る。さきに水(みづ)をさけにせしところなり。ときに王(わう)の直(ぢき)
臣(しん)なるの子やまひにてカペナウンにありければ 四七 耶蘇(いえす)の
ユダヤよりガリラヤにきたれることをききてきたり耶蘇(いえす)の
もとにゆきてカペナウンにくだりその子(こ)をいやしたまはんこ
とをねがへり。そは死(ぬ)るばかりなりければなり 四八 耶蘇(いえす)かれに
いひけるはなんぢら休徴(しるし)とことなるわざをみずば信(しん)ぜじ

四九 これいひけるハ主よわが子のしなざるさきにくだりたまへ
五十 耶蘇いひけるハ往なんぢの子ハいくるなり。その人耶蘇のいひしことばを信じてさりぬ
五一 くだるときその僕どもこれにあひてつげけるハなんぢの子ハいくるなり。
五二 これその愈そめし時をこれにたづねければ。こたへてきのふひるの一時に熱さめたりといふ
五三 父ハ耶蘇のなんぢが子ハいくるなりといひたまひしときとその時のおなじきことをしりておのれとその全家ことごとく信せり
五四 この第二次のことなるわざを耶蘇ユダヤよりガリラヤにいたりてなせるなり

第五章 それのちユダヤ人のいはひありければ耶蘇エルサレムにのぼりたまふ 二 エルサレムの羊門のかたはらにヘブルのことばにてベテスダといふ池あり。このいけにいつゝの廊あり 三 そのなかには病者めしひ跛者またおとろへたるものなどおほくふしゐて水のうごくをまてり 四 そは天使をりをり池にくだりてみづを動かすことあり水のうごけるのち先ていけにいりしものはなにのやまひによらずいえたり 五 三十八年やみたるもの一人ここにあり 六 耶蘇これがふしたるをみてその病のひさしきをしりこれにいひけるは愈んことを欲がふや。やめるものこたへけるは主よみづのうごけるとき

われを扶ていけにいるる人なし。われいらんとするときハ
他のひとくだりて我よりさきにいる 八 耶穌これにいひけ
るハ起よねどこをとりあげてあゆめ 九 その人たちどころ
に愈たるのちねどこをとりあげてあゆめり。この日ハあん
そくにちなりき 十 ユダヤ人いえしものにいひけるハ。けふ
ハ安息日なれバなんぢねどこをとりあぐるハよろしから
ず 十一 かれらにこたへけるハ我をいやせしものわれにねど
こをとりあげて行といへり 十二 かれらたづねけるハなんぢ
に臥牀をとりあげてあゆめといひし人ハたれなるぞや 十三
いえしものハそれ誰なるをしらざりき。そハかしこにおほく

の人あまたしゆゑいえすさけられたなり 十四 その後いえす聖殿
にてその人にあひいひけるは視よなんぢすでにいえぬ
ふたゝび罪ををかすことなかれ。おそらくはさきよりまされる
災禍なんぢにおこらん 十五 その人ゆきてユダヤびとにおの
れをいやせしものはいえすなりとつぐ 十六 ここにおいてユダヤ
人いえすを窘迫てころさんとはかる。それはかれがこのこと
をせしは安息日なりければなり 十七 いえすこれにこたへけ
るはわが父はいまにいたるまではたらきたまふ我もまた
はたらくなり 十八 これによりてユダヤびといよ〳〵いえすをこ
ろさんとはかる。それはあんそくにちを犯すのみならず神を

おのれがちゝといひ己をかみとひとしくなればなり 十九 こ
のゆゑに耶蘇かれらにこたへていひけるはまことに誠に
なんぢらにつげん子はちゝのおこなふことをみて行のほ
かにはなにごとをもおこなふことあたはず。それすべて父の
おこなふことを子もまたおこなへばなり 二十 ちゝは子を愛
しすべておのれのおこなふところをこれに示す。な
んぢらをしてあやしましめんためにはこれのわざよりもさ
らに大なることをかれにしめさん 二十一 それちゝの死しものを
をよみがへらせていかさしむるがごとく子もおのれのお
こゝろのまゝしたがひて人をいかさしむべし 二十二 それ父はたれを

もさばかず審判はすべて子にゆだねたり
23 これすべての人をして父をうやまふごとく子をもうやまはしめんがためなり子を敬はざるものはこれをつかはせし父をうやまはず
24 まことにまことになんぢらにつげん我がことばを聴われをつかはせしものを信ずるものは永生をたもち且さばきにいらずして死よりいのちにうつれり
25 まことにまことになんぢらに告ん死にしもの神の子のこゑをきくときいたらん。いまその時になりぬ。これをきくところのものはいくべし
26 それ父はみづから生をたもつごとく子にも賜てみづからいのちをたもたせたまへり
27 また人の子たるによりてこれにさ

だききまへるは權威(けんゐ)をさづけたまへり 二八 これをあやしとおもふことなかれ。そは墓(はか)にあるものみなその聲(こゑ)をききていづるときき
たらんことはりなり 二九 善(よきこと)をなせしものは生(いのち)をうるによみがへり 惡(あしきこと)をなせしものはつみを得(う)るによみがへるべし 三十 われなにごとをもみづから行(おこな)ふことあたはず。きくところにしたがひて審判(さばき)をす。わがさばきは公平(たゞし) そは我(われ)わがむねをおこなふことをもとめずわれをつかはせし父(ちゝ)のむねをおこなふことをもとむればなり 三一 もしわがことを我(われ)みづからあかし。せばそのあかしは眞(まこと)ならず 三二 別(べつ)にわがことをあかしするものあり それそのわがことをあかしする證(あかし)のまこと

あるをしる 三三 なんぢらさきに人(ひと)をヨハネにつかはせしに
かれ眞理(まこと)のためにあかしをなせり 三四 されどわれ人(ひと)のあか
しをうけずこのことをいふはなんぢらのすくはれんが
ためなり 三五 ヨハネはもえしてひかれる燈(ともしび)なり。なんぢらた
のしんで暫(しばらく)そのひかりをよろこべり 三六 われはヨハネよりお
ほいなるあかしあり。そは父(ちゝ)のわれに賜(たまひ)てなしとげしむる
事(わざ)はすなはちわがおこなふところのわざなるこれ父(ちゝ)のわれを
つかはせしことを證(あかし)すればなり 三七 また我(われ)をつかはせしちゝ
もわがことをあかしせり。なんぢらいまだその聲(こゑ)をきかず
いまだその形(かたち)をみず 三八 その道(ことば)はなんぢらのこゝろにとゞま

らざりき。そはなんぢらそれつかはせしものを信ぜざるによりてなるなり 三九 なんぢら聖書(せいしよ)にかぎりなきいのちありとおもひてこれを探索(さぐ)る。このせいしよはわれについてあかしするものなり 四〇 なんぢらわがもとに生(いのち)をえんがためきたるをこのまず 四一 われひとの榮(あがめ)をうけず 四二 われなんぢらを知る。なんぢらそのこころに神(かみ)をあいするの愛(あい)あらざるなり 四三 われはわが父(ち)の名(な)によりてきたりしはなんぢら我(われ)をうけず。もし他(ほか)のひとおのれが名(な)によりてきたらばなんぢらこれを接(うけ)ん 四四 なんぢらはたがひに人(ひと)のあがめをうけて神(かみ)よりいづる榮(あがめ)をもとめざるものなるにいかでよ

く、信ずることをえんや 四五 なんぢらをちゝに訴るものとわ
れをおもふなかれ。なんぢらをうつたふるそのひとあり
即ちなんぢらが恃ところのモーセなり 四六 もしモーセを信
ぜばわれをしんずべし。そはモーセわがことを書せればな
り 四七 もしモーセのしるせしことばをしんぜずばいかでわがい
ひしことを信ぜんや

第六章 このゝち耶穌ガリラヤの湖すなはちテベリアのみづう
みのむかふへ済しに 二 おほくのひとゞこれにしたがふ。そ
はこれがやみしものをいやせし休徴をみしがゆゑなり 三 耶
穌やまにのぼりて門徒とともにそのところにざせり 四 時候

ユダヤびとのすぎこしの節(いはひ)はちかし 五 いゑす目をあげておほくの人(ひと)のきたれるをみてピリポにいひけるはいづこよりパンをかひてこれらに食(くは)しむべきぞ 六 みづからそのなさんとすることはしれどこれを試(こゝろみ)んがためにかくいへるなり 七 ピリポこたへけるは銀(ぎん)二百(にひやく)のパンも人(ひと)ごとにすこしづゝあたへてなほ足(たら)ざるべし 八 門徒(でし)のひとりなるもの(?)シモンペテロの兄弟(きやうだい)アンデレーいゑすにいひけるは 九 こゝにひとりの童子(わらべ)ありおほむぎの餅(パン)いつゝとちひさき魚(うを)ふたつをもてりされどこのおほくの人(ひと)にはいかにはぐべきぞ(?) 十 耶穌(いゑす)いひけるはひとびとをすわらせよ。そのところはおほ

くの草あをきおよそ五千人ほどありけり 十一 耶穌(いえす)パンをとり祝謝(いのり)をなしてあたへ門徒(でし)これをまはりし人(ひと)にあたふ。またかくのごとくにしてちひさき魚(うを)をもひとびとのこのみにしたがひてこれらに與(あた)へり 十二 みな飽(あき)たるのち耶穌(いえす)でしにいひけるはすこしもうしなはざるやうにそのあまりの屑(くづ)をひろひあつめよ 十三 これらが食(くら)せしそのいつゝの麰麥(おほむぎ)のパンの餘遺(のこり)のくづをひろひあつめたれば十二の筐(かご)にみてり 十四 ひとびと耶穌(いえす)のなせししるしをみてまことに世(よ)にきたるべき預言者(よげんしや)なりといふ 十五 こゝにおいて耶穌(いえす)これらがきたりておのれをとらへて王(わう)になさんとするを知(しり)てひとり

まてこゝをさりて再やまにいりたまへり　十六　日のくれたるころ門徒
うみにくだりて舟にのりカペナウムに向てうみをわたる。
既にくらくなれども耶蘇かれらにきたらず大狂風ふくによ
りてなみあれいだせり　十九　一里十町ばかりこぎいだせ
るとき耶蘇のうみをあゆみふねにちかづくをみて門徒お
ぢおそれたり　二十　耶蘇いひけるハわれなり懼るなかれ　二十一
こゝにおいてよろこびてかれをふねにうけいれたれバた
だちにそのゆかんとせるところの地につきぬ○　二十二　明日この
なぎさのうみべに立しひとびとのみ門徒ののりし舟のほかの
またハふねなく又耶蘇もでしとともにふねにのらず門徒

のみゆけるをしる 二三 このときテベリアよりほかのふねきたりて
主のいのりてひとびとに餅をくはせしところのちかくに
つけり 二四 ひとびと耶穌のこゝにあらず門徒もまたあらざる
をみてかれらも舟にのり耶穌をたづねんためにカペナウム
にいたれり 二五 湖のむかふにてかれにあひいひけるはラビ
何時こゝにきたりたまひしや 二六 耶穌こたへていひけるは
誠にまことになんぢらにつげんなんぢらのわれをたづぬ
るは休徴をみしゆゑにあらずたゞパンを食してあきたる
がゆゑなり 二七 なんぢらくちはつる糧のためにはたらかずして
永生にいたる糧をもとめよ人の子なんぢらにあたふるこのそのふためは

勞べしちゝの神これに印してあかしをなせり 廿八 こ
れにおいてひとびと耶蘇にいひけるはわれらいかなることを
をなさば神の工はおこなふべきや 廿九 いゑすこたへてこれらに
いひけるは神のつかはせしものを信ずるはすなはちその
わざなりと 卅 これらいひけるはわれらをしてなんぢを信ぜ
しむるためになんの休徵をなしてわれらにみするや何の
わざをおこなふや 卅一 われらのせんぞ野にてマナをくらへり
すなはちしるして天よりパンをこれらにあたへて食しむとある
がごとし 卅二 耶蘇いひけるはまことにまことになんぢらにつげん
天よりパンをなんぢらにあたへしものはモーセはあらば

今(いま)わがちゝハ天(てん)より眞(まこと)のパンをもてなんぢらにあたふ 三三
神(かみ)のパンハ天(てん)よりくだりて生命(いのち)をよにあたふるものなり
三四 かれらいひけるハ主(しゆ)よつねにその餅(もち)をわれらにあたへ
よ 三五 耶蘇(いゑす)いひけるハわれハいのちのパンなり我(われ)にきたる
ものハうゑずわれを信(しん)ずるものハつねに渇(かわく)ことなし 三六 さ
れど我(われ)なんぢらにわれを信(しん)ぜざることをなんぢらに
つげたりき 三七 すべて父(ちゝ)のわれにあたふるものハ我(われ)にき
たらん。またわれにきたるものハわれかならずこれをすてじ 三八
わが天(てん)よりくだりしハおのれのこゝろのまゝを行(おこなは)んとにあ
らずわれをつかはせしものゝ意(こゝろ)のまゝをおこなはん

ことなり　三九　すべて父のわれにあたへしものをわれ一ちも
うしなはずして末日にこれをよみがへらすを即ちわれをつかの
はせし父のこころなり　四十　おほよそ子をみてこれを信ずる
ものはかぎりなきいのちを得われまたをはりの日にこれ
をよみがへらすべし。これわれをつかはせしものの意なれ
ばなり　四一　ここにおいてユダヤびとら耶蘇のわれは天より
くだりし餅ありといひしことにつきつぶやき　四二　いひけ
るはこれが父母はわれらの識ところならずや。まさるもちこの
れをヨセフの子いゑすにあらずや。なんぞわれは
天よりくだりしといふや　四三　耶蘇こたへていひけるはなん

ちからひは譏(つぶやき)ことなかれ 四四 それ我をつかハせし父(ち)もしひかざれバ人(ひと)よくわれにきたることなし我(われ)ハきたりしひとを末(をはり)の日(ひ)にそれこれ我よみがへらすべし 四五 よげんしやの書(しよ)にひとみなをしへを神(かみ)にうけんとしるされり。このゆゑにすべて父(ち)よりききて學(まなび)しものハわれにきたる 四六 されど父(ち)をみしものハなし。ただ神(かみ)よりきたるもののみこれをみたり 四七 誠(まこと)にまことにわれなんぢらにつぐ。それ我を信(しん)ずるものハかぎりなきいのちあり 四八 われハ生命(いのち)のパンなり 四九 なんぢらのせんぞハ野(の)にてマナをくらひしかど死(しね)り 五〇 すべてくらふものをしてむなしからしむるものハ天(てん)よりくだれる

餅(パン)なり 五一 われハ天(てん)よりくだりしいけるパンなり もし人(ひと)こ
のパンをくらハゞかぎりなくいくべし我(わが)あたふるパンハ
わが肉(にく)なるぞ。よの生命(いのち)のためにわれこれをあたへん 五二 こゝ
にユダヤびとたがひにあらそひいひけるハこれ人(ひと)いかで
その肉(にく)をわれらにあたへてくらハしむることあらんや 五三
耶蘇(いえす)いひけるハまことにまことになんぢらにつげん もし人(ひと)の子(こ)
のにくをくらハずその血(ち)をのまざればなんぢらにいのち
なし 五四 わが肉(にく)をくらひわが血(ち)をのむものハ永生(かぎりなきいのち)あり。われを
すゑの日(ひ)にこれをよみがへらすべし 五五 それわが肉(にく)ハまこ
とのくひものまたわが血(ち)ハまことのみものなり 五六 わが

にくをくらひわがちを飲(のむ)ものハわれにをりわれもまたか
れに居(をる) 五七 いける父(ちち)われをつかはしぬ。ちゝによりてわがいけ
るごとく我(われ)をくらふものもわれによりて生(いく)べし 五八 これ天(てん)
よりくだれるパンなり。なんぢらの先祖(せんぞ)がくらひたれどな
ほ死(し)しマナのごときものにあらずこの餅(パン)をくらふものハ
かぎりなくいくべし 五九 これらのことを耶蘇(いゑす)カペナウムの會(くわい)
堂(だう)にてをしへをなせるときいひしところなり 六〇 門徒(でし)のうち
のうちおほくの人(ひと)これをききていひけるハ此(こ)ハはなはだ
しきことばなり誰(たれ)かよくこれをきかんや 六一 門徒(でし)のこのこ
とについてつぶやくを耶蘇(いゑす)みづからしりてこれらにいひ

けるハ。この言によりてつまづくか 六二 もし人の子のもとゐ
ところに升をみバいかに 六三 生をあたふるものハ靈なり肉
ハえきなし。我がなんぢらにいひしことバみたまなり生命
たるなり 六四 されどなんぢらのうちに信ぜざるものありそれ耶
穌のこくいくるハしんぜざるものハ誰かおのれをわたすも
のハたれといふことをはじめよりしれバなり 六五 耶穌また
いひけるハ。このゆゑに我さきにわが父あたへざれバ人よ
くわれにきたるものなしといひしなり 六六 これのちそれ門
徒おほくしりぞきて耶穌とともにあるかざりき 六七 これ
によりていゑす十二のでしにいひけるハなんぢらもまた

さらんとおもふや 六八 シモンペテロこたへけるハ主よわれらハたれにゆかんや永生のことばをもてるものハなんぢなり 六九 またわれら信じてしる。なんぢハいける神の子キリストなり 七十 耶蘇こたへけるハ。我なんぢら十二人をえらびしにあらずや。されどそのうちのひとりハ惡魔なり 七一 おほんハシモンの子イスカリオテのユダをさしていへるなり。かれハ十二のひとりにして耶蘇をわたさんとするものなり。

第七章

このことのゝち耶蘇ガリラヤを巡りユダヤのうちをめぐることをこのまざりき。そハユダヤびとかれを殺

んとはかれるなり 二 さてユダヤびとの搆廬のいはひちかづ
づけり 三 こゝにおいて耶穌のきやうだいこれにいひける
は、なんぢの行ところのわざを門徒にもみせんがためこ
ゝをさりてユダヤにゆけ 四 それおのれを顯さんとしてひ
そかに事をなすものあらず。なんぢこれらのわざをおこな
はゞおのれを世に顯せよ 五 これその兄弟もみなこれを信ぜざ
りしがゆゑなり 六 耶穌これらにいひけるは わが時いまだい
たらず。なんぢらのときは恒にそなはれり 七 世はなんぢら
をにくむことあたはず われを惡む。それはこれらがおこなふ
ところはあしゝとわれ證すればなり 八 なんぢらこの節に

のぼれまで時(とき)いまだいたらざればわれ今(いま)このいはひにのぼらず 九 このごとくいひてガリラヤにとゞまれり 十 その兄弟(きやうだい)のゆきしのち耶穌(いえす)もあらはならずしてひそかに節(いはひ)にのぼる 十一 いはひのときユダヤびと耶穌(いえす)をたづねていひけるハかれはいづくにあるや 十二 衆人(おほぜい)のうちにてかれにつきさゝやくのこと多くいひあらそふ或(あるひと)ハかれを善人(よきひと)なりといひあるひとハいな民(たみ)をまどはすものなりといふ 十三 されどもユダヤびとを懼(おそる)るによりてあらはにかれがことをいふ人(ひと)なし〇 十四 いはひのなかばごろ耶穌(いえす)みやにのぼりて教誨(をしへ)たれば 十五 ユダヤびとこれをあやしみいひけるハこの人(ひと)ハいまだま

なばずいかにして書(ふみ)をしるや 十六 耶穌(いえす)かれらにこたへていひけるは。わがをしふるところはわがをしへにあらず我(われ)をつかはせしもののをしへなり 十七 人(ひと)もしかれをつかはせしものの旨(むね)をおこなはんとせばこのをしへの神(かみ)よりいづるかまたおのれよりていふなるかをしるべし 十八 おのれよりていふものはおのれのほまれを求(もとむ)るなり。おのれをつかはせしものの榮(ほまれ)をもとむるものは眞(まこと)なり。その衷(うち)は不(ふ)義(ぎ)なし 十九 モーセなんぢらに律法(おきて)をあたへしにあらずや。されどなんぢらのうちにはこれを守(まもる)ものなし。なんぢらなにゆゑわれをころさんと謀(はかる)や 二十 ひとびとこたへていひけるはなんぢ鬼(おに)

はつかれたり。たれかなんぢを殺(ころ)ことをもとむらんや 二一 耶蘇(いえす)
こたへてかれらにいひけるハわれさきに一事(ひとつのわざ)をなせしに
なんぢらミな奇(あやし)とせり 二二 モーセなんぢらに割禮(かつれい)をさづけし
ハそのおのれよりいでしにはあらずして列祖(せんぞ)よりいでしも
のなるがゆゑなり。これによりてなんぢら割禮(かつれい)をあんそく
にちにおこなふ 二三 人(ひと)もしモーセのおきてをやぶらざらん
がために安息日(あんそくにち)にかつれいをうくるときは何(なに)ぞわれがあんそ
くにちにひとの全身(ぜんしん)(カラダヂユウ)をいやせしことをいかるや 二四 外貌(うはべ)に
よりて是非(よしあし)をさだむることなかれ義(ただしき)をもてさだめよ 二五 こ
のときエルサレムのある人(ひと)いひけるハこれひとびとのころさ

んとするものはあらばや
二六 今これあらはにいふ。あへ
てこれをとがむるものなし 有司たちはこれがまことに
キリストなりと知るならんか
二七 されどわれらはこの人のいづ
こよりきたりしかをしる。もし キリストのきたらんときは誰も
その何處よりきたるをしるものあらざらん
二八 このとき耶穌
みやにてをしへをなしつゝ大聲によびいひけるは なんぢら
われをしりまたわがいづくより來るをしる。されど我はおの
れによりてきたるにはあらず われをつかはせしものは眞
なるものにしてなんぢらのしらざるところなり
二九 われはか
れを知る。そはわれかれより出かれわれをつかはせしも

のあればなり 三十 こゝにおいてかれら耶蘇をとらへんとはかりき。されどその時いまだいたらざるがゆゑに手だしするものなかりき 三一 民のうちおほくの人これを信じいひけるはキリストのきたらん時そのなすところの休徴このひとよりおほからんや 三二 パリサイの人たちみどもの耶蘇につきそのこそひそのはからひあるを聞きたれば祭司のをさたちとパリサイのひととこれをとらへんとて下吏をつかはせり 三三 こゝにおいて耶蘇いひけるはしばらくなんぢらとゝもに在てのちわれをつかはせしもののもとにゆかん
三四 なんぢら我をたづぬるともあふべからず我がをるところ

ろへなんぢらきたることあたはざるべし 三五ユダヤ人あひたがひにいひけるは かれわれらの遇ざらんとては いづこへゆかんとするか ギリシヤにちりしもののなかにゆきて ギリシヤの人をゝしへんとするや 三六彼がかたりて なんぢらわれを尋ともあふべからず また我をるところに なんぢらきたることあたはざるべし といひし言はなにぞや○三七いはひのをはりの大日にイエス立てよばはりいひけるは 人もしかわかば われにきたりて飲 三八われをしんずるものは 聖書にあるごとく その腹より活水かはのごとくながれいづべし 三九このこといへるは かれを信ずるもののうけんとする

靈(みたま)をさせるなり。それハ耶蘇(いゑす)いまだ榮(さかえ)をうけざるによりてみ
たまいまだくだらざればなり 四十 民(たみ)のうちにておほくの人(ひと)
このことばをきゝて。これまことにこれ預言者(よげんしや)なりといひ
四一 あるひハこれハキリストなりといひ。あるひハキリストは
ガリラヤよりいづべけんや 四二 聖書(せいしよ)にキリストはダビデのすゑ
にてダビデのすみし郷(さと)ベツレヘムよりいでんとしるせしにあらず
やといふ 四三 こゝにおいて民(たみ)どもかれにつきてあらそひわ
かれたり 四四 そのなかにかれを執(とら)んとするものもありけれ
ど手(て)ざしせしものなかりき 四五 下吏(したやく)どもさいしの長(をさ)とパリ
サイの人(ひと)のもとにかへりければ、かれら下吏(したやく)にいひけ

るハなんぞかれを曳きたらざるや 四六 したやく答ていひけるハいまだこの人のごとくいひしひとあらじ 四七 パリサイのひといひけるハなんぢらもまた惑されしか 四八 有司またハパリサイのひとのうちにかれを信ずるものあらんや 四九 律法をしらざるこのおほくのひとハ罰すべきものなり 五十 それうちの一人まへに夜いエスにきたりしニコデモといへるものかれらにいひけるハ 五一 それ人にきかずばその行をしらざるさきにまづその罪をさだむるハわれらの律法ならんや 五二 かれらこたへていひけるハ爾もまたガリラヤよりいでしものかなんぢの考みよよげんしやハガリラヤよりいづることなし

五三 こゝにおいておの〳〵家にかへれり

第八章 いゑす橄欖山にゆきたまひ 二 よあけごろまた聖殿にいりたまひしが民みなこれにきたりたればざしてかれらをおしふ 三 こゝに奸淫をおこなひたるときとらへられし婦ありけるをがくしやとパリサイの人これを耶穌のもとにつれきたり群集のなかにおきていひけるは 四 師よこのをんなは奸淫をおこなひをるときとらへられしものなり 五 このくひごときものを石にてうちころすべしとモーセ律法のうちに命じたり。なんぢはいかにいふや 六 かくいへるは耶穌をこゝろみて訟のゆゑをひきいださんとおもへるなり。いゑ

き身をかゞめゆびにて地にものかきたまふ 七 かれらがしきり
にとふより耶穌おきてこれらにいひけるはなんぢらのう
ち罪なきものまづこれをいしにて撃べしといひ 八 また身
をかゞめて地に書たまふ 九 かれらこれをきゝてその良心にせ
められおいしものよりはじめわかきものまでひとりびとりいで
ゆきさる 耶穌ひとりのこる。をんなはあつまれ中にさ
てをり 十 いゑす起てをんなにいひけるは婦よなんぢをう
つたへしものはいづこにゆきしや。なんぢの罪をさだむるも
のなきか 十一 をんなのいひけるは主よたれもなし耶穌これに
いひけるはわれもなんぢのつみを定ず。ゆきてふたゝび罪

犯すことなかれ○ 十二 耶蘇(いゑそ)またひとびとにかたりていひける
は われハ世(よ)のひかりなり われにしたがふものハくらきな
かをあるかで生(いのち)のひかりをうるなり 十三 こゝにおいてパリ
サイの人(ひと)いひけるハなんぢみづからおのれが證(あかし)をなせ
は なんぢのあかしは眞(まこと)ならず 十四 耶蘇(いゑそ)こたへていひけるは
われみづから己(おのれ)のあかしをなすともその證(あかし)ハまことなり。そ
ハわれいづくよりきたりて何處(いづく)へゆくをしれバなり。なんぢ
らハわがいづくより來(きた)りいづくへ去(ゆく)をしらざるなり 十五 なんぢ
らハ肉(にく)によりて人(ひと)のつみをさだむ。われハひとを罪(つみ)とさだ
めず 十六 われもし定(さだ)むわがさだむるところハ眞(まこと)なり。そハわ

をひとりあるにあらず我をつかはせし父とともにあれば
なり 十七 二人のあかしはまことなりとなんぢらのおきてに
しるされたり 十八 われ證をするものはわれなり われを遣せ
し父もまたわがあかしをするなり 十九 これらいひけるは
なんぢの父はいづくにあるや 耶蘇こたへけるはなんぢら
はわれをしらず また我が父をもしらざるなり もしわれを
識るならばわが父をもしるならん 二十 耶蘇これらの
ことをみやの中さいせんのはこあるところにてかた
りたれどこの時のいまだいたらざれば たれも手をいだす
もの なかりき 二一 耶蘇またいひけるは我往んなんぢらは

われを尋(たづね)べし なんぢら おのれが罪(つみ)にしなん わがゆくところへは なんぢらきたることあたはざるなり 二二 これによりてユダヤびといひけるは わが往(ゆく)ところへ なんぢらきたることあたはずといへるは。これは自殺(じさつ)せんとするかの 二三 耶穌(いえす)かれらにいひけるは なんぢらは下(しも)よりいで われは上(うへ)よりいづ。なんぢらはこの世(よ)よりいで われはこの世(よ)よりいでず 二四 このゆゑに なんぢらはおのれの世のつみに死(しな)んと われいひしなり。なんぢらもしわれの彼(かれ)なるをしんぜずば おのれの罪(つみ)に死(しな)ん 二五 かれらいひけるは なんぢはたれなるや 耶穌(いえす)いひけるは われは實(じつ)にわがなんぢらにつぐるところのものの

なり 廿六 われなんぢらにつきていふべきことゝ罪(つみ)をさだ
むべきことゝ多端(おほく)あり。されどわれをつかはせしものは眞(まこと)なり。かれ
わきゝしことをわれ世(よ)につぐ 廿七 これは父(ちち)をさしていへるな
れどかれらはさとらざりき 廿八 こゝにおいて耶穌(いゑす)かれらにいひ
けるはなんぢら人(ひと)の子(こ)をあげしのち我(われ)のかれなるをしり
またわがみづからなにごとをもなさず たゞわが父(ちち)のをし
へにしたがひてこれらのことをいへるとしるべし 廿九 われ
をつかはせしものは我(われ)とともにあり。ちゝはわれをひとりお
きたまはず そはわれ恆(つね)にかれのこゝろにかなふことをお
こなへばなり 三十 耶穌(いゑす)このことをいひつるとき おほくの人(ひと)の

れバしんぜよ 三一 耶穌おのれを信ぜしユダヤびとにいひけ
るハなんぢらもしわがことばに居ばまことにわがでしな
り 三二 かつまことをしらん真理ハなんぢらを自由をえさす
べし 三三 かれらこたへけるハわれらハアブラハムの子孫なり
いまだひとの奴隷となりしことなしなんぢらハ自由をえ
さすべしと爾のいひしハいかなることぞ 三四 耶穌かれらに
いひけるハまことにまことになんぢらにつげんすべて悪をおこ
なふものハあくの奴隷なり 三五 しもべハつねに家にをらねど
子ハつねに居る 三六 このゆゑに子もしなんぢらを自由とあた
へなバなんぢら誠にじゆうなるべし 三七 われなんぢらが

アブラハムのすゑなるをしる。されどもわれをころさんと謀そハわがことばなんぢらの衷にあらざればなり 三十八 われハわが父とともにありて見しことをいひ。なんぢらハなんぢらの父とともにありてみしことを行ふ 三十九 これにこたへて耶蘇にいひけるハわれらの父ハアブラハムなり耶蘇いひけるハなんぢらもしアブラハムの子ならバアブラハムのわざをおこなふべし 四十 志かるにいまなんぢらハ神にきゝし眞理をつげたるわれをころさんとせり。これアブラハムのわざにあらず 四十一 爾曹ハなんぢらの父のわざをおこなふなり。これらいひけるハわれらハ奸淫によりてうまれず只ひとりの

ちゝあるや。さるなもち神あり 四二 いゑそこれらにいひけるハ神もしなんぢらの父ならバなんぢらわれを愛すべし。なれバ神よりいでゝきたれバなるゝ。それわれおのれによりてきたるにあらバ神われをつかはしまつるなり 四三 なんぢらなんぞわがいふ言をさとらざるや。それハわがおしへをきくことを得ざれバなり 四四 なんぢらの父あくまより出すさその父の慾ばおこなふことをこのむ。これハはじめより人をころすものなりまた眞理にをらず。それハこれの裏にまことなけれバなり。これが誑をいふときハおのれよりいづそりかなるゝ。それハこれハ誑者またいつはりものゝ父なれバな

そ四五 われ眞理(まこと)をいふによりてなんぢらわれをしんぜず
四六 なんぢらのうち誰(たれ)かわれをつみにさだむるものあるや。われなんぢらにまことをいふになにゆゑわれを信(しん)ぜざるか
四七 神(かみ)よりいでしものは、かみのことばを聽(きく)なんぢらのきかざるは神(かみ)よりいでざるによりてなり
四八 ユダヤ人(びと)こたへていひけるはなんぢはサマリアのひとにて鬼(おに)につかれたるものなりとわれらがいへるは宜(うべ)ならずや
四九 耶蘇(いえす)こたへていひけるはわれはおにゝつかるゝものにはあらず。われはわが父(ちゝ)をたふとびなんぢらはわれをかろんずるなり
五十 われはみづからの榮(ほまれ)をもとめず、これを求(もとむ)る罪(つみ)をさだむる

こころみ、そのあり 五一 われまことに誠(まこと)になんぢらにつげん
人(ひと)もしわがことばをまもらバ、かぎりなく死(し)をみざるべし
五二 ユダヤびと彼(かれ)にいひけるハいまわれらハなんぢが鬼(おに)につ
かれたるものなるをしる アブラハムすでに死(し)ぬまた預言者(よげんしや)も
しねり。しかるになんぢ云(いふ)ひともしそのことばをまもらバ
かぎりなく死(し)じと 五三 なんぢハわれらの先祖(せんぞ)アブラハムより
もまされるものあらんやアブラハムすでに死(し)ぬよげんしやた
ちもしねり。なんぢみづからを誰(たれ)とするの 五四 耶蘇(いゑす)こたへけ
るハわれもしみづからあがめをなさばわが栄(あがめ)ハむなし我(われ)
をあがむるものハわが父(ちゝ)なりすなはちなんぢらのおのが神(かみ)と

なふるところのものなり
五五
なんぢらハこれをしらざれど、これを識われもしこれをしらずといはゞなんぢらのごとき詐者となるらん。されどわれハこれをしりてその道をまもるなり
五六
なんぢらのせんぞアブラハムハわが日をみんことを喜びまたこれをみてたのしめり
五七
ユダヤびとこれにいひけるハなんぢいまだ五十にもならざるにアブラハムをみしや
五八
耶穌これらにいひけるハまことにまことになんぢらにつげん我ハアブラハムのあらざりしさきよりあるものなり
五九
こゝにおいてひとびとこれを撃んとて石をとれり耶穌ハかくれてそのあひだをとほりて聖殿をいでゆけり

第九章

耶蘇ゆくときうまれつきなる瞽者をみしが 二 その門徒これにたづねていひけるハラビこのひとめしひに生れしハたれの罪なるや。おのれによるかまたハ二親によるか 三 耶蘇こたへけるハこのひとのつみにあらず亦そのふたおやの罪にもあらずこれによりて神のわざあらはれんためなり 四 晝のうちハわれかならず我をつかはせしものゝわざをなすべきなり夜きたらんそのとき誰もわざをなすことあたはず 五 われ世にをるうちハよの光なり 六 このことをいひて地につばきし唾にてつちをときその泥をめしひの目にぬり 七 これにいひけるハシロアムの池にゆきてあら

へ。かれすなはちゆきてあらひ目(め)みることをえてかへりきた
シロアムはかれを譯(やく)せばつかはされしものといふ義(ぎ)なり 八 隣(となり)の
ひとびとおよび素(もと)よりかれの乞食(こつじき)なりしをみしものどもい
ひたるはこれぞすわりてものをこひし人(ひと)ならずや 九 あるひ
とはかれなりといひ。あるひとは似(に)たるなりといふ。かれは
いひけるは我(われ)はかれなり 十 かれらいひたるはなんぢの目(め)は
いかにしてあきたるや 十一 こたへていひたるは耶穌(いゑす)といふ
ひと土(つち)をときわがめにぬりていふ シロアムのいけにゆきて
洗(あらへ)と。われゆきてあらひければ目(め)みることをえたり 十二 ひと
びとかれはいひたるはかれはいづくにをるや。こたへてし

らぬといふ　十三　かれらこの瞽なりしものをパリサイのひとゝの
もとにひきいたれり　十四　つちをこねて耶蘇かれが目をあけ
し日はあんそくにちなりき　十五　パリサイ此ひとも彼にとひけ
るはなんぢのめはいかにしてあきたるや答たるはかれど
ろをわがめに置されそれをあらひて見ることをえたり　十六　あ
るパリサイのひといひけるはこの人あんそくにちをまもら
ざるがゆゑに神よりいでしにあらじ。あるひといひたるも
罪人いかでかゝるしるしをおこなふことを得んや。こゝに
おいてかれらあらそひわかれたり　十七　復めしひにいひたる
はなんぢの目をあけしによりなんぢかれのことをなんと

りふや。こたへけるはこのかたは預言者なり
十八 ユダヤびとこれのめしひなりしは見うるやうになりしことをその二親をよびきたるまでは信ぜざりき。そのちゝはゝおやをよびきたりて
十九 かれにとひけるはこの人をめしひにてうまれしといふところのなんぢらの子なるか。いまいかにしてみることをえたるや
二十 二親かれらはこたへけるはこれはわが子なるとうまれつきの瞽なることをしる
二十一 されど今いかにしてめあきとはなりしかわれらこれをしらず亦そのめをあけしは誰なるかをしらず。かれはおとななり彼にたづねよかれみづからいふべし
二十二 二親のかくいひしはユダヤびとをおそれし

まよる。そハ耶蘇がキリストといひあへるものあらバ會堂よ
りいださるべしとユダヤびとたがひにいひさだめられたるな
り 廿三 ふたおやのかれハ年長なりかれにたづねよといひし
ハこのゆゑなり 廿四 めしひなりしものをまたよびていひた
るハなんぢ神に歸せよわれらハこの人のつみびとなる
をしる 廿五 こたへけるハつみびとなるや否われがしらず
しらず我ハめしひなりしがいまめあきとなれるその一事
をしる 廿六 かれらまたいひたるハかれハ爾になにをなせし
やいかにしてなんぢの目をあけしや 廿七 こたへけるハわれ
すでになんぢらにいひしになんぢらきかざる何故ふたゝび

きかんとするか。なんぢらもその門徒にならんとおもふや
廿八 かれらのゝしりいひけるはなんぢはその人のでしなれ
らはモーセの門徒なり 廿九 神のモーセにかたりしことはわ
れらしれり。されどこの人のいづこよりきたれるものをわれ
らしらず 卅 その人こたへけるは此はあやしきことな
り。かれすでにわが目をあけしにそのいづこよりきたれる
をなんぢらしらずといふ 卅一 神はつみびとにきかず。されど
神をうやまひてその旨にしたがふものには聽たまふとわ
れらしれる 卅二 世のはじめよりこのかたうまれつきなる瞽
者のめをあけしひとあるをきかず 卅三 もしこのひと神より

いでざらばなにごとをもなしえざるべし 三四 これらこたへて
いひけるはなんぢことごとく罪孽にうまれしものなるに
反てわれらををしふるか。つひにこれを逐ひいだせり 三五 か
れらが逐いだせしことをきゝ耶穌たづねてこれにあひい
ひけるはなんぢ神の子をしんずるか 三六 こたへていひける
は主よかれとしてわが信ずべきものはそれなるや 三七 耶穌
いひけるはなんぢすでにかれをみる今なんぢとものいふ
ものはそれなり 三八 主よわれしんずといひてかれを拝せり
三九 耶穌いひけるはわれさばきせんために世にきたる。すな
はちみえざるものをして見みゆるものをかへつてめしひ

となりしむ 四十 耶穌とともにをりしパリサイのひとこのこ
とを聞てかれらはいひけるはわれらもめしひなるか 四十一 耶
穌これにいひけるはなんぢらもしめしひならば罪なか
るべし。されどいまわれら見といひしによりてなんぢらの
つみはのこれり

第十章 まことにまことになんぢらにつげん羊牢にいるに門より
せずしてほかよりこゆるものは竊賊なり強盜なり 二 もん
よりいるものはそのひつじの牧者なり 三 かどもりはこれ
のためにひらき羊はそのこゑをきく。このものおのれのひつじ
の名をよびてこれをひきいだせり 四 これそのひつじをひきいだ

はとき先(さき)はゆくなり。ひつじはかれのこゑをしりてこれに従(したが)ふ

五 ひつじも別人(ほかのもの)にはしたがはずかへつて避(にぐ)べし そはほかのもののこゑをしらざればなり

六 耶蘇(いえす)これらはこの譬(たとへ)をいへどこのかれらはそのかたれるところいかなる意(こゝろ)なるをしらざりき

七 この故(ゆゑ)に耶蘇(いえす)またかれらにいひけるはまことにまことになんぢらにつげん われはすなはちひつじの門(もん)なり

八 すべてわれよりさきにきたりしものはぬすびとなり強盗(がうとう)なり。ひつじはそのこゑをきかざりき

九 我(われ)はもんなり。もしひとわれよりいらばすくはれかつ出入(でいり)をなして草(くさ)をうべし

十 ぬすびとのきたるはぬすまんとし殺(ころ)さんとしほろぼさんとする

のほかなしわがきたるはひつじをしていのちを得させゆ
たかにあらしめんためなり
十一 われは善ひつじかひなりよき
ひつじかひは羊のためにいのちを捐
十二 ひつじかひにあら
ばおのがひつじをもたねば只やとはれてひつじをまもるを
のは狼のきたるをみればひつじをすてゝ逃おほかみひつ
じをうばひてこれをちらし
十三 雇工のにぐるはやとはれし
ものなればその羊をいとはざるによりてなり
十四 われはよ
き牧者にしておのれのひつじをしる。またおのれのひつじに
しらる
十五 父われをしるごとくわれも父をしる。われひつ
じのために命をすてん
十六 われはこの牢にあらざるほかの

ひつじ我かならずかれらをもつれきたらん。かれら我が聲をきゝなん。つひにひとつの群ひとつの牧者となるべし 十七 我がちゝわれを愛す。そハわれふたゝび命をえんがためにいのちを捨つるがゆゑなり 十八 我よりこれをうばふものなし我みづからこれを捨つるなり。われこれを捨つるの權能ありまたよくこれをうるのちからあり。これ我がちゝより我この命令をうけたり 十九 さてこの言によりてまたユダヤびとあらそひわかれたり 二十 その中なるおほくのものいひけるハ鬼につかれてくるふものなるになんぞかれに聽や 二十一 また或いひけるハこれ鬼につかれしもののことばにあら

ば鬼(おに)はめくらひの目(め)をあけることあたはんや 二二 冬時(ふゆのとき)みやきよめのいはひのとき 二三 いゑす聖殿(みや)のソロモンの廊(らう)をあるきゐるに 二四 ユダヤびとこれをとりかこみていひけるはわれらをいつまでうたがはするや爾(なんぢ)もしキリストならばあきらかにわれらにつげよ 二五 耶蘇(いゑす)こたへけるはわれなんぢらはつげしかどもなんぢら信(しん)ぜず。ちゝの名(な)によりてわがおこなふ事(わざ)はわれについてあかしをなすなり 二六 されどなんぢらは信ぜず。こはなんぢらはいひしごとくわが羊(ひつじ)にあらざればなり 二七 わがひつじはわがこゑを聴(きく)われかれらを識(しる)かれらはわれにしたがふ 二八 われかれらに永生(えいえんのいのち)をあたふこの

れらハいつまでもほろびず亦(また)これをわが手(て)よりうばふものなし 二九 これをわれに賜(たまひ)しわがちゝハすべてのものよりも大(おほい)なりまたわがちゝの手(て)よりこれをうばひうるなかるべし 三〇 われとちゝとハ一(ひとつ)なり 三一 こゝにおいてユダヤびと石(いし)をとりてまたこれをうたんとせり 三二 耶蘇(いゑす)かれらにこたへけるハわが父(ちゝ)よりうけてまたおほくの善事(よきことども)をなんぢらにみせしハそのうちいづれのわざによりてわれをいしにてうたんとするや 三三 ユダヤびとこたへていひけるハ石(いし)にてうたんとするハよきわざのためにあらずなんぢが褻瀆(けがし)ことをいひかつなんぢ人(ひと)なるにおのれを神(かみ)となすにより

てなり 三四 耶穌こたへけるハなんぢらのおきてに。われ稱な
んぢらハ神なりとしるされしにあらずや 三五 聖書ハやぶる
ゝことあたハず。もし神のことばをうけしものをかみといはらんは
へ 三六 父のきよめわかちて世につかハせし者われハかみの
子なりといひしとてなんぞこれをけがしごとをいふとい
ふべけんや 三七 もしわれわが父の事をなさずバわれを信
ずることなかれ 三八 もしこれを行バわれを信ぜずともそ
のわざを信ぜよ。それハ父のわれにあり我の父にあるこ
とをなんぢらしりて信ぜんがためなり 三九 これら復とらへ
んとしけりしが耶穌その手をのがれてされり 四十 このくてま

とヨルダンのむかふなるヨハネのバプテスマをほどこせしところにゆきてそこにとゞまる 四一 おほくの人これにいたりいひけるはヨハネは休徴をなさず。されどもこの人につきてヨハネのいひしことはみな眞なり 四二 こゝにおいておほくのひとこのところにてこれを信ぜり

第十一章

こゝに病者ありラザロといひてベタニアのひとなり ベタニアはマリアとそのあねマルタのすめる村なり 二 マリアはさきだちて主ににほひあぶらをぬりて己のかみのけをもて主のあしをぬぐひしひとにて。このやめるラザロはこれが兄弟なり 三 このゆゑにその姉妹い遣はしのものに主のあいするも

のやめりといひつかはせり 四 耶穌これをきゝていひける
はこハ死るやまひにあらず神のさかえのためなり神の子
をしてこれによりて榮をえせしめんがためなり 五 それ
マルタとそのいもうと及ラザロハいゑすの愛するところの
ものなり 六 このゆゑに耶穌そのやめるをきゝてこのとこ
ろに二日とゞまり 七 そのゝち門徒にいひけるハわれらま
たユダヤにゆくべし 八 でしいひけるハラビユダヤ人さき
ごろに石をもてなんぢをうたんとせしにまたこゝに
ゆきたまふや 九 耶穌こたへけるハ一日のうちに十二時あ
るにあらずや。ひともし日間あるかバつまづくことなし。そ

ハこの世のひかりをみるによりてなり 十 また人もしよる
あゆまばつまづくべし。そハ光そのひとになきがゆゑなり
十一 耶蘇このことをいひてのちでしにいひけるハわれらの友ラザロ
いねふりたれこれをおこさんためにゆくべし 十二 門徒いひ
けるハ主よかれもしいねぶらバいえん 十三 耶蘇ハかれの
志にしをいへるなれどでしらハ寝てやすめることをい
へるならんとおもへり 十四 このゆゑに耶蘇あきらかにかれ
につげていひけるハラザロハ死ねり 十五 なんぢらをして信ぜし
むるためにわれのこゝにあらざりしを喜されどいまこのし
らにゆくべし 十六 デトモといへるトマスほかの門徒らに

いひけるハわれらもまたゆきてかれとともにしぬべし 十七
耶穌いたりてラザロがすでに墓にをさめられて四日なるを
しれり 十八 ベタニアハエルサレムにちかし。その隔ることお
よそ八七丁なり 十九 おほくのユダヤびとマルタとマリアをその兄
弟のことによりてなぐさめんとてすでにかれらのもとに
きたりをれり 二十 マルタハ耶穌きたれりときゝてこれをいで
むかへマリアハなほ室にざせり 二一 マルタいえすにいひける
ハ主よこゝにいませしならバわがきやうだいハしなざり
しものを 二二 然ながらいまとてもなんぢが神にもと
むるところのものハ神なんぢにあたふとしる 二三 耶穌いひ

けるハなんぢのきやうだいハよみがへるべし 二四 マルタいえるハいひけるハわれハ末日(をはりのひ)のよみがへるべきときによみがへらんことをしるなり 二五 耶蘇(いえす)これにいひけるハわれハ復生(よみがへり)なり生命(いのち)なりわれをしんずるものハしぬるともいくべし 二六 およそ生(いき)てわれをしんずるものハ永遠しぬることとなし。なんぢこれをしんずるや 二七 かれ耶蘇(いえす)にいひけるハ主(しゆ)よしかり。われなんぢハ世(よ)にきたるべきキリストかみの子なるとしんず 二八 かくいひをはりてひそかにその妹(いもうと)マリアをよび師(し)きたりてなんぢをよびたまへりといふ 二九 マリアこれをきゝいそぎたちて耶蘇(いえす)のもとにゆけり 三十 いえハいま

ごむらにいらずなほマルタの迎しところにをれり
三一 マリアとなぐさめてともに室にをりしユダヤびとマリアが急ぎたち
いづるをみてこれハ墓にゆきてなげくならんといひつゝ
うしろにしたがへり
三二 マリアいゑすのところにきたり彼をみてその足もとに伏いひけるハ主よもしこゝにいませしならバわが兄弟ハしなざりしものを
三三 いゑすマリアの哭泣とうれひともにきたりしユダヤ人のなくをみてこゝろをいたましめ身ふるひて
三四 いひけるハなんぢ何處にこれをおきしや。かれらいひけるハ主よきたりてみたまへ
三五 耶蘇なみだをながしたまへり
三六 こゝにおいてユダヤびとのいひ

たるハ視よいかばかりこれを愛せるものぞ 三七 そのうちな
る人いひたるハめしひの目をひらきたるこの人ましてか
れを死ざらしむることあたハざりしや 三八 耶穌またこゝろ
をいたましめて墓にいたる。はかハ洞にてその口のところ
に石をおけり 三九 耶穌いひたるハいしをのけよ死しものゝ
きやうだいマルタいひたるハ主よこれハはや臭ししまてよ
ましでハ四日をへたり 四十 耶穌かれにいひけるハなんぢも
し、しんぜバ神のさかえをみるべしとわれなんぢにいひし
にあらずや 四一 つひにその石をはなしものをおきたるとこ
ろよりそりのけたり。いゑす天をあふぎていひけるハ父よ

まではわれにきける。われこれをなんぢに謝す
四二 われなんぢがつねにわれに聴ことをしる。さるにわがかくいふはかたはらにたてる人をしてなんぢのわれをつかはせしことを信ぜしめんとてなり
四三 如此いひておほごゑによびいひけるはラザロよいでよ
四四 死者ぬのにて手足をまかれまゝ面はてぬぐひにてつゝまれて出いゑすかれらにいひけるはかれをときてあるかしめよ
四五 マリアとともにきたりしユダヤびと耶蘇のせしことをみておほくかれを信ぜり
四六 されどもそのうちはパリサイの人にゆきて耶蘇のせしことをつげしものあり
四七 こゝにおいて祭司の長たちとパリサイ

のひとと議官をよびあつめていひけるハわれらいかにす
べきやこの人おほくのしるしをなせり 四八 もしこれをかくこ
のまゝにさておかバ人みなこれを信ぜんさらバロマの人
きたりてわれらの地をも民をもうばふべし 四九 そのうちの
ひとりにてこの歳のさいしの長なるカヤバといへるもの
かれらにいひけるハなんぢらなにをもしらず 五〇 またた
みのために一人しにて擧國ほろびざるハわれらの益なる
ことをもおもはざるなり 五一 この言ハおのれよりいでしに
あらず。このとしの祭司のをさなるにより耶蘇のこの民の
ためにしぬることを預言せるなり 五二 たゞこのたみのた

めのみならず散たる神のこどもらをもひとつにあつめん
ごとなり 五二 さてこの日よりしてかれら耶穌をころさん
ことをはかる 五四 この故に耶穌これよりあらはにユダヤ
びとの中をあるかずそこをさりて野にちかきところなる
エフライムといふまちにゆきて門徒とともにとゞまれり 五五
ユダヤびとの逾越のいはひちかづきければひとびとおのれを
潔んがためにすぎこしのいはひのまへに郷間よりエルサレム
にのぼり 五六 耶穌をたづね聖殿にたちてあひいひ
けるはいかにおもふやかれは節にきたらざるか 五七 さいし
の長とパリサイの人ともすでに令をいだしてもし耶穌の

ありかをしるひとあらば告べしといふ。これハかれをとらへんとするなり

第十二章 逾越のいはひの六日まへ耶蘇ベタニヤにいたる。さてハ即ちさきにてよみがへらしゝラザロのをるところなり 二 こゝにはおいそあるひとびとこのところにて耶蘇にふるまひをまうくマルタ給仕をなせりラザロもいゑすとともに坐せるものゝうちの一人なり 三 マリア又眞正のナルダなるあたひたかきにほひあぶら一斤をもちきたりて耶蘇のあしにぬりまたおのが頭髪にてそのあしをぬぐへり。あぶらのにほひあまねく室中にみてり 四 そのでしの一人なるイスカリヲテのユダ

なハち耶穌をわたさんとはかるものいひけるハ 五 この香膏をなにゆゑぞ銀三百にうりてまづしきものにほどこさゞるや 六 かれがかくいへるハ貧者をおもふにあらず。ぬすびとにてかつ金嚢をもちそのうちにいれたるものをうばふものなればなり 七 耶穌いひけるハかれをゆるせかれはわが葬の日にこれをたくはへたり 八 まづしきものハつねになんぢらとともにあれどわれハ常になんぢらとともにあらざれバ 九 おほくのユダヤびと耶穌がこゝにをるをしりてきたる。たゞに耶穌のためのみにあらずまたそのよみがへらせしところのラザロをもみんとおもひきたるなり 十 祭司

のをさたちラザロをもころさんとはかりける 十一 それラザロに
ことによりておほくのユダヤびとゆきて耶穌(いゑす)をしんずる
がゆゑなり○ 十二 あくる日(ひ)おほくのひとびと節(いはひ)にきたり耶穌(いゑ)
穌(れ)のエルサレムにきたらんとするをきゝて 十三 椶葉(しゅろのは)をとりてゆきてこれ
らをむかへホザナよ主(しゅ)の名(な)によりてきたるイスラエルの王(わう)はさ
いはひなりとよばゝり 十四 いゑす驢馬(ろば)の子(こ)をえてこれに
のる 十五 しるしてシオンの女(むすめ)よおそるゝなかれ視(み)よなんぢの
王(わう)はろばの子(こ)にのりてきたるといへるがごとし 十六 門徒(でし)たち
はじめこれらのことをさとらざりしが耶穌(いゑす)さかえをうけし
のちにかれら此事(このこと)はかれにつきてしるされ。またかれらこれを

ひとぐ彼におこなひしをおもひいだせり　十七 耶穌の
ラザロを墓よりよびいだしてよみがへらせしとき、これと
ともにありしものども證をなせり　十八 この休徴をなせしこ
とをききしによりてひとびとかれを迎ふるなり　十九 こゝにお
いてパリサイの人たがひにいひけるは、なんぢらがはかると
ころの益なきをしらずや、みよ世はこぞりてかれにしたがへり
(十) 二十 禮拜のためにのぼれるもののうちにギリシヤの
人あり　二一 これらガリラヤのベツサイダのひとなるピリポにき
たり求ていひけるは、君よわれら耶穌にまみえんことをね
がふ　二二 ピリポきたりてアンデレにつぐ、アンデレまたピリポと

ともに耶蘇(いえす)に告ぐ 二三 いえすかれらにこたへていひけるは人(ひと)の子さかえをうくべきときいたれり 二四 まことにまことになんぢらにつげん一粒(ひとつぶ)の麥(むぎ)もし地(ち)におちてしなずばたゞひとつにてあらん。もし死(しな)ばおほくの實(み)をむすぶべし 二五 そのいのちををしむものはこれをうしなひその生命(いのち)ををしまざるものはこれを存(たもち)てかぎりなきいのちにいたるべし 二六 人(ひと)もしわれにつかへんとせばわれに從(したが)ふべし。われにつかふるものは我(わが)をるところにをらん人(ひと)もしわれにつかふれば我(わ)が父(ちゝ)はこれを貴(たふと)ぶべし 二七 いまわがこゝろうれへいかゞなまをいはんや父(ちゝ)よこのときよりわれをすくひたまへとい

ちんら否さらずためにわれ此時にいたれるなり 二八 ねがはくハ
くれ父よなんぢの名のさかえをあらはせ。このとき天より
こゑありていひけるハわれその榮をすでにあらはしまた再これをあ
らはすべし 二九 旁邊にたてるひとびときゝて雷なれりと
といふ。あるひとハ天のつかひこれにかたれるなりといへ
り 三十 耶蘇こたへていひけるハこの聲ハわがためにあらじ
なんぢらのためなり 三一 この世ハいま罪にさだめらるゝこの
よの主ハいまおひいださるべし 三二 われもし地よりあげら
れなバ萬民をひきてわれにきたらせん 三三 如此いひしハそのい
つるもそのいかなるさまにて死んとするをしめせるなり

三四 人々かれにこたへていひけるはわれら律法にてキリストはかぎりなく存ものなりときゝしになんぢ人の子かならずあげられんといふはなんぞや此ひとの子とは誰なるや
三五 耶蘇かれらにいひけるはなほしばらくのあひだ光なんぢらとともにありひかりあるうちにあゆみて暗におひつかれざるやうにせよ。くらきにあゆむものはそのゆくべきをしらず 三六 なんぢらひかりの子となるべきために光のあるうちにひかりをしんぜよ耶蘇これらをいひをはりてかれらをさけて隠たり○ 三七 いゑすかれらのまへにてかくおほくの休徴をなしたれどもなほかれをしんぜざりき 三八 これ預

言者イザヤがいひしことば。われらのつげしことを信ぜしものはたれぞや主の手はたれにあらはれしやとあるにかなへり。四十イザヤまたいふ。かれら目にて見こゝろにてさとりあらためていやさるゝことを得ざらんがためにかれそのめを瞽しそのこゝろを頑梗せりと。このゆゑにかれら信ずることあたはず四十一イザヤはかれの榮をみしによりかれについてこれはかたれるなり四十二されど有司たちのうちにおほくかれをしんぜしものありしがパリサイの人をおそれてあらはに信ずるといはざりき。その會堂よりしりぞけられんことをおそれたるによる四十三これかれらは神のほま

れよりも人のほまれをこのみたるなり○四四耶穌よばはりていひけるハわれを信ずるものハわれをしんずるにあらず我をつかはせしものを信ずるなり四五またわれを見るものハわれをつかはせしものをみるなり四六われハ光として世にきたれり。すべてわれをしんずるものをして暗にをらざらしめんためなり四七人もしわがことばをきゝてまもらざるともその罪をさだめず。わがきたりしハ世のつみをさだめんためにあらず世をすくはんためなり四八われを棄わがことばをうけざるものハつみを定るものあり。すなはちわがいひし言ははその日かれがつみをさだむべし四九そはわれお

のれよりいふにあらざされ我をつかはせし父わがいふべきことわがかたるべきことを命じたまへるなり 五十 そのめいじたまふところはすなはち永生なることをしれり。このゆゑにわがいふところは父のつげたまふままにいへるなり

第十三章

すぎこしのいはひのまへに耶穌この世をさりて父にかへるべきときいたれるをしりて世にあるおのれの民をあいしたまひしがをはりにいたるまでこれを愛せり 二 ときにすでに晩飯のせきにつく。あくまはかねて耶穌をわたさんとおもふこころをシモンの子イスカリヲテのユダといふものの心におこさしめたり 三 耶穌おのれの手にちゝのすべての

かれの手にまかせしことゝ神(かみ)よりきたりかみにかへることを
しりて 四 ゆふげの席(せき)をたちてうはぎをぬぎ手巾(てぬぐひ)をとりて
こしにまとひ 五 然(さう)してたらひに水(みづ)をいれ門徒(でし)のあしをあ
らひそのまとひたるてぬぐひにてふきはじめ 六 つひに
シモン ペテロにおよぶペテロこれにいひけるは主(しゆ)よなんぢわ
が足(あし)をあらふか 七 耶蘇(いえす)こたへていひけるはわがなすこと
をなんぢいましらねど後(のち)これをしるべし 八 ペテロこれに
いひけるはなんぢ断(たえ)てわがあしをあらふべからず耶蘇(いえす)これに
こたへけるはわれもしなんぢをあらはずばなんぢわれ
と干渉(かゝはり)なし 九 シモン ペテロこれにいひけるは主(しゆ)よさらばわ

があしのみならず手と首をもあらひたまへ 十 耶穌いひけるハあらひたるものハあしのほかの濯におよばず。そのみにして全きよし。なんぢらも潔されどもことごとくハきよきものにあらず 十一 こハ耶穌おのれをわたさんとするものの誰なるをしるゆゑにことごとくきよきものにあらずといへるなり

十二 かれらの足をあらひしのちその上衣をとりまたすわりてかれらにいひけるハわがなんぢらになせしことをしるや 十三 なんぢらわれを師とよびまた主とよぶ。なんぢらのいふところハよし我ハまことにこれなり 十四 われぞなんぢらの師また主なるになほなんぢらのあしをあらふ。なんぢ

らもまたたがひの足をあらふべし 十五 それなんぢらは例を
しめせり。これわがなせしごとくなんぢらも行しめんが
ためなり 十六 まことにまことになんぢらにつげん しもべはその主
よりおほいならず つかはさるゝ使者はこれをつかはせしものより大
ならず 十七 なんぢらもしこれをしりてこのごとくなさば
福なり 十八 わがいひしところはなんぢらをすべて指すにあ
らず。われはわが選しものをしる。しかれども聖書はわれと
ともに食するものわれにそむきて踵をあげしとしるされ
しにかなはせんためなり 十九 その事のいたらんときなんぢ
らわれを信じてキリストとせんためにそのことをいひつぐ

る今(いま)よりこれをなんぢらに告(つぐ) 二十 まことにまことになんぢらにつげんわがつかはすものをうくるものは我(われ)をうくるなりわれを接(うくる)ものはわれをつかはせしものをうくるなり 二十一 耶穌(いえす)このことをいひて心(こゝろ)にうれへあかししていひけるは誠(まこと)にまことになんぢらにつげん一人(ひとり)なんぢらのうちにわれをわたすものあり 二十二 門徒(でし)たちたがひにかほをみあはせ誰(たれ)をさしていへるなることをうたがふ 二十三 耶穌(いえす)のあいするひとりのでし耶穌(いえす)のむねによりそひてありしが 二十四 シモンペテロこなたをさしていへるあるのをとはしめんと首(かうべ)をもてしめせり 二十五 いゑその懐(むね)によりそひてをりしもの耶穌(いえす)にいひけるは主(しゆ)よたれな

るくの 二六 耶蘇(いゑす)こたへけるハわれひとつまみの食物(くひもの)にものを濡(つけ)てあたふる人(ひと)ハそれなりとてつひに一撮(ひとつまみ)のくひものをものをつけてシモンの子(こ)イスカリヲテのユダにあたふ 二七 彼(かれ)がひとつまみのものをうけしそのときサタナこれにいれり こゝにおいて耶蘇(いゑす)これにいひけるハなんぢがなさんとすることハ速(すみやか)になせ 二八 これハなにゆゑにいひしかをともに席(せき)にをるものどもの中(うち)にしるものあらざりき 二九 あるひとユダハ金嚢(かねぶくろ)をあづかれるゆゑ耶蘇(いゑす)これをしていはひについて用(もちゐる)べきものをかはしむるならんこの亦(また)ハまづしきものにほどこさしむるならんとおもへり 三十 さて彼(かれ)ハひとは

まゝみのくひものをうけてたゞちにいでさり時はすでに夜
なりき 三一 かれのいでしのち耶蘇いひけるはいま人の子さ
かえをうく神またかれによりて榮をうくるなり 三二 神もし
これによりてさかえをうくるときは神もまたみづからかれ
さかえのうちにこれをさかえしめむ直にこれをさかえしめ
ん 三三 小子よわれなほしばらくなんぢらとともにありなん
ぢらわれを尋んわがゆくところはなんぢらいたること
あたはじ前にこれをユダヤびとにいふ今またこれをなん
ぢらにいふ 三四 われ新誡をなんぢらにあたふ。すなはちなん
ぢら相愛すべしとはこれなり。わがなんぢらをあいせるご

とくなんぢらもあひ愛(あい)すべし 三五 なんぢらもし相(あひ)あいせ
ばこれによりて人々(ひと〴〵)なんぢらのわがでしなることをしる
べし シモン ペテロかれにいひけるは主(しゆ)いづくへゆきたまふ
や耶蘇(いゑす)こたへけるはわが往(ゆく)ところへはなんぢはい
ましたがふことあたはず後(のち)われにしたがはん 三七 ペテロこれ
にいひけるは主(しゆ)よなにゆゑにいまなんぢに従(したが)ふことあたは
ざるやわれはなんぢのためにわが命(いのち)を捨(すて)ん 三八 耶蘇(いゑす)これ
にこたへけるはなんぢいのちをわがために捐(すつ)るやまことに
われなんぢにつげん鶏(にはとり)なかざるまへになんぢ三次(みたび)
われをしらずといはん

第十四章 なんぢら心はうれふることなかれ神をしんじまた
われを信ずべし 二 わが父のいへには第宅おほし もししからず
ばわれかねてなんぢらにこれをつぐべきなり我なんぢら
のためにところを備にゆく 三 もしゆきてわれなんぢらの
ために所をそなへなばまたきたりてなんぢらをわれに納べ
し われのをるところになんぢらも居しめんとてなり 四 な
んぢらはわがゆくところをしりまたその途をしる 五 トマス
いひけるは主よわれらなんぢのゆくところをしらず何ぞ
してそのみちをしらんや 六 耶蘇これにいひけるはわれは
途なり眞なり生命なり人もしわれによらざれば父のもと

まゆくことあたはず七もしなんぢらわれをしらばわがちゝ
をも識(しる)べし。いまよりなんぢらこれをしるなり已(すで)になんぢ
らかれをみたり八ピリポこれにいひけるは主(しゆ)よわれらに
ちゝをあらはしたまへさらば足(たれ)り九イエスこれにいひけ
るはピリポわれ如此(かく)ひさしくなんぢらとともにをりしに
いまだなんぢわれを識(しら)ざるかわれを見(み)しものは父(ちゝ)を見しなり。な
んぞちゝをわれらにあらはせといふや十われ父(ちゝ)にをりちゝ
のわれにをることを信(しん)ぜざるか。わがなんぢらにいふと
ころはみづから語(かた)るにあらずわれにをる父(ちゝ)そのわざをな
せるなり十一われはちゝに居(をり)ちゝはわれにをるとわがいふを信ぜよ

ことを信ぜよ。もししからずばそがわざによりてこれを信ぜべし。十二まことに〱なんぢらにつげん。われを信ずるものはわがなすところの事をなさん。かつこれより大なることをもなすべし。そはわれわが父へゆけばなり。十三なんぢらわが名によりてねがふところのことを我きゝてこれをなさん。父のさかえの子によりてあらはれんがためなり。十四もしなんぢらなにごとにてもわが名によりてねがはゞ我これをなさん。十五もしなんぢらわれを愛するならばわが誡をまもれ。十六われちゝにもとめん。父かならず別になぐさむるものをなんぢらにたまひてかぎりなくなんぢらといつも

にをらしむべし 十七 これはすなはち眞理(まこと)のみたまなり世(よ)こ
れをうくることあたはず。そはこれを見(み)ずまたしらざるに
よる。されどなんぢらはこれを識(しる)そはこれなんぢらとともに
をりまたなんぢらの衷(うち)にをればなり 十八 われなんぢらを
すてゝ孤子(みなしご)とせず再(また)なんぢらにきたらん 十九 しばらくせバ
世(よ)われをみることなし。されどなんぢらはわれを見(みる)われい
くればなんぢらも生(いき)ん 二十 その日(ひ)にはなんぢらわれわが父(ちゝ)に
をりなんぢらわれに居(をり)われなんぢらにをることをしるべ
し 二十一 わがいましめをたもちてこれを守(まもる)ものはすなはちわ
れをあいするなりわれを愛(あい)するものはわがちゝはあいせ

らる。われもまたかれをあいしてこれに自己(みづから)をあらはすべ
し 二二 イスカリヲテならざるユダかれにいひけるは主(しゆ)よいか
ましてみづからをわれらにあらはし世(よ)にあらはしたまはざる
や 二三 耶穌(イエス)こたへてかれにいひけるは人(ひと)もしわれをあいせ
ばわが言(ことば)をまもらん。またわが父(ち)はかれをあいせん。われら
きたりてかれとともにすむべし 二四 われを愛(あい)せざるものはわ
がことばを守(まも)らず。なんぢらのきくところのことばはわ
が言(ことば)にあらずしてわれをつかはせし父(ち)のことばなり 二五 われな
んぢらとともにをりてこれらのことをなんぢらにいへり
されど 二六 わが名(な)によりて父(ち)のつかはさんとする訓慰師(なぐさむるもの)は

なはち聖霊(せいれい)もすべてのことをなんぢらにをしへ亦(また)わがす
べてなんぢらにいひしことをなんぢらにおもひいださし
むべし 二七 われ平安(やすき)をなんぢらにのこす。わがやすきをなん
ぢらに予(あたふ)わがあたふるところは世(よ)のあたふるところのご
ときにあらず。なんぢらこころに憂(うれふる)なかれまた懼(おそるゝ)なかれ 二八
われゆきてまたなんぢらにきたらんとわがいひしことを
なんぢらきけり。もしわれをあいせば父(ちゝ)にゆくとわがいへ
ることをなんぢらよろこぶべきなり。そはわがちゝはわれ
より大(おほい)なればなり 二九 いまだ成(なら)ずこれまづなんぢらに
つぐ事(こと)ならんときになんぢらこれを信(しん)ずべきためなり 三十

このゝちはおほくの言をもてなんぢらにかたらじ。そは
このよの主きたるゆゑなり彼はわれにかゝることなし 三十一
されどわがこれをなすはわが父をあいしまたその命ぜ
しごとくにしたがひておこなふことを世にしらしめんがた
めなり起よわれらこゝを去るべし

第十五章 われはまことの葡萄樹にしてわが父は農夫なり 二 われ
にありて實をむすばざるえだはちゝこれをきりとり
またすべてみをむすぶ枝はこれをかりこむ。そはますますおほ
くみを結ばしめんためなり 三 いまなんぢらわがいひしこと
ばによりて潔なれり 四 なんぢらわれに居れさらばわれまた

なんぢらにをらん枝(えだ)もしぶだうのきにつらならざればみづから實(み)をむすぶことあたはず。なんぢらもわれにつらならざればまたかくのごとくなるらん 五 われはぶだうの樹(き)なんぢらはそのえだなり人(ひと)もしわれにをりわれまたこれにをらばおほくの實(み)をむすぶべし。そはもしなんぢら我(われ)をはなるるときはなにごとをもなしあたはざればなり 六 人(ひと)もしわれにをらざればはなれたる枝(えだ)のごとくそとにすてられて枯(かる)るなり。ひとこれをあつめ火(ひ)になげいれてやくべし 七 なんぢらもしわれにをりまたわがいひしこと爾儕(なんぢら)にをらばすべてねがふところ求(もとめ)にしたがひてあたへらるべし

八なんぢらおほくの實をむすべばこれによりて
榮をうく。されバなんぢらわが門徒なり九ちゝわれを愛
しゝがごとくわれまたなんぢらをあいせり。なんぢらわが愛に
をれ十もしなんぢらわがいましめをまもらバわが愛にを
らん。これわがちゝの誡をまもりてその愛にをるがごとく
し十一これこのことをなんぢらにかたるハわが喜なんぢら
にありてなんぢらのよろこびをみたさしめんがためなり十二
わがなんぢらを愛せるごとくなんぢらもまたたがひにあ
いあいすべし。これわが誡なり十三ひとその友のためにおのれの
命をすつるハこれよりおほいなるあいハなし十四なんぢら

がなんぢらはめいずるところのことをおこなはゞすなはちわが友(とも)なり　十五　いまよりのちわれなんぢらを僕(しもべ)といはず。そはしもべはその主(しゆ)のなすことをしらざればなり。われさきにはなんぢらを友(とも)とよべり。われなんぢらにわが父(ちゝ)よりききしところのことをことごとくつげしによる　十六　なんぢらわれを選(えらば)ではわれなんぢらをえらべり。このなんぢらをしてゆきて實(み)をむすばせそのみをたもたしめんがため。またなんぢらのすべてわが名(な)によりてちゝにねがふところのものを彼(かれ)をしてなんぢらにたまはらせんがためにわれなんぢらをたてたり　十七　なんぢらたがひに愛(あい)せんがためわれこれ

と命ぜし。十八 世もしなんぢらをにくむときはなんぢらよりもさきにわれを悪むとしれ 十九 なんぢらもし世のものならば世はおのれの属をあいすべし。されどなんぢらはよのものにあらず。われなんぢらを世よりえらびたり。これによりて世なんぢらをにくむ 廿 しもべはその主よりおほいならずとわがなんぢらにいひしことをこころに憶よ。ひともしわれをせめばなんぢらをも窘迫しわがことばをまもらばなんぢらの言をもまもるべし 廿一 されどかれらはわれをつかはせしものをしらざるによりわが名のゆゑをもてこれらのことをなんぢらに加べし 廿二 われもしきたりてかたらざりし

なからべこのわれらつみなかるらん。されどいかなるその罪いひえらう
くべきやうなし。二三 それはにくむものをまさしくわがちからをもて
あくむなり。二四 それもし他の人のせざりしわざはこれらの
うちはおこなはざりしあるべうわれら罪あるらん。されどそ
れらが父と然までは見いうこれをふくめり。二五 このご
ときんうわれらのおきては故なくしてわれをなくめあて録
せしこゝろにかなはずとあるなり。二六 それなぐさむるもの然
父よりおくらんとするをちゝよりいづる眞理のみなるな
り。そのきたるときわがためは證をなすべし。二七 またちゝも
またわれらも偕はじめよりともにはよりてあくうしをあれ

證し

第十六章

一 わがこれらのことをなんぢらに語るハなんぢらがつまづかざらんためなり 二 ひと〴〵なんぢらを會堂よりしりぞくべし。まさにすべてなんぢらをころす者みづから神につかふるとおもふときいたらん 三 これらのことをなんぢらになすハ父とわれとをしらざるがゆゑなり 四 われこのことをなんぢらにかたるハ時いたりてわがこれをいひしことをなんぢらにおもひいださんためなり前にこれをなんぢらにいはざりしハ我なんぢらとともにをりたればなり 五 われ今われをつかはせしもののもとにゆかんとす。されどなんぢ

らのうちかれはいづこへ往とたづぬるものなく 六 たゞ
て我これらのことをいひしによりて憂なんぢらのこゝろにみ
てり 七 されど眞をなんぢらにつげん わがゆくはなんぢらの
益なりわれもしゆかずばなぐさむるものなんぢらにきたらじ
もし往ばこれを汝らにおくらん 八 これきたらんとき
罪につき義につきさばきにつき世をしてつみありとさとら
しめん 九 つみにつきてといへるはかれを信ぜざるによ
るゆゑなり 十 たゞしきにつきていへるはわが父へゆ
くによりてなんぢらまたわれを見ざればなり 十一 審判につ
いてといへるはこのよのぬしさばきをうけたればなり 十二 わ

れなほおほくかたるべきことあれども今(いま)なん
ぢらさとることあたはず 十三 されど彼(かれ)すなはちまことの靈(れい)の
きたらんときなんぢらをみちびきてすべての眞理(まこと)をしら
しむべし。そはこれ己(おのれ)によりてかたるにあらずそのきゝし
ところのことをなんぢらにいひ亦(また)きたらんとすることを
なんぢらに志めすべければなり 十四 かれわが榮(さかえ)をあらはさ
ん。そはわがものをうけてなんぢらにしめせばなり 十五 すべ
てちゝのもちたまふものはわがものなり。この故(ゆゑ)にこれわ
がものをうけてなんぢらに示(しめさん)といへり 十六 志ばらくせばなん
んぢらはわれを見(み)ず。また志ばらくしてわれをみるべし。これ

われ父へゆくなり 十七 こゝにおいて門徒のうちにてあるものたがひにいひけるは暫せばなんぢらわれをみざるべし しばらくしてわれをみるべしといひ且われはちゝへゆくなりとわれらにいひしはなんのことぞや 十八 かれらまたいひけるはこのしばらくといひしは何のことぞや そのいへるところをわれらしらず 十九 耶蘇かれらがとはんとするをしりていひけるは しばらくせば我をみざるべし しばらくしてわれをみるべしと言しこのことによりてなんぢらたがひにたづねあふか 二十 誠にまことになんぢらにつげん なんぢらはなげきかなしまん 世はよろこぶべし。なんぢら

うれふることあらん　されどその憂(うれへ)はかはりてよろこびとなる
べし 二一 をんな子(こ)をうまんとするときはうれふ。その期(とき)いたる
るによりてなり。されどすでにうみぬればもはや苦(くるしみ)をわするゝ世(よ)
にひとのうまれたるよろこびによりてなり 二二 かくのごとく
なんぢらもいま憂(うれふ)されどわれまたなんぢらを見(み)んその
ときなんぢらのこゝろよろこぶべし。その喜樂(よろこび)をうばふもの
のあらじ 二三 その日(ひ)なんぢらわれにとふところなかるべし。
まことにまことになんぢらにつげん　およそわが名(な)によりてちゝ
にもとむるところのもの父(ち)これをなんぢらにさづけたま
ふべし 二四 なんぢらいまゝでわが名(な)によりてもとめたるこ

となへし求(もとめ)よさらバうけん しかしてなんぢらのよろこび満(みち)
べし 二五 われたとへをもてあることゝをなんぢらにかたりしが譬(たとへ)
喩をもちゐずしてなんぢらにかたり父(ちゝ)につきてあきらかに
にしめすときいたらん 二六 その日(ひ)なんぢらわが名(な)によりて
もとめん。われなんぢらのために父(ちゝ)にねがはんといはず 二七
そハちゝみづからなんぢらをあいすればなり。これなんぢ
らわれを愛(あい)しまたちゝよりわがきたりしことを信(しん)ずるに
よる 二八 われちゝよりいでゝ世(よ)にきたれり。またよをはなれ
て父(ちゝ)にゆかん 二九 でしらハいひけるハなんぢいまあきら
かにいひて譬喩(たとへ)をいはず 三〇 われらいまなんぢのしらざる

ところなくまた人のなんぢにとはるゝ用なきことをしる。こ
れによりてわれら神よりなんぢのいできたりしことをしん
ず 三一 耶蘇かれらにこたへけるはいまなんぢら信ずるか 三二
ときまさにいたらん今いたりぬ。なんぢら散ておのおのその
屬するところにゆきてわれを一人おかん。されどわれ
ひとりをるにあらず。父われとともにをるあり 三三 われこの
ことばをなんぢらにかたりしはなんぢらをしてわれにあり
て平安をえせしめんがためなり。なんぢら世にありては患
難をうけん。されどおそるゝなかれわれすでに世に勝て

〔第十七章〕耶蘇このことばをかたりて天をあふぎいひけ

るハ父よときいたりぬ。なんぢの子なんぢのさかえをあら
はさんがためになんぢの子のさかえをあらはしたまへ 二
これなんぢかれにたまひしところのものにかれ永生をあ
たへんがためすべてのものををさむる權威をかれにたま
ひたればなり 三 かぎりなきいのちとハ唯ひとりの眞神な
るなんぢとそのつかはせしいゑすキリストをしる是なり 四
われなんぢの榮をよにあらはし。なんぢのわれに託しとこ
ろのわざハわれこれを成り 五 ちゝよ今われをしてなんぢ
とともに榮えせしめたまへ。わがもちし創世よりさきは
なんぢとともにもちしところのさかえを得せしめたま

へ
六なんぢ世よりえらびてわれにたまひし人々にわれなんぢの名をあらはせり。かれらはなんぢの屬にしてなんぢかれらをわれに賜へりかれらはなんぢのことばを守れり
七かれらいまなんぢのわれにたまひしものは皆なんぢよりいでしとしる
八そはわれなんぢがわれにたまひし言をかれらにあたへたればなり。かれらこれを受またわがなんぢよりいでしことをまことに知かつなんぢのわれをつかはせしことを信ぜり
九われかれらのために祈わがいのるは世のためにあらずなんぢのわれにたまひしもののためなるのみ。そはかれらはなんぢのものなればなり
十凡て

わがものはなんぢのもの なんぢのものはわがものなり且(かつ)
われかれらによりてさかえをうく 十一 われいまより世(よ)にを
らず。かれらはよにをる われはなんぢにいたる聖父(きよきちち)よなん
ぢのわれにたまひしものをなんぢの名(な)にをらしめかれを
保守(まもり)てわれらのごとくかれらをも一(ひとつ)になしたまへ 十二 われ
かれらとともにありしときかれらをなんぢの名(な)にをらし
めてこれをまもりたり。なんぢのわれに賜(たまひ)しものをわれま
もりしがそのうち一人(ひとり)だにほろびたるものなし。ただ沈淪(ほろび)
の子(こ)ほろびたり。これ聖書(せいしよ)にかなはせんためなり 十三 われい
まなんぢにいたる。われ世(よ)にありてこのことをかたれるは

わが喜樂(よろこび)をかれらにみたしめんためなり 十四 われなんぢのことばをかれらにさづけたり世(よ)はかれらをにくむ。そは我(われ)よのものにあらざるごとくかれらも世(よ)のものにあらざればなり 十五 われなんぢにかれらを世(よ)よりとりさるべくといのらず。ただかれらを保守(まもり)てあしきにおちいらんなかれといのる 十六 われよの屬(もの)にあらざるごとくかれらも世(よ)のものにあらず 十七 なんぢのまことをもてかれらをきよめさせたまへ。なんぢのことばは眞理(まこと)なり 十八 なんぢわれを世(よ)につかはせしごとくわれもかれらを世(よ)につかはせり 十九 われかれらのためにみづからを潔(きよむ)これまことによりてかれらのきよめら

ぜんためなり 二十 それがしかれらのためのみいのらずか
れらのことばによりてそれがしを信じるもののためにも祈な
り 二一 これらみな一はあらんためなり父よなんぢそれがしにあり
それがしなんぢに居ことのごとくかれらもそれらにありて
ひとつにあらんためこの世をしてなんぢのそれがしをつかはせ
しことを信ぜしめんためなり 二二 なんぢのそれがしにたまひし
榮はそれがしかれらにさづけたり。これわれらの一なるがごと
くかれらもさゞひはひとつにならんためなり 二三 それがしかれ
らにをりなんぢそれがしにをる。それかれらをしてひとつに全
あらしめこの世をしてなんぢのそれがしをつかはせしことま

たなんぢわれを愛するごとくこれらをもあいすることをしらしめんとなり 二四 父よなんぢのわれに賜しものゝわがをるところにわれとともにをりてわが榮すなはちなんぢがわれにたまひしものをみんことをねがふ。そは世基をおかざりしさきになんぢわれをあいしたればなり 二五 たゞしき父よ世はなんぢをしらずされどわれはなんぢを識れりこれらもなんぢのわれをつかはせしことを識れり 二六 われなんぢの名をこれらにしめせり復これをしめさん。そはなんぢのわれをあいするの愛これらにありまたわれこれらにをらんためなり

第十八章

耶穌このことをいひてのちそのでしとともにいでゆくケデロンの河をわたりそのところにある園のうちにでしとともにいりぬ 二 耶穌をわたしたるユダこの處をしれり いえすはしばしばその門徒とともにここにあつまりければなり 三 このときユダ一隊のつはものと羣吏をさいしのをさたちおよびパリサイのひとよりうけ炬とてうちんと兵器をたづさへてここにきたれり 四 いえすは事のおのれにおよばんとするをことごとく知いでてこれらにいひけるは誰をたづぬるや 五 これにこたへけるはナザレの耶穌なり 六 いえすはこれらにいひけるはわれそれなり 耶穌をわたせしユダ

かれらとともにたてり 六 耶穌かれらにむかひてわれなり
といひたまへるとき かれらしりぞきて地にたふれたり 七
いゑすまたかれらにたれをたづぬるやとふたゝびとひしか
ば かれらはナザレの耶穌なりといふ 八 いゑすこたへけるはわ
れすでになんぢらに我はそれなりといへり もしわれをた
づぬるならばこの輩をゆるしてさらしめよ 九 これ耶穌わ
れにたまひしものゝうち一人をもうしなふものなしとい
ひし言をかなはせんためなり 十 ときにシモンペテロ剣をお
びたりしがこれをぬきて祭司のをさのしもべをうちてそ
のみぎの耳をきりおとせり そのしもべの名をマルコスといふ 十一

耶蘇ペテロにいひけるハつるぎを鞘にをさめよ父のわれ
にあたへし杯をわれのまざらんや 十二 こゝにて隊のつはもの
およびそのかしらとユダヤ人のしもべら耶蘇をとらへし
ばりて 十三 まづこれをアンナスのもとにつれゆく。これハこの
歳のさいしのをさカヤパの外舅なるによりてなり 十四 ユダヤ
びとに議てひとり民のためにしぬるハ益ありといひしハ
このカヤパなりき 十五 シモンペテロとほかにひとりのでし耶
蘇にしたがへり。このひとりのでしハ祭司のをさのしると
ころのものにて耶蘇とともにさいしのをさの庭にいる 十六
ペテロハ門外にたゝずみさいしのをさのしるところのでしい

でし門をまもる婢はつげてペテロをともなひいるゝ 十七 こゝに
おいてもんをまもる婢ペテロにいひけるはなんぢもこの
人のでしのひとりならずやペテロしからずといふ 十八 しもべ
どもとしもやくにんたち寒によりて炭をたきそのところにまた
ちてあたゝまるペテロもこれらとともにたちて煖れり 十九
さいしのをさ耶穌はそのでしとその道のことをたづぬ 二十
耶穌これにこたへけるはわれあらはに世にかたりきわれ
つねにユダヤびとの平生あつまるところなる會堂および
聖殿にてをしへをなしひそかにかたれることなし 二一 なん
ぞわれにたづぬるやわれいかにかたりしを聴ものにたづ

ねよかれらわがいひしところをしれり 二二 耶穌かくいひしにかたはらにたてるひとりの小吏てのひらにてこれを打いひけるはなんぢさいしの長にこたふるにかくのごときか 二三 耶穌かれにこたへけるはもしわがいひしことよくあらばそのよからざるを證せよ。もしよくばなんぞわれをうつや 二四 さてアンナス耶穌をしばりてさいしのをさカヤバのもとにおくれり 二五 シモンペテロ立てあたゝまりをりしがあるひとびといひけるはなんぢもかれの門徒のひとりなるぞやペテロうけがはずしてあらずといへり 二六 さいしのをさのしもべの中のひとり即ちペテロにみゝをそがれし

ものは親戚いひけるは われなんぢがこれとともに園におりしをみしにあらずや 二七 ペテロまたうけがはざりし。やがて雞なきぬ◯ 二八 ひとびと耶穌をひきてカヤパより公廳にゆけり時まだよあけなりき。これら汚穢をうけんことをおそれてやくしよにいらず。それすぎこしのいはひを食せんとすればなり 二九 ピラトいでてこれらにいひけるは いかなる訟をもてこのひとをうつたふるや 三〇 ひとびとこたへけるは これもし悪をなせるものにあらずんばなんぢにわたさじ 三一 ピラトこれらにいひけるは なんぢらこれをとりてなんぢらの律法にしたがひてさばきせよ ユダヤのひとびとこれにいひけるは

われらはひとをころすの權なし 三二 これ耶蘇のそのしなんとする狀をさしてかたれることばかなへま 三三 ピラト復やくしよにいり耶蘇をよびていひけるはなんぢはユダヤびとの王なるや 三四 耶蘇これにこたへたるはなんぢこのことをいつるはみづからによるかまたはついぞ人のつげしによる 三五 ピラトこたへけるはわれはユダヤ人ならんや。なんぢのくにの民とさいしの長となんぢをわれにわたせり。なんぢなにをなせしや 三六 耶蘇こたへたるはわが國はこの世のくにはあらずもしわがくにこれよの國ならばわがしもべはわれをユダヤびとにわたさざるためにたゝかふべし。されど

わがくにハこの世のくにゝあらざるなり 三七 ピラトかれにい
ひけるハさらバなんぢハわうなるか耶蘇こたへけるハな
んぢのいふところのごとくわれハ王なりわれこれがため
に生れこれがために世にきたれり。それハ眞理についてあかし
をなさんためなり。すべてまことにつくものハわが聲をき
く 三八 ピラトかれにいひけるハ眞理ハいかなるものぞや。この
ことをいつるのちまた出てユダヤびとにいひけるハわれ
ハこの人につみあるをみず 三九 爰になんぢらにひとつの例
あり。それすぎこしの節にひとりの囚人をなんぢらにゆる
す。なんぢらユダヤびとの王をゆるさんことを欲ふや 四十

ひと〴〵また喊叫(さけび)いひけるはこのひとにあらずバラバを釋(ゆるせ)

バラバはぬすびとなりけり

第十九章(だいじふくしやう)

そのときピラト耶穌(いえす)をとりてむちうつ 二 兵卒(へいそつ)どもいばらにて冕(かんむり)をあみこれの首(くび)にかぶらしめ。またむらさきの袍(うはぎ)をきせて 三 いひけるはユダヤびとの王やすかれ。このくて掌(てのひら)にてこれをうてり 四 ピラトまたそとにいでてかれらにいひけるはわれこれについて罪(つみ)あるをみずこれをしらせんとてなんぢらにひきいだせり 五 いえすは棘(いばら)のかむりをかうぶりむらさきのうちぎをきてそとに出(いづ) ピラトかれらにいひけるはみよこれその人(ひと)なり 六 さいしの長(をさ)ぶちともさ

やくこれをとりて十字架(じふじか)につけよじふじかにつけよとさけびいふピラトかれらにいひけるはなんぢらこれをとりてじふじかに釘(つけ)よわれはかれにつみあるをみざるなり 七 ユダヤびとかれにこたへけるはわれらに律法(おきて)ありそのおきてにしたがへばかれは死ぬべきものなり。そはかれみづからを神(かみ)の子(こ)となせばなり 八 ピラトこのことばをきゝてます〳〵おそる 九 また公廳(やくしよ)にいりていゑすにいひけるはなんぢいづこのものぞ耶穌(いゑす)こたへせざりき 十 ピラトかれにいひけるはわれにこたへざるか我(われ)なんぢをじふじかにつくる權(けん)威(ゐ)ありまたなんぢをゆるすけんゐありこのことをしらざ

るゝ 十一 耶穌こたへけるは なんぢ上よりけんゐをさづけらずばわれにむかひて権威あることなし このゆゑにわれを
なんぢにわたせしものはつみ尤おほいなり 十二 このゆゑ
ピラトかれをゆるさんと謀りつれども ユダヤびとさけん
でいひけるは もしこれをゆるさば カイザルは忠臣あらじ す
べてみづから王となのるものは カイザルにそむくものなり
十三 ピラトこのことばをきゝて 耶穌をひきいだし 鋪石といふ
るところ ヘブルのことばにてはガバタといふところの
さばきの座にみづからすわれり 十四 その日はすぎこしのい
はひの備日にして ときはおよそ十二時ごろなりき ピラト

ユダヤびとにいひけるハなんぢらの王をみよ 十五 かれらさけびてこれを除けこれをのぞけ十字架につけよといふピラトかれらにいひけるハわれなんぢらの王をじふじかに釘べけんや。さいしのをさたちこたへけるハカイザルの他われらハわうなし 十六 つひにピラトかれを十字架につけしめんとてかれらにわたせり。こゝにおいてかれら耶蘇をとりてひきゆけり 十七 耶蘇じふじかをおひて髑髏といへるところヘブルのことばにてゴルゴダといふところにゆけり。このところにて 十八 かれを十字架につけたり。ほかの二人のものもかれとともに十字架につけらる。ひとりハ右ひとりハ左

いゑす中にをれり 十九 ピラトまたふだを十字架につけ此ハユダヤびとの王なるナザレのいゑすなりとしるしたり 二十 おほくのユダヤびとこの罪標をよめり。そハ耶蘇をじふじかにつけしところハ京城にちかけれバなり。そのふだハヘブルギリシヤロマのことバにて書たり 二十一 ユダヤびとの祭司のをさたちピラトにいひけるハユダヤびとの王としるすなかれみづからユダヤ人のわうなりといひしとしるすべし 二十二 ピラトこたへけるハわがしるせしところ巳にしるしたり

二十三 へいそつども耶蘇をじふじかにつけしのちそのうはぎをとり四にわけておのおのその一をとりまたしたぎをとれ

又この裏衣(したぎ)はぬひめなくうへよりまつたく織(おれ)るものなりけれバ
二四 たがひにいひけるハこれを裂(さか)ずしてたれのものにならんと鬮(くじ)にすべし。これハ聖書(せいしよ)にかれらたがひにわが衣(ころも)をわけわがしたぎをくじにすれといひしにかなはせんためなり兵卒(へいそつ)どもすでにこのことをなせり
二五 さて耶穌(いえす)のはゝとはゝの姉妹(しまい)およびクロパの妻(つま)のマリアまたマグダラのマリアその十字架(じか)のうしろにたてり
二六 いゑす母(はゝ)とあいするところの門徒(でし)とうしろにたてるをみてはゝにいひけるは婦(をんな)よこれはなんぢの子(こ)なり
二七 またでしにいひけるはこれなんぢの母(はゝ)なり。このときその門徒(でし)これをおのれの家(いへ)につれ

ゆけり 二八 かくて耶蘇すべてのことすでにをはれるをし
て聖書にかなはせんためにわれ渇くといへり 二九 このところ
に醋のみちたる器皿ありしかばへいそつども海絨をもて
ひたし牛膝草につけてその口にあてたり 三〇 いえす醋をうけ
しのちいひけるは事をはりぬ。かうべをたれて靈をわたせ
り○ 三一 この日はいはひのそなへびなり。このあんそくにち
は大なるあんそくにちなれば屍をじふじかのうへにおく
ことをこのまざるがゆゑにユダヤびとピラトにむかひて
かれらの脛を折てそのしかばねをとりのぞかんことをねがひけ
り 三二 こゝにおいて兵卒ども耶蘇とともに十字架につけら

れしものゝひとりのあしをさきに折(をり)つぎにまたひとりの
あしを折(をり) 三三 のちに耶蘇(いゑす)にきたりしがすでに死(しに)たるをみ
てそのあしを折らざりき 三四 一人(ひとり)のへいそつ戈(やり)にてその脇(わき)
をつきければたゞちに血(ち)と水(みづ)となかれいでたり 三五 これを
みしもの證(あかし)をたつ。そのあかしはまことなり。かれみづ
からいふところの眞(まこと)なるをしる。なんぢらをして信(しん)ぜしめ
んがためなり 三六 このこと成(なれ)り。あるしてその骨(ほね)のひとつを
もをらざるべしとあるに應(かな)せんがためなり 三七 またほかの
書(ふみ)にかれらの刺(さし)しものをかれらみるべしといへり〇 三八 こ
のちアリマタヤのヨセフといへるものまて前(まへ)にユダヤびと

をおそれて隠にいゑすのでしとなれるもの耶穌のしかばね
をとらんとてピラトに求ピラトこれをゆるせしにより
きたりてその屍をとれり 三九 またさきに夜間いゑすにきたれ
りニコデモといふひと没薬と蘆薈をまぜおよそ百斤ばかりの
りたづさへきたる 四〇 かれら耶穌のしかばねをとりてユダヤ
びとの葬のならはしにしたがひこれを布と香にてつゝめ
り 四一 さて十字架につけしそのあたりにそのあり園のうち
にいまだ人をはうむりしことなきあたらしきはかあり 四二
この日はユダヤびとのいそぎのそなへ日なり。また墓ちかゝ
りけれバそこに耶穌をおけり

第二十章

一 週のはじめの日はあさいまだくらきうちにマグダラのマリア墓にきたりて石のはかよりとりのけありしを見 二 つひにシモンペテロまた耶穌のあいせしところの門徒にはしりきていひけるははかより主をとりしものあり。われらいづこにおきしやその處をしらず 三 ペテロと彼ひとりのでしいでゝ墓にゆく 四 ふたりともにはしるほかのでしペテロよりとく趨てさきにはかにいたりぬ 五 俯てかばねをつゝみし布をおけるをみたれどもいらず 六 シモンペテロかれにおくれてきたり墓にいりつゝみしぬのゝおけるを見たり 七 そのかうべをつゝみしてぬぐひは屍を裹しぬのとともに

おかれずしてほかのところに畳ておけり 八 こゝにおい
てさきに墓にきたれるほかのでしもいりきたれば みて信ぜ
り 九 しるして耶蘇のよみがへるべきことのあるをかれら
いまだしらざるなり 十 かくて門徒はおのれのやどにかへ
れり 十一 マリアは墓のそとにたちて哭つゝはかにむかひうつぶ
みて 十二 ふたりの天使しろきころもを着いゑすのしかばね
をおきたりしところの首のかたにひとり足のかたにひとり
坐しをるをみたり 十三 天のつかひかれにいひけるは婦よ
なんぞなげくや。かれこたへけるはわが主をとりしものあ
りいづこにおきしかをしらざればなり 十四 かくいひてふり

うしろを耶蘇(いゑす)のたちしをみる。されども耶蘇(いゑす)なることをしら
ず 十五 いゑすかれにいひけるハをんなよなんぞなげくや誰(たれ)
をたづぬるかマリア園(その)をまもるひとならんとおもひかれ
にいひけるハ君(きみ)よなんぢもしかれを移(うつ)しならバい
づこにおきしかわれにつげよわれまさにかれを取(とる)べし 十六 耶蘇(いゑす)か
れにマリアよといふ婦(をんな)かへりみてかれにラボニといふ。こ
れ夫子(ふうし)なり 十七 いゑすかれにいひけるハわれに捫(さはる)
ことなかれわれいまだわが父(ちち)のもとにのぼらざればなり。わが兄(きやう)
弟(だい)にゆきていへわれハわが父(ちち)すなはちなんぢらがちゝわ
が神(かみ)すなはちなんぢらがかみに升(のぼる)と 十八 マグダラのマリア主(しゆ)

彼(かれ)みしことゝ主(しゆ)のかくおのれにいひつぐるといふことを門徒(でし)たちにゆきてつぐ○十九 この日(ひ)はくれがたすなはち一週(ひとまはり)のはじめの日(ひ)でしたちユダヤびとをおそるゝによりてあつまれるところは門(と)をとぢおきしが耶蘇(いえす)きたりてそのうちにたちかれらにいひけるはあんぢら安(やす)かれ 二十 かくいひしのちそれ手(て)とわきばらをかれらに見(み)せ。でしたち主(しゆ)をみてよろこべり 二一 耶蘇(いえす)またかれらにいひけるはなんぢらやすかれ父(ちゝ)のわれをつかはしゝごとくわれもなんぢらを遣(つかは)す 二二 かくいひしのち氣(いき)をふきかけてかれらにいひけるは聖靈(せいれい)をうけよ 二三 あんぢら誰(たれ)のつみをゆるさんともその罪(つみ)ゆ

るされ、ざるのつみを定るともそのつみはさだめらるべし 二四
耶穌きたりしとき十二の弟子の一人なるデトモととなふ
るトマス、かれらとともにをらざりき 二五 このゆゑにほかの門
徒かれにいひけるはわれら主をみたりトマスかれらにいひ
けるはわれもしその手にくぎのあとを見またゆびを釘の
あとにさしわが手をそのわきにさしいれずば信ぜじ
二六 八日をすぎてのち復でしらうちにをりけるが
トマスもかれらとともにをれり門をとぢたるに耶穌きたりて
そのうちに立ていひけるはなんぢらやすかれ 二七 つひに
トマスにいひけるはなんぢの指をこゝにのべてわが手を見

あんぢの手(て)をのべてわがあばらにさせ信(しん)ぜざるなかれ信(しん)ぜよ 二八 トマスこたへていひけるはわが主(しゆ)よわが神(かみ)よ 二九 いゑすかれにいひけるはなんぢわれをみしによりて信(しん)ずみずしてしんずるものはさいはひなり 三十 この書(ふみ)にのするざるほかになほあまたのしるしを耶蘇(いえす)でしのまへにてあらはせり 三一 このふみをのするはなんぢらをして耶蘇(いえす)のかみの子(こ)キリストなることを信(しん)ぜしめこれを信(しん)じてその名(な)によりていのちをえせしめんがためなり

第(だい)二十一章(しやう)

このゝち耶蘇(いえす)またテベリアのみづうみにてまたでしたちにおのれをあらはせり。そのあらはせることは左(さ)のごとし 二 シモン

ペテロとデドモといへるトマスおよびガリラヤのカナのナタナヘルとセベダイの子(こ)らとまたほかの二人(ふたり)のでしともあり 三 シモンペテロかれらにいひけるはわれ漁(すなどり)にゆかん。かれらいひけるはわれらもともにゆかん。かれらいでゝ船(ふね)にのりしがこの夜(よ)はなにのえものもなかりき 四 すでによもあけたるに耶穌(いゑす)きしにたてり。されど門徒(でし)たちそのいゑすなることをしらざりき 五 耶穌(いゑす)かれらにいひけるはちいさき子(ご)どもよ食物(しよくもつ)あるや。かれらこたへけるはなし 六 耶穌(いゑす)かれらにいひけるは網(あみ)をふねのみぎにうたば獲物(えもの)あらん。つひにあみをうつ魚(うを)おほきによりてひきあぐることあたはざりき 七 こゝにお

いゑ耶穌(いゑす)のあいせしところの彼(かの)でしペテロにいひけるは
これ主(しゆ)なりシモンペテロ主(しゆ)なりときゝて裸(はだか)なりしがころも
をつけ帯(おび)してうみにとびいりぬ 八 あとりのでしたちは小舟(こぶね)
にてうをのいりたるあみをひきていたれりそれ岸(きし)をさる
ことほとんど五十間(ごじふけん)ばかりなりければなり 九 岸(きし)につき
しに炭火(すみび)とそのうへにのせたる魚(うを)および餅(パン)あるをみる
十 耶穌(いゑす)かれらにいひけるはいまとりしところのうをを少(すこし)
もちきたれ 十一 シモンペテロふねに往(ゆき)あみをきしにひきてた
りしにその網(あみ)のなかにおほきなるうを百五十三尾(ひやくごじふさんび)いりさ
まぢつくおほかりけれどあみはやぶれざりき 十二 耶穌(いゑす)かれら

にいひけるハきたりて食せよ。でしたち敢てこれハなんぢハたれなるとたづぬることをせず。これハ主なりと志れバなり 十三 耶穌きたりてパンをとりこれらにあたへ魚をもまたそのごとくせり 十四 耶穌よみがへりしのち自己をでしたちにあらはせることこれ三次なり 十五 さてこれら食しそのち耶穌シモンペテロにいひけるハヨナの子シモンよなんぢこれらのものにまさりてわれを愛するや。かれいひけるハしゆよ然わがなんぢを愛することハなんぢ志れり 耶穌これにいひけるハわが羔をかへ 十六 またふたゝびこれにいひけるハヨナのこシモンよなんぢわれをあいするや。かれいひけるハ主

よしかりわがあんぢをあいまするこゝろはあんぢしれり耶蘇(いゑす)かれはいひけるはわがひつじを牧(か)へ 十七 みたびこれにいひけるはヨナの子(こ)シモンよなれはあいまするかのペテロみたび我(われ)をあいまするかといはれしによりて憂(うれ)ひてこたへけるは主(しゆ)よしらざるところなしわがなんぢを愛(あい)するこゝろはなんぢしれり耶蘇(いゑす)かれはいひけるはわがひつじを牧(か)へ 十八 まことにまことになんぢにつげんなんぢ幼(わかき)ときみづから帯(おび)しこゝろにまかせてあるきぬ老(おい)てハ手(て)をのべ人(ひと)なんぢをしばりこゝろにかなはざるところにひきゆくらん 十九 これいへるはそのいかなる死(し)にて神(かみ)をあがめんといふことをしめしたるなり。こ

れ給ひてのちまたこれにいひけるハ我[われ]にしたがへ 二十
ペテロふりかへり耶蘇[いゑす]のあいせしでしのしたがふるをみる。
このでしハ食[しよく]するときいゑすのむねによりて主[しゆ]をうらん
ものハたれぞやといひし門徒[でし]なり 二十一 ペテロこれをみて耶[いゑ]
蘇[す]にいひけるハ主[しゆ]よこの人[ひと]いかに 二十二 耶蘇[いゑす]これにいひける
ハわれもしかれがながらへてわがきたるをのぞま
ば爾[なんぢ]になんぞのかゝはりあらんや。なんぢハわれに從[したがへ] 二十三 こゝ
においてこの言[こと]きやうだいのうちにつたはりてこの門徒[でし]
しなざるといひつぎ。されども耶蘇[いゑす]ペテロにこれハしなざるとい
ひしにあらず。たゞもしかれがながらへてわが來[きたる]をまつ汝

のぞまバなんぢになにのかゝはりかあらんやといひしなり
二四 これらのことにつきて證をなしまたこれを誌るせしも
のはその門徒なり。われらそのあかしの眞なることを知し
る 二五 耶穌のなせしことはこれらのほかになほおほくあり。
もしこれを一々しるしなばその書この世にのせつくすこ
とあたはじとおもふなりアーメン

新約聖書約翰傳 終

横濱山手百七拾八番
フェリス學校

然全書

耶穌降生一千八百七十七年

翻譯委員社中
米國聖書會社

新約聖書使徒行傳

明治十年
日本横濱上梓

使徒行傳

第一章 テヲピロよわれさきに前書をつくりておほよそ
耶蘇のはじめておこなひつるところ教しところをしるせし
二 そのえらびたる使徒たちに聖靈によりて命ぜしのち擧
られしときまでいたれり 三 それ耶蘇はくるしみをうけ
しのちおほくの確據あるしるしをもておのれの活たるこ
とをあらはし四十日のあひだ、かれらにみえ神の國のこと
につきてかたり 四 またかれらとともにあつまりゐて命じ
けるはなんぢらエルサレムをはなれずしてわれよりきけると
ころの父の約束したまひしことをまつべし 五 それヨハネ

も水をもてバプテスマをなしたれどもなんぢらハひさしか
らずして聖靈によりバプテスマをうくべければなり 六 あつ
まれるもの彼にとひけるハ主よなんぢいま國をイスラエル
にかへさんとするか 七 こたへていひけるハ父のその權に
てさだめたまへる時と期ハなんぢらがしるべきところ
にあらず 八 されども聖靈なんぢらに臨てのちなんぢら
能力をうけエルサレム ユダヤ 全國サマリヤおよび地のはて
にまでわが證人となるべし 九 このことを言をはりしのち
かれらのみるまへにあげらる雲かれをうけて見えざらし
めたり 十 耶穌のぼりたまふときかれら天をあふぎ注目たり

しに白き衣をきたるふたりの人ありてかたはらにたち
十一 いひけるはガリラヤ人よなんぞ天をあふぎてたて
るやなんぢらをはなれて天にあげられし此の耶穌はなん
ぢらがみしごとくの天にのぼるをみたるそのごとくまたきたら
ん○十二 そのときかれら橄欖とよばるる山よりエルサレムに
かへる此の山はエルサレムにちかくわづかに安息日にあゆ
みうる程なり 十三 すでにいりて樓にのぼりぬかれらはとゞま
るところのペテロ ヤコブ ヨハネ アンデレ ピリポ トーマ
バルトロマイ マタイ アルパイの子ヤコブ ゼロテといへるシモン
ヤコブの兄弟なるユダなり 十四 すべてこのひとびと婦たち

および耶穌の母マリアまた耶穌の兄弟とゝもにこゝろをあはせてつねに祈禱とつとめたり○ 十五 そのころペテロ門徒たち(そのあつまれるものゝ凡そ百二十人なり)の中にたちていひけるハ 夫人々きやうだいよ 聖靈ダビデの口によりて耶穌をとらふるものをみちびけるユダにつきて預めかゝりたるこの聖書ハかならず應べかりしなりそれハ我等とともにつらなりてこの職をうけたればなり 十八 このひとハ不義のあたひをもて地所をかひまたさかさまにおちて眞中よりやぶれその腸ことごとくながれいでぬ 十九 このことエルサレムに住るすべてのものにしれしかの

ば、そのちしよを方言にてアケルダマとよぶ。これをとけば血の地所なり　二〇詩の篇にしるして、かれの家をむなしくなされそのうちに人をすまするなかれ。かれの職はひとにとらせよといへり　二一このゆゑに主イエスわれらが中にゆききしたまひける間　二二すなはちヨハネのバプテスマよりはじめてわれらをはなれてあげられ給ひし日にいたるまで常にわれらとともにありしもののうち一人われらとともにその復生しことの證人となるべきなり　二三ここにおいてバルサバとよばるるヨセフまたの名はユストといへるものとマツテアとのふたりをあげて　二四いのりていひけるは、すべての人のこ

こゝろをしりたまふ主よ。ねがはくハ奉事こゝし使徒のつとめをえさせんがためなり。この二人のうちいづれを選たまひしゝのしめしたまへ 二五 さてはユダはこの職をすてされてそのゆくべきところにゆきたり 二六 かくて鬮をとりしにマツテアにあたりければすなはち十一人の使徒とともにつらなれり

第二章 ペンテコステの日にいたりて門徒たち皆こゝろをおなじくして一處にありしに 二 たちまちに天よりはげしき風のふくごとき響ありてかれらが坐せるところの室にみてり 三 焔のごとき舌のあらはれてうつりておのおのゝうへにとゞ

まる 四 こゝにおいてかれらハみな聖靈にみたされそのいきのいはしむるにしたがひて異なるくにぐにの方言をいひいだしたり 五 ときに敬虔あるユダヤびと天下のくにぐによりきたりてエルサレムにとゞまれるものありき 六 この音おこりしによりおほくの人々あつまりけるがおのおの己がくにことばをもちゐてかたるをきゝて躁あへり 七 みなおどろきあやしみつゝ互にいひけるハ視よこのかたるものハすべてガリラヤ人ならずや 八 いかにしてわれらいへ生まれしところの方言をもちゐるよりきくぞ 九 われらハパルテア人メデア人エラム人およびメソポタミアユダヤ

カパドキア ポント アジア 十 フルギア パムフリア エヂプト また
クレネにちかきリブヱの地方にすめるもの。またロマよ
りきたりてをるもの。あるひはユダヤ人およびその教にい
りし人 十一 またクレテびと アラビヤ人なるはかれらが我らの
くにことばをもて神のおほいなるみわざをかたるときく
らく 十二 皆おどろきいぶかりてたがひにいひけるはこれい
かなるゆゑぞや 十三 あるひはあざけりて此ひとびとは甘き葡
萄酒にみちたるものなりといふものあり 十四 ここにおい
てペテロ十一人とともにたちて声をあげてかれらにむかひ
いひけるはユダヤ人およびすべてエルサレムにすめるも

のよなんぢらよくわが言をきゝてこゝろをとめよ 十五 今は晝の九時なれば。なんぢらのおもふごとくこの人々も酔るものにあらず 十六 これすなはち預言者ヨエルによりてかゝれるところなり 十七 神いひたまはく末の世にいたりてわれわが霊をもてすべての人にそゝがん。なんぢらの子女も預言すべし。またなんぢらのわかきものは異象をみ。おいたるものは夢をみるべし 十八 その時われわが霊をわがしもべなる男女にそゝがん。かれらもまた預言をなすべし 十九 われうへなる天には奇跡をあらはし。しもなる地に休徴をあらはさん。すなはち血あり火あり烟あるべし 二十 主のおほいなる顕赫日の

きたらんさきに日ハくらく月ハ血とかはらん 二一 すべて主
の名をよびもとむるものハすくはるべし 二二 イスラエルのひと
びとよ。これらのことばをきけナザレの耶蘇ハなんぢ
らの知るごとく神かれによりてなんぢらのうちになせし妙
なる能力と奇跡としるしとをもてなんぢらに證しされたる
るところの人なり 二三 この人ハさだまれる神のさだめし旨と
あらかじめ知りたまふところにかなひてわたさる。なんぢら
ハ無法の手をもてこれをとらへ十字架につけてころせり
二四 神ハその死のくるしみを釋てこれをよみがへらせたま
へり。この人ハ死につながるべきものにあらざればなり 二五

そはダビデかれについていひけるハ我まへに主のつねに在をみる。そのわが右にいませハわが動されざるためなり
二六 このゆゑにわが心ハたのしみ、わが舌ハよろこべり。このうへわが肉體ハ望にとゞまらん
二七 これなんぢハわが魂を陰府にすておかず、またなんぢの聖者をくちはてさせざるがゆゑなり
二八 なんぢわれに生命の路をしめせり。なんぢおのが前にありてよろこびにみたしめんと
二九 人々きやうだいよ。われ始祖ダビデについてはゞかるところなくなんぢらにいふべきこれ當然のことなり。かれハすでに死てはうむられその墓ハ今日までわれらの中にあり
三〇 かれは

預言者にして神これにちかひをたてゝ。その血統のうちよりひとりをあげて位につかしめんとちかひたまへると知り
三 あらかじめこのことをさとるがゆゑにキリストのよみがへることにつきかたりて。かれは陰府にすておかれずまたその肉體もくちをみざるといへるなり 三二 まそよ神は耶穌をよみがへらせたまへり われらはみなその證人なり 三三 このゆゑにかれはすでに神の右にあげられ約束のせいれいを父よりうけて。今なんぢらがみるところ聞ところのものをそゝげり 三四 それダビデも天にのぼりしことなし。しかるにみづからいひけるは。主わが主にむかひていへり。われなん

ぢの敵をなんぢの足凳となすまで我が右に坐せよと 三六 され
バすべてイスラエルの全家よなんぢらが十字架につけしこ
の耶蘇を神これを主となしキリストとなしたまへり
しかと確に志れ 三七 かれらこれをきゝてそのこゝろ刺るゝ
がごとくしこゝろにおいてペテロとそのほかの使徒たちにまうしけ
るハ。ひとびと兄弟よわれらなにをなすべきや 三八 ペテロかれ
らにいひけるハ。なんぢらおのおの悔あらためて罪のゆるし
をえんがために耶蘇キリストの名によりてバプテスマをうけ
よしからバなんぢらも聖靈の賜をうくべし 三九 この約束ハ
なんぢらおよびなんぢらの子孫またすべての遠人すなハち

ち主なるわれらの神のめさるゝひと〴〵に屬なり 四〇 またお
ほくのことばをもて證してすゝめけるハなんぢらこのよ
こしまなる世よりすくひいだされよ 四一 そのときこの言を
きゝいれしものハバプテスマをうけたりこの日でしにくはゝれ
たるものおほよそ三千人 四二 かれらハつねに使徒たちの
をしへをうけ交接をなしパンをさきかつ祈禱をつと
む 四三 こゝにおいて敬畏ひと〴〵のこゝろに生ずまた使徒たち
によりておほくのふしぎなるわざと休徵おこなはれたり
四四 信者ハこゝろひとつところにあつまりて諸物をともにし
四五 產業とそのもちものを鬻ておの〳〵の用にしたがひこれ

をわけあたへぬ 四六 日々こゝろをあはせて聖殿にたえずまうで
家においてパンをさきよろこびとまごゝろをもて食をとも
にし 四七 神をほめすべての民によろこばるゝ主すくはるゝも
のを日々けうくわいにくはへたまへり

第三章 第三時いのりの時刻にあたりてペテロとヨハネと
もに聖殿にのぼりしに 二 一人のうまれつきなる跛あり、み
やにいるひとに施濟をこはんために日ごとおきて殿の
美となづくる門におかる 三 かれペテロとヨハネのみやに
いらんとするを見てほどこしを求む 四 ペテロヨハネとと
もにつくづくかれをみていひけるはわれらをみよ 五 かれ得

ことあらんとおもひてかれらを見つめゐたり 六 ペテロいひけるハ金銀ハわれになしされどわれにあるものをなんぢにあたふ。ナザレの耶蘇キリストの名により起てあゆめ 七 つひにその右の手をとりこれをおこしけれバ。その足と踝たゞちにつよくなりて 八 をどりたち且あゆめり。踊あゆみ神をあがめつゝかれらとともにみやにいりぬ 九 すべての民か彼のあゆみ神をあがむるをみて 十 素そのみやの美門にざしてものごひしをなしゐたりしものなるをしり。この人にありしことをおほいにおどろきあやしめり 十一 そのあしなへペテロとヨハネにまつはりをりしあひだに。民ミなおどろくことそ

るりざしくソロモンの廊と名づくるところにかけあつまれり
十二 ペテロこれをみて民にこたへけるはイスラエルの人々よなにゆゑにこのことを奇とするやぞわれらがみづからの能と德をもてこの人をあゆませしがごとく。なんぞわれらに目をつくるや
十三 それアブラハム イサク ヤコブの神すくがせんぞたちの神はそのしもべ耶穌をあがめなんぢらがわたせしものピラトがゆるすことをさだめたるとき。その前になんぢらが拒しところのものを榮たまへり
十四 なんぢらは聖者ただしきものとこばみ人をころせしものをおのれにゆるされんことをもとめ
十五 かつ生命の主をころせり。神

ハこれを死よりよみがへらせたまへり われらハそのあかしびとな
るなり 十六 耶穌の名ハその名を信ずるによりて、なんぢらが
見るところ識るところのこの人をつよくせり。かく耶穌によ
れる信仰ハなんぢらすべてのものの前においてこの人を
まつたく愈しなり 十七 きやうだいよ われ知なんぢらがお
こなひしことハしらざるによりてなり。なんぢらの有司た
ちもまたしかり 十八 しかれども神ハすべてのよげんしやの
口によりてキリストの苦をうくることをあらかじめ示し
そのことをかく應せたまへり 十九 このゆゑになんぢら罪を
くいあらためてその罪をけさるゝことをせよ。そ

ハ主のまへより安舒日のきたらん 二十 且あらかじめさだめた
まひし耶穌キリストをおくりたまはんがためなり 二一 神のいにしへ
よりきよき預言者のくちによりていひたまひし萬物の
あらたまるときまで天はかならずこれをうけおくべし
二二 モーセまことに列祖たちにつげていひけるは主なるな
んぢらの神はなんぢらの兄弟のうちより我に似たるひ
とりの預言者をおこさん。そのなんぢらにつぐるすべての
ことをきくべし 二三 すべて此よげんしやにききしたがはざ
るものは民の中よりたちほろぼさる 二四 またサムエルよりこ
のかたかたりしところの預言者もみなあらかじめこの日

をさしていへり 二五 それなんぢらハよげんしやの子孫なり。かつ神のなんぢらが列祖にたてたまひし契約をうけつぐものなり。むかしアブラハムにつげて地の諸族ハなんぢの裔によりてさいはひをえんといひたまへり 二六 神まづそのしもべ耶穌をたてなんぢらおのおのをその悪よりひきかへし福をえせしめんがために先なんぢらにかれをつかはせり

第四章

一 かれらが民ををしへ。かつ耶穌のことをひきて死よりよみがへることを宣るによりて。祭司みやもりづかさおよびサドカイのひとびと心をなやまし その民にかかれるとき

突然きたりて 三 手づからこれをとらふ。時すでにくれけれ
バあくる日まで獄にいれおけり 四 されどその道をきゝし
ものハおほくこれを信ぜり その數およそ五千人なり 五 明
日つかさたち長老がくしや 六 および祭司のをさアンナま
たカヤパ ヨハネ アレキサンデルとさいしのをさのすべての族
エルサレムにあつまり 七 使徒たちをその中にたゝせてとひ
けるハなんぢらなにの權なにの名によりてこれをおこ
なひしや 八 そのときペテロ聖靈にみたされてこれにいひ
けるハ民のつかさおよびイスラエルの長老よ 九 われらもし
病る人におこなひし善事につきてとはれて愈せ

しかし今日たゞさるれば十なんぢらとイスラエルの民もこゝろ
なるべし。そのなんぢらが十字架につけしところ神のよみ
がへらせたまひしところのナザレの耶穌キリストの名によ
りてこの人すこやかなることを得。なんぢらの前にたちを
り。十一これなるたちなるなんぢら工匠のすてしところの石にい
への隅の首石となれるものなり十二このほか別にすくひあ
ることなし。そは天下の人のうちわれらの頼てのぞて
くはるべき他の名をたまはざればなり十三かれらペテロと
ヨハネのいとはゞかるところなきをみて。その無學のいやし
きものなるとしれば これとあやしみたり。またその耶穌と

ともにありしを見る
十四 かついやされたる人のかれらとともに立るを見るよりいひけすべき言なかりき
十五 かくてかれらに命じて集議所をさらしめ後あひかたりていひけるは
十六 この二人になにをなすべきやかれらがまことにいちじるき休徴をおこなひしことはすべてエルサレムにをるものゝ明かなるところなりわれらこれをいひけすことあたはず
十七 されどもこのことの猶ひろく民にひろがらざるためにかれらを恐喝てこのゝちその名について人にかたることなからしめん
十八 つひにかれらをよびてさらに耶穌の名についてかたること教ることをなすなかれといましむ
十九

ペテロ ヨハネ かれらにこたへていひけるハ神にきくよりもまさりてなんぢらにきくが神のまへにありて義たらんこの、なんぢらみづからこれを判よ 二十 われら見しところ聞しところのものハいはざるをえざるなり 二十一 人々そのありしことによりて神をあがめければこれら民をおそれこのふたりを罪するによしなくさらにこれをおびやかしてゆるせり 二十二 そのふしぎなるわざによりていやされたる人ハ四十歳あまりなりき〇 二十三 かれらゆるされてその友のもとにゆき祭司のをさと長老のいひしことをことごとくつぐ 二十四 その友これをきゝてこゝろをあはせ神にむかひ聲をあげていひけ

るハ主よなんぢハ天と地と海とそのなかのあらゆるものをつくりたまひし神なり 二五 なんぢ曾てそのしもべダビデのくちによりてなにゆゑに異邦人ハさわぎたちもろもろの民ハむなしきことを謀る 二六 地の王たちハおこりて牽伯とともにあつまり主およびそのキリストにさからふといへり それまことにヘロデとポンテヲピラト異邦人およびイスラエルの民ともにこの城にあつまりなんぢが膏をそゝぎたる聖僕いゑすにさからへり 二八 これなんぢの手なんぢの旨にてあらかじめさだめたまひしことをかなはせるなり 二九 主よいまかれらの恐喝をみたまへ。ねがはくハなんぢ

み手をのべて醫をほどこしなんぢのきよきしもべ耶穌の名によりてしるしとふしぎなるわざをおこなはしめなんぢが僕どもに臆することなくなんぢの道をのぶることをゆるさせよ○三一 かくて祈禱をなしをはりしとき。そのあつまれるところふるひうごきみな聖靈にみたされておくするところなく神のことばをのぶ 三二 信者はみなこゝろを一にしおもひを一にして誰ひとりそのもちものを己がものといふものなくすべてこれをともにもてり 三三 使徒たちおほいなる能をもて主いゑそのよみがへりしことを證しければみなおほいなる恩をうけたり 三四 そのうちにひとりも窮乏ものな

かりき。そハ地所あるひハ家をもてるものハそれをうりて
そのうりしところの價をもちきたり 三五 使徒たちの足下
におく。これをおの／＼の用にしたがひてわけあたへしゆ
ゑなり 三六 レビの族にてクプロにうまれしヨセフハ使徒た
ちによばれてバルナバといへる。これをとけバ勸慰の子 三七 こ
のひと田疇ありけるがそれを售てその金をもちきたり使
徒たちの足下におけり

第五章 一 アナニアといふ人その妻サツピラとともに產
業をうり 二 そのあたひの幾分をかくし餘のいくぶんをも
ちきたりて使徒たちのあしもとにおきぬ。その妻もこれを

しれり 三 ペテロいひけるはアナニアよなんぢ
のこころサタナにみたされ聖靈にむかひいつはりて地所
のあたひのいくぶんをかくさんとせしや 四 地所いいまだ
うらざるときはなんぢのものならずや。すでに售たりとも
なほなんぢの權につけるならずや。なにゆゑになんぢの心
このことをくはだてしや。なんぢ人にむかひて偽にあらず
神にむかひていつはるなり 五 アナニアこの言をききてた
ふれて氣たえぬ。これをきくものみな大におそる 六 わかきも
のどもたちてかばねを殮いだして葬り 七 およそ三
時ばかりすぎてその妻いまだこのありしことをしらずして

いひきかせけり 八 ペテロかれにいひけるはなんぢらこのあたひは地所をうりしやかれはつげよ。こたへていひけるはしかりその價なり 九 ペテロかれにいひけるはなんぢらこころをあはせて主の靈をこころむるはなんぞや視よなんぢの夫をほうむりしもののあし門外にあり。またなんぢをもかきいださん 十 婦直にその足下にたふれていき絶ぬ。そのきたるものどもいりきたりてその死するを見これをもかきいだしてその夫のかたはらにほうむれり 十一 全會のものとこれをきけるものどもみなおほいに懼 十二 おほくの休徴とふしぎなるわざは使徒たちの手によりて民のうちにおこな

あられけり。またかれらみな心をあはせてソロモンの廊にをれる
十三 餘のものはあへてこれにちかづかざりき。されども民
はかれらをたふとみ 十四 男女とも信ずるものますますおほく
主につきぬ 十五 かくてひとびと病るものをたづさへて衢にい
でねだいと榻のうへにおけり。そはペテロのきたらんとき
ぞその影に蔭さるゝものあらんことをおもへばなり 十六 またお
ほくのひとびと四方のむらむらよりやめるものおよび悪鬼に
なやまさるゝものをたづさへてエルサレムにきたりこと
ごとくいやされけり 十七 しかるにさいしの長およびかれとゝ
もにあるもの即ちサドカイ宗のともがらみな起ておほい

まいきどほり 十八 使徒たちをとらへて公獄におけり 十九 され
ども主のつかひ夜ひとやの門をひらきかれらをたづさへ
いだしていひけるは 二十 ゆきて聖殿にたちこの生命の道を
ことごとく民にかたれ 二一 かれらこれをきゝて昧爽ごろより み
やにいりてをしふ。祭司のをさおよびともにあるものども
きたりて議官および イスラエル の子孫なるとしよりぶちをこ
とごとくよびあつめてつかひをひき來らせんがために下
吏どもひとやはつのちせり 二二 その人たちきたりしに獄のう
ちにはこの徒をみず。かへりて告いひけるは 二三 ひとやはいかさ
くとざし守るものも門のそとにたてるをまさしく見しにひ

らけバ内はひとりをもみざりき 二四 祭司みやもりおよびさいしの長たちこのことばをきゝてこハいかになりゆくべきとうたがひはつきずこゝろまどへり 二五 あるひときたりかれらにつげけるハ視よなんぢらが獄にいれしものハいま殿にたちて民ををしふ 二六 こゝにおいて殿司をさやくらちとともにゆきかれらをひきてきたれり。されど手あらきことをせざりきそハ石にて民にうたれんことをおそれしがゆゑなり 二七 さてはひききたりてかれらを議官のまへにたゝせ祭司の長これにとひけるハ 二八 われらこの名によりてをしふることなかれとなんぢらにきびしく禁ぜしに

あらざやしかるになんぢらハそのをしへをエルサレムにみた
せ。またこの人の血をわれらにおはしめんとす 二九 ペテロと
使徒たちこたへていひけるハ人にしたがふより神にした
がふハなすべきのことなり 三十 われらの列祖の神ハなんぢ
らが木にかけてころせしところの耶蘇をよみがへらせた
まへり 三一 神ハこれを君とし救主としてその右のうでにあ
げられイスラエルにくいあらためと罪のゆるしをあたへん
がためなり 三二 われらハこのことの證をなすものなり神お
のれに信従ものにたまふところの聖靈もまたあかしす 三三
かのひとびと是をきゝてはなはだしくいかりをふくみて

かれらを殺さんとはかる 三四 パリサイの人にて衆民のうちに
たふとまるゝ教法師ガマリエルといへるものしゆぎやくの
なかにたち命じて使徒たちをしばらく外にいださしめ 三五
いひけるハイスラエルの人々よ。なんぢらこの人をもちまつき
てなさんとするこゝろをみづからつゝしむべし 三六 それさき
にチウダおこりてみづから矜誕りこれにしたがふるも
のおよそ四百人ありしがかれころされしたがひしも
のハ皆ちらされてあとなきにいたる 三七 この人此のちまた
戸籍しらべのときガリラヤのユダおこりて民をいざなひし
たがハせしが。かれも亡びそれにしたがひしものもことごとく

ちらされしかバなり 三八 今われなんぢらにかたらん。この人々をゆるしてこれにかまふなかれ。もしその謀とこゝろおこなふところ人よりいでたるならばやぶるべし 三九 もし神よりいでバなんぢらこれをやぶることあたはず。おそらくはなんぢら神にさからふものとならん 四十 [illegible]これにしたがひ使徒たちをよびてむちうち耶穌の名によりてかたることをなすなかれと命じてこれをゆるせり 四一 使徒たちは耶穌の名のためにはづかしめをうくるは足ものとせられしことをよろこびて議官のまへをさり 四二 日々に殿および人の家においてをしへ[illegible]なし。耶穌キリストの福音を

つらいてやめざりき

第六章 そのころ門徒たちの數おほくなりしときギリシヤことばのユダヤ人その寡婦たちが日々のほどこしにおとされしとてヘブルことばのユダヤ人にむかひ怨言しありければ 二 十二人のものでしたちをよびあつめていひけるハわれら神の道をおきて飲食のことをつかさどるハこゝろにかなはず 三 このゆゑに兄弟よなんぢらのうちより聖靈と智慧のみちたる善證あるもの七人をえらぶべし。われらそれをたてゝこのことをつかさどらせん 四 またわれらハつねにいのることゝ道をつたふることを務べし 五 こ

の言すべてのものゝこゝろにかなひけるが信仰とせいれいのみちたるステパノおよびピリツポプロコロニカノルテモンパルメナまへユダヤ教にいりしアンテオケのニコラをえらび

六 このひと〴〵を使徒たちのまへにたゝしむ。使徒たちいのりてそのうへに手をおけり〇七 神のみちいよ〳〵ひろまりて門徒たちのかずエルサレムにおいてはげしくまさり祭司もおほく信仰のみちにしたがへり〇八 ステパノめぐみと能力にみちてふしぎなるわざとおほいなる休徴を民のうちにおこなへり 九 ときにリベルテンととなふる會堂およびクレネびと アレキサンデリア人 キリキヤびと アジアびと

の諸會堂よりひと〴〵起てステパノといひあらそふ 十 この者ら
ステパノの智慧とことばによりていふところの靈にてきす
ることあたはざりき 十一 つひに人をそしていふものありいはしめける
いわれらこの者がことばをきくにはモーセと神とをけがした
る 十二 この者民と長老とがくしやたちの心をうごかせ突然
きたりてこの者をとらへ集議所にひきいたり 十三 いつはりの
證人をたてゝいはせけるはこの人はきよきところと律法
をけがすことばをいふことをやめず 十四 それかれいへりてこの
ナザレの耶穌はこの所をこぼちこのモーセのわれらにさ
づけしならはしの例をかふべしといへるをわれらきゝたれ

ぞあり 十五 こゝにおいてぎくわいに坐せるものみな目を
注てこのものをみしにそのかほ天使の面のごとくありき

第七章 さて祭司のをさいひけるはこの事かくのごとくな
るや 二 ステパノいひけるはひと〴〵兄弟および父たちよ聽
われらのせんぞアブラハムいまだカランにすまざるさき
メソポタミヤにありしとき榮光の神あらはれて 三 これにい
ひたまひけるはなんぢの國をいでなんぢの親族をはなれ
てわがなんぢに示さんところの地にいたれ 四 かくてアブラハム
カルダヤびとの地をいでゝカランにすめりその父のしにし
のち神かれをかしこより今なんぢらが住ところのこの

地(ち)にうつしたまへり 五 この地(ち)においてそれ足(あし)をふむたるほ
どの地(ち)をもあたへず。されどもかれいまだ子(こ)あらざりしにこ
の地(ち)を産業(さんげふ)としてこれとその子孫(しそん)にあたへんと約束(やくそく)した
まへり 六 神(かみ)かくいひたまへり。その裔(すゑ)はほかの國(くに)にやど
らん他(ほか)のくにの人々(ひとびと)これを奴隷(どれい)となして四百年(しひやくねん)のあひだなや
やまさん 七 神(かみ)またいはく。これをどれいとする國民(くにたみ)をわ
れさばくべし。そののちこのものらそのくにを出(いで)このところに
おいてわれにつかへんと 八 またこれに割禮(かつれい)のけいやくを
あたへたまへり。かくてアブラハム イサクをうみ第八日(やうかめ)にこの
子にかつれいをほどこせり。イサク ヤコブを生(うみ) ヤコブ十二の始祖(しそ)

祖とうむ 九 始祖たちヨセフをねたミてこれをエジプトに賣
すざれど神ハこれとともにありて 十 すべての患難のうち
よりこれをすくひいだしエジプト王パロのまへにおいて恩
寵と知恵とをあたへてエジプトおよびパロの全家をつかさ
どらせたまふ 十一 こゝにエジプトカナンのすべての地に饑饉
とおほいなる難ありわれらのせんぞたちも食物をうるこ
とをえざりき 十二 さるにヤコブエジプトに穀物あることを
きゝて先われらのせんぞたちをつかはせり 十三 ふたゝびつか
はせしときヨセフその兄弟にしられたり。こゝにヨセフの親族
パロにあきらかになれり 十四 ヨセフ人をつかはしてその父

およびすべての家族七十五人をよびきたらしむ 十五 こゝに
おいてヤコブエジプトにくだれば このときもすべての祖宗も死
にたるのち 十六 スケムにおくられアブラハムが金をもてスケム
の父なるエミモルの子孫よりかひおきし墓にはうむられけ
り 十七 神のアブラハムにしめしたまへるやくそくの期ちかづ
くにしたがひて民ふえひろがりてエジプトにおほくなれり
十八 ヨセフのことをしらざるほかの王おこるにいたりて 十九
かれあしき謀をもてわれらの親族をあしらひわれらのせ
んぞたちをなやましその嬰孫のいきのこらざるやうに事
をもてさんせんとせり 二十 そのときモーセうまれていとうる

しく三ヶ月のあひだ父の家にそだてられ 二一 すてられし
のちパロの女これをひろひあげ己の子としてそだてたり
二二 モーセことごとくエジプトびとの學術をならへ言と行
とにちからあり 二三 四十歳におよびてその兄弟なるイスラエル
の子孫をこゝろみるのこゝろおこれり 二四 一人のしひたげ
らるゝものをみてこれを保護エジプトびとをうちてその
仇をむくひたり 二五 モーセハわが手をもて神のかれらをす
くはんとしたまふことをその兄弟さとるならんとおもひ
しかどかれらハさとらざりき 二六 次日かれらあひ闘ふところにあ
りければかれらをあはせて和睦いひけるハひとびとよなん

ぢゃ兄弟なるになにゆゑ相そこなふや 二七 その友をそこな
ふものこれを拒卻ていひけるは誰がなんぢをたてゝわれ
らの有司また刑官となせしや 二八 なんぢ昨日エジプトびとを
ころせしごとくまたわれをもころさんとするか 二九 モーセ
このことばによりのがれてミデアンの地にたびびととな
りそこにおいてふたりの子をうめり 三十 をへては四十年と
すぎしときシナイ山の野において主のつかひ棘のなかなる
火焔のうちにてモーセにあらはる 三一 モーセこれをみてあ
やしとみとめんとしてちかくよるとき主の聲あり云ける
ハなんぢの列祖の神すなはちアブラハムのかみイサクのか

みヤコブの神なり。モーセおそれをのゝき敢てうかゞわざり
き 三三 主かれにいひたまひけるハなんぢの足の履をぬ
げなんぢがたてるところハ聖地なり 三四 われまことにエジプト
にあるわが民のなやみを見またその嘆息をきゝこれをす
くはんがためにくだれり来れわれなんぢをエジプトへつかはさ
さんと 三五 夫かれらがこばみて誰がなんぢをたてゝ有司また
さばきびとゝなせしやといひし此モーセを神ハあるじの
なかにあらはれし使者の手によりてつかさどる救者とし
てつかはしたまへり 三六 この人エジプトおよび紅海また四十
年のあひだ野においてふしぎなるわざと休徴をおこなひ

てかれらをみちびきいだせり 三七 イスラエルの子孫(しそん)にいへり
て神(かみ)はなんぢらの兄弟(きやうだい)のうちよりわがごとき一人(ひとり)のよげ
んしやをなんぢらのためにおこしたまふべしといひし人
すなはち此(この)モーセなり 三八 かれは野(の)の會(あつまり)にをりシナイ山(やま)に
ておのれにかたるところの天使(つかひ)またわれらの列祖(せんぞたち)とゝ
もにありてわれらにさづけんがため生(いけ)ることばをうけしも
のなり 三九 この人(ひと)はわれらのせんぞたちはしたがふことを
このまず反(かへつ)てこれをしりぞけその心(こゝろ)までエジプトにか
へり 四〇 アロンにいひけるはわれらにさきだつべき神(かみ)をわれ
らのためにつくれ。そはわれらをエジプトの地(ち)よりみちびき

いざせし彼モーセハいかになりしかを志らざればなり 四一 そ
の時かれら犢をつくりその像にいけにへをさゝげ己の手
のわざをよろこべり 四二 こゝにおいて神ハかれらをかへり
みずしてその天の軍勢をまつるにまかせたまへり。すなは
ち預言者の書に。イスラエルの族よなんぢらハ四十年のあひ
だ野において犠牲と祭物をわれにさゝげしや 四三 まふなん
ぢらハモロクの帳幕およびレパンといふ神にかたどれる星を
なひもちつなんぢらが拝せんためにつくれるところの像をた
づさへたり我なんぢらをバビロンのさきへうつさんと録さ
れたるごとし 四四 われらのせんぞたちハ野にて證のまくや

ともせり。此ハモーセにかたりたまへるものゝつげたまひて已(すで)に
みしところの式(しき)にしたがひてつくるべしと命(めい)ぜしごとくつく
りたるものなり 四五 われらのせんぞたちこの帳幕(まくや)をうけて
ヨシアとゝもに異邦人(いはうじん)の地(ち)をせめとりしとき・これをたづ
さへいたり。このいはうじんハダビデの時(とき)までにわれらの
列祖(せんぞたちも)のまへより神(かみ)のおひはらひたまひしところのものな
り 四六 ダビデ神(かみ)のまへに恩(めぐみ)をうけてヤコブの神(かみ)のために居(すまひ)
所(どころ)をまうけんとねがひたれど 四七 ソロモン神(かみ)のために殿(みや)をた
てたり 四八 しかれども至上(いとたかき)ものは手(て)にてつくれるところに
すみたまはず預言者(よげんしや)のいへるごとし 四九 主(しゆ)い

いだせし彼モーセハいかになりしかしらざればなり
四一 その時かれら犢をつくりその像にいけにへをさゝげ己の手
のわざをよろこべり
四二 こゝにおいて神ハかれらをとこへり
ぞしてその天の軍勢をまつるにまかせたまへり。すなハ
ち預言者の書に。イスラエルの族よなんぢらハ四十年のあひ
だ野において犠牲と祭物をわれにさゝげしや
四三 またなん
ぢらハモロクの帳幕およびレパンといふ神につかさどる星を
なんぢらが拝せんためにつくれるところの像をた
づさへたり我なんぢらをバビロンのさきへうつさんと録さ
れたるごとし
四四 われらのせんぞたちハ野にて證のまくや

ともせり。此ハモーセにかたりたまへるものゝかれにむかひて已に

みしところの式にならひてつくれと命ぜしごとくつく

まつるものなり 四五 われらのせんぞたちこの帳幕をうけて

ヨシアとともに異邦人の地をせめとりしときこれをたづ

さへいれり。このいほうじんハダビデの時までわれらの

列祖のまへより神のおひはらひたまひしところのものな

りき 四六 ダビデ神のまへに恩をうけてヤコブの神のために居

所をまうけんとねがひたれど 四七 ソロモン神のために殿をた

てたり 四八 されども至上ものハ手にてつくれるところに

おらざるなり。その預言者のいへるごとし 四九 主い

ひたまへく天ハわが座位なり地ハわが足凳なりなんぢら
わがためにいかなるいへをたてんとするものか。また我やすむ
ところハいづこなるや五〇わが手ハこのすべてのものをつ
くらざりしや五一うなじこはくして心と耳にかつれいをうけ
ざるものよなんぢらつねに聖靈にさからひその列祖のご
とくなんぢらも行なり五二なんぢらのせんぞたちハいづれ
の預言者をなやまさゞりしこのものらハ義者のきたらん
ことをあらかじめつげしものをころしなんぢらハ今その
たゞしきものをうらぎりころせしものとなれり五三なん
ぢらハ天のつかひよりて律法をうけながらまもら

ざるあり 五四 衆人これらのことをきゝておほいにいきどほ
り切齒しつゝステパノにむかへり 五五 しかるにステパノは聖靈
にみたされ天をあふぎて神の榮光とそのみぎに耶穌のた
てるをみていひけるは 五六 みよわれ天ひらけて神のみぎにた
人の子のたてるをみる 五七 こゝにおいてこれらおほいによ
ばゝりて耳をおほひ心をあはせてステパノのもとにはせより
五八 このものを邑よりおひいだし石をもてこれをうつ證人らお
のおのその衣服をサウロといへる少年のあしのもとにお
けり 五九 かれらが石をもてステパノをうてるときこのものいのり
ていひけるは主いゑすよわが靈魂をうけたまへ 六十 またひ

ざまづき大聲によびいひけるハ主よこの罪をこれらにお
はしむるなかれこの言をいひをはりて寢につくサウロハ
そのころされしをよしとせり

第八章 この日エルサレムにあるところの教會をおほいにせ
むることおこりて使徒たちのほかハみなユダヤとサマリヤの
地にちらされたり 二 敬虔あるひとびとステパノをはうむりこ
れがためにおほいなる哭泣をなせり 三 サウロハけうくわいを
いと殘害してこゝかしこの家にいり男女をひきいだして
これを獄にわたせり 四 こゝにおいてちらされたるものど
も徧くゆきて福音をのべつたへたり 五 ピリッポハサマリヤの邑に

くだりてキリストのことをのべて示せ 六 おほくの人々ピリッポがおこなへるふしぎなるわざを見聞してこゝろをおなじうし謹てそのいへることをきけり 七 それけがれたる鬼おほいにさけんでそのつけるところのおほくの人よりいでぬまた癱瘋およびあしなへの人もおほくいやされけれバ 八 これによりてこの邑におほいなるよろこびありき 九 ここにシモンといへるもの魔術をおこなひサマリヤの民をおどろかせしものあり 十 小より大にいたるまで皆つゝしみてこれにきゝてこの人ハ神のおほいなるちからなりといへり 十一 これらのつゝしみてこれにきゝけるハひさしくそ

の魔術(まじゅつ)にておどろかされたることがひさしくあり 十二 しかれどもかれ
ら神(かみ)の國(くに)および耶穌(いえす)キリストの名(な)につきて福音(ふくいん)をのぶる
ピリッポを信(しん)ぜしかばをとこをんなともバプテスマをうく
シモンもまたしんじてバプテスマを受(うけ)つねにピリッポとともに
ありてこのものがおこなふところのふしぎなるわざと徴(しるし)
をみておどろけり 十四 エルサレムにをる使徒(しと)たちサマリヤまでみ
な神(かみ)の道(ことば)をうけたりときゝてペテロとヨハネをこれにつ
かはしき 十五 この二人(ふたり)のものくだりてこれらが聖靈(せいれい)をうけん
ためにいのりせり 十六 そはこのものたゞ主(しゅ)いえすの名(な)にいれられ
バプテスマをうけしのみにていまだその一人(ひとり)にも聖靈(せいれい)くだら

らざりしによる 十七 この時ふたりのもの手をこのものらのうへ
におきければこのものらせいれいをうけたり 十八 使徒たちの手
をおけるによりて聖霊をあたへらるゝをみてシモン金を
もちきたりこのものらにいひけるは 十九 わが手をおくところの
ものもすべて聖霊をうけんためにこの権をわれにもあたへ
よ 二十 ペテロこのものにいひけるはなんぢのかねはなんぢと
ともにほろびよ。なんぢは神の賜をかねにてえんとおもへ
り 二一 なんぢこのことにおいて分なくまた與なし。そはなん
ぢのこゝろ神のまへにたゞしからぬぞ 二二 ゆゑになんぢこの
悪をくいあらためて神にいのりなんぢのこゝろの念ある

ひハゆるされん 二三 われなんぢが膽の苦にをり不義の繫に
なるを見れバなり 二四 シモンこたへていひけるハなんぢら
がいひたるところ一もわれにおよばざるやうわがために
主にいのれ 二五 二人主のことばを證しのべたる
のちエルサレムへかへりゆくときサマリヤ人のむらむらにふく
いんをのべたり○ 二六 主の使ピリポにいひて
けるハ起て南の方にむかひエルサレムよりガザにくだ
るところの路にゆけその路ハ野なり 二七 かれ起てゆけるに
エテヲピア人なるおちちエテヲピアびとの女王カンダケの大臣
ある寺人にてすべてその國の財寶をつかさどるも

の禮拜(れいはい)のためエルサレムにきたりし 二八 そのかへりあるが車(くるま)の
うちにざし預言者(よげんしや)イザヤの書(ふみ)をよみをりけり 二九 靈(みたま)ピリツポ
にいひけるハ往(ゆき)てこのくるまに就(つけ) 三十 ピリツポはしりより
て彼(これ)がよげんしやイザヤのふみをよむをきゝこれにいひ
けるハなんぢそのよむところのことをさとるや 三一 かれいひ
けるハもしわれをみちびくものなくバいかでさとることを
をえんやつひにピリツポをおのれとゝもに坐(ざ)せしむ 三二
そのよみをりし聖書(せいしよ)の文(ぶん)ハ左(さ)のごとしかれハ羊(ひつじ)のほふり
場(ば)にひかるゝごとくひつじまた羔(こひつじ)のその毛(け)をきるものゝ
まへにおと聲(こゑ)をいださゞるごとくその口(くち)をひらかず 三三 かれ

卑賤(いやしき)まじはりしとき義判(さばき)をとりさられたり誰(たれ)かよくその世(よ)のさまを述(のべ)えんや。そハこれのいのち地(ち)よりとりさられたればなり
三四 寺人(おほじん)ピリッポにむかひいひけるハ請(こふ)まづしらせ預言(よげん)者(しや)ハたれをさしてこれをいひしや。みづからをさせしかこの他人(ほかのひと)をさせしか
三五 ピリッポ口(くち)をひらき此(この)しるさるゝところよりはじめて耶蘇(いえそ)のふくいんをこれにのべつたふ
三六 うちつれてふたりのもの路(みち)をゆき水(みづ)あるところにいたりければ寺人(おほじん)いひけるハ水(みづ)をみよわれバプテスマをうけんに何(なに)のさまたげのあるや
三七 ピリッポいひけるハなんぢもし全心(まごころ)をもて信(しん)ぜバよかるべし。このものこたへていひけるハわれ耶蘇(いえそ)

キリストは神の子なりとしんず三八遂にめいじて車をとゞめしめてピリツポと寺人のふたり水にくだりピリツポバプテスマをこのものにほどこせり三九このもの水よりあがるとき主の靈ピリツポをひきさる。寺人またかれをみることをえざりき。寺人よろこびてその路をゆけり四十さてアシドドにてピリツポはあらはるものあり。これよりすべてのむらざとを經て福音をのべつゝカイザリヤにいたり

第九章

サウロはなほも兇言と殺氣をはきつて主のでしたちをとせめ祭司のをさにゆきて二ダマスコの諸會堂によせる書をもとむ。このもしこの道にあつまるものをみば男女に

ありしらばとらへてこれをエルサレムにひかんとおもへり
三 かれゆきてダマスコにちかづけるときたちまち天(てん)より
光(ひかり)ありてかれをめぐりてらせり 四 かれ地(ち)にたふる。そのと
きサウロサウロなにゆゑ我(われ)をせむるやといふこゑをきけ
り 五 サウロいひけるは主(しゆ)よなんぢはたれぞ。主(しゆ)いひたまひ
けるはわれはなんぢが窘迫(せむる)ところの耶穌(いえす)なりなんぢ刺(とげ)あ
るむちをけるはかたし 六 かれ戦慄(をのゝき)おどろきていひけるは
主(しゆ)よわれになにをなさしめんとしたまふや。主(しゆ)かれにいひ
けるはおきて邑(まち)にいれ。さらばなんぢ行(なす)べきことをしめさ
るべし 七 かれとともにゆける人々(ひと〴〵)ものいふこともあたはず

して立とゞまりその聲をきゝけれども誰をもみざりき 八 サウロ
地よりおきて眼をひらきたるに何もみえざりければ人々も
みちびける人たちその手をひきてダマスコにいりぬ 九 この三日
の間ものみえずして飲食をもせざりき 十 このときダマスコにアナニア
といへる一人のでしありて主まぼろしのごとくこれにいひ
たまひけるはアナニアよ。答けるは主よこゝにあり 十一 主い
ひたまひけるはたちて直といへる街にゆきユダのいへに
いりてタルソの人サウロといふものをたづねよ。かれいま
祈禱てをり 十二 このアナニアといふ人きたりてみることを得
させんがためそのうへに手をおきしと異象にみたればな

十三 されどアナニアこたへけるハ主よわれこの人につき
ておほくの人のいへるをきゝしにこれがエルサレムにて
なんぢの聖徒をくるしめしこといかばかりぞや 十四 かつこ
のところにてもこのものハすべてなんぢの名をよぶものをと
らへんとて祭司のをさよりうけたる權威をもてり 十五 主い
ひたまひけるハ往けよこのものハ異邦人および王とイスラエルの
子孫のまへにわが名を擔しめんためにわがえらびし器な
り 十六 このものハわが名のためにいかばかりの苦難をうくるか
われこれをこのものにしめさん 十七 こゝにおいてアナニアゆきて
その家にいり手をこのもののうへに按ていひけるハ兄弟サウロ

よ。なんぢのきたりたる路にてあらはれしところの主耶穌な
んぢがふたゝび見ことをえ、かつ聖霊にみたされんためにわ
れをつかはせり 十八 たちまちかれの眼より鱗のごときも
のおちて再みることを得たちまち起てバプテスマをうく 十九
かれまでに食してちからづきたり。かくてサウロハ數日の
あひだダマスコにある門徒たちとともにをり 二十 たゞちに會堂
においで耶穌のことをのべて即ちこれハ神の子なりとい
ふ 二十一 きくものみな駭異ていひけるハこの人ハエルサレムにお
いてこの名をよぶものをほろぼし且こゝにきたりしもこ
れをしばりて祭司の長にひきわたさんとするにあらずや 二十二 さう

されどもサウロハますます堅固してこの耶穌ハキリストなり
とあかしをなしダマスコにをるところのユダヤ人をいひふ
せたり 二三 すでにおほくの日をへてのちユダヤびとサウロ
をころさんとはかりしが 二四 その計謀つひにサウロにしらる
る。かれらハ晝夜まちの門をまもりてころさんとせ
しに 二五 門徒たち夜かごをもてサウロを石牆よりつりおろ
せり 二六 サウロハエルサレムにいたりて門徒たちにつらならんと
とせしかバ皆かれが門徒なることを信ぜずしてこれを
おそる 二七 バルナバかれをひきて使徒たちのもとにいたりて
の途中にて主をみしことゝ主のかれにかたりたまひし

ことおよびダマスコにありてはゞからず耶蘇(いゑす)の名(な)によりて
のべしことゞもをつげたり 二八 かれエルサレムにありてでした
ちとゝもに往來(ゆきき)し 二九 主(しゆ)いゑその名(な)によりてはゞからずか
たり、またギリシヤ方言(ことば)のユダヤびとゝいひあらそへり。このものら
サウロをころさんとはかる 三十 されど兄弟(きやうだい)たちこれをさと
りてこれをカイザリヤまでおくりてタルソにゆかしめたり 三一 こ
ゝにおいてユダヤ ガリラヤ およびサマリヤ中(ぢう)のけうくわいは
平安(おだやか)にて成立(なりたち)て主(しゆ)をおそるゝ事(こと)をおこなひ聖靈(せいれい)のすゝめ
によりてその數(かず)いやましにまさりけり 三二 さてペテロあまねく諸方(しよはう)
の地(ち)をへてルッダにすめる聖徒(せいと)にもくだりけり 三三 そのところ

りて一人(ひとり)のちゆうぶをわづらひ八年(ねん)のあひだ床(とこ)につける
アイネアとなづくるものにあふ 三四 ペテロかれにいひけるハ
アイネアよ耶穌(いえす)キリストなんぢをいやせり起(おき)てなんぢみづから
床(とこ)をとゝのへよこの時たゞちに起(おく) 三五 ルッダおよびサロンにすめる
すべての人(ひと)これを見て主(しゆ)に歸(き)せり○ 三六 ヨッパに女(をんな)のでしあ
りダビタとなづく譯(わけ)バドルカス。これハおほくの善事(よきこと)と施濟(ほどこし)
をおこなへるものなりしが 三七 そのころ病(やみ)てしにけるによ
りその屍(しかばね)をあらひて樓(たかどの)におけり 三八 ヨッパはルッダにちかきゆ
ゑ門徒(でし)たちペテロのこゝにあることをきゝ二人(ふたり)のものを
つかはしてわれらはくることをおそくするなかれと請(こひ)し

む 三九 ペテロたちてこれらとともにゆき既にいたりければ人々これをひきて樓にのぼるにすべての寡婦どもペテロのかたはらにたちて哭泣つゝドルカスがともにありし時つねにつくれるところのうへ衣した衣をみせけり 四十 ペテロこのものらをことごとく外にいだし跪ていのりまうしかばねにむかひてダビタおきよといひければこのをんな眼をひらきペテロを見おきてざしぬ 四一 ペテロ手をのべてこれをおこし聖徒およびやもめたちをよびてこの活たるダビタをそのまへにたゝしめたり 四二 このことヨッパ中にきこえ多のひと主を信ず 四三 かくてペテロひさしくヨッパにとゞまりて

皮工シモンのいへにをれり

第十章

一 カイザリヤにイタリヤ隊となづくる組の百人のかしら
にてコルネリヲといへる人あり 二 かれは信心のふかきもの
にてそのすべての家族とともに神をうやまひ民におほく
のほどこしをなしつねに神に祈禱せり 三 ひるの三時ごろ
まぼろしのごとく神のつかひのきたりてコルネリヲよといひ
つるをあきらかにみる 四 かれ目を注こらしておそれい
ひけるハ主よなにごとなるや。天使かれにいひけるハなん
ぢのいのりとなんぢの施濟とハのぼりて神のまへに記さ
れたり 五 いま人をヨッパへつかはしペテロといへるシモンを

よべ六この人ハ皮工シモンのところにやどれり。その家ハう
みべにあり七コルネリヲにかたれる天使さりしのちかれそ
の僕ふたりと恒におのれにつかふる信心のふかき兵卒と
および八これにことごとくつげてヨッパへつかはせり九これ
らゆきて次日その邑にちかづけるときペテロ祈禱のため
屋上にのぼれり。時ハおよそ十二時なりし十いたく餓て
食せんとおもひしが人のしよくもつを豫備うちに氣
とほくなるこゝちして十一天ひらけ器のくだるをみる
大なる布のごとく四角をむすびて地につりおろされたり
十二そのなかにハすべて地のよつあしの獸昆蟲および空の鳥

あり 十三 かく聲ありてかれにいひけるハペテロよ起てこれ
をころし食せよ 十四 ペテロこたへけるハ主よしからじわれ
いまだ穢たるものと潔からざるものを食しことなし 十五
聲ふたゝびありてかれにいひけるハ神のきよめたまへるもの
をなんぢきよからずとするなかれ 十六 かくのごとくすること三
次たゞちにそのうつはもの天にあげられけり 十七 かくて
ペテロその見しところの異象ハいかなる意ならんとうた
がひをりしときコルネリヲより遣されたるひとびときたりて
シモンの家をたづねて門のまへにたち 十八 呼てペテロといふ
シモンハこゝにやどれるや否ととふ 十九 ペテロなほその[illegible]

ろーのことをおもひをりしに靈(みたま)これにいひけるハみよ三(さん)
人(にん)のものなんぢをたづぬ 二十 起(おき)てくだりうたがはずしてこの
ものとともにゆけ我(われ)これをつかはせしなり 二十一 ペテロくだ
りてその人(ひと)たちにいひけるハわれハなんぢらがたづぬる
ところのものなりなんぢらいかなる故(ゆゑ)ありてきたるや 二十二
かれらいひけるハ百人(ひやくにん)の長(かしら)なるコルネリヲといへる義(たゞしく)かつ
神(かみ)をうやまひまたすべてのユダヤびとのうちにハたふとまるゝもの。
なんぢをその家(いへ)によびてなんぢの言(ことば)をきけと聖(きよき)つかひに
しめされたり 二十三 ここにおいてペテロこれらをよびいれて
やどらしめ次日(つぎのひ)ペテロこれらとともにいでたちけるが

ヨッパのきやうだいたちもまたかれとともなへり 二四 つぎの日かれらカイザリヤにいるコルネリヲハすでにその親族およびしたしき友だちをよびあつめてかれをまちゐたり 二五 ペテロの入きたまへるときコルネリヲかれをむかへそのあしもとにふして拝めり 二六 ペテロかれをひきおこしいひけるハ起よわれも人なり 二七 かくてともにかたりつゝ内にいりておほくの人のあつまれるを見 二八 かれにいひけるハユダヤびと異邦人とまじはりまたちかづくことの律にかなはざるハなんぢらのしるところなり。されど神ハいづれの人をもけがれたるもの或ハきよからざるものといふなかれ

とわれに示たまへり 二九 このゆゑに我むかへらるゝやいな
猶豫ずしてきたれり。われなんぢらにとふ我をむかへしはな
にのためなるや 三十 コルネリヲいひけるは四日さきにわれ斷
食してこの時刻までいのりをり三時ごろ家にありていのりを
りしにかゞやける衣をきたるものわが前にたち 三一 いひけ
るはコルネリヲよなんぢの祈禱はきこえなんぢのほどこし
は神のまへに記えられたり 三二 されば人をヨッパへつかはし
ペテロといふシモンをよべ。このもの海邊にあるかはなめし
シモンのいへにやどれり彼きたりてなんぢにかたるべし
と 三三 このゆゑに我たゞちに人をなんぢにつかはせり。なん

ぢのきたれるハ善。われら神のなんぢに命じたまへるすべ
てのことをきかんとていま神のまへにあるなり 三四 ペテロ
口をひらきていひけるハわれまことに神ハひとをかたよらざる
ものにしていづれの國民にても神をうやまひ義をおこな
ふものハその聖旨にかなふといふことをさとれる 三六 その道
ハすなはち神の耶穌キリストによりて平和をのべイスラエル
の子孫につかへたまひしところなり此いともハあらゆる
ものゝ主たるなり 三七 そのことヨハネの宣しバプテスマのゝち
ガリラヤよりはじまりユダヤ中にありしことハなんぢら
ゝがしるところ 三八 すなはちこのナザレよりいでくる耶

穌ハ神よりせいれいと才能をもてあぶらをそゝがれあまねくめぐりて善事をおこなひまた悪魔につかるゝものをいやせりそハ神のかれとともなりしによる 三九 われらハそのかれがユダヤびとの地およびエルサレムにおいておこなひしすべてのことを證するものなりユダヤびとハこの人を木にかけてころせり 四十 神ハ第三日にこれをよみがへらせすべての民にあらはさずして 四一 たゞそのあらかじめえらびたまへる證人すなはち彼がよみがへりしのちこれとともに飲食せしわれらにのみ顯したまへり 四二 うらこのものハその生者と死者のさばきびとハ神よりさだめられしことをわ

まへはあらはして民にのべとく命じたり 四三 すべての預言者もおほよそこの主を信ずるものはその名によりて罪のゆるしをうくべしとこの主につきて證せり 四四 ペテロこの言をうまるあひだに道をきくところのすべてのものに聖靈くだりたり 四五 ペテロとともにきたりし割禮ある信者たちはせいれいの賜いはうじんにまでそゝげることをおどろきぬ 四六 そは異なるくにの方言をもてこのものらがこのつくまるとゝ神をあがむるをきゝたればなり 四七 このときペテロこたへけるはわれらのごとくすでに聖靈をうけたるこの人々はたれか水を禁じてバプテスマをうけざらしむるものあらん

やつひに主の名によりてバプテスマをうくべきことをかれらに命ず。ここにおいてかれらペテロに數日とゞまらんことを請へり

第十一章 使徒たちおよびユダヤ中にあるところの兄弟まではいはうじんも神のことばをうけたりと聞 二 ペテロエルサレムにのぼりしとき割禮あるものどもかれとあらそひ 三 いひけるはなんぢかつれいなき人の家にいりてかれらとゝもに食せり 四 ペテロそのありしはじめより次第にかたりて、かれらにあらはしいひけるは 五 われヨッパの邑におりていのるとき氣をうしなへるうちして。天よりよもゝを

つりさがるおほいなる布のごときうつはものくだるをみる
にその器わがもとにつけて 六 それに目を注てつらつらにこれ
をとらへ見るにそのうちに地の四足のものとあらきけものと昆蟲および
びそらの鳥ありき 七 こゝにまたペテロよ起てころ
してくらへといへる聲をきけり 八 われいひけるは主
よろづのくさ穢たるものときよからざるものはいまだわが
口にいれしことなし 九 聲また天よりわれにこたへて神の
きよめたるものをなんぢきよからずとするなかれと
十 かくのごときこと三次つひにまたそのものふたゝび天
にひきあげられたり 十一 その時にあたりてカイザリヤよりわ

れにつかはせる三人(みたり)のものわがをるところの家(いへ)のまへに
たてり 十二 すると霊(みたま)われにうたがふことなくしてこれらとともにゆ
くべしといひたまへりこの六人(ろくにん)の兄弟(きやうだい)もわれともなひゆ
きてその人(ひと)のいへにいりぬ 十三 かれわれらにつぐ天(てん)のつか
ひのわが家(いへ)にあらはれてむかひて人(ひと)をヨッパへつかはし
ペテロといふシモンを迎(むか)へよ 十四 その人(ひと)なんぢおよびなんぢの
家族(かぞく)のすくはるべきことばをつげんといへるを見(み)たりと
十五 こゝにわがかたりそめしとき聖霊(せいれい)かれらにくだりたまふことわれらには
じめしごとくかれらにもくだれば 十六 そのときわが主(しゆ)のい
ひたまへる ヨハネは水(みづ)をもてバプテスマをなしたれども

んぢらハ聖靈によりてバプテスマをうけんとのことばをお
もひいだせり 十七 されば神ハ主いゑすキリストをしんずる
ところのわれらにたまひしごときおなじ賜物をこれらに
あたへたまへば われいかで神にさからふことをえんや 十八
かれらこのことばをきゝて對ふるところなく たゞ神をあが
めいひけるハ實にしかれバいはうじんの生をえんがために
これらにも悔改をあたへたまへること 十九 さてステパノにつ
いておこりし苦難によりてちらされたるひと〴〵旅して
ペニケ クプロおよびアンテヲケにいたりしが たゞユダヤ人に
のみみちをつたへたる 二十 これらの中にクプロ クレネのひと〴〵

ありてアンテヲケにきたり主イエスの福音をのべてギリシヤ人にもかたれり 二一 主の手かれらとともにあり。おほくの人しんじて主に歸せり、二二 これらのことそのきこえエルサレムにあるところの教會のみみにいりしかばバルナバをつかはしてアンテヲケにいたらしむ 二三 これきたりて神の恩をみてよろこびこれらにこころをかたくして主に屬んことをすゝめたり 二四 そはこのひとよきひとにして聖靈と信仰にみてるものなればなりここにおいてあまたのひと主にくはゝりぬ 二五 さてバルナバはサウロをたづねんためにタルソにおもむき 二六 これにあひてこれをアンテヲケにつれきたる

まじはりてかれら一年(いちねん)のあひだともにきやうくわいにあつまりておほくの民(たみ)ををしふ。門徒(でし)たちのキリステアンととなへられしはアンテヲケよりはじまれり 二七 そのころ數人(すうにん)のよげんしやエルサレムよりアンテヲケにきたる 二八 その中(うち)のひとりアガボと名(なづ)くるものたちて靈(みたま)により示(しめ)しけるは世界中(せかいぢう)におほいなる饑饉(ききん)あらんと。そのことをさしてクラウデヲ・カイザルのときにはおこりけり 二九 こゝにおいて門徒(でし)たちおのおのそのちからにしたがひてユダヤにすめるところの兄弟(きやうだい)をすくはんためにこのれらにものをおくらんことをさだめ 三十 ついにそのことをおこなふ。まるなたちバルナバとサウロの手(て)に托(たく)して

あれらを長老におくれり

第十二章 そのころヘロデ王けうくわいのうちの數人をあやまさんとてこれらをとらふ 二 この刃をもてヨハネの兄弟ヤコブをころせり 三 このことのユダヤ人のこゝろにかなへるを見てこれまたペテロをもとらふ。このときハ除酵パンのいはひの日なりき 四 すでにこれをとらへて獄にいれすぎこしの節ののち民のまへにひきいださんとおもひ十六人のへいそつにあれとまもらしめたり 五 ペテロハ如此ひとやにまもられ教會ハかれがためにひたすら神にいのる 六 ヘロデこれをひきいださんとするまへの夜ペテロハ

ふたつの鏈につながれてふたりの兵卒のあひだにねむり
守者は門のまへにありてそのひとやをまもれり 七 ときに
主の使者きたりければ光ひとやのうちに照燿きそのつかひ
ペテロの脇をたゝきてこれをさましすみやかにおきよといひ
ひしに鏈その手よりおちたり 八 天使かれにいひけるはな
んぢ帯をしめくつをはきけよ。ペテロそのごとくせり。天使また
いひけるはなんぢのうはぎを身にまとひてわれにしたが
へ 九 ペテロいでゝこれに從ひしがそれつかひのなせるこ
とを眞實なるとしらずまぼろしをみるとおもふ 十 かくて
第一だい二の警固をすぎてまちにいるところの鐵門にい

たりしはそのもんおのづから、かれらのためにひらく。かれら
たち出(いで)て一つの衢(ちまた)をすぎゆくときその天使(つかひ)たちまちこの
れさりたまへり 十一 ペテロさとりていひけるはわれ今(いま)ま
ことにしる主(しゅ)そのつかひをつかはしてヘロデの手(て)およびすべてユダヤ人(びと)ののぞみよりわれをすくひいだしたまひ
しことを 十二 このこと醒悟(さとり)てのちヨハネ名(な)をマコといふ人(ひと)の母(はゝ)
なるマリアのいへにいたりしはおほくの人(ひと)あつまりて
祈(いの)りをなせり 十三 ペテロ、がもんの戸(と)をたゝきけるときロ一ダと
なづくる下婢(しもめ)きたりてこれをうかゞひしが 十四 ペテロの聲(こゑ)
なるをしりければよろこびまたくば門(もん)をもひらかずして

かけりきてペテロのもんのまへにたつことを告(つぐ) 十五 かれら
ローダにいひけるはなんぢ狂(くるへ)り。されども女(をんな)いひはりて
まことのことならんたがはずといふ。かれらまたいひけるはそれは
ペテロをまもる天(てん)のつかひなり 十六 ペテロはなほ門(もん)をたゝき
てやめざりしかばかれら門(もん)をひらきペテロをみておどろき
けり 十七 ペテロ手(て)をうごかしてこれらのものをしづめて
主(しゅ)のかれを獄(ひとや)よりひきいだしたまひしことのありさま
を告(つげ)まをしまたこのことをヤコブおよび兄弟(きやうだい)たちにしらせよとい
ひ遂(つひ)にいでゝほかのところにゆけり 十八 夜(よ)あけにおよびし
ときペテロはいかになりしやと兵卒(へいそつ)のなかのさわぎひと

かくあらざりき 十九 ヘロデ ペテロを たづぬれども見つけざれば ついにまもりをるものをたゞしてこれらを死罪に命ぜしめて ヘロデはユダヤよりカイザリヤにくだりてそこにとゞまれり ○ 二十 ヘロデ ツロとシドンのひとびとにむかひてはなはだしく怒をいだきければ これらは心をあはせてそのもとにきたり 内侍の臣ブラストにしたしみをなして平和をもとむ そはかれらが國は王のくにゝよりて糧食をうればなり 二十一 ヘロデ さだめたる日におよび王服をつけ そのくらゐに坐しかれらにむかひてかたれり 二十二 民よばはりいひけるは これ神のこゑなり人の聲にあらず 二十三 ヘロデはほまれを神に歸せざ

るより主の使者これをうちしかバこのものハ蟲のためにくはれて氣たえ 二四 さて神のことばはますますひろまりバルナバおよびサウロはその務をとげをはりてマコとなづけらるるヨハネをともなひてエルサレムよりかへれり

第十三章

アンテヲケのけうくわいには數人(すうにん)のよげんしやと教師ありすなはちバルナバおよび 二ニゲルとよばるるシメヲンまたクレネのルキヲおよび分封王ヘロデの乳きやうだいマナエンおよびサウロなり 二 このものら主につかへて斷食をせるとき聖靈のいひけるはわがためにバルナバとサウロをえらびすつちて我かれらに命ぜしところの職をおこなはしめよ 三 こ

こゝにおいて断食しいのりをなし手を二人のうへにおきて
これをゆかしむ 四 如此このふたりハ聖靈につかハされて
セルキアにくだりかしこより舟出してクプロにおもむけり
五 このものらサラミスにゆきユダヤびとの諸会堂にお
いて神のことばを宣まふヨハネを用ひてそのたすけとな
せり 六 かくてこの島のうちをへてパポスにいたりしと
きいつはりの預言者バリエスとなづくる卜をなせしユダヤ
人にあへり 七 このひとハくにの代官セルギヲパウロといふ
智人とともにあり時にバルナバとサウロをまね
きて神のことばをきかんことを求む 八 こゝにこのうらな

いしやエルマス(この名をとけバ卜者)ふたりのものをさからひ
ひ代官をして信ずることなからしめんとせり 九 サウロま
たの名ハパウロ 聖靈にみたされ目をとめてこれを視 十 い
ひけるハ 噫すべてのいつわりと奸惡にみてるもの惡魔
の子すべての義の敵よなんぢ主の直なるみちをまげ
てやめざるか 十一 みよ主の手いまなんぢのうへにありなん
ぢ瞽となりしばらく日をみざるべし。たちまちかれの目か
すみくらみて己をてびきせんものをもとめさまよへり 十二
こゝにおいてだいくわんこのありしことをみて主のをし
へにおどろきこれを信ぜり 十三 パウロおよびそのともなく

るものパポスより舟出してパムフリアのペルゲにいたりこ
こにてヨハネはこのものらにわかれてエルサレムにかへる 十四 こ
れらはこゝより旅してピシデアのアンテヲケにいたり安
息日にくわいだうにいりてざしぬ 十五 律法とよげんしやの
書をよみをはりしのち會堂のつかさたち人をもてこれら
にいはせけるはひとびときやうだいよもし民にすゝむる言
あらばいへ 十六 パウロたちて手をうごかしいひけるはイス
ラエルの人々および神をうやまふものよなんぢらきくべ
し 十七 このイスラエルのたみの神はわれらの列祖をえらび
その民のエジプトの地にやどりをりしときこれをそだて

うつはりき手をもつてこのところよりみちびきいだ
し 十八 おほよそ四十年のあひだ野にてこれをいつきやしな
ひ 十九 またカナンの地の七族の民をほろぼしその地をこれ
らに嗣しめ 二十 のちおよそ四百五十年のあひだすなはち
よげんしやサムエルのときまでこれに審士をあたへたまへ
り 二十一 そののちこれら王をもとめたれば四十年のあひだ
ベニアミンの支派キスの子サウロをあたふ 二十二 後またこれを
うつしダビデをたてゝこれらの王となしこれがため
に證していひたまひけるはわれエッサイの子ダビデとい
へるわがこゝろにかなふ人をえたりかれすべてわが旨

をなしとぐべし 二三 神はそのやくそくにしたがひてこの人
のすゑより救主いゑすをイスラエルにおこしたまへり 二四 そ
のきたるまへにヨハネ先イスラエルのすべての民にくいあ
らためのバプテスマをのべつたへたり 二五 ヨハネその職をお
こなひしときいひたるはなんぢらわれを誰とおもふやわ
れはその人にあらずわれよりのちにきたるものありわれは
その足の履をとくにもたらざるものなり 二六 ひとびと兄弟
アブラハムの子孫およびなんぢらのうち神をうやまふもの
よこのすくひの道をなんぢらにおくりたまへり 二七 それ
エルサレムにすめるものおよびその有司たちはキリストを

あらはこの罪はさだめて安息日ごとによむところのよ
げんしやのことばを成しめたり 二八 且ころすべきゆゑをえ
ざれどもピラトにこれをころさんことをもとめ 二九 すでにか
れについてしるされたるすべてのことをなしとげしかれ
らはこれを木よりおろして墓におけり 三十 されども神はこれ
をよみがへらせたまへり 三一 多日のあひだかれはガリラヤ
より己とともにエルサレムにのぼりしものにあらはれたまへり。
このものらはあかしを民にまをすものはそのひとびとなり
三二 われらもよろこびの音をなんぢらにつぐ神はいえすを
よみがへらせてせんぞたちに立しやくそくをその

子孫たるわれらに成したまへり 三三 すなはち詩の第二篇にな
んぢはわが子なりわれ今日なんぢを生めりと録されたる
がごとし 三四 またくされに歸せざる様にこれをよみがへら
せたることについては左のごとくいへり云われダビデにや
くそくせしところの頼べき恵をなんぢらにあたふべしと
三五 このゆゑにまたほかの篇になんぢはその聖者をくちはて
しめじといへり 三六 それダビデは神のむねにしたがひて
その世につかへしのちねむりて列祖とゝもにおくられ遂にく
ちはてたり 三七 然れども神のよみがへらせたまひしもの
はくちはてざりき 三八 されば人々きやうだいよこの人によ

よりて罪(つみ)のゆるしはなんぢらにつたへらるゝを知(しる)べし 三九 なんぢら
モーセの律法(おきて)によりて義(ぎ)とせらるゝことあたはざりしすべ
てのつみも信(しん)ずるものはみなこれによりてゆるされ義(ぎ)とせ
らるゝなり 四十 されバなんぢら慎(つゝし)めよおそらくハ預言者(よげんしや)の
ふミにいはれたることなんぢらにおよばん 四一 いはく藐忽(あなどる)
ものよ視(み)ておどろきうしなはれよそはわれなんぢらの日(ひ)
にひとつの事(こと)をおこなはん人(ひと)これをなんぢらにつぐると
もなんぢら信(しん)ぜざるべしとなり 四二 かれら會堂(くわいだう)をいでん
とせしとき次(つぎ)の安息日(あんそくにち)はまたこのことばをのべよと
請(こへ)り 四三 會(あつまり)すでに散(さん)じておほくのユダヤ人(びと)およびその

らしくはいりし神(かみ)をうやまふひとぐくパウロとバルナバにちからづくりパウロバルナバこれらにかたりて恒(つね)に神(かみ)のめぐみにをらんことをすゝむ 四四 つぎのあんそくにちにいたり邑(まち)のひとびと神(かみ)のことばをきかんとて幾乎(ほとんど)こぞりあつまりきたり 四五 そのおほくあつまれるをみてユダヤびと嫉妬(ねたみ)をおこしこゝろにみちみちて争辯(さからひ)しつのゝしりパウロがいふところをおとしめり 四六 パウロとバルナバもぢうらびしていひけるはそれ神(かみ)のおとだはこのあらはまづなんぢらにつぐべきなり然(され)どもなんぢらはこれを棄(すて)ておのれらかぎりなき生命(いのち)をうくべきことのはあらざると自(みづか)らさだめたるゆゑにわれら轉(てん)じていはうじんにむ

りかへし 四七 そハ主かつてわれらに命じたまへりいはく ちかへるなんぢ救となりて地の極までおよばんためにわれなんぢをたてゝいはうじんの光となせり 四八 異邦人ハこれをきゝてよろこびて主のことばをあがむまたかぎりなきいのちにさだめられたるものハ信ぜり 四九 かくて主の道あまねくこの地にひろまりぬ 五〇 然るにユダヤびと神をうやまふ貴婦だちおよび邑のおもだちたるひとびとのこゝろをうごかさせてパウロとバルナバをくるしめその境よりおひいだせり 五一 二人ハこれらにむかひ足の塵をうちはらひてイコニヲムにゆけり 五二 かくてでしたちハおほいに喜樂を

いざきこうろ聖靈にみたされたり

第十四章 ふたりのものイコニヲムにおいてともにユダヤびとの會堂にいりて道をはなし、ユダヤびとおよびギリシヤびとをおほく信ぜしめたり 二 されど信ぜざるユダヤびといほうじんをおこしめてそのこころに兄弟をあしくましむ 三 このゆへにひさしくこゝにとゞまり主によりてはゞからずことをはなせり主はかれらの手にしるしとふしぎなるわざをおこなはしめてその恩の道をあかしせり 四 邑のひとびとふたつにわかれあるひはユダヤ人にくみしあるひは使徒たちにくみせり 五 かくて異邦人ユダヤびとおよびその

の有司(つかさ)どもとともにこの徒をはづかしめ石にてうたんとはかる六ふたりのものこれをしりてルカオニヤの邑(まち)なるルステラ デルベおよびそのまはりの地にのがれ七このところにありて福音(ふくいん)をつたふ八ルステラにひとりの足(あし)よわきもの坐(ざ)しゐたりこの者はうまれつきのあしなへにていまだあゆみしことなし九このひとパウロのかたるをきゝゐたりしがパウロめを注(とめ)てそのいやさるべき信仰(しんかう)あるを視(み)て十おほごゑにいひけるはなんぢのあしにてたゞしく立(たて)よといひければおどりあがりてあゆめり十一ひとびとパウロのなせしことを見て聲(こゑ)をあげルカオニヤのことばにていひけるは諸神(かみがみ)ひとの

たちまちなりてわれらにくだれりと 十二 これらバルナバをゼウスとよびパウロはかしらだちて説話ことをする人なるがゆゑにヘルメスとこれをよぶ 十三 ときにその邑前にあるところのゼウスの祭司うしと花かざりを門にもちきたりておほくの人とともにいけにへをさゝげこれらをまつらんとせり

十四 使徒バルナバパウロこれをききておのがころもを裂きはしりいでゝ大衆のなかに入さけび 十五 いひけるはひとびとよなにゆゑにこのことをなすやわれらもまたなんぢらとおなじ情なるところの人なり。なんぢらは福音をつたふるはなんぢらをしてこの虚妄をすてゝ天と地と海およびそのうち

のすべてのものをつくりたまへる活神(いけるかみ)にこのゑらしめんが
ためなり 十六 さきの世には神(かみ)すべてのいはうじんはその
自己(おのれ)がみちにあゆむことをゆるしたまひしかど 十七 なほな
んぢらをめぐみて天(てん)よりあめをふらせみのりある時候(とき)を
あたへ糧食(くひもの)とよろこびをもてなんぢらのこゝろをみたし
めおのれみづから證(あかし)せざりしことなし 十八 この言(ことば)をもてか
らうじておほくの人(ひと)のおのれらに犠牲(いけにへ)をさゝげんとする
をとゞめたり 十九 時(とき)にユダヤびとら アンテオケ イコニオムよ
りいたりきておほくのひとをすゝめ石(いし)にてパウロをうち
しに既(すで)にしにたりとおもひ邑(まち)のそとにひきいだせり 二十 弟(で)

徒たちそのものはまはりにたちける時彼おきてそのまちにいり次の日バルナバとともにデルベにゆけり 二一かくてそのまちに福音をつたへおほくのひとをでしとなし。またルステラ イコニオム アンテオケにかへり 二二門徒たちのこゝろをかたうしそのしんねを信仰にとゞまらんことをすゝめ。またおほくの艱難をへてわれらが神のくにゝいるべきむねをしめせり 二三かくてふたりの教會ごとに長老をえらび斷食といのりをなし前より信ぜるところの主にこれをゆだねたり 二四かれらあまねくピシデアをへてパムフリアにいたり 二五ペルガに道をつたへてアツタリアにくだり 二六このところより舟にのりてアンテオケ

まゐれる。こゝはこのわざのために神の恩にゆだねられ今とげ
しつとめをおこなはんとていでしところなり 二七 まゐりつい
たりて教會のひとをあつめおのれをたすけて神のなしゝた
まへるすべてのこととはうじんのために信仰の門をひ
らきたまひしことをつぐ 二八 かくてひさしく門徒とゝ
もにこゝにとゞまれり

第十五章 一 ユダヤよりくだりし人々きやうだいたちにをしへ
けるはもしなんぢらモーゼの例にしたがひて割禮をうけ
ずばすくはるゝことを得ず 二 これによりてパウロとバルナバお
ほいにこのひとゞとあらそひこの論ぜしうへきやうだいたち

おのことにつきてパウロバルナバおよびそのうちの數人を
エルサレムにのぼらせ使徒と長老たちにとはしめんことをさ
だむ 三 さてはおいてこのかれら教會のひとびとにおくられいで
ピニケおよびサマリアを經ていはうじんの神に歸せしことを
つぶさにのべすべての兄弟をおほいによろこばしめたり
四 かれらエルサレムにいたるにけうくわいと使徒および長老
たちにむかへられおのれをたすけて神のなしたまひしを
凡てのことをつげしに 五 パリサイ宗のうちなる信者すうにん
起ていひけるはかれらにもかならず割禮をほどこしこれに命
じてモーセのおきてをまもらしむべし 六 使徒たちおよび

ちやうらうたちこのことを議んためにあつまれり 七
おほくの論ありしのちペテロたちてかれらにいひけ
るはひとびと兄弟よひさしきさきに神われをなんぢらの中
よりえらび福音のことばをわが口よりいはうじんにきか
せこれらをして信ぜしめたまひしことはなんぢら
のしるところなり 八 この人のこころをしりたまふ神は
かれらに聖靈をあたへしごとくにわれらにもあたへてその證
をなし 九 また信仰をもてそのこころをきよめわれらとか
れらの間にすこしのちがひをなさゞりき 十 しかるに今なにゆゑに
われらの列祖もわれらも負あたはざる軛を弟子たちの頸に

つけて神をこゝろむるや 十一 これらのものとおなじくわれらも主いゑすキリストのめぐみによりてすくはるゝことを信ずるなり 十二 爰においてひとぐみな黙してバルナバとパウロが神のおのれらをもて異邦人のうちにおこなひし多くの休徴とふしぎなるわざとをのぶるをきゝけり 十三 かれらがいひをはりしのちヤコブこたへていひけるは人々きやうだいよわれにきけ 十四 神はじめていはうじんを眷顧そのうちよりおのゝが名をあがむる民をとりたまひしことはシモンすでにこれを述 十五 よげんしやの言これとあへり。その書に。
このゝち我かへりてすでにたふれたるダビデの帳幕をふ

たゞびおこし その破壊(くづれ)のあとをふたゝびつくりてこれを建(たて)
たるべし 十七 これその餘(あまり)の民(たみ)およびすべてわが名(な)をも
てよばるゝいはうじんに主(しゆ)をたづねさせんがためなり 此(この)
すべてのことをおこなふ神(かみ)これをいふ。と志るされしが
ごとし 十八 神(かみ)ハ世(よ)のはじめよりそのすべての所行(わざ)を志ろしめした
まへり 十九 このゆゑにわれおもふ。異邦人(いはうじん)のうちより神(かみ)に歸(き)す
るものをわづらはさざれハよろしかるべしと 二十 志かれども書(ふみ)
をこのあらハおくりて偶像(ぐうざう)ハけがされたるものと姦淫(かんいん)とく
びりころしたるものと血(ち)とをいましむべし 二十一 それいにし
へより安息日(あんそくにち)ごとに會堂(くわいだう)にてモーセの書(ふみ)をよむべきゆゑに

それをのぶるもの各邑にあれバなり○二二こゝにおいて使徒および長老たち全會とともにそのうちより人をえらびあれバパウロバルナバとともにアンテオケにつかはさんことを定むそのえらばれたる人ハきやうだいのうちのおもきもの即ちバルサバとよばるゝユダおよびシラスなり 二三 このわれらの手によせておくりし書ハいはく使徒ちやうらうおよびきやうだいアンテオケスリヤキリキヤにをる異邦人のきやうだいに安をおくる 二四 われらが命ぜざるものわれらのうちを出いで言をもてなんぢらをわづらはしなんぢらのこゝろをみだしたるを聞 二五二六 これによりてわれら心をおなじうし

人(ひと)をえらびてわれらの愛(あい)するバルナバパウロとともにつかは
さんとさだむ。この二人(ふたり)はわれらの主(しゆ)いゑすキリストの名(な)の
ためにその命(いのち)をもをしまざりしものなり 二七 われらユダと
シラスをつかはしかれらの口(くち)よりおなじことをのべしめん
とす 二八 そは聖霊(せいれい)とわれらと左(さ)の肝要(かんえう)なるものゝほかはお
もきをもなんぢらにおはせじと定(さだめ)たり 二九 すなはち偶像(ぐうざう)にさ
さげしものと血(ち)とくびりころしたるものと姦淫(かんいん)とをいま
しむべし。もしこれらのことをなんぢらみづから慎(つゝし)まば善(よし)
ねがはくはなんぢらすこやかなれ 三十 かれらつかはされて
アンテオケにいたり衆(ひとびと)をあつめてその書(ふみ)をわたせり 三一 ひとびと

かれをよみその勸(すゝめ)をうけてよろこべり 三二 ユダとシラスも
また預言者(よげんしや)なればおほくのことばをもて兄弟(きやうだい)をすゝめか
れらをつようせり 三三 このふたりのもの志ばらくかしこ
にとゞまり後(のち)きやうだいたちは安然(あんぜん)を祝(しゆく)されそのおのれ
をはくのたちせしものゝもとにおくられけり 三四 バウロとバルナバ
はアンテオケにとゞまりその餘(あまり)のおほくの人(ひと)とゝもにをし
へをなし主(しゆ)のことばをのべつたふ 三五 數日(すうじつ)のゝちバウロ
バルナバにいひけるはわれらさきに主(しゆ)のことばをのべしと
ころの諸邑(しよいう)にまたゆきて兄弟(きやうだい)のありさまをいざ訪(と)ふべし 三六
さてバルナバもマコとなづくるヨハネをともなはんとお

もくろみ 三八 然れどもバウロはさきにパムフリアにておのれより
はなれはたらきをなさで共にゆかざりしこのマコをともなふ
はよろしからずとおもひしによる 三八 遂にふたりのなかにはげ
しきあらそひおこりて相わかれてバルナバはマコをともなひ
クプロにわたれり 三九 パウロはシラスをえらび兄弟よりお
のれを主のめぐみに托られていでたち 四十 スリヤ及びキリキヤ
をめぐりて諸けうくわいを堅固せり

第十六章 かくてパウロはデルベおよびルステラにいたれるに
一 テモテといへる門徒あり。その母はユダヤの信あるをんなる
にてその父はギリシヤ人なり 二 これはルステラ イコニオムの兄

弟らにほまれを得たり 三 パウロかれをたづさへてゆかにゆ
うんことを欲そのところにをるユダヤ人のためにかれに
割禮をおこなへりそは人々みなかれがちゝのギリシヤ人な
るを知ればなり 四 かくて諸邑をすぎエルサレムにある使徒
および長老たちの定めるいましめをまもらせんとてこれ
をその人々にさづく 五 これによりて諸教會のしんかうか
たくなりそのかずも日々にましぬ 六 かれらフルギヤとガラテヤ
の地をありきしときアジアにて道をとくことを聖靈にと
どめられ 七 つひにムシアにちかづきビテニアにゆかんとせし
が耶蘇の靈これをゆるさざりければ 八 かれらムシアをへて

トロアスにくだれり　九 このときパウロ夜においてひとりのマケドニヤ人たちておのれにねがひマケドニヤにわたりてわれらを助よといふをまぼろしに見たり　十 このまぼろしを見しのちわれらまことに主のわれらをしてマケドニヤ人に福音をのべしめんとわれらをめしたまふことをおしはかりて直にマケトニヤにゆかんとせり　十一 こゝにおいてトロアスよりふなでをし真直にはせてサモトラケにいたりその次日ネアポリスにゆき　十二 かしこよりピリツピにいたるピリツピはマケドニヤの一のわかれのうちなる名ある邑にしてろうまの植民地なりきわれら数日このまちにとゞまれり　十三 安息日

にわれらまちをいでゝ河のほとりなる常にいのりをなせると
ころへゆき坐してあつまれる婦女らにかたりしに 十四 紫
布をあきなふテアテラのまちの商にて神をうやまふルデヤ
と名くるをんな聞ゐたり主その心をひらきてパウロ
のいふところにこゝろをもちゐしめたまふ 十五 この婦その
家族とゝもにバプテスマをうけ求ていひけるはなんぢらもし
主を信ずるものとわれをせばきたりてわが家にとゞまれ
と強てわれらをいざなひたり 十六 われら祈禱所にゆけると
きうらなひをなせる靈につかれたるひとりのをんなの奴隷わ
れらに遇ふこれうらなひをもてその主におほくの

利をえさせしものなり 十七 バウロとわれらにしたがひてさけびいひけるハ、このひとゞもハいとたかき神の志もべにて、救道をわれらにつたふるものなり 十八 此の婦かくのごとくせることひさしかりしかれバ バウロこれをうれへふりかへりて靈にいひけるハわれ耶穌キリストの名によりてなんぢに命ず このをんなよりいでよ 靈たちどころに出ぬ 十九 こゝにおいてかのあるじたち利のみちのきたえさるゝをさとりてバウロとシラスをひきいだし市場にひきて有司たちにいたれり 二十 又これを上官のまへにひきてたゞちにいひけるハこのひとゞもハユダヤ人にてわれらの邑をみだし 二十一 ロマ人たるわれらの受ざる

ば行ふべからざるところの習俗をつたふるものなり 二二 大勢のものひとしくたちてこれらを攻つつかさはその衣をはぎ命じてこれをむちうたしむ 二三 おほく杖てのち獄にいれこれをかたくまもれと獄吏にめいず 二四 ひとやもりかくのごとき命をうけしにより彼等をおくのひとやにいれて桎をうけさせき 二五 かくて夜半ごろパウロとシラスいのりをなしつつ神を讃美す。めしうどら耳をかたぶけてこれをききてゐたりしに 二六 にはかにおほいなる地震ありてひとやの基ふるひうごき門ことごとくただちにひらけまたその囚人のなはめとけたり 二七 ひとやもり目をさまし獄門のひらけたる

をみてめしうど已ににげしとおもひ刀をぬきて自殺せん
としければ 二八 パウロおほごゑによばはりていひけるはみづから
こゝろ戕ふなかれわれらみなこゝにあり 二九 このとき彼あかりを
もとめておどりいり戰慄てパウロとシラスのまへにひれ
ふし 三十 かれらを外につれいだしていひけるは君よわれす
くはれんために何をなすべき 三一 かれらいひけるは主イ
エスキリストをしんぜよしからばなんぢおよびなんぢの家
族もすくはるべし 三二 つひにかれらおよびその家のすべての
ものに主のことばをのべけり 三三 この夜の即時かれふたり
をいざなひその杖傷をあらひてたゞちにその家族とゝも

にみなバプテスマをうけ 三四 且かれらをおのがいへにつれきたりて食物をその前にそなへすべての家族とともに神を信じてよろこべり 三五 夜あけにいたりてつかさたち下吏をつかはしいはせけるはその人々をゆるすべし 三六 獄吏そのことばをパウロにつげていひけるは上官なんぢらをゆるせとのいひつかはせり。されば今いでゝやすらかにゆけ 三七 パウロこれらにいひけるはわれらロマ人なるに罪をさだめずして公然にわれらをむちうち且ひとやにいれしに。しかうしていまひそかにいださんとするか。よろしからず。かれら自きたりてわれらをいだすべし 三八 したやくこの言をつか

きびとはつげられてこれらそのロマ人(びと)なるをききておそれ 三九 來(きた)りてこれらにこゝよりいでんことを求(こひ)てつれいだしてまたその邑(まち)をさらんことをねがひたり 四十 二人(ふたり)のものひとやをいでルデアのいへにいり兄弟(きやうだい)たちにあひこれらに勸(すゝめ)をなしていでさりぬ

第十七章(だいじふしちしやう)

かくてこれらはアムピポリスおよびアポロニヤを經めぐりてテサロニケにいたる。こゝにユダヤびとの會堂(くわいだう)あり 二 パウロ常(つね)のごとくこれらのなかにいり三回(みたび)あんそくにちごとに聖書(せいしよ)にもとづきてこれらと論(ろん)じ 三 キリストのかならずくるしみをうけ死よりよみがへるべきことをとき又(また)われなんぢ

らにつたふるところのこの耶蘇(いゑそ)すなはちキリストなるこ
とをときあかせり 四 ここにおいてその中(うち)のひとびと信(しん)じて
パウロとシラスにつけり。また神(かみ)をうやまふギリシヤ人(びと)のこれ
につけるものおほく貴女(たつときをんな)もすくなからざりき 五 しかるに
ユダヤびとこれを妬(ねたみ)いちばなる匪類(わるものども)をかたらひむれをな
して邑(まち)をさわがせパウロとシラスをとらへ民(たみ)のまへにひき
いださんとしてヤソンの家(いへ)にきたりしが 六 このものらを見(み)いだ
さざりければヤソンおよび數人(すうにん)のきやうだいを邑宰(まちづかさ)のま
へにひききたりておほごゑにいひけるは天下(てんか)をみだしたる
のものどもここにまできたれり 七 ヤソンはかれをむかへ

いれたり此ひとびとハみな耶穌といふ他の王あらましくいひて
カイザルの命にそむくものなり 八 大衆と邑のつかさだち
これをきゝて心をいためしむ 九 つかさびとハヤソンおよびその
餘のひとびとより保状をとりてかれらをゆるせり 十 きやうだ
いたち夜の間にいそぎパウロとシラスをベレアにおくりしむ。
このものら彼處にいたりてユダヤびとの會堂にゆけり 十一 この
ところの人々ハテサロニケのものよりハ性情よきがゆゑに
おのこゝろをもて道をきゝこのことのおもむき果してあるやいなやと
をしらんとて日々に聖書をさぐれり 十二 これゆゑにそのう
ちの人おほくこれを信ぜりまたギリシヤの貴女および男子

のしんじたるものもすくなからざりき 十三 テサロニケのユダヤびとらは神のことばのパウロによりてベレアにものべられしをしりてまた彼處にいたりてひとびとをさわがしめたり 十四 ここにおいて兄弟たちたゞちにパウロを海にゆかしむ、されどもシラスとテモテはなほそのところにとゞまりぬ 十五 パウロをともなひしひとの彼をたづさへてアテンスにいたる。その人々パウロよりシラスとテモテに速にきたらしめよとの命をうけていでたり 十六 パウロアテンスにありてこれらをまてるときその邑あまねくて偶像にはびこるをみて甚こころをいふかめたてまたそのゆゑに會堂においてユダヤ人および神を

うやまふひとびとと論じまた日々いちばにおいてそのあふところのものとろんぜり 十八 ときにエピクリアンおよびストイクの理學者あまたかれとあひろんず。ある人いひけるはあれ嘐啁ものなにをいはんとするものぞ。またあるひといふこれはあらたなる鬼神をつたふるもののごとしと。そはパウロこれらに耶穌およびよみがへれることを教へしが故なり 十九 かくてかれをひきつれアレオ山にゆきていひけるはなんぢがかたるところのあたらしき教をわれらしらせらるゝことを得るや 二十 なんぢの異聞をわれらのみゝにいれしがゆゑにわれらそのなにごとなるをしらんとほつするなり 二一

すべてのアテンスびとおよびその地にとゞまれる人ハたゞ
あたらしきことをいひつげ或はきくことにのみその日をおく
れり 二二 パウロアレオ山のなかにたちていひけるハアテンスの
人よわれなんぢらが事ごとに鬼神をうやまふのはなはだ
しきを観る 二三 われみちをゆくときなんぢらが敬拝ところの
ものをみしにしらざる神にとほりつけし一の祭壇をみい
だせり。ゆゑになんぢらがしらずしてうやまふそのものを
われなんぢらに示さん 二四 それ宇宙とそのうちのあらゆる
ものをつくりたまへる神ハあれ天地の主なれバ手にてつ
くれる殿にすみたまはず 二五 ころすべてのものに生命と氣

息と萬物をあたへたまへるものなれバともしきことなし人の手にてつかへらるゝものにあらず 二六 また一の血脉よりいでし諸の民を悉く地の全面にすまはせあらかじめその時期と住むところの界とを定めたまへり 二七 これ人をして神をもとめしめこれらが或ひハ探りうることをあらんためなり。されども神ハわれらおのおのを離るゝこと遠からざるなり 二八 それわれらハよりて生きまた動き存ることをうるなり。なんぢらの詩人たちもわれらハその子なりといひしが如し 二九 かくわれらハ神のすゑなればその神を金銀また石など人の工と巧をもてつくれ

るものとひとしくおもふべからず 三十 さきには蒙昧(くらき)なりしときは神(かみ)これをみすぐりしにしたまひしが今(いま)はいづこの人(ひと)にもみなくいあらたむることを命(めい)じたまふなり 三十一 そは神(かみ)までまそのたてしところの人(ひと)によりて義(ぎ)をもて世(よ)をさばくべき日(ひ)をさだめおのことはついては彼(かれ)をよみがへらせてそれ證(あかし)をもろもろのひとにあたへたまへばなり 三十二 これら死(し)たるものゝよみがへりのことをきゝてある人(ひと)はあざけりぬ。あるひとはわれらこの言(こと)をばふたゝびなんぢにきかんといふ 三十三 かゝるにおいてパウロかれらの中(なか)よりいでさる 三十四 されど數人(すうにん)かれにつきて信(しん)ぜりそのうちにはアレオやまの裁判人(さいばんにん)デオヌシオ

およびダマリスと名くるをんなまたそのほかの人もかれと
ともにありき
第十八章 そのゝちパウロはアテンスをはなれてコリントにいたる
二 ちかごろイタリヤよりきたりしものにてポントにうまれし
アクラとなづくるユダヤ人およびその妻ブリスキラにあ
ひてそのもとにいたれりこれらはさきごろイタリヤよりきたりし
もクラウデヲユダヤ人はことごとくロマをさられと命ぜしによる
まゐてなり 三 これその業をおなじくするによりてかれらと
ともにとゞまりて工をなしぬそのげふは帳幕をつくるもの
なり 四 かくてパウロは安息日ごとにくわいだうにおいて

論じユダヤ人とギリシヤびとを勸めり 五 シラスとテモテマケドニヤよりくだりきたるときパウロユダヤびとにむかひて耶蘇のキリストなることをあかしし道をつたふることにあつくこゝろをもちゐしされば 六 しかるにユダヤ人はあれはさからひこれを謗しはよりてパウロ衣をふるひてこれらにいひけるはなんぢらの血はなんぢらの首に歸すべしわれは咎なしいまより異邦人にゆかん 七 つひにそこをさりてユストといへる人のいへにいる。この者は神をうやまふものにてその家はくわいだうにとなれり 八 くわいだうの宰クリスポおよびその家族みな主をしんぜ。おほくのコリントびともまた道をきゝ信じてバプテスマを

うけしものもおほかりき 九 主(しゆ)ある夜(よ)まぼろしにパウロにいひたまひけるは おそるゝなかれ默(もく)せずしてかたるべし 十 そはわれなんぢとともにあればなんぢを害(がい)せんとてせむるものなし。またこの邑(まち)にわがおほくの民(たみ)あり 十一 こゝにおいてパウロ一年(いちねん)と六(ろく)ヶ月(げつ)のあひだかれらのなかにとゞまりて神(かみ)の道(みち)をゝしへたり 十二 ガリヨ アカヤの代官(だいくわん)たりしときユダヤ人(びと)こゝろをあはせてパウロをせめこれを裁判所(さいばんしよ)にひききたりて 十三 いひけるは この徒(もの)はおきてにそむきて神(かみ)ををがむことを人(ひと)にすゝむるものなり 十四 パウロ口(くち)をひらかうんとせしとき ガリヨ ユダヤびとにいひけるは ユダヤ人(びと)よ

もし不義奸惡のことならバわれがなんぢらより聴ハまつくわざなり 一五 されどもし言語あるひハ名字およびなんぢらのおきての論ならバなんぢらみづからこれを理べしわれこのことの審士たるをこのまず 一六 つひにかれらをさいばんしよよりおひいだせり 一七 こゝにおいてもろもろのギリシヤびと會堂のつかさなるソステネをとらへ裁判所のまへにてむちうてども。ガリヨハさらにこのことを意とせざりき 一八 パウロこのところになほひさしくとゞまり後きやうだいにいとまをつげてプリスキラおよびアクラとともに船にのりてスリヤにわたる。これケンクレアにあたまをそりき誓願によりて

髪をそれり 十九 かれエペソにいたりて二人をそこにとゞめおか
きみづから會堂にいりてユダヤびとゝ論ぜり 二十 衆かれがひ
さしくとゞまらんことを請たれどうけがはずして 二一 い
とまをつげていひけるはわれこのきたらん節を必
エルサレムにおいて守らざるをえず。されどもし神ゆるしたま
はゞふたゝびなんぢらに返るべしとつひに舟出してエペソ
をさりて 二二 カイザリヤにつき。しかしてエルサレムにのぼりて教會の
安否をとひてのちアンテヲケにくだり 二三 しばらくこのと
ころに住てまたいでたちガラテヤおよびフルギヤの地をつぎ〳〵
に經てすべての門徒たちをかたうせり 二四 こゝにアレキサンデリア

にうまれしユダヤびとにて辨才あるものにて聖書に達したる
アポロとなづくる人エペソにきたれり 二五 この人はやくより
つとに主の道のをしへをうけ且こゝろを熱して耶蘇のことを
つまびらかにこのことををしふされどたゞヨハネのバプテスマをしれる
のみ 二六 かれもはじめてこの會堂においてはゞからずかたり
ければプリスキラとアクラこれをきゝてかれをおのが家に
まねき神のみちをなほもつまびらかにときあかせり 二七
アポロアカイアにゆかんとせしかば兄弟たち書をおくりて
でしたちにかれをうけいれんことを勧められゆきてあそこ
に恩によりて信ぜしものをおほいにたすけゝり 二八 そはこれ

聖書(せいしよ)をひきて耶蘇(いえす)のキリストなることをしめしひとびとの
まへにてユダヤびとを甚(いた)くいひふせたればなり

第十九章　アポロのコリントにをるときパウロ東(ひがし)のかたの地(ち)
をへてエペソにきたりある門徒(でし)にあひて 二 かれらにい
ひけるはなんぢら信者(しんじや)となりしとき聖靈(せいれい)をうけしや。かれ
こたふるはわれらは聖靈(せいれい)のあることをさへきかざりき 三 パウロ
いひけるはさらばなんぢらバプテスマをうけて何(なに)にいれら
れしや。かれらいひけるはヨハネのバプテスマにいれられたり 四
パウロいひけるはヨハネはまことに悔改(くいあらため)のバプテスマをほどこし
民(たみ)にむかひてわれののちに來者(きたるもの)をすなはち耶蘇(いえす)キリストを

しんぜよといへり 五 かれらこれをきゝてバプテスマをうけて
主いゑすの名にいれられたり 六 パウロ手をそのうへにおき
ければ聖靈かれらに臨みみなことなるくにぐにの方言をいひてこの
たゞしくも預言せり 七 その人おほよそ十二人なりき 八 パウロ
會堂にいりてだいたんにして神の國のことをろんじつゝも
すゝめて三ケ月を過たり 九 しかるはかたくなにしてあへて
信ぜざるひとびとおほくの人のまへにてその道をそしり
ければパウロこれらをはなれ門徒たちをもはなれさせて
日々テラノスといへる人の講堂にていつも論ぜり 十 二年のあひ
だかくのごとくなししかば ユダヤびともギリシヤ人もすべてアジア

にすめるものこと〴〵く主のをしへをきゝぬ 十一 神くパウロの手によりてたゞならぬふしぎのわざを行(おこな)ひたまへり 十二 すなはちパウロのからだにふれたる汗巾(あせふき)あるひハ襜衣(まへだれ)をとりもちてやめるものにつけたれバ病(やまひ)ハさりて悪鬼(あくき)もいでさりぬ 十三 こゝに諸所(しよ〳〵)をめぐりてまじなひをなせるユダヤびとあり悪鬼(あくき)につかれたるものにむかひ試(こゝろみ)に主いゑすの名(な)をよびていひけるハわれらパウロがのぶるところの耶蘇(いゑす)によりてなんぢはいでんことをちかはしむ 十四 かくなせるものハユダヤ人(びと)なるスケワといへる祭司(さいし)のをさの七人(しちにん)の子(こ)なり 十五 悪鬼(あくき)こたへていひけるハわれ耶蘇(いゑす)をしれり。またパウロをしれり。さ

れどもなんぢらハ誰ぞや夫悪鬼につかれたる人かれらのう
へにとびあがりかれらにかちておしふせければかれら傷
つけられはだかのまゝにてその家をにげされり 十七 このことエペソ
にすめるすべてのユダヤびとギリシヤ人にきこえしかバこの
れらみなおそれをいだきぬまた主いゑすの名あがめられ
たり 十八 また信ぜしものゝうちおほくきたりて自らいひ
あらはしその行しことをうつたへり 十九 またさきに魔術を
おこなへるおほくのものどももその書籍をあつめひとびと
のまへにてやけりその價をかぞへて銀五万なりしと云
れり 二十 主の道ひろまりて勝をうることかくのごとし 二 お

のことのをはりしのちパウロはマケドニヤおよびアカヤをす
ぎエルサレムにゆかんとこゝろをさだめいひけるは我かし
こにゆきてのちかならずロマをも見るべし 二二 さるほどにおの
れにつかふるものゝうちテモテとエラストの二人をマケドニヤ
につかはしおのれはしばらくアジアにとゞまりぬ 二三 この
ときその道についてひとかたならぬさわぎおこれり 二四 そ
はひとりの銀工あり名をデメテリヲといふこれアルテミス
の銀龕をつくりさいくにんらに利をえせしめしことすく
なからざりき 二五 その工人およびおのがたぐひの業のもの
をあつめていひけるはひと〴〵よわれらの富はこのなり

ちひによせることなんぢらの知ところなり 二六 このパウロ
手にてつくれるものハ神にあらずといひておほくの人を
すゝめまどはしたゞにエペソのみならずほとんどアジア
中におよぼせり。これまたなんぢらが見ところ聞ところな
り 二七 これたゞわれらの業のかろしめらるゝあやふみある
のみならずアジアおよび天下こぞりてあがむるところの
おほいなる女神アルテミスの宮もなみせられその威光もま
さにほろぶべし 二八 これらこれをきゝてはなはだしく怒さけ
びいひけるは大なるかなエペソびとのアルテミスよ 二九 こゝ
においてて挙邑おほいにみだれパウロの同行なるマケドニヤ人

のガイヲスとアリスタルコをとらへこれをひきつれてもろともにはせて戯(ぎ)園(ゑん)にはしいれり 三十 パウロその人(ひと)々(びと)のなかにいらんとせしに門(で)徒(し)たちこれをゆるさゞりき 三一 またアジアの祭(まつり)をつかさどるものゝうちはこれとしたしきものどもありて人(ひと)をつかはしつゝそのみづから戯(ぎ)園(ゑん)にいらざらんことをもとめたり 三二 その時(とき)あるひとびと彼(かの)ことをいひあるひとびとは此(この)ことをいひさけべり。そもそも會(あつ)衆(まり)みだれて大(おほ)半(かた)はなにのためにあつまれるかをしらざればなり 三三 こゝにおいてユダヤ人(びと)アレキサンデルはいでんことをすゝめられたるひと群(ぐん)集(じゆ)のうちよりこれをおしいだしぬ。アレキサンデル手(て)をうごかし

民にむかひて事實をつげんとせしが 三四 これらそのユダヤ人たるをしるがゆゑにみなおなじく聲をあげて大なるかなエペソひとのアルテミスよと二時ばかりのあひださけびあへり 三五 書記官ひとびとをしづめていひけるはエペソの人々よそのエペソは天よりおちしおほいなるアルテミスのみやにつかふる邑なるをしらざるものあらんや 三六 この事はいひけすことあたはざればなんぢらおだやかにしてみだりなる事をなすべからず 三七 そはこのひとびとはみやの盗賊にもあらずなんぢらの女神をそしれるものにもあらば。しかるになんぢらこれをひききたれり 三八 デメテリヲおよびともにあると

ころのさいくにんもし人(ひと)をうつたふる事あらバさばきの日(ひ)ありまた代官(ざいくわん)あればたがひにあれにうつたふべし 三九 もし他(ほか)のことがらについてもとむる事あらバ律法(おきて)にかなふあつまりにおいてさだむべし 四十 われら今日(けふ)のさわぎについてハ訴(うつたへ)られんことをおそる。そハこの聚集(あつまり)についていひひらくべきことなければなり 四一 如此(かく)かたりてあつまりをちらせり

第二十章(だいにじふしやう)

騒擾(さわぎ)のやみしのちパウロは門徒(でし)たちをよびわかれをつげマケドニヤにゆかんとていでたちぬ 二 その地方(ち)を經(へ)おほくのことばもてひとびとをすゝめギリシヤにいたれり 三 あつ

に三月とゞまりて後スリヤにわたらんとせしときユダヤ人これを害せんとはかりければマケドニヤを經てかへらんとこゝろを定めたり 四 これとともにアジアまでゆきしものはプロスの子ベレアのソパテルおよびテサロニケびとのアリスタルコとセクンドデルベのガヨスとテモテまたアジアのテキコとトロピモなり 五 このともがらはさきだちゆきてトロアスにおいて我儕をまてり 六 たねいれぬ餅のいはひののちわれらピリピより舟出して五日めにトロアスにいたりこれらにあひてそのところに七日とゞまれり○ 七 一週のそのはじめの日われらパンをさくために集しがパウロつぎの

日(ひ)いでたゝんとおもひこれらに道(みち)をときかたりつ
づけて夜半(よなか)にいたれり 八 これらがあつまれる樓(たかどの)におほく
の燈(ともしび)あり 九 ユテコとなづくるひとりのわかきもの窓(まど)によ
りて坐(ざ)しいたくねぶりをりしがパウロの道(みち)をときたれるこ
とひさしかりければこれねぶりによりて三階(さんがい)よりおちたりか
れをたすけおこせしにすでに死(しね)り 十 パウロくだりてその
うへに伏(ふし)かれをいだきていひけるはなんぢらうれへさわ
ぐなかれこの人(ひと)のいのちはうちにあり 十一 かくてパウロまた
のぼり餅(パン)をさきてくらひ久(ひさ)しくこれらとかたりて夜(よ)あけに
およびていでたてり 十二 ひとびとかの少年(わかきもの)をたづさへその活(いける)

をみてすくなからずなぐさめを 十三 さてわれら舟(ふね)にのりてさきだちてアソスにわたり、そのところにてパウロをのせんとせり。そはかれ陸(くが)よりゆかんとみづからかくさだめしなり 十四 かれアソスにおいてわれらにあひたれば、これをのせてミテレネにいたる 十五 かしこより舟出(ふなで)してつぎのひキヨスの對(むかひ)にいたり、またつぎの日(ひ)サモスにつきトログリヨムにとまる。次日(つぎのひ)ミレトスにいたれる 十六 それパウロアジアに時(とき)をついやさゞるためにふねにてエペソをすぎんと意(こころ)をさだめしがゆゑなり。かくさだめしは彼(かれ)なるべくはペンテコステの日(ひ)エルサレムにあることをえんといそぎたるによる 十七 かくてかれはミレトスよりエペソ

に使をはせてけうくわいの長老たちを招よせけり 十八 かれ
らきたりしとき パウロかれらにいひけるはわがアジアに來
りし初日よりつねになんぢらのなかにありて行しことは
なんぢらがしるところなり 十九 すなはち我すべてのことに
謙遜まことなみだをながし ユダヤ人のはかりごとにより艱難
にあひて主につかへ 二十 益あることはこれをのこさずしめし
われをのべて或はひとびとのまへあるひは家々においてなん
ぢらにをしへ 二十一 神にむかひてくいあらためし主イエス
キリストにむかひて信仰することをユダヤ人およびギリシヤ
びとにあかしせり 二十二 今我はこゝろせまりてエルサレムにゆく。この

しこにて遇ところいかんとしらず 二三 たゞ聖靈まちごとに
われにしめしていふ縲絏と患難われをまてりと 二四 しかれ
どもわれはわがゆくべきみちと主いゑすよりうけし職を
なのそちも福音をあかしまつるおはりをとげんためにはわが生命
をもおもんぜざるなり 二五 今われ知るなんぢらのうちをへめ
ぐりて神國をつたへしわが面をこれのちなんぢらふたゝ
びみざるべし 二六 このゆゑにわれ今日なんぢらに證すすべ
てのひとの血においてわれはいさぎよくしてあづかるこ
となし 二七 そはわれ神の旨をのこすところなくことごとくな
んぢらにのべたればなり 二八 ゆゑになんぢらみづから慎み

つなんぢらが聖靈にたてられて監督となれるその全群を
つゝしみ主のおのが血をもて買たまひしところの教會を
やしなふべし 二九 そはわがさらんのちおの群をゝしまざ
るあらき狼なんぢらの中にいらんことをしれり 三十 亦
なんぢらのなかよりも門徒たちをおのれにしたがはせん
とてよこしまなる言をいひいだすものおこらん 三一 この故
になんぢらこゝろせよ。わが三年のあひだよるもひるもた
えず涙をながしておのおのをいましめし記憶べし 三二 兄弟
よなんぢらの德をたて且すべてのきよめられしもののな
かにおいて業をなんぢらにあたふるちからある神および

その恩恵のおことばに今われなんぢらをゆだぬ 三三 わが人の
金銀衣服をむさぼりしことなし 三四 わがこの手はわれおよ
びわれとともにありしものの需用にそなへしことなん
ぢらがしるところなり 三五 われなんぢらもかく勤労てよわ
きものをたすけ。主いへることをおもひいづべし受るよりも與
はさいはひなり。とのおほせをこころに記すべきをすべての
事においてしめせるなり 三六 パウロかくかたりをへて曲跪て
てもろもろとともにいのれり 三七 これらみなおほいになげき
パウロの頸をいだきてあはれと接吻しそのふたたびわが面を
見まじといひしおことばによりてわけても憂をなしつゝ船

舟までともなへり

第二十一章 われら強てこれらにわかれ舟にて眞直にコスにい
たり次日ロドスにゆきかしこよりパタラにいたり 二 ヒニケ
にわたる舟に遇われらはのりていで 三 クプロを望んでそれ
を左にみすぎスリヤにわたりツロにつけりそこのところ
にてふねの積荷をおろさんとすればなり 四 こゝにてわれら
門徒たちをたづねてそこに七日とゞまれり彼等靈にかんじ
てパウロにエルサレムへゆくなかれといふ 五 されどわれら七日
をすごしてかれらにわかれいでたちて途につく彼等その妻
孥とともにわれらをおくりて邑外までいたりしがともに

は岸にひざまづきていのりをつげをはりて 六 互にわかれをつげをはりて
のちわれらは舟にのりこれらはその家にかへれり 七 われ
らツロよりトレマイにいたるまでは舟路をとほりぬ。つきて兄
弟たちの安否をとひかれらとともに一日とゞまり 八 次日
いでたちてカイザリヤにいたり福音をつたふるピリポの家
にいりてともにとゞまる。このピリポは七人の一人なり 九 こ
れには預言する四人のむすめありみな處女なり 十 われら數
日おほくとゞまれるときアガボスと名くるひとりの預言者
ユダヤよりくだりて 十一 われらがもとにきたりてパウロの帯を
とりておのれの手足をしばりていひけるはかくのごとく

エルサレムはあるユダヤ人らこのおびのぬしをしばりて異邦人の手にわたさんと聖靈いひたまへりと
十二
われらとその地のものとともどもこれにエルサレムへのぼるなかれとすゝめしに
十三
パウロこたへけるハなんぢらなんぞ哭てわがこころを摧やぶれ主イエスの名のためにたゞしばらるゝのみならずエルサレムに死るもまた甘ずるところなりと
十四
かれをすゝめどもいれざりければわれら主の旨のごとくなれといひて止ぬ
十五
そのゝち數日をへてわれら行装をなしエルサレムへのぼれり
十六
カイザリヤのでしたちも數人われらとともにゆきてわれらとクプロのナソンといへる老門徒のもと

ともやどりせんとてその家にともなひいりぬ　十七　われら
エルサレムにいたりしに兄弟たちよろこびてわれらをむか
ふ　十八　つぎのひパウロはわれらとともにヤコブの家にいたりしに
長老たちみなあつまりをれり　十九　パウロこれらの安否をとひ
て神のおのれを用ていほうじんのあひだに行たまひしこ
とを一々つげたりければ　二十　かれらこれをききて主をあがめパウロ
にいひけるは兄弟よなんぢユダヤびとの信ぜしもの幾
萬なるをしる　これらもみな律法に熱心なるものなり　二十一　な
んぢ異邦人のあひだにあるユダヤ人にをしへてモーセをも
てしはなれ兒子にかつれいをほどこすなかれ例にしたが

ふなかれといへるとつぐるものあることをきゝした
まへり 二二 今いかにすべきぞおほくの人々(ぞく)なんぢのきたれるを
きゝてかならずあつまらん 二三 その故(ゆゑ)はなんぢわれらがい
ふところをおこなへわれらは誓願(せいぐわん)のものの四人(よにん)あり 二四 なんぢ
ぢこの人々(ひとびと)をたづさへゆきかれらとゝもにきよめおこなひをなし代(かはり)
てその費(ついえ)をいだしかれらに髪(かみ)をそることをえせしめよ
さらばすべて人々(ひとびと)なんぢにつきてきゝしところみな虚(そら)ごとにしてな
んぢも律法(おきて)をまもりておこなふことをしる 二五 信(しん)ぜ
たる異法人(いほうじん)はわれらすでに書(ふみ)をかきおくりてかゝるた
ぐひのことをおこなはず守(まも)るにおよばずたゞ偶像(ぐうざう)にさゝげしものと

血(ち)とくびりころせしものおよび姦淫(えん)とをはなれしむべしと
さだめたり 二六 こゝにてパウロは次日(つぎのひ)そのひとびとをたづさへて
かれとともにきよめおこなひをなし且(かつ)これら各々(おのおの)のために供(そな)
物(もの)をさゝぐべきおこなひ そのきよめの期(とき)まではきよめおこなひの日(ひ)を
たらさんことを殿(みや)にいりてつぐ 二七 七日(なぬか)をはらんとするとき
アジアよりきたれるユダヤびとパウロのみやにをるを見(み)て
盡(ことごと)くその民(たみ)をさわだてしめかれをとらへ 二八 さけびけるは
イスラエルの人々(ひとびと)われらをたすけよ これは人(ひと)をあまねく教(をしへ)を
つたへこの民(たみ)と律法(おきて)とこの處(ところ)にさからふものなり。まさギリシヤ
人(びと)をもひきて殿(みや)にいれてきよきところをけがしたり 二九

そはこれらさきにエペソ人トロピモといへるものパウロとと
もに城下にありしとみてパウロかれをみやにひきいれし
とおもへるなり　三十　まちにおいて挙邑さわぎたち人々かけ
あつまりてパウロをとらへこれを殿よりひきいだしければ
たゞちにその門をとぢたり　三一　これらすでにパウロをころさ
んとせしときあまねくエルサレムみだれたりとのうたへ千夫
のをさ長にきこえければ　三二　これたゞちに兵卒と百夫の
かしらどもをひきゐこれらのもとにはせくだれり、これら
千夫のかしらと兵卒とをみてパウロをうつことをやむ　三三　その
とき千夫のかしらちかくよりてパウロをとらへ命じて二のく

さりにてこれをつながせ。それは誰たるもの何事をなせしぞとたづねらるに 三四 おほくの衆中あるひとはこのことをいひ或はかのことをいひさけび。みだれによりて千夫のかしらその實情をしることあたはざれば。そのゆゑに命じてこれを陣營にひきゆかしめけり 三五 三六 おほくの人々あとにしたがひてこれをころせとよびさけびおしせまるによりて階におよべるときは兵卒パウロをかゝへて 三七 パウロひかれて陣營にいらんとせしときせんにんの長にいひけるはわれなんぢにかたりてよきやいなや彼いへるはなんぢギリシヤのことばをしるや 三八 なんぢはさきに乱をおこし四千人の凶徒を

ひきゐて野(の)にいでしエジプト人(びと)ならずや　三九 パウロいひけるハ
われハキリキヤのタルソにうまれしユダヤびとにて鄙邑の
たみにあらざるねがハくハ民(たみ)にかたることをわれにゆるせ
四十 せんにんの長(かしら)これをゆるしければパウロきざはしの上(うへ)
にたちて民(たみ)にむかひて手(て)をうごかしそのおほいにしづまれ
るときヘブルのことばをもてこれらにかたりて

第廿二章(だいにじふにしやう)　一 ひとびと兄弟(きやうだい)および父(ちゝ)たちよ請(こふ)いまわがのべんとす
る事實(ことがら)をなんぢらきけ　二 これらそのヘブルのことばをもて
語(かた)るをききていよいよしづまれり　三 パウロいひけるハわれハ
ユダヤ人(びと)にてキリキヤのタルソに生(うま)れそだちてこの邑(まち)のガマリエル

の足下にてそだてられ先祖のおごそかなる律法によりて
をしへられ神に熱心なりしおしらえ今日のなんぢらすべて
のごとくなりき 四 われさきにこの道のひとを男女と
もにしばりて獄にわたし死にいたるまでこれをせめた
り 五 すなはち祭司のをさと長老會のひとのわれについて
みなあかしをなすごとし。われこれらより兄弟たちにお
くるふみをうけダマスコにをるものをしばりてエルサレムに
ひききたり刑をうけさせんとてこのしごとにおもむけり 六 さ
れど我ゆきてダマスコにちかづける時おほよそひるごろ
たちまち天よりおほいなる光ありてわれをめぐりてらせ

七 われ地にたふる。そのときサウロ サウロなにゆゑわれをせむるやといふ聲をきく 八 われこたへたるに主よなんぢは誰ぞや われにいひたるは われはなんぢがせむるところのナザレの耶蘇なり 九 われとともにありしもの光をみておそれたり。されどわれにかたりしものゝ聲をきかざりき 十 われいひたるは主よわれなにをなすべきかと主われにいひたるはおきてダマスコに往そこにさだめおかれし爾がなすべきこと彼處においてなんぢにつぐべし 十一 その光のかゞやきによりてわれみることをえずなりたればわれとゝもにをりしものに手にたすけられてダマスコにいたれ

て 十二 この邑(まち)にすめるすべてのユダヤびとのなかにほまれあるアナニアといふ律法(おきて)にあつくる神(かみ)をうやまふ人(ひと) 十三 わがもとにきたりてこのかたはらに立(たち)ていひけるは兄弟(きやうだい)サウロふたゝびみることを得(え)よ。われたゞちに目(め)をあげてかれを見たまつれ 十四 またいふわれらの列祖(せんぞたち)の神(かみ)ハなんぢに神(かみ)のむねをしらしめかの義者(たゞしきもの)をみさせその口(くち)よりいづるこゑをきかしめんことをさだめたまへり 十五 そはなんぢこれぶふあまでその見聞(みきゝ)せしことをもてすべての人(ひと)にむかひあかしびとなるべければなり 十六 今なんぢいかでためらふべくんやたちて主(しゆ)の名(な)をよびバプテスマをうけてその罪(つみ)をそゝぎ

さるべしと 十七 われエルサレムにかへり聖殿(みや)においていのれ
るときに まぼろしにて 十八 見(み)けるに主(しゆ)われにむかひて急(いそげ)かれ
らはなんぢがわれにつきてたつる證(あかし)をうけざるがゆゑに
すみやかにエルサレムをいでよといひたまへり 十九 われいひけ
るは主(しゆ)よわれもとなんぢを信(しん)ずるものをとらへあるひは
諸會堂(しよくわいだう)にてこれをむちうちしことをこれらはしる 二十 又(また)なん
ぢのあかしびとステパノがその血(ち)をながさるゝときわれ傍(かたはら)に
たちてそのころさるゝをよしとしこれがころすものゝ衣(ころも)
をまもれり 二十一 主(しゆ)われにいひけるはゆけわれなんぢを遠(とほ)い
はうじんにつかはすべし 二十二 これまできゝてこの言(ことば)にいたり

みな聲をあげていひけるはかくのごときものを地よりさ
れかれをさもにいのちのあるべきものにあらざりき 二三 かれ
ら喧呼でそのころもをぬぎ塵を空中にあげければ 二四 千夫
のかしら命じてパウロをぢんえいにひきいれしめ。何故か
くかれらがパウロにむかひてさけぶかをしらんがためむ
ちうちてかれにとふべしといへり 二五 かれら革鞭をあてん
とてパウロをひきのばしとき彼そのかたはらにたてる百
夫のかしらにいひけるは罪をさだめずしてロマ人たるも
のをむちうつを律法にかなふや 二六 ひやくにんの長これを
きゝゆきて千夫のかしらにつげていひけるはなんぢはな

ことをつゝしめよこのひともロマ人なるぞ　廿七　せんぷの長
ゆきてパウロにいひけるはなんぢハロマびとなるやわれ
につげよ。パウロいひけるハしかり　廿八　千夫のかしらこたへ
けるハわれハおほくの金銀をもてこの民籍をえたり。パウロ
いひけるハわれは生來なり　廿九　こゝにおいてパウロを拷問
せんとせしものどもたゞちにしりぞきぬ。千夫のかしらそ
のロマ人なるをしりこれをしばりしことをおそる　三十　かく
てあくる日ユダヤびとのかれを訟たるゆゑを確にしらん
とおもひパウロのなはめをとき祭司の長たちおよび全議
會に命じてあつまらしめパウロをたづさへゆきてその前

またゝせらる

第廿三章 パウロ議會にめを注これらをみていひけるはひとびと兄弟たちわれ今日にいたるまですべてのこと良心によりて神につかへたり 二 祭司のをさアナニアこのそばにたてるものに命じてその口をうたしむ 三 こゝにおいてパウロこれにいひけるはしろくぬりたる壁よ神はなんぢをうたんなんぢが坐せるは律法にしたがひてわれをさばかんためなるにおきてにたがひ命じてわれをうたしむるぞ 四 このたはらに立るものどもいひけるはなんぢ神のさいしの長をのゝしるや。パウロいひけるは兄弟よわれその祭司のを

さなるをしらざりきしらバ然をいはざりしなりそハなんぢの民の有司をそしるなかれとしも録されたればなり 六 パウロかれらの其半もサドガイの人なるその半ハパリサイのひとなるをしりて議會のなかによばはりいひけるハひとびと兄弟よわれハパリサイの人またパリサイびとの子なり死るもののよみがへるあらんを望によりて今たださるる 七 パウロかくいひしかバパリサイの人とサドガイのひとのあひだに争論おこりてあつまりたるおほくの人々あひわかれたり 八 それハサドガイびとハ復生また天使および靈となしといひパリサイ人ハこれをみなありといふなり 九 遂におほいな

るさわぎとなりぬ。パリサイびとの學者だち立てあらそひ
いひけるはわれらこの人のあしきことをみずもし靈ある
ひは天使のこれにことばをかけしことあらんにはわれら神に敵
はむべからざるなり 十 かくて大なるあらそひおこりければ
千夫のかしらパウロがかれらにひきさかれんことをおそ
れて兵隊に命じかれらの中よりうばひとりて
陣營にひきいらしめたり 十一 その夜パウロのかたはらに
たちていひたまひけるはパウロよ勇めなんぢわれに
ついてエルサレムに證せしごとくロマにもかくあ
かしすべければなり 十二 明日におよびてユダヤびと黨をむ

そびともにちかひていひけるはパウロをころすまでは食飲をもせまじ
十三 この誓をなせるものは四十人あまりなりき
十四 かれら祭司のをさおよび長老たちのもとにきたりていひけるはわれらパウロをころすまでは何をも食じとちかひをたてたり
十五 このゆゑに請なんぢら議會とともにパウロの事をなほくはしくたづぬるさまをなして千夫のかしらに告かれをなんぢらにひきくだらしめよかれがちかづかざる前にかれをころさんとわれらすでに備をなせり
十六 かゝるにパウロの姉妹の子そのくはだてをきゝ即ちゆきて陣營にいりてパウロにつぐ
十七 パウロ請てひやくふまん

の長ひとりをまねきいひけるハこの少者をせんふんの長
につれゆけ。かのものこれにつぐべきことあれバなり 十八 こ
ゝにおいて百夫のかしらこれをせんふんの長につれゆきてい
ひけるハ囚者パウロわれをまねきてこの少者なんぢにい
ふべきことあれバこれをなんぢにつれゆかんことをねが
へり 十九 千夫のかしらその手をとりひきひそかなるところにし
りぞきてとひけるハなんぢわれにつげんとすることハ何
ぞや 二十 これいひけるハユダヤ人パウロのことをなほくハ
しく察考するさまをなしてなんぢにねがひ明日これを議會につ
れくださんことを約せり 二一 されどなんぢこれらがことバに

あさげみなりければそのうち四十人あまりのものバウロ
をころすまでハくらハじのまじと共にちかひて埋伏し
今までハそのそなへをなしてなんぢのゆるしをまてり 二二
せんまんの長わかきものはなんぢわれにかの事をつげし
と人にはかたるなかれといひふくめてかれをさらしめ 二三 ま
た百夫のかしらのふたりをとめして兵卒二百人騎兵七十人
矛をもつもの二百人とをそなへ今夜だい九時にカイザリヤへ
ゆけ 二四 のる畜をそなへてパウロをのらしめかれをまもり
て方伯ペリクスのもとへおくるべしといひ 二五 また左のごと
き書をかきおくれり 二六 云クラウデヲ ルシアス最たふとき方伯

ペリクスのやすきをとふ 二七 この人ユダヤびとらにとらへられま
さにあやめられんとせしをわれそのロマ人なるをききしに
より兵隊をひきゐゆきてこれをたすけ 二八 これらが訟ふるゆ
ゑをしらんとおもひかれをその議會につれくだりしに 二九
これがうつたへられしはただこれらの律法の論によれる
のみにてその死にあたるべくまたつなぐべきのゆゑを
みざるなり 三十 しかるにユダヤ人かれを害せんとちうるよし。
そのことをわれにしらせしによりてたゞちにかれをなんぢの
もとにおくれり。またこれが訟しものどもに命じてその
訟るところをなんぢにつげしめんとす 三一 ここにおいて兵

卒は命にしたがひてパウロをたづさへ夜のうちにアンテパトリスに
いたる 三二 あくるひ騎兵をしてパウロとともにゆかしめその
餘のものは陣營にかへれり 三三 騎兵はカイザリヤにいたり
書をつかさにわたしパウロをそのまへにたゝしむ 三四 方伯ふ
みをよみをはりてかれはその國をとひキリキヤのものな
ることをしりて 三五 いひけるはなんぢをうつたふるものたちもきたらば
に來らんときわれなんぢにきくべし遂にめいじてかれを
ヘロデの公廨においてまもらしめたる

第二十四章 一 五日をへてのち祭司のをさアナニアは長老たちと
よびひとりの辯士テルトルスとともにくだりてパウロを方伯

にうつたふ 二 パウロよびいだされしときテルトルスうつた
への端をひらきていひけるは 三 もつとも尊ペリクスよわれ
らなんぢによりて太平をえ且この國はなんぢの先見によ
りて良にあらたまりたる時にもしたがひ地にもしたがひて
感謝せざるなし 四 今われあくてなんぢをさまたぐること
をせじ請しばらくしのびてわがまうしのおもむきをきゝた
まへ 五 それわれらこの人をみるに疫病のごとし。天下の
ユダヤびとをみださせるかられてナザレ宗のかしらにて
六 また聖殿をもけがさんとせりわれらこれをとらへわが
律法にしたがひてさばきをなさんとおもひしに 七 千夫の

このしもルシアスきたりてわれらの手(て)より強(しひ)てこれをうばひ
とれり 八 かれをうつたふるものをして命(めい)じてなんぢのもとに
きたらしめたりなんぢかれをたゞさばわれらが訟(うつた)ふると
ころをことごとくしりたまふべし 九 ユダヤ人(びと)もともにうら
たくいひけるはこれらの事(こと)まことにしかりと 十 つかさ首(かうべ)を
もてしめしパウロにいはしめければこたへけるハなん
ぢこの國(くに)に深(おほ)くの年(とし)このたみの審官(さばきびと)たるをわれしれるゆゑ
にみづからの事情(ことがら)をうつたふるもよろこばし 十一 なん
ぢしらんわが崇拝(をがみ)のためにエルサレムにのぼりしよりわづか
うに十二日のみ 十二 かれらハわが聖殿(みや)においてひとゝあら

そひをなしまたハ會堂あるひハ城下においてひと〴〵をみだ
せしことをいまだ見ざるべし 十三 且かれらが今われをうつ
たふるところのことハ憑據をたてこれをうさうするお
とあるなり 十四 されどわれ此事をなんぢにいひあらはさんそ
れわれハかれらが異端ととなふる道にしたがひてわが列祖
の神につかへこと〴〵く律法と預言者のふみにしるされし
ことを信じ 十五 かれら義者もたゞしからざるも死しものよみ
がへらんことを神によりてわれハのぞめり。かれらもこれ
らくが望ところとおなじきなり 十六 これによりてわれ常にみ
づからつとめて神にむかひ人にむかひて良心の責なからん

ことをはげむるなり 十七 それ數年を經りしのち施濟をわがたみになし また獻祭をせんがためにかへり來たり 十八 われそこに潔淨てあれらのつとめをなせるときアジアよりきたるあるユダヤびとらは聖殿においてわが人とあらそふことをせしは亂などもなさざるをみたり 十九 もしわれを訴ふべきことあらばかれらなんぢのまへにうつたふべし 二十 あるひはまたわが議會のまへにたちたるときよばはりて死するもののよみがへることにつきわれ今日なんぢらにたださるるといへるこの一言のほかにこの人々もしわが不義あらばそを見ばいふべし 二十二 ここにおいてペリクス詳細にその道をしり

それでこれらをまたしめんとしていひけるハ千夫のかし
らルシアスのくだらんそのときわれくはしくなんぢらのこ
とをあきらめんと 二三 百夫のかしらに命じてパウロをまもらし
めかつあまきを寛容にしてその友のこれを供給ことあるを
禁ぜざらしむ 二四 数日のゝちペリクスその妻ユダヤ人なる
デルシラとゝもにきたりパウロをめしてそのキリストを信ず
る道をつたふるをきく 二五 パウロ公義と撙節ときたらんとす
る審判とをろんぜしかばペリクスおそれてこたへけるハな
んぢしばらくしりぞきされ便時をえてまたなんぢをめさ
ん 二六 ペリクスパウロより金をえんことをのぞむがゆゑに

しば〳〵この進を召てともにかたれり 二七 かくて二年を経てのちポルキスペストスといへるものペリクスの職にかはりぬペリクス悦をユダヤびとにえんとおもひてパウロを獄につなぎおけり

第廿五章 さてペストスは任國にいたりて三日のちカイザリヤよりエルサレムにのぼりし 二 三 時にさいしの長だちとユダヤのおもだちたるものどもパウロをかれに訴へつゝあまたと途までまちをりころさんとおもひこれに勸それ恩をかうむるに賜てパウロをエルサレムにめしたまはんことを請 四 ペストスこたへていはくパウロはまもられてカイザリヤにありわれも

ところあらば彼處にゆきむくべし 五 そのゆゑになんぢらの
うち權威あるものどもわれとともにくだりてこれについて
訟ふべきことあらばうつたへよ 六 ペストスこれらのなかに十
日あまりとゞまりてカイザリヤにくだり明日さばきの座に
すわりて命じてパウロをひききたらしむ 七 パウロのきたれる
ときエルサレムよりくだりしユダヤ人らこれをとりかこみ
證據をたつることあたはざるおほくの重罪をもてうつた
へいだせるを 八 パウロいひひらきけるはわれはまたユダヤ
人のおきておよび聖殿またカイザルにもなにも犯せるところ
なし 九 ペストスよろこびをユダヤ人にえんとしてパウロに

こたへていひけるハなんぢエルサレムにのぼり彼處(かしこ)においてこのことにつき審判(さばき)をわがまへにうけんことをのぞむや否(いな)
十 パウロいひけるハわれ今(いま)カイザルのさばきのざにま立(たて)りこのところにおいて審(さばき)をうくるハ當然(たうぜん)なりわれハなんぢがあきらかに知(しれ)るごとくユダヤびとに不義(ふぎ)をなせしことなし
十一 もし不義(ふぎ)をおこなひて死(し)にあたる罪(つみ)をおかしたらばわれハ死(し)をまぬかるゝことをねがはざれどもし我(われ)をうったふるところのことむなしきときハそのかれらにまかせてわれをかれらに交付(わたし)うるものなしわれハカイザルに上告(じやうこく)せん
十二 ここにおいてペストス議事官(ぎじくわん)とあひはかりて

いひたるゑなんぢカイザルに上告(じやうこく)せんとねがふをカイザルに
ゆくべし 十三 數日(すじつ)をへてのちアグリッパ王(わう)およびベルニケ ペストス
の安否(あんぴ)をとはんためにカイザリヤにきたる 十四 かしこにとゞ
まれることひさしかりしかばペストス パウロのことを王(わう)に
つげていひけるはこゝにひとりの囚人(めしうど)ありすなはちペリクス
の遺(のこし)おきしところなり 十五 われエルサレムにありしとき祭司(さいし)の
をさたちユダヤびとの長老(ちやうらう)たちこれをうつたへて罪(つみ)にさだ
めんことをねがへり 十六 われこれに答(こた)へけるはうつたへら
れしものおのれをうつたへしものに對(たい)してそのうつたふる
ところを分理すべき機(をり)をいまだえざるさきにかれを死につ

くるハロマびとの例(ためし)にあらば 十七 こゝにおいてかれらこの
ところにきたらばあつまれば。われも日(ひ)をのばすことをせず
次日(つきのひ)さばきの座(ざ)にすわり命(めい)じてその人(ひと)をひきいださしめ
するに 十八 訟者(うつたへるもの)どもたちてこれをうつたへしがその事(こと)わが
あらかじめおもひしところにたがへり 十九 たゞかれらハ鬼(き)
神(しん)をうやまふおのが道(みち)とパウロが生(いき)といふすでに死(しに)しひ
とりの耶蘇(いえす)とについてあらそひをなしこれをうつたへし
のみ 二十 我(われ)かれらのあらそひにまどひたればパウロに對(むかひ)なん
ぢエルサレムにゆきこの事(こと)につきてかしこにおいて審判(さばき)を
うくるをこひねがふや否(いな)ととひしに 二十一 これアウグストの質(しら)

訳ぎやうけんとして護れんことをもとめしにより我めんに
じてこれをカイザルにおくるまでまもらせおけり 二二 アグリッパ
ペストスにいひけるはわれもまたその人にききたきをの
ぞむなり。このをいひけるは明日なんぢきかれよ聴べし 二三 こゝ
においてあくる日アグリッパとベルニケおほいに威儀をそなへ
きたりて千夫の長たちおよび邑のたふときひとびとともろ
に公堂にいりぬ。パウロもペストスの命によりてひきいださ
る 二四 ペストスいひけるはアグリッパ王およびきてわれらとこ
もにある人々よなんぢこの人をみるならんユダヤの
おほくの人々エルサレムにおいても亦このところにおいて

もしわれはついてわれはうつたへこれはこのものは生(いく)べきものにあらずとよびさけべり 二五 されどわれこれを査看(しらべ)てそのしぬべきことをせざりしをしれり且(かつ)かれみづからアウグストに上告(じやうこく)せんとせるよりわれこれをおくらんことを定(さだめ)たり 二六 されどこれについてわが君上(きみ)にそうもうすべき實情(じつじやう)をしらねばゆゑにこれしまつをしらんとて奏(そう)すべきことをえんがためなんぢらの前(まへ)に殊更(ことさら)にアグリッパ王(わう)なんぢのまへにひきいだせり 二七 それめしうどをおくるにその罪案(ざいあん)をしるさゞるは理(ことわり)にかなはずとおもへばなり

第廿六章(だいにじふろくしやう)

アグリッパ パウロにいひけるはなんぢのみづからのた

めなのべがるをとゆるしたまへりパウロ手をのべこれにこたへ辯ぜんとしていひけるハ 二 アグリッパ王よわがユダヤ人よりうつたへられしことにつき今日なんぢのまへにてことごとくいひひらくことをうるがゆゑにわれを幸なるものとおもふ 三 殊にさいはひなるハなんぢユダヤびとの風氣とこれらが論ずるところの端をことごとくしりたまふことなり。このゆゑにねがはくハ耐心てわれにきゝたまへ 四 それわが始よりエルサレムにありてわが民のなかにをる幼稚ときよりいうま世をすぎしうをユダヤ人ハみなしるなるべし 五 もし證をなさんとせばこれらハ素よりわが

さきはわれらの教のうちにてもつとも厳きところはまもらふ
ひとるパリサイ人なりしことを識あり 六 今われたちてまれ
しの列祖は神のやくそくしたまひしその望につきてさば
かるゝなり 七 この望はわれらの十二の支派
のよるもひるもひたすら神につかへて得んとねがふものなり
アヽアグリッパ王よこの望のゆゑにわれはユダヤ人にうつた
へられたるなり 八 神まさでは死しものをよみがへらせたりとい
ふこともなんぢらなんぞ信じがたしとするや 九 我きのふさ
きつのそナザレの耶蘇の名にさからはんがためおほくのことを
致なりいまさきにもそれをおもひエルサレムにてこのお

ことをなせり即ちさいしの長たちより權威をうけておほくの聖徒をひとやにいれまたかれらのころさるゝときそれをよしとし十一諸會堂においてしば〱かれらを罰ししひてかれらに褻瀆をいはしめ。うち狂ることはなはだしくかれらをしのぎて外國の邑までせめおよべり十二このとき祭司のをさだちよりの權威と命令をうけてダマスコへゆきしに十三王よその道にてひるのころわれ天よりひかりのあるを見たり日よりもかゞやきて我およびともにゆけるものをめぐりてらせり十四われらみな地にたふる。そのときヘブルのことばをもてサウロサウロなんぞわれをせむるやなんぢとげある鞭

をけることかたしとわれにいひ述る聲ぞわれきこえき 十五 わ
れいひけるは主(しゆ)よなんぢはたれぞやとこたへけるに主(しゆ)わ
れはなんぢがせむるところの耶穌(いえす)なり 十六 なんぢ起(おき)てたて
よわがなんぢにあらはるゝはなんぢをたてゝ役者(つかへびと)となし又
たなんぢがすでに見(み)しことゝわがなんぢにあらはれて示
めさんその事の證人(あかしびと)となさんがためなり 十七 われなんぢ
をまもりてこの民(たみ)およびいはうじんの手(て)よりすくひ出し
今(いま)なんぢをこれらにつかはすは 十八 これらの目(め)をひらき暗(くら)
きよりはなれて光(ひかり)につきサタンの權(ちから)をさりて神(かみ)に歸(き)せしめ
またこれらをしてわれを信(しん)ずるによりてつみのゆるしと

きよめられしものゝ中において業をうくることを得せしめんがためなり。十九 このゆゑにアグリッパ王よわれその天のあらはしにそむかずして 二十 先ダマスコ エルサレムの人々つぎにユダヤの全地およびいはうじんにまで恒にくいあらためまこのなみおこなひをなして罪をくいべきことゝ神に歸すべきをおしゆるよう我の屢ねがふたゞ 二一 これらのことによりてユダヤ人われを聖殿にてとらへころさんとせしも 二二 しかしてわれハ神のたすけをえ今日にいたるまでたふることなく小きものにも大なるものにも證をなせり。そのいふところは預言者およびモーセが將來かならずな

らんといひしほかにあらざるハなし 二三 すなはちキリストの
くるしみをうけ死しものゝよみがへりのはじめとなり光
をこのたみと異邦人につたふることなり 二四 パウロがかくう
つたへけるときペストス大聲にいひけるはパウロよなんぢは
狂氣せるなり博學なんぢをしてきやうきせしめたるなり 二五 パウロ
いひけるはもつともたふときペストスよわれは狂氣せるにあらず
わがいふところは真實にしてたしかなるこゝろよりいづ
るなり 二六 王もこれらの事情をよくしりたまへばわれは
はゞからずして王前にかたれりそはこれらのことハ方隅に
おこなはれし事にあらざれば王はかくるゝところなしと

信ずればなり 二七 アグリッパ王よなんぢよげんしやのふみを信ずるやわれなんぢのしんずるをしる 二八 アグリッパパウロにいひけるはなんぢはわれを勸てたやすくキリステアンとならしめんとすは 二九 パウロいひけるは容易にもせよたやすからざるにもせよわれねがふたゞ爾のみならず今日われにきくところのもの皆もわがごとくなりてわがおびるもののなからハおなじく神にねがふなり 三十 このことをいひしとき王と方伯およびベルニケまたともに坐せしひとびとたちてさりぞき 三一 相かたりていひけるはこの人は死べきことも縲絏にかゝるべきこともなさざるなり 三二 アグリッパペストスにむかひて

ひいひけるはこの人もしカイザルに上告せんといはざりし
ならばこそやゆるさるべきものなり

第廿七章 われらをふねにてイタリヤへわたらすることさだまりけれ
ばパウロおよび他のめしうどらをアウグスト隊の
ひやくにんの長なるユウリアスとなづくるものにわたせり
二 こゝにおいてわれらアジアにそうてふねせんとする
アドラミテオムの舟にのりて出マケドニヤのテサロニケびと
アリスタルコもわれらとともにありき 三 次日シドンにつけり。
ユウリアスねんごろにパウロを待遇かれに朋友のもとにゆ
きてそのもてなしをうくることをゆるせり 四 われらまた

このところより舟出(ふなで)せしが風(かぜ)のさかふによりてクプロの風下(かざしも)
のかたをはしり 五 キリキヤとパムフリアの海(うみ)をわたりてルキヤ
のムラといへる湊(みなと)にいたれば 六 そのところにて百夫(ひやくふ)のか
しらイタリヤへわたるアレキサンデリアのふねにあひてわれら
をそれにのせたり 七 多日(たじつ)のあひだふねのゆくこと遅(おそ)くやう
やくにしてクニドスにむかふところにいたりしが風(かぜ)の順(じゆん)なら
ざるによりてサルモネをすぎクレテのかざしものかたをゆき
しが 八 漸(やうやく)にしてその岸(きし)にそひラサイアの邑(まち)にちかき美湊(よきみなと)と
なづくるところにいたれり 九 時(とき)をふることすでにひさし
く断食(だんじき)の期(き)もすぎぬれば舟路(ふなぢ)のあやふきによりパウロい

さとしていひけるハひとびとよわれおもふにこのふなぢハ損害おほかるべしただに積荷と舟のみならずわれらのいのちにもおよばん 十一 しかれども百夫のかしらハパウロがいふところよりも船長と舟主のことばを信じたり 十二 且このみなとハ冬をすごすに便よろしからざれバこのゆゑにおほくピニクスにいたりかしこにて冬をすごさんことを得んとてこのところをいでんとさだめたるものおほし ピニクスハクレテのみなとにて西南のかぜとにしきたの風とそのきしにそひてふくところなり 十三 ときに南風しづかにふきければこれらおもひをとげたりとおもひ錨をあげクレテ

はそうてはしりしに 十四 ほどなくユーロクルドンといふなる
狂風(ちやて)しまよりおろしきたり 十五 舟(ふね)をふきさらひければわれ
は敵(さから)ふことをえざれバその風(かぜ)にまかせて 十六 つひにクラウダ
といへる小島(こじま)のうしろにかくれはせゆきやうやくはし
て小舟(こぶね)艀をおさむ 十七 既(すで)にひきあげしのちこれら備(そなへ)おけるも
のをもて大舟(おほぶね)の胴(どう)をしばりつゝ洲(す)にのりいらんことをお
それ帆(ほ)をおろしてながれゆけり 十八 風(かぜ)はげしきによりてつぎ
のひ水夫(かこ)らつみにをなげすて 十九 第三日(みつかめ)にいたりてわれ
ら手(て)づから舟具(ふなぐ)をなげすつ 二十 かくて多日(たよう)のあひだ日(ひ)も星(ほし)
もみえずしてはげしきかぜふきあれければわれらつひは

すくはるべき望たえはてたり
二一 人々ひさしく食せざればパウロ
これらのなかにたちていひけるハ人々よなんぢらさきにわ
がいふをきゝてクレテよりふなでせざりせばそ
の損害をうけざるべきなりし
二二 今われなんぢらにすゝ
む勇なんぢらのうちひとりだも生命をうしなふもの
なかるべしただ舟をうしなふことあらんのみ
二三 そはわが屬する
ところわがつかふるところの神のつかひこの夜わがかた
はらにたちて
二四 パウロよおそるゝなかれなんぢかならず
カイザルのまへにたつべしみよ神はなんぢとともにふね
にあるものをことごとくなんぢに賜へり
二五 このゆゑに

諸人いさめよ、そのわれにつげたまへるごとくそのごとくならんとわれは神を信ずればなり 二六 われらかならず一島におしあげられん 二七 かくて第十四日の夜にいたりわれらアデリアのうみにたゞよふ。夜半ごろ水夫らきしにちかづけりとおもひて 二八 水をはかりしに二十尋をえたりすこしまたすゝみてまたはかりしに十五尋をえたり 二九 石にのりあげんことをおそれ艫より四のいかりをおろして夜のあけをまちわびぬ 三十 水夫らふねよりのがれんとして舳よりいかりをおろす状しなし小艇をうみにさげたれバ 三一 パウロ百夫のかしらと兵卒にいひけるハこのひとぐもし舟にとゞまらずバ

なんぢらすくはるゝことを得じ 三二 こゝにおいて兵卒ら小舟の索をたちきりてそのながるゝにまかせたり 三三 夜のあけんとするときパウロすべてのひと〴〵に食せんことをすゝめていひけるはなんぢらまちわびて食せざりしこと今日はすでに十四日めなり 三四 故にわれなんぢらにしよくせんことをすゝむ。そは救をうるたすけとなるべければなり。なんぢらの頭髪ひとすぢだになんぢらのかうべよりおちざるべし 三五 如此いひてパンをとりすべての人のまへにて神に謝しこれをさきて食しければ 三六 これらもみな〳〵いさんで食せり 三七 舟にのれるところのわれらあはせ

せて二百七十六人なりき 三八 まてはしよくしてあきたれバ穀物(こくもつ)をうみにすてゝふねをかろくせり 三九 夜(よ)あけてその地(ち)はしらざれどひとつの海灣(いりうみ)をみたり。こゝに洲(す)さきあり。或(あるひ)はいたるべくバこゝにふねをいれんと謀(はかり)つなをたちて錨(いかり)をうみにすて舵纜(かぢづな)をゆるめ舳さきの帆(ほ)をあげ風(かぜ)にしたがひすさきをさしてすゝみしに 四一 うしほのながれあふところにいたりてふねを洲(す)にのりあげへさきハ居(お)つきてうごかず艫(とも)ハなみのはげしきがためにやぶられたり 四二 こゝにおいて兵卒(へいそつ)らめしうどのおよぎにげんことをおそれこれを殺(ころ)さんとせしが 四三 しかれども百夫(ひやくふ)のかしら

四十三 パウロをすくはんとおもひそのすゝめをとゞめ且およぎうるものはまづ水にとびいりて
四十四 そのほかのものはあるひは板あるひはふねのくだけにのりて岸にいたらんことを命じたまひかくのごとくしてみなまぬかるゝことを得てきしにのぼれり

第廿八章

われらすでにすくひをえてのちその島の名をマリタとなふることをしれり
二 えびすら尋常ならぬなさけをのべ雨ふりと寒とにより火をたきてわれら衆人をもてなせり
三 パウロおほくの柴をあつめて火にくべしにあつさうさによりて蝮いできたりてその手につけり
四 夷人らまむし

のその手(て)にかゝりたるをみてたがひにいひけらくこの人(ひと)はまさしくひとをあやめしものならん。これ海(うみ)よりのがれたりといへども天理(てんり)そのいくるをゆるさゞるなり 五 パウロはむしを火(ひ)のなかにふりおとして害(がい)をうくることなし 六 かれらはパウロが腫(はる)るかあるひはたちまち仆(たふ)れてしぬることあらんとおもひしにひさしくうかゞへどもかれは害(がい)のおよばざるをみてそのおもひを轉(てん)じて神(かみ)なりといへり 七 しまの長(をさ)をプブリヲと名(な)づくかのほとりにおのがもてる田地(でんち)あり。これはわれらをむかへてねんごろに三日(みか)やどらせたりき 八 ときにプブリヲの父(ちゝ)ねつと痢(り)

病にわづらひて臥しをりしがパウロそのもとにいたりていのりて手をそのうへに按これをいやせり 九 このことありてのち島にあるところの他のやめるものどもきたりていやさるゝことを得たり 十 これら禮をあつくしてわれらをうやまひまた舟出のときにのぞみてわれらがなくてかなはぬものをおくれり 十一 われら三ケ月を經て後このしまにて冬をすごせしデヲスクリの號あるアレキサンデリアの船にのりていでゝ 十二 スラクサにつき三日とゞまれり 十三 かしこよりまはりてレギヲにいたりて一日を經て南風ありければ次日プテヲリにいたり 十四 兄弟たちにあひかれらが請にまかせて七日と

どまらせしかくして、ロマにゆく 十五 ロマの兄弟(きやうだい)たちわれらのこ
とをきゝアッピーポロムおよび三館(みつのやかた)といへるところにきたり
てわれらをむかふパウロかれらをみて神(かみ)に謝(しや)しそのこゝろに
ちからをえたり 十六 さてわれらロマにいたりしに百夫(ひやくふ)の
かしらめしうどらを王(わう)をまもる兵隊(へいたい)のかしらにわたせしも
されどパウロをひとりにて守兵(まもりのへい)とともに別(べつ)にみづからをる
ことをゆるされたり 十七 三日(みつか)を経(へ)てのちパウロユダヤ人(びと)の
おもだてるものどもをよびあつむ。かれらのあつまれると
きかれにいひけるは、ひとびと兄弟(きやうだい)よわれいまだわが民(たみ)または
列祖(せんぞ)の例(きまり)にもとりてならぬことをもなせしことなし。しかる

にエルサレムより囚人となりてロマびとの手にわたされた
り 十八 ロマ人すでにわれをしらべたれど死べきつみなきによつて
ゆゑにわれをゆるさんとおもひしに 十九 ユダヤ人これをこば
みしにより我やむことをえずしてカイザルに上告せしか
れども我國のたみをうつたへんためにはあらず 二十 これ
によりてわれなんぢらに會ともにかたらんことをこふる
なりそはわれイスラエル族ののぞみのためにこの鏈につなが
るゝゆゑなり 二一 かれらいひけるはわれらユダヤよりなんぢ
について書信をうけず又兄弟たちのきたりしものもな
んぢについて何のあしきことあるをわれらに報まうさ

ましものなし　二二　されどわれらなんぢのおもふところを聞(きか)んとほつするハわれらいづこにてもあの宗旨(しゆうし)のそしらるゝを識しればなり　二三　既(すで)にさだめたる日(ひ)におほくの人(ひと)パウロのやどにきたれるをパウロ朝(あさ)はやくより暮(くれ)にいたるまでモーセの律法(おきて)とよげんしやの書(ふみ)とひき神國(かみのくに)のことをときこらかれをあかし耶蘇(いえす)のことをのこりてかれら説きすめたり　二四　そのことばに感(かん)じてこれを然(しか)とするものありまたさ信(しん)ぜざるものもありて　二五　たがひに相(あひ)あはざるによりてつひにしりぞけて。其(その)しりぞかんとせしときパウロ一言(ひとこと)をかたりける八誠(まこと)あるかな聖靈(せいれい)よげんしやイザヤによりてわ

われらの列祖にかたりし言。そのまゝ、それは云なんぢこの民に
ゆきてつげよ。なんぢらはきけどもさとらず みれども見ず
二七 そはこのたみ目にて見みゝにて聽ところのまことをさとり
悔改てわれにいやされんことをおそれその心をにぶくし
耳をおほひ目をとぢたりと 二八 この故になんぢらしるべし
神のすくひは異邦人におくられ、かれらはこれをきくべし
二九 パウロがこの言をいひをはりしとき ユダヤ人さりゆき
てたがひにおほいなる爭論をなせり 三十 このゆゑにパウロはその
うけたまはりし家にとゞまりて全く二年すごしてきたりあふ
ところのものをむかへて、たゞひたすら神國の道主いエス

使徒行傳 終

美路留

PROPERTY OF
PRINCETON
THEOLOGICAL
SEMINARY.

from

E. Rothesay Miller.

West Philadelphia

PROPERTY OF
PRINCETON
THEOLOGICAL

Division
Section
No,

SCC
1862